

昭和三十三年十二月三十日印刷
昭和三十四年一月一日発行

(第十三卷 新年号
第一号 通巻第百十七号)

(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1959年 1月号



懸賞入選作品

『花 臀』

(かでん)

蒼野

礼

戦国哀史「美女処刑之賦」

近藤

一

1月号

奇譚グラス 臨時増刊号

長篇サディズム小説二大傑作集

青い廃院

弓沢
俊二郎

与那国奇談

永山
久美雄

限定版

下し大作、堂々ここに登場！

読書の秋を迎えて、ここに満天下のサドファンに御贈りする快心作二篇。いずれも書下しの未発表作品。普通号にては一年以上に亘って連載すべき分量の二大作を一挙に登載して、責小説の醍醐味を心ゆくまで賞味して貰うに足る特別臨時増刊号。

口絵には、四馬孝画伯が、「青い廃院」の中から、その責の名場面ばかりを抜き出して精緻流麗なタッチで誌面狭しとばかり縦横無尽に画筆を揮い、挿画には同じく四馬孝氏の外、新進気鋭の杉原虹児氏がリアルなペン画を以てクライマックス・シーンの絵面化を計って絢爛誌上を覆う。

絵 口 麗 華 頭 卷

四馬孝・画

「青い廃院」画廊

○美貌の人
○美女誘拐
○苦悶する美貌
○屈辱の責め
○踊りの責め
○廃院の中
○モデル責め
○救
○変ったレッスン（表紙裏）
○受縄（目次裏）



本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

◎賞金

佳作	秀作	優作
(各篇につき)		
三千円	五千円	壹万円
若干篇	若干篇	若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 三十枚乃至五十枚程度(四百字詰)

但し多少の増減は差支えありません。

締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以って報告します。誌上では入選作の掲載を以って発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便(百瓦につき八円)にて御送付願います。

読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

〔映画、雑誌〕通信〕映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

◎本誌月極購読料◎

一月分	一冊	(送料共)	二百円
三月分	三冊	(送料共)	六百円
半年分	六冊	(送料共)	千二百円
一年分	十二冊	(送料共)	二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十三巻第一号
毎月一回一日発行
定価二百円

新年号

昭和三十三年十二月三十日印刷
昭和三十四年一月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

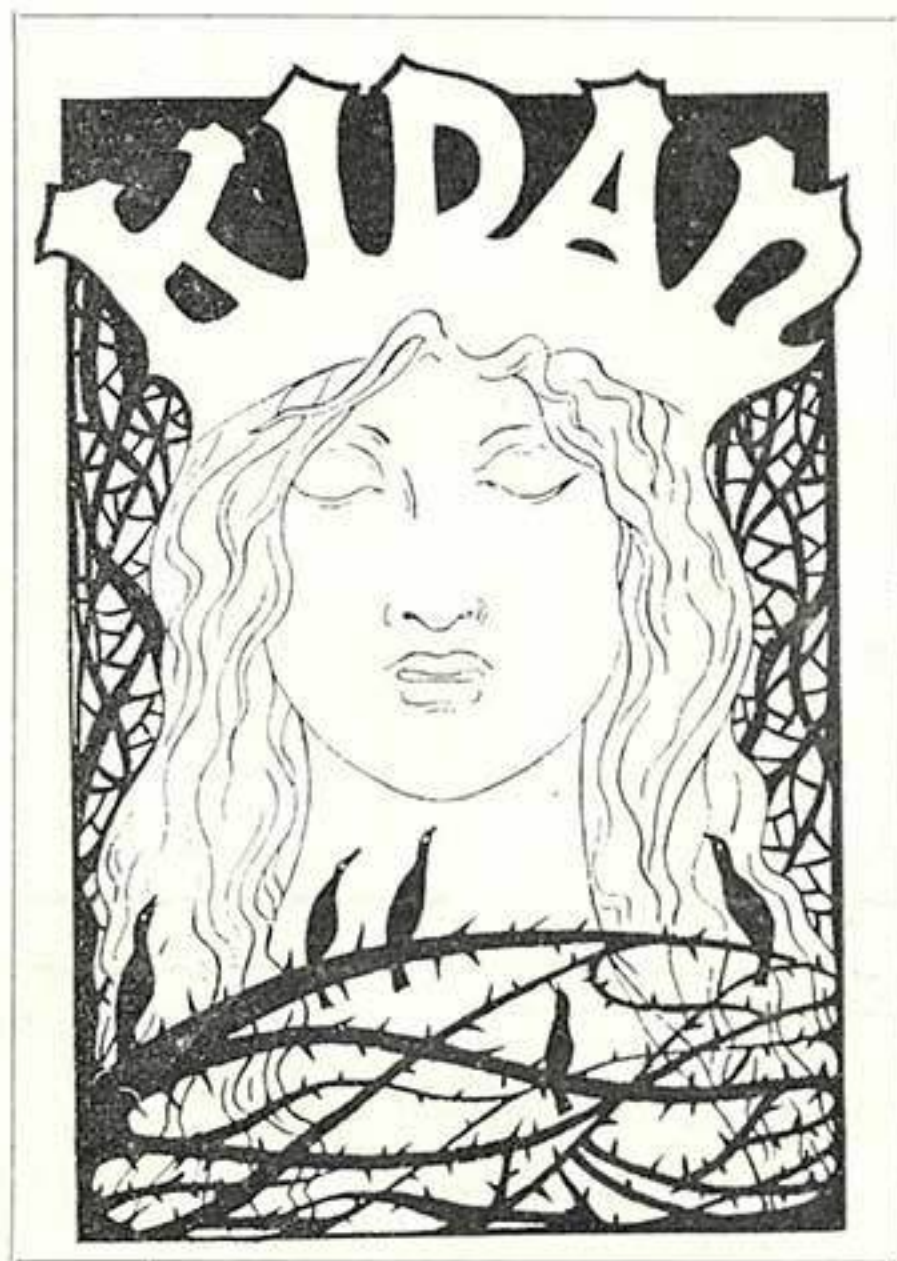
発行所 天 星 社

電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座 大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手にて一割増)等どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

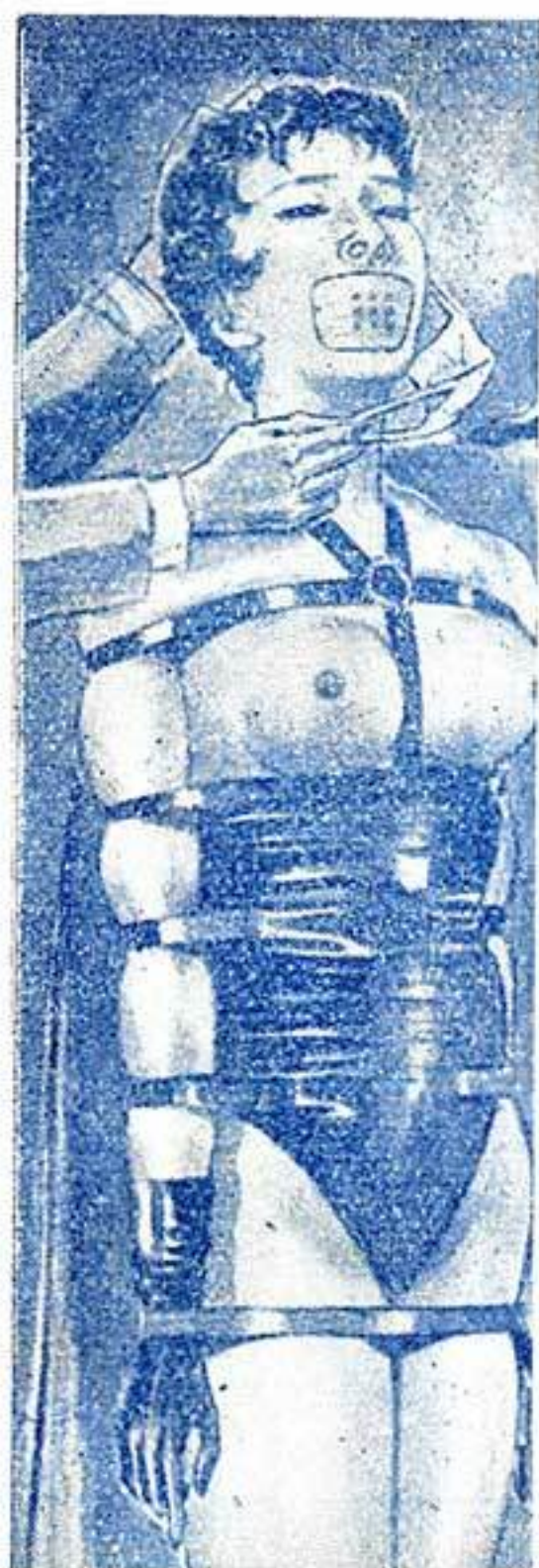
昭和三十三年十二月三十日印刷 新年号(第十三卷第一号)
昭和三十四年一月一日發行(毎月一回一日發行)
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

Osaka Japan



定價二百円

IBM. 2805



◎サドの世界に新風を吹き込む異色長篇書

弓沢俊二郎 青い廃院

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦唐の妖気が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかない弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

永山久美雄 与那国奇談

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫くの粋夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

内 容 紹 介

青い廃院

弓沢俊二郎・作 四馬孝・画

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手練りの網
- 十四、救
- 十五、勝者の心

与那国奇談

永山久美雄・作 杉原虹児・画

女護ヶ島与那国 女百人に男一人
股裂きになる女 孤島の殺人
股裂きと火焙り 人肉の炙り焼
筏流しの刑罰

臨時増刊号『青い廃院』

只今 定価二百円(送共)
発売中!

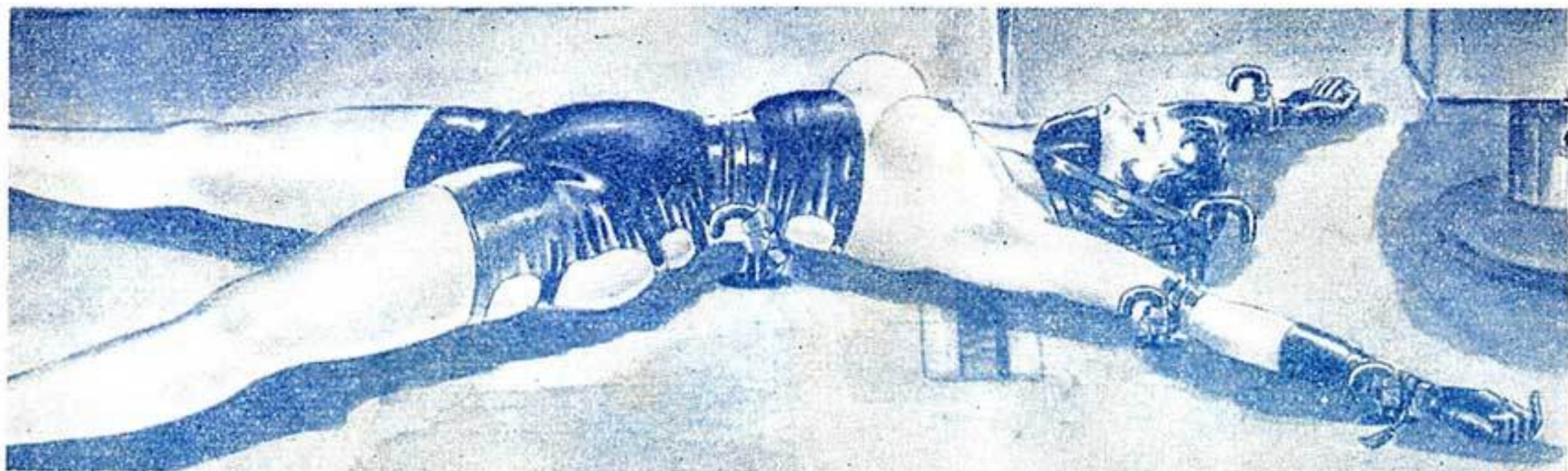
お申込は

大阪市阿倍野郵便局

私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪第五〇〇四二番





奇譚クラブ

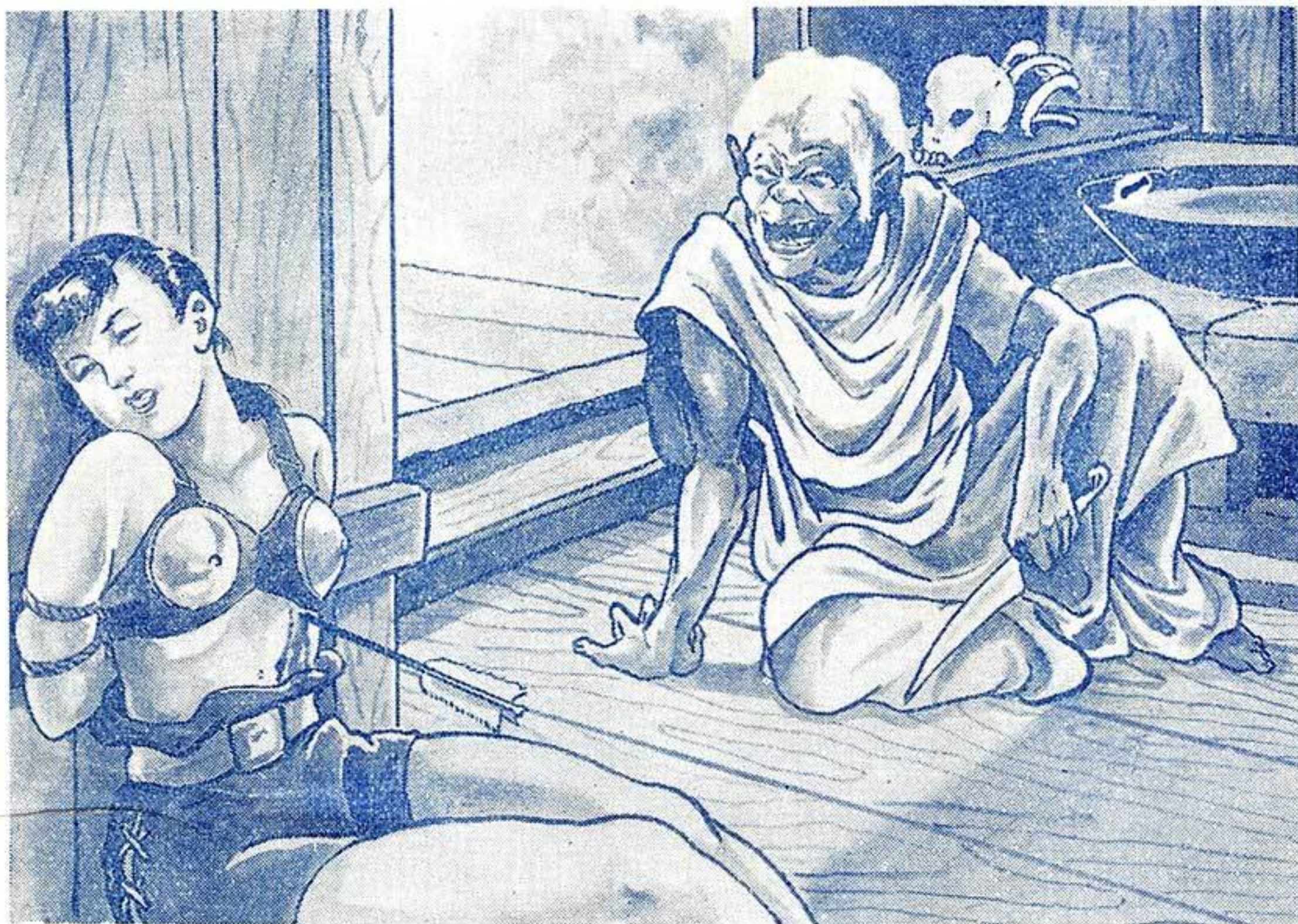
復刊第三十七号
新 年 号

目次

縛り絵「かるた会の夜」	滝 れい子・画
虹児画集 ボクシングの練習	杉原 虹児・画
俊平戯画 観世音菩薩	南村 俊平・画
特写写真	本誌写真部特写
頭 巻	(絹川文代嬢)
四馬孝画集 女体の家畜化	四馬 孝・画
南村俊平戯画 二題	南村 俊平・画
妖婆と戦傷兵 捕虜の少女と獅子	
図書雑誌通信「特異な角度から」	九雅 節夫・18
映画・出版物の男風について	原 俊行・25
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品	
「花 臀(かでん)」	蒼野 礼・26
通信 長瀬昭子様へ挑戦します	三隅千恵子・36
創作 宿 直 室	楨村 奏・38
体験手記 「女体臍相譚」	須藤 律夫・46
嫁いびり物語 人妻すみれ	東町 三郎・48

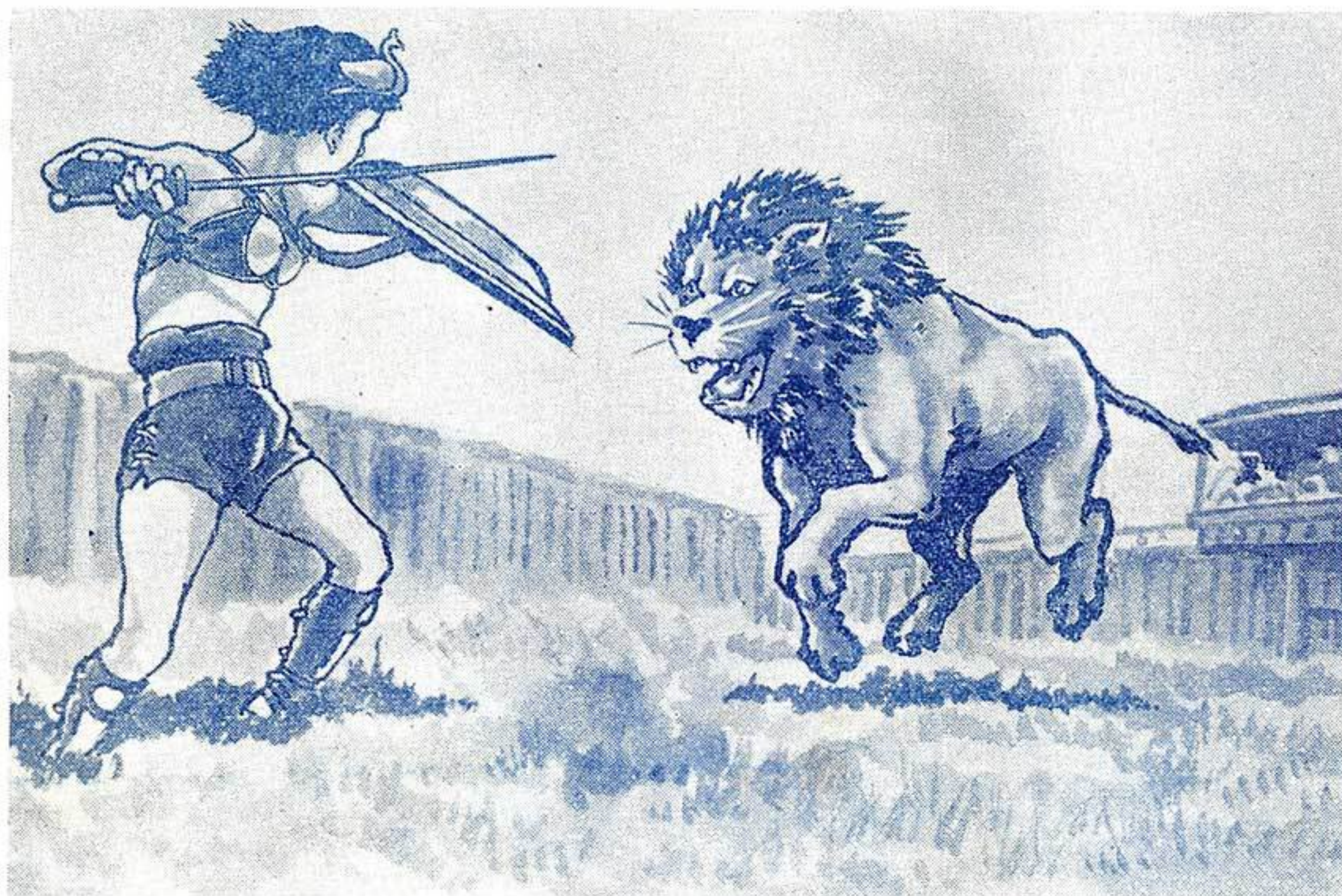


現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正	59
戦国哀史Ⅱ美女処刑之賦	近藤 一	62
マゾヒズムへのいざない	黒田 史郎	74
夜を賭ける男	弓沢俊二郎	78
馬化白書(KKスクラップより)	鞍 良人	88
涙は宇宙空間に輝く(下)	浦田 紀夫	98
創作従 卒	菅 良太	106
愛好者の記録	とやま・かづひこ	115
緊縛映画スナツプシリーズ		
福寿草の巻『鬼火燈籠』	牧 高志	118
呼びかけⅡ益田愛子さんへⅡ	近藤 一	123
映画通信 今月の縛られ女優達	大河内珠樹	126
レーゼ・シナリオ		
河内山『遊 俠 伝』	海野 築朗	128
魔教圈 No. 8 (その十一)	土路 草一	142
腹切りの要因	大島 広志	156
女体切腹秘話 月光の中で	池島 水行	158
読者通信		165



妖婆と戦傷兵

(傷ついた少女を料理して喰おう)
(とする食人の妖婆)



捕虜の少女と獅子

(捕われの少女は猛獣との一騎討)
(を強いられている。)

かるた会の夜

足と手を縛って電燈のスイッチをきると、皆出ていつてしまった。
二た部屋ほど隔てて賑やかな談笑の声が聞えてくる。



滝
れい子・画



ボクシングの練習

海老のように曲げて吊り下げられたハツラツとした少女の全身に、
雨のようにグローブの強打が浴びせられる。



杉原虹児・画

虹児

觀世音菩薩

或は枷鎖に囚禁せられ、手足に紐械を被らんに彼の觀音の力を念
ぜば、釈然として解脱することを得ん。(普門品)



南村俊平・画

観光旅館の待合室にて

<本誌写真部特写>







モデル……（絹川文代嬢）21才



女体の家畜化

四馬 孝・画

「嫌でも言う通りにするさ」



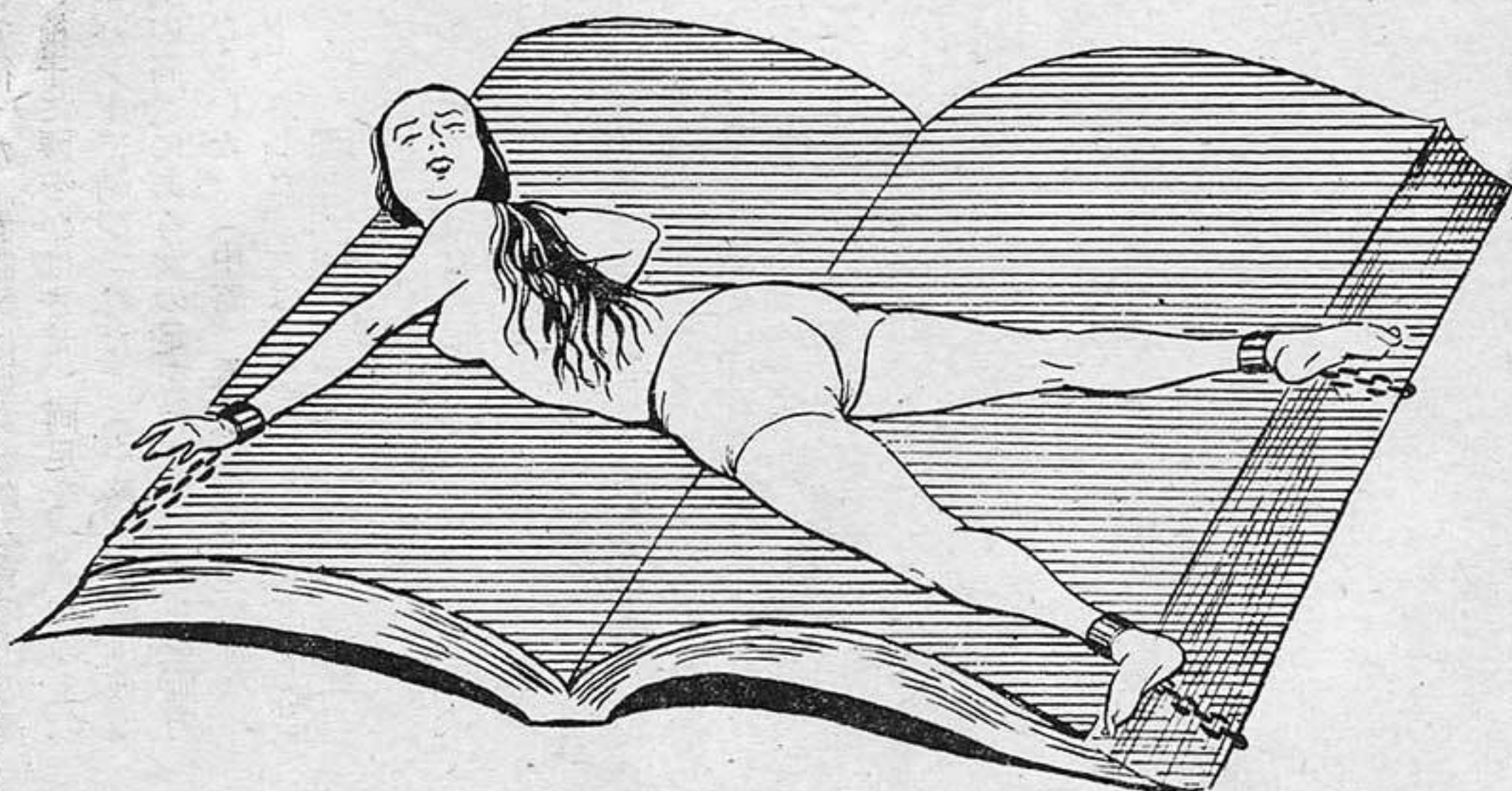


新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1959年 新年号

(第十三巻 第一号 通刊第百十七号)



◎図書雑誌通信◎

特異な角度から

九雅 節 夫

《石川達三「女学生の食欲」》

初夏の頃、女学校では全生徒の体格検査が行われた。

三百人の若い娘たちの裸になった姿というものは、吾々の想像を絶する壮観であつたろうと思われる。十五、六から十八、九までの未熟な肉体は、青梅の実のような魅力を持ていないだろうか。

(新潮社版・石川達三作品集第四巻に収める)

石川達三としては珍しく、善意の空転を描いた、ペーソスのある短篇である。

(この項第二部十四項)

次も同じく石川達三の短篇から挙げる。

これは、ヒューマニストとしての医者 of 敗北の姿を描きつつ、しかも尚、絶ゆることない一脈の暖流を探ろうとするテーマの佳作だ。しかし昭和十年代文学の通例として、人生をみつめる作者の目は実に暗い。一人の娼婦を「売る」者と「買う」者が、その値打を鑑定して貰おうとして、医者を訪ねてくる所から始まる。

《石川達三「深海魚」》

(1)二人が出て行って女が入って来た。いくらかぎこちなく、顔を赤らめているようであった。彼は別室の外科用診察室に女を連

れて行った。看護婦は彼女を踏み台の上の高い椅子に腰をかけさせ、両足をペダルの上の革バンドで結びつけた。(中略)医師は彼の胸の高さにある女の足を結んだペダルを両方にひらいた。(中略)看護婦は足を結んだバンドを外した。女はのそりのそりと(以下略)「医師」は数日後に、又別の事件に出会う。カルモチン自殺の女を治療するのだ。

(2)強心剤の注射、胃洗滌、排泄機能が衰えている。急いで灌腸をし排尿をさせた。

(この項第三部二十二項)

所謂「横浜事件」の凄惨な拷問は、同じ石川氏の長篇「風にそよぐ葦」に、ドキュメントな手法で描かれているが、そのシーンを次に紹介しよう。

《石川達三「風にそよぐ葦」》

拷問に関する手記(河田夫人)

私は昭和十七年の九月に主人と一緒に検挙され、加賀町警察で取調べを受けました。その暴行ぶりは、筆にも言葉にも言い尽くせない鬼畜のふるまいでありました。……中略……夜中の寒い時にコンクリートの床の上に座らせられ、両手は後手に縛られ、私の声が外に洩れないように戸じまりをしておいて、猿ぐつわをはめ、それから拷問を始めたものでした。靴の踵で腿や腰を蹴り、火箸や蝙蝠傘の先でからだ中を突き、全身紫色に腫れ上ってしまいました。また時には、……中略……

棍棒で突くという凌辱までも加えられたのです。後には拷問をはじめ前に医師と看護婦に用意させておいて、それから私をなぐりはじめるというやり方をしていました。

今日ではこの事件の虚構であったということとは、よく知られている。誠に驚くべきことである。

私は、この拷問に立会ったという看護婦の冷い青い目を秘かに想っては、異様な戦りつを覚えるのである。

(この項第一部二十五項)

実は今回石坂洋次郎、丹羽文雄、舟橋聖一の現代風俗作家を特集しようとして巻頭石川達三を三篇そろえたものの、図書館へ行って調べる余裕がなく、やむを得ず以下例によって東西も問わず、手持の材料から引用していくこととしよう。

では、次にブラントーム「艶婦伝」(小西茂也)から二、三、引用することにしよう。一言、お断りしておくど、この種の本からの引用は、九牛の一毛に過ぎず、私としては唯、その紹介をするだけで、読者は原書をひもといて、その全容を知りたい。「艶婦伝」は元版は創元社、後に同社から普及版が出たが、一部に省略があると云われる。今回は新潮社から文庫版で出版されたが、私は比較対照してみたわけではなく、完訳版か省略版かは、よく判らない。以下

に挙げるのは新潮文庫版に拠る。

《ブラントーム「艶婦伝」小西茂也訳》

(1)さればこれら女人衆に惚れたり、妾に娶ったりして……中略……よくよくお調べあることが、いっち肝心でござる。さうしたことはしかしちゃんとかのオクタヴィウス・シーザーが、友人連中と一緒に手配し、行っていたところで、すなはちローマの貴婦人や上臈衆や、甚しくは適齡期の処女までを……中略……頭の天頂から足の爪先まで、トラヌといふ人買ひをして先づ以ってくまなく調べさせたこと、売買される奴隷女や農奴女に対すると断断であって、その結果、無疵でお眼鏡にかなって及第し、人買ひの折紙のついたものだけを、皇帝には御用に供されてをったさうである。

トルコ人は、コンスタンチノープル其他の大きな町の奴隷市場で男女の奴隷を買ひ求めるに際し、ちようどこれと同じ式の検査を致してをるさうな。

そして両版とも、ここには一寸とぼけた味のカットが入っている。

(この項第二部十五項)

続けて同書第二講から挙げる。このテーマは、ブラントームのあまり関心のある所ではないらしく二、三のエピソードしかない但し、中々ピリリとした小味の利いた話法だ。

(2) これもやんごとない極みのお方だが(カトリック女王)嫁せられて未亡人となり、大変にお美しくかったが、また極めて好きものであらせられたので、持前の並の淫欲だけでは御満足が参らず、それを更に刺激し挑発なさうとして、時折、侍女や女官のうちでも最も眉目うるはしいのを選んで裸にし、惚々と眺め楽しんでから、平手でお臀をピシヤリと強く乱暴に叩かれてをったといふ。また何か落度のあった侍女は、逞しい鞭でやはり居敷のあたりを御自らご折檻なされ、鞭打される度毎に相手が妙に猥らな恰好で、身体や臀をくねらせたり、もそもぞ動かしたりするのを御覧じ遊ばされて、ひとしほ御満悦を覚えられていたさうである。

また時とすると、裸にはせずただ裾をまくらせ(当時は女人衆は下袴をつけてをらなかつたからだ)相手の咎目の軽重に応じて、平手でなり鞭でなり、そのお臀の上を叩いて笑はせたりし、さうした光景を眺めて、おのが欲情をいざ充分に研ぎ尖らせてから、屈強堅剛な色男を招いて、たっぷりとその欲望を満たし鎮められるのを常とせられたといふ。ここにも愉快な絵が入っている。五人の「眉目美しい侍女」が裾をまくって、お臀をさし出している。カトリック女王が鞭を、というよりは、笞を(というのには木の枝のムチらしく見える)ふるっているという図。尚、ここに登場するカトリック女王とは、カトリック・ド・メジス・アン・リ二世の妃で、夫君の死後勢威を揮ったことは本文中にもある通り。「野望強き勇婦にして烈女、サン・バルテレミ虐殺に係す」とある。

(この項第一部二十六項)
同書第二講は、この後にも、同テーマの風流談を伝えている。

(3) やはり貴人だが、その御内室を裸かのか着たりで鞭打を加え、五体をくねらすそのさまを御覧じ遊ばされて、快としてをられたといふ話を聞いたことがある。

(この項第一部二十七項)

この機会に今一項、ブランドーム先生の驚くべき風流大辞典の、ほんの一ページにすぎない「鞭と女」のテーマから、ここに挙げておこう。

(4) さる上臈から伺ったことだが、その娘だった頃、毎日きまって母親から、二度づつ鞭打を蒙ったが、それは別にこれといふ落度があつてのことではなく、娘が尻や身体を動かすのを見て、母者人は快感を覚え、その嗜虐を充分掻き立てて、別種の愉悦を計ろうとの算段からであつたらうと娘心にも考えついたといふことである。そして彼女が十四の年に近づくに伴い、ますます母のかうした仕打は烈しく執拗になって、さまざま虐待や折檻を

加へるにつれ、その眼は血のやうになり愈々妖しく輝いて行つたさうである。

この項が一寸、毛色の変つていふというのは、今様に云おうならロウティーン。女になりかけてはいるが、未だ少女で、充分教育上の懲戒をされるにふさわしい娘が登場することである。本誌でも、このテーマはまだ森本氏の「残酷なる女性たち」の他には、あまり見られない。有名な「Whips and Tears」という本にも、このテーマはあることだし、もっともっと開拓されている筈だと思ふ。(この項第一部二十八項) 共産党作家、小林多喜二は、若き日の志賀直哉との交際でも判る如く、何よりまずヒューマニズムの作家だった。愛人の娼婦から、その裏面を知ると、それをバクロしてヒューマニズムの義憤をたたきつけずにはいられなかった。その多喜二の作品から数項を。

《小林多喜二「沼尻村」》

(1) 監督は、コクツ、コクツと居ねむりしているユキ子の横顔を、いきなり平手で殴りつけた。殴られた方の頬は、遠くからでも、そっちだけが際立って赤くみえた。(選炭場での風景。仕事が終わると)

(2) 何よりヨシエたちは、こらえていた用を足しに便所へ走った。前に入つたのを待っていないので、みんなは構わずに男の便所へ

後向に蹲んだ。

この小説は「改造」一九三一、四月号、五月号の両号へ発表された。

(この項、第一部二十九項。及び第二部十六項)

珍しく推理小説から一つ、ピックアップする。

この小説は、一九四五年度の米国の作家によるもので、古風な中にやはり心理的なスリラーがかった色調がある。

女主人公マーシャ・ファイルモアは、自分の女としての魅力を最大限に利用して、利欲を満たし、犯罪を行うという現代の悪女である。このような女を犯人に仕立て上げるストーリーそのものも、心理学的に考えれば中々面白いと思うのだが……。

犯罪を実行しているマーシャが、少女時代の記憶を反すうしているシーンから二カ所挙げよう。

《ベイナー・ケンドリック》

「指はよく見る」中桐雅夫訳

(1) 一度だけ、母がマーシャを鞭うったことがある。肉屋の娘がみせびらかしたような三輪車を彼女が欲しがったときである。鞭はそんなににはげしくはなかったが、このことがマーシャにかなりの影響を与えた。彼女は母親の骨ばった膝の上に横にされた恥しさと、自分の小さなおなか、母親の黒いアルパカのガ

ウンのためにむづかゆかった感じとを決して忘れなかった。

(この項第一部二十九項)

(2) 彼女は深い回想にしずんだ。彼女はデパートからドレスを盗んでつかまった。シエリフのブラックマーこそ、あの舞踏会の晩の刑事なんだ。消毒剤の匂いのする湿っぽい警察署の婦人警官はドレスをはぎとり、スリッパのまま立たせておいた。彼女の魅力も消え失せ、ふるえているだけだった。

(この項第三部二十四項)

(1) は、典型的な鞭打。一、鞭が用いられていること。二、膝の上に横にされて当然、臀を叩かれていること。三、裸、若しくは思いきり着物をまくり上げて叩かれていること(少女のおなか、母親のガウンにふれていた)。

又、(2) も、タイピカルな凌辱シーンでありこのような話のある推理小説というのは全く珍らしいのである。この「指はよく見る」の出版社、早川が、B ケンドリックの他の作を邦訳することを希望している。

本稿二百項に上るコレクションの中で、恐らく意外な小説家の名を、読者は発見されるであろう。しかしこれとて、コレクトの限界を示すものではない。少々、楽屋落に似るが、ここで告白しておく、現代作家

で井上靖、時代小説で吉川英治、この二人の文章は人間味がないとか、綺麗事と云ったら悪るだろうが、ここに集めたいようなポイントには皆無だ。しかし左に述べる吉川英治の文章は、例外的な一例である。

《吉川英治「平の将門」》

家に飼っている女奴(奴婢)の蝦夷萩と急に親しくなつて、先頃も昼間、柵の馬糧倉の中へ、ふたりきりで隠れこんでいたのを、意地の悪い叔父の郎党にみつけれられ、

「御子が蝦夷の娘と馬糧倉の中で、昼間から歌垣のやうに……略……おられた。——相手もあらうによ、女奴と」と、大事のように吹聴された。

どうしてか、後見の叔父たちは小次郎には何も云わなかったが、女奴の蝦夷萩はきびしい仕置に会ひ、大勢の前で、鞭で三十も四十も打ちすえられた。

戦後、英治が雑誌「小説公園」に連載した長編小説の第一章、平の将門(小次郎)の少年時代を写したものだ。日本古代の奴隷制の一面をほんのチラリとみせてくれる。その意味でも誠にめづらしい。

(この項第一部三十項)

さて次は、吉川英治の次に「神の狭き地」のコードエルが出てくるとは、一寸変かもしれないが、確か第二回でお断りしたとおり、ノートを作ったり整理、構成したり

は中々不可能なので全然、順序もなく書きつづけて行く次第。いずれ全部が完結してから、再び順序づけ補遺して、より読み易いものにしたいと希んでいる。

《アースキン・コールドウェール》

「ゲ レ タ」

「我慢できなかったのよ」彼女は答えた。

「それならそれでいい」彼はきびしさをよそおって言った。

「あったことをかくすならお尻を叩くよ。もう言わないぞ、グレタ。冗談いってるんじゃないぞ。まじめだよ。三つ数えるからな。いか！ ワン…ツー…スリー」

身体をひっくりかえし服をめぐって、グレタは軽く彼女の尻をたたいた。やめてしまっても依然、彼女は、ふざけた尻たたきを面白がったのか、憤慨したのかわからなかった。彼の記憶によれば、いつでも彼女はじらしたり煽情的にふるまったりして、遠慮のない格闘ごっこをしている間、くすくす笑ったり身をもじらしたりし、その揚句、小台所であろうと居間や寝室であろうと、その場で激しく言い寄るのが落であった。

新婚夫婦の遊戯的な尻たたきの情景であるコールドウェールについては、前回も本稿に紹介しておいた。この「グレタ」は、一九五五年に発表された問題作である。

(この項第一部三十一項)

附記

一、本稿第二回(五七年三月号)に題未詳として、吉田甲子太郎訳の寄宿舎鞭打テーマの少年小説を紹介しましたが、この「逃げた少年」はその後、短篇集「エミール」の中に入り、新潮社から出版されております。

一読しましたが、少年向のものだけに、ごく簡単な筋書風のもので、脱走した一少年がすぐ捉まり、退学か体刑かを選べと言われ、講堂の壇上で、全校生徒の前で鞭刑を受けるのです。脱走を手伝った少年は「ズボン脱げ」と命令される頃から、もう目をつむってしまふのです。そして「一つ」「二つ」という掛声と共に体操教師が裸の尻を打つ音を、切なく感じるのです。又、鞭を受けた少年が身をくねらせて自分の傷跡を調べる場面もあります。多少、潤色すれば面白い読物になるに違いありません。

二、東和映画の配給したフランス映画と云っても、ミシェルモルガン主演でもデユヴィヴィエ映画でもありません。文化映画「女性美への道」を紹介します。

これは最初、併映用の三巻物で、日本語解説版、黒白の並サイズ。勿論一般公開されております。

最初、女性が如何に美を己の上に体現しようとして来たか、その努力が漫画となって出て来ます。その中の一つに、非常に稚拙な

絵ですが、浣腸の図が出て来るのです。大きな大きな浣腸器です。解説「十八世紀には、女達は瘡を治すために浣腸を行っていました。彼女たちは、一日に二度も三度も浣腸して瘡を治す努力をしていたのです」

(本稿第二回で紹介した、フックス・安田訳「風俗の歴史」第四巻の挿入図にある如き、有閑マダムは浣腸図等は、こういう歴史的事実をバックとしているのです)

こういうプロローグを置いて、現代の美容術を描くのですが、その中で二、三、興味深い所を挙げてみましょう。例えば乳房を大きくするために、一人の女が上半身を出して寝ていますと、四本足の「吸引器」が当てられ乳房を吸い上げる。次に周りから型を当てて絞るように盛上げる(弾力のある乳房がポツポツ飛び出す)そして、ヘラでクリームを塗るといふわけです。

映画は、これらを、多分に諷刺的に画きます。太った中年のマダムが、腰や膝や脚を高圧の空気で締めつけられるあたり、苦笑をさそいます。

腋毛をぬく場面もあります。長々と伸びた腋、腋の下に黒いものがみえる。そこに脱毛クリームがぬられ固められ、ビリビリとはがすと、もうつるつるです。鼻の下生毛は電気針でぬくのですが、そのたびに痛みで女の顔がケイレンするのです。常識的な角度の映

画では、一寸みられない珍しいシーンです。余分な脂肪を除くために、高圧空気で皮膚がブルンブルンと波うつ程吹きつけます。大きなお尻を丸出しにして、これを受けているシーンもあります。又、マッサージはクリームを塗った上で、まるで餅でもこねるようになまわし、尻に近いあたりは、ピシヤピシヤ叩く。被術者は、口をゆがめて泣き顔をする一寸した尻叩きでした。

この中、私がもっとも興味深かったのは、シャワールームに被術者を立たせ、後から消火ホースのように水を浴びせかけるのです。アウシュウイツ収容所で、ナチスが女囚を懲戒するのに用いた「流水浴懲罰」をすら思わせる。この映画の場合も、体がへこむほど高圧の水が二本のホースから浴びせられるのです。

三、「文芸春秋・漫画読本」八月号中に例の如く、ブロンディ（チック・ヤング作）があります。この中に娘が、ダグウッドに「ねえ、お尻を叩いてよ！」を地団駄ふんでせがむのがあります。なんと、アメリカの親父というものは哀れなものです。ただ、ここで注目しておきたいのは、アメリカの教育では現代でも尻叩きスパンクという懲戒が、少女に対してすら行われているということです。四、附記三項で触れたついでに、流水浴懲罰に対する覚書として、ヨーロッパ映画「女囚

一一三号」をここに記録に留めておきたいと考えます。但し大部分は前に見ただけで、ノートもとっていないので、映画の国籍も他のデータも判然としていません。ストーリーは、殺人罪におとされた無実の若い看護婦が、監獄でさまざまな苦難に遇い、遂に脱獄するというものです。後半、地下水道を伝って逃走するシーンは「第三の男」を連想させ、又所長が代って、地獄のような女囚刑務所が改良されるところは、往年の名画「格子なき牢獄」とあまりに酷似しています。ただ、この映画の興味の存する所は、その前半のサディスティックな女囚たちの受難シーンにあると、特異な角度から見た私には感じられたのです。

「ふくろ」と呼ばれる女看守がいる。中年の残酷な女です。尼寺を改造した、この女刑務所では、所長も看守もすべて女ばかり。しかし、そんな刑務所なら行ってみたいなどと思っただけではない。彼女達は、実に楽しげに冷たい笑いを片頬にうかべて、残酷な体刑を行うのです。「ふくろ」は最も典型的な看守で、女囚たちは「ふくろ」が手を叩くにつれて行動するよう訓練されている。ヒロインは入獄早々、夜の服装検査で靴下をはいていたというので、次の日は裸足で歩かされる。又、同じ夜、髪をカールしていた若い女囚は、髪の毛をこづきまわされ、平手打を喰わされると

いう厳しい刑務所です。

煙草を吸った女囚や、組み打ちをした女囚たちと共に、ヒロインは寝台で口を利いたために独房へ叩き込まれる。文字通り、ぶちこまれる。そして口をきいたために、かくれて立ち聞きをした看守から「四日間水とパンだけ」という罰を決められる。平手打は、遠慮会釈もなくビシビシ両頬にとばされる。平手打は、罰以前の日常の茶飯事にすぎないので

そしてこのクライマックスは、たまりかねて暴力に訴えたヒロインたち五人の若い女が恐ろしい灌水浴懲罰にかけられるシーンなのです。

「女性美への道」で、肌をひきしめるためにホースで水をかけるのは、まだ享乐的、遊戯的ですが「女囚一一三号」でのこの懲罰は、受刑者の立場からは、実に残酷な恐ろしい懲罰です。深夜の中庭には冷たい風が吹き、寝巻のままの女囚たちは二米おきに向うむきに一列に並ばされ、しのびよる寒さと恐怖でふるふるえている。「お祭が始まるよ」「何されるの」「水をかけられるんだよ」残酷な喜びを感じている看守たちは、いそいそと消防ホースを出している。やがて、所長のお出ましだ。「準備は」「できました」「よし、水を」消火栓がひねられ、所長はしっかりと放水孔をにぎって、左はしの女から恐ろしい水

の鞭を当てて行く。最初は小手しらべでしようか、次々と鞭を当ててゆく。それでも忽ち悲鳴があがり、女たちの衣はべったり身体にはりついて、臀がくつきりみえる。嗜虐的な目を光らせた所長は、今度は逆に右はじの女から、そろそろ本格的な水の鞭での鞭打を始めるのです。一列に並んだ女囚の背中と尻がぐっしりと水にぬれて、懲戒を待っている実にサディスチックなシーンです。右はじの女が逃げようとする直ぐ看手が捕え、ぶちのめしておいて噴射の的にしてしまふ。と、忽ち千切れるような悲鳴と苦痛のダンスが始まるが、しぶきを浴びて倒れてしまいます。それを起して押えつけて、頭と云わず背中と云わず臀までも、噴流の鞭に責めさいなめるという、その雰囲気にも内容に於ても記憶すべき第一級の映画でした。

この映画のデータを、もし教示して下さい人がおりましたら幸いです。

五、本稿第四回（五八年七月号）中の第三部二十一項で、エリノア・リップパー女史「ラールの女」を御紹介したことは、記憶している方もありましよう。ここに再説するのは、同書が「女囚という名の奴隷」渡辺某訳として再刊されていることです。同一の訳文が、違う書店から違う題名、訳者名で出版されるというのは不明朗なことですが、一読の値打はあります。

雑記

一、九雅節夫、その後の事件

前回の約束に従って私は「九雅節夫自身の事件」（三十二年十一月号）の続篇を書く事にした。私の体験を語ることは、いささか面映いが又、多少は役に立たぬこともないであろう。

前回では、私は手術の後、見習看護婦に熱療法をされた所まで書いた。彼女の手が、チラチラと私の臀にふれるのが、こそばゆかった感覚が今よみがえってくる。私が自分で云うのは変だが、私は学生時代には同性愛的な視線を向けられたことも度々だったし、まず一方の美少年だと云ってもよいかと思う。Yというナースが、私に高圧浣腸を施したことは前に書いたが、そのときにもこんな事があった。Yがイルリガトールを持って二、三人の同僚と連れ立って廊下の所で話し合っている。キヤッキヤツと笑っている。そして顔を赤くしたYが、ポンと後ろから叩かれて入ってきた。ところが、ところである。右膝を抱き嘴管が入れられたとき、どやどやと二、三人のナースが部屋の中へ入ってくるのである。

「痛くない？」

「九雅さん、目をつむって口をあけるのよ」と彼女達は口々に言って近づくのである。その時、私は初めて衣服を脱いだモデル、初

舞台のストリッパー、いやそれよりも、初めて婦人科の手にかかった乙女の心境をマザマザと知ったのであった。

ところで前回の続きだが、グリセリン浣腸をやられた私は、これから苦行なのだ。と云うのは、病室からトイレまで百米ぐらいあるその間には、看護婦も何人も歩いてゐるし女患者の目もあるのだ。この見習看護婦は、肛門に大きな脱脂綿を当て

「我慢できる間は、この脱脂綿でおさええて下さいね」と云ったから、私はこの長い百米の道中を片手で後を押さえ、途中で漏らさないよう浣腸患者特有のヨチヨチ歩きで、しかも私のあとからは、使用済みの浣腸器をささげたナースがついてくるのだから（私は今浣腸を受けました）と広告しているようなものだ。恥ずかしいとか怒るとか云うより、コッケイだった。その後、私はユダヤ人狩にかまった女たちが、裸にされてガス室で殺される前、自分の赤ん坊を衣類の下にかくしてガス室に入ったというエピソードを聞いたとき、その時と同じような感じをうけた。面白くともうのではありません、人間の運命のコッケイさなのだ。（幻滅の悲哀を感じるね）とその後、浣腸される度に私は云った。

その後、二、三回されたが、看護婦が思っていたように、その度に少しは出ればよかったのだが、その実、一つも出なかった。私は

映画・出版物の男風について

なんぶう

原 俊 行

「裸の太陽」江原が職場で入浴中、男の脱衣あり素裸となって脚でパンツをロッカーに入れる。「赤い陣羽織」老優（勘三郎）だが禪を用いてのコミックが客を哄笑させる。「坊ちゃん」ファーストシーン近く四国の船着場に赤フンの漁師や船頭が散見され、南原の入浴水泳中男Aがジャブと立上り、湯舟より外へ出る。「炎上」三島原作の名に恥じず、主役（雷蔵）が少年時代を回想する時母校の先輩が若き士官姿で登場し「相撲だ、相撲だ！」と叫んで忽ち禪一本の裸身を現わす。

出版物では「背徳」の第二部が禁色秘楽の關係其儘に刊行されたが前篇程のショックはない。「夜の異端者」（鹿火野一彦）は「第三の性」に似たルポ形式で、過日のゲイ（富田英三）に有るパガモンド風の詩と良き対照を示す。ゲイが銀座界のマスコミを衡けば夜の異端者は新宿其他の新興店を写真版にしてPRしている。「ゲイボーイ」や「浅草物語」はフィクションに近い

ので興醒めする。「新汐」では「女の見た男色世界」と題して白洲正子が頗るうがった視野に立って鋭い論評をしているのが注目し得る。特に銘うたれた斯道作家の記事の様にジメツかないでドライな卒直性豊かな文体に一驚した。同誌には小説「金色の殿堂」もあって白人、ペデ、マスター等のタレントが悪徳頹廢の限りを思考且実践する描写が一風変っている。

これらの写真記事を観るにつけプロか又はそれに準ずる人に対する関心が薄くなると共に反対の——已が美価に対して無関心なる若者達の完全に飾り気ない魅が愈々魅惑の権化として高貴なオブジェと思わざるを得ない。舶来裸隨筆とよれば「日本の青少年の羞恥心の強烈」を批判しているけれども、之だけが甚だ残念の次第だが、だからこそ益々ダイヤモンドなのかも知れない。そこで自力自作による彼らの記録蒐集のみが「この世の花」となる所以である。

黙っていた。

便秘は三週間続いて、とうとう私は高熱を出してしまい、医者はその原因をつきとめて婦長に何事か命じた。つまり、私は直腸を揺られることになったのだ。さすがに婦長は、自分で直接手を下そうとはしなかったが、他の病棟からOという三十四、五才の腕利きのナースを頼んで来たものだ。このナースは一言で云えば、ダイアナ夫人のような女丈夫だった。デブデブしているのではなく堅太りで二十貫はある。腕のつけねなど丸太棒のような太さで、冬でも桜色の腕を露出していた。この人は後で聞くと、産科の名ナースなのだ。そう。なぜなら、其処では浣腸を乱用するし、それでなくても出産後の婦人は排便が困難になる。それで自然、Oは便をほじくり出す名人となったのだらうと思う。早速、その日の午後三時頃、Oがこちらの病棟へ来たらしい物音がし始めた。田舎くさいKナースが通りすがりに一寸ドアを開け

「九雅ちゃん、可哀そうね。いよいよOさんが来たわ」とニヤニヤ笑ってみせる。

「何が？」と私はとぼけてみた。

「あら知らなかったの？一寸、痛い目をみるわよ」

「痛い目？」

——それ以後のことは一寸、筆にはつくしがたい。ただ一言、云っておけば、手首どころか腕まで入ってしまったのだ。その刺激と痛みといったらなかった。しばらくの間、腫れ上っていた。

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

花

臀

か
で
ん蒼^{そう}野^の礼^{れい}

(一)

十日間の長い出張から夫が帰って来る夕だった。美千子は食卓を整え、縁側の鏡台に向って念入りに化粧を済まし、それから下着を脱いだ。

鏡に向って苦心惨胆、どうやら赤い六尺褌が、きりりと雪白な肌に喰い込んだ。美しい臀がきっちり二つに仕切られ、ふくらんだ。鏡に映るその恰好が、われながら恥ずかしく、美千子は頬を上気させた。

その上から直接に、絞りの浴衣を纏って食卓の前に座って、簞笥の上の時計を見上げた。五時前。

バスの時間は丁度、五時だった。

クラクションが鳴り、鈍いエンジンの音が高く立って去ると、石

段を昇って来る靴音が響いて来て、やがて夫は玄関の格子戸を開けた。

式台に手をつかえている赤褌の美しい妻の姿を、伊地々は久振りに貪り眺めた。

「お帰りなさい……」

耳まで赧らんでいるのが、いじらしい。

「うむ」

と短く応えて、伊地々は眼に満足な色を浮かべて、靴を脱ぎにかかった。

白い生地に赤い筋目が喰い込んで臀が、くりくりと動きながら、茶の間へ向って行く。

「一人で締めたのか」

背後から伊地々は云った。

急須へ湯を注ぎながら、美千子は答えた。

「一人でしなくって……一体」

「ふふ……なるほど、そうだな」

女中がいるわけでもない。また仮りにいたとしても、これだけは手伝わすわけにはいかないだろう。愚問だった。

「だが、よく締めた」

湯呑を受取って、ひよいと、その手を握んで、伊地々は引き寄せた。

「賞めてやる。ほら！」

むっちりした乳房が、背中を打たれた衝激でブルンと震えた。

「ちい……」

美千子は顔をのぞけた。

食事が済むと、伊地々は風呂で軽く汗を流した。赤禪は後片附の為台所で動いている。急いで風呂場へやって来た。

「お背中を……」

「ああ」

「お疲れでしたでしょう」

厚い脂肪質の背中へ、シャボンを塗りながら云った。

「ざっとやれ」

伊地々は性急に云った。

今から、どうせ一汗掻くのだ。その汗を掻く作業が早くしたい。まったく久し振りの責めだ。

「……はい」

美千子は素直にうしろで答え、背中を擦りだした。

部屋には、やはり赤色のしごきが主を待っていた。

それは、美千子の身体を柱に括るのに用いられた。

濡れたタオルが猿ぐつわにされ……脚がぐるぐる巻きに固く柱へ

固定されていた。

白い脚部を絳々と巻いた色は、血の色のように鮮やかに映った。鞭の空鳴りを聞くと、美千子は否応なく腕に力を籠めて柱へ強く頬を寄せた。頬ずりするような形だった。

向けている赤禪の臀の筋肉が、ぴくと緊った。少女の臀部のような可愛い笑窪ができた。

そこを伊地々は暫く、ぴちやぴちやと叩いていたが、

「一つ！」

と叫ぶなり、黒い革鞭をビューと振り下ろした。部屋一杯に肉を撲つ鋭い、そして烈しい音が響いた。

「うっ……」

美千子の上体が身悶えした。乳房が柱に圧しつけられて歪んだ。眼尻から涙が滲み出て、一筋滑った。

ちりちりとした熱を持った痛みが、臀に走った。それは長く続いた。

「ううう……」

呻くのへ、第二撃が見舞った。

舌を美千子は吸った。幾度も。暫く振りの接吻だった。夫の出張中、幾度か想い出した唇だった。長い髪が振り乱れて、その幸福感に酔っていた。柱からは解放されたが臀が、まだ疼く。爛れたように赤い炎症が一面に滲んでいる。

「這え！這って行って、水を口で運んで来い！」

牀を離すと伊地々は云った。

美千子は脚を少し開いて、ぐったりとしている。迫った息を吐いていた。

「……行け！」

「……は……はい」

「こいつ、へたばりやがって！」
伊地々は肩を張った。

「まだ鞭が喰い足らんのか」
柱の下で赤い撚れた長い紐とともに、畳にどくろを巻いている黒い小蛇のような、それを引き寄せた。

美千子は身を起した。犬だ。

「い……行きます」

「待て！。気合を入れてやる」

白い掌が臀をかばった。

「あなた、もうここは勘忍して……」

「のけろ！その掌を！」

再び手は床を支えた。美千子は眼を閉じて、頭をうなだれた。髪が逆さに下ってうなじの白さが目立った。

臀の肌理と同じ白さだと、伊地々が賞める美しさだ。

びしり！びしり！びしり！

鞭は立て続けに臀を噛んだ。充血を帯びた生地に、みるみる新たな紅味の条痕が走った。赤禪が生あるものの様に細く震えている。

美千子は、烈しく身体を揺すった。散ばっていた紐が掌のなかにつかみ寄せられていた。

熱い感覚だけがあつた。

傷づいた臀を見せて、美しい犬

は台所までよろよろと這い進んで行き、口一杯に水を含んで、苦痛に顔を歪め、けんめいに運んで来ると、倒れるように畳の上に顔を伏せた。

(二)

朝の間、雨が降っていたが、午近くになって俄に晴れた。庭の、いちじくの葉が青々と冴えて陽を浴びた。裏山では、ひぐらしの聲が盛んになった。



洗濯した六尺褌を美千子が竿に乾していると、突然、横手の柴折戸が開いて案内も乞わず人影が庭内に滑り込んで来た。抜き足、差し足、忍び寄って来たが、美千子に気づかれると、いきなり抱きついて来た。

「ミチ！」

「まあ」

美千子は声を挙げた。

「萌子さん」

高校時代のクラスメート、友岡萌子だった。珍らしい友が来たものだ。二人は轟とばかり抱き合った。

「あなた。結婚して四国の方へ行っていたのではなかったの？」

「そうよ。一度お手紙上げたでしょう。ところが、主人が東京へ転勤になっちゃったのよ。十日程前、こちらに着いたの……ほっほっほ」

「さては、御主人を突つついたわね」

美千子は、睨む真似をして笑った。そうよ、と云わんばかりに萌子は、また美千子の身に腕をまわした。

その抱擁の強さに美千子の胸は、ふとたじろいた。

東京の街が恋しいのより、私と会いたいために帰ったのではないかしら、この人は……

花のように美しい二つの顔が互いに頬ずりし合った。

「どう？新婚の御感想は……」

茶菓子を食卓に並べると美千子に、真向いから萌子は云って、ひよいと手を伸ばして菓子盛りの一つを口に運ぶと、カリッと爽やかな歯の音を立てた。

「あなたこそ、御感想は？」

と、美千子は眼を笑わせて、
「恋愛結婚の結果は？」

「見合結婚の結果は？」

すかさず萌子はやり返して、二人共ぶうっと吹きだした。見合だ、いや、恋愛だと、それぞれの結婚観を主張し合ったのはついこの間のような気がする。

今となつては、その大真面目さが、おかしく思い出されたのだ。

「でも……」

と、萌子は顔から笑いを消して、

「ミチが結婚したとき、淋しかったわ。恨んだのよ、本当は。憎くらしくって、卒業したら、すっかりよそよそしくするんですもの……」

「まあ……この人ったらっ！」

そう云うのだったら、美千子も云いたいことがあった。

「一生結婚せずに二人で暮そうと云ってたくせに、卒業期になると人が変わったように恋愛結婚論を振りまわしだしたのは誰よ」

「ミチだって見合結婚を唱えたじゃないの。あいこよ……」

「ちがうわ……」

「ちがわないっ」

「ち……ちが……」

吃つたと思うと、まつ毛の長い眼から涙がこぼれた。裏切られた辛さが想起された。

「あいかわらず泣虫だわ……」

萌子は膝をすり寄せた。

「さ……」

ハンカチで涙を拭いてやった。

「あなたが先に裏切るようなことを云うから、わ……私だって……」
「判った。私が悪かったわ……だから、もう泣かないで」

萌子は肩に腕をまわした。変らない細い肩だ。そのくせこの人の乳房やお臀のふくらみは……と、衣類を撥き裂かんばかりに張り切

っている豊かさに眼を奪われた。

「ふふ……泣いちゃった……」

妙にバツの悪い感情があった。ごまかすように、そうおどけて云って美千子は、そっと萌子の手から肩を外すした。

手の温味の残った肩の部分が、しびれるような感覚が、身のうちをよ切った。

「珈琲がいい？それとも紅茶？」

潤んだ眼を、ほほえませて云う。

「紅茶いたたくわ」

元の位置に戻って萌子は微笑した。

杉木立のある庭から地続きの裏山で、蟬の音がスコールのよう

降っている。

風がでて来て、赤い色彩が庭に揺れた。旗のように。

リプトンだろうか、いい香気だった。一口含んで食卓に置くと、

「あれは、なあに？」

萌子は庭を向いて云った。

美千子は頬に朱を差した。内心の狼狽が、つい色にでてしまい

「輝だわ……」

と云うと、あわてて茶碗へ眼を落した。

「へえ、赤い輝って始めて見たわ。誰が締めるの？」

「誰がって……主人だわ……」

少さく呟くような声だった。

「変ってるのねえ、ミチの旦那さん……」

萌子はそう云うと、くくくと忍び笑いを洩らした。

「どうしたの……」

美千子は、ふいに顔が真赧になった。萌子の忍び笑いが、秘密を指しているように感じられた。気が差して仕様がな

話題を逸らした。

「で、あなた幸福？」

「まあまあ、だわ」

まだ顔に笑いが漂っている。

「ミチはどうなの？」

その声も笑っていた。

「私も——」

「——まあまあ？」

と、おおむ返しに云うと、萌子は急に美千子の手首を握んで引き寄せた。

「あの輝、ミチが締めるのでしよう？あなたの顔にそう書いてあるようよ……。白状なさいっ」

「云わないのねえ……云わなければお臀剥ぐわよっ」

息が熱く耳朶に触れた。

「そ……そんな……お姉様——」

自分でびっくりした。無意識に、お姉様と呼んだのだ。——なつかしい呼名を。

スカートの上から萌子の右手が腰に伸びて、掌の腹が丸い曲線を軽く叩いた。

「お姉様と呼んだわね。ミチ！」

「……ええ」

口が耳へ押しつけられた。

「剥ぐわよ……」

「は……はい」

美千子は臍中の感覚が、甘くしびれた。この瞬間を待っていたのではなかったか——

輝は生乾きだった。湿っている。脚を開いて踏張っている美千子のうしろにまわって、萌子はキュッキュッと締め上げながら、

「まさか、本当だ、とは思わなかった」

力んで声が途切れ途切れだった。

「毎日禪を締めて、お迎え、に、でるなんて」

「痛い……もうお姉様いいわ……」

「まあ！なまめかしいったら！」

手を放すと、萌子は嗟歎した。

なんと妖艶な男装だろう！

素晴らしい着想だ。白と赤。その際立った美しいコンビ。

「ミチの夫、芸術家よ……」

美千子は後悔しなかった。いや、今更、後悔するにはもう遅かった。――

臀を剥くと、萌子の手は、それから次々に服を剥いでゆき、美千子の躰が剥玉子となって曝されるのに、二分と暇がかからなかったのだ。

「ひどいわ」

と美千子は燃えるような顔になって一度云ったが、その語気はしびれて細かった。

「禪締めて見せて」

その言葉にも、素直にうなづいてしまったのだ。不思議な魔法の虜になったように。

庭に差す陽が、夕ぐれの陰影を帯びた。

二人とも、ただ息だけが弾み洩れていた。

「帰るわ」

萌子は躰を起した。スカートは脱いでいたが、黒いレースのついたパンティは外ずさなかった。

高校の頃は、萌子の方が一方的に積極したにしろ、必ずどちらもお互に身体の間々まで見せあった。

――美千子は不満だった。

「お姉様……」

脚へ頬をすりつけながら云った。

「お臀見せて……」

「ミチ……。おどろかないで……」

萌子が帰って行くと、入れちがいに夫が帰宅した。格子戸の開く音に、片附物をしていた台所から赤い禪姿は飛んで行った。

あの出張から帰った日から、もう五日程たっている。

臀を眺めながら、今夜は一責、責めるかと伊地々は、にやにやと嗤った。

(三)

翌日、友岡萌子は、また声もかけず庭から忍ぶように這入って来て、縁側で編物をしている美千子へ花の微笑を投げた。

「まあ、お姉様――」

美千子は血が、かっとたぎるようだった。

丁度今、萌子のことを想っていたのだ。

昨日、「おどろかないで」そう云って、くるっと剥きだして見せた萌子の臀が、しきりに頭のなかに浮んで来て、編棒を動かす手もそぞろになりがちの矢先に突然、当の本人の出現だった。――

「早くう……」

お上りなさいと、美千子は立って行って萌子の手を執った。

うれしい。もう何か酔うような、甘い気分美千子の胸は浸された。

手を引っぱられて、萌子は泳ぐように座敷に上ると、

「ミチ！会いたくてたまらなかったのよ」

熱い息とともに吐きだした。

人眼のない、背景の杉山では、今日も又ひぐらしの声が姦しい。

「うふふ……」

「キレイだわ……うふふ……」

二度低く笑った。萌子は美千子の駄をうつ伏せに寝かせた。腎を剥かれることを美千子は怖れた。

そこは一面青黒く鞭痕がついている筈だ。

——昨夜。

伊地々の腎責は、夜中過ぎまで加えられた。鞭を締めたまま壁を支えて立たせられて、背中に夫を乗せてハイハイよろしく部屋中を這いまわさせられた。無論、腎はびちやびちやと張られ通した。

くたくたに疲労している美しい人間馬は、全身じっとり汗を滲ませて、幾度か悲鳴と一緒に畳の上に身を倒していた。

そのたび、伊地々は鞭をつかんで引立せ、掛声をかけて腎を鞭打った。

一時頃までその労働が続いたろうか。

柱へぎつちりと脚が緊縛されて、最後の仕上げが腎を赤く飾りだすと、美千子の顔は紙のように白くなって、もう半ば失神状態だった。

——美千子は怖れた。

昨日なかった斑痕を萌子が見たら、忽ちその意味を察するにちがいない。

萌子はなんと云うだろうか——

不思議な期待も、ふと胸の隅に疼いた。

「おどろかないで」

その言葉を、今度は自分が吐く番なのかしら……

「いや、いや」と美千子は頭を振った。その拍子にアップに束ねていた髪がぐらっと解けて、漆黒の美しい髪がうつむけに白い顔へ乱れかかり、さらっと畳にこぼれた。

髪の間から青みを帯びた眼が、潤んだ色で萌子の顔を見上げ、

「やめて……今日は……」

「なに云うの」

ついに——

「……おどろかないで」

泣くような声で美千子は云った。

「……なぜ」

と呟いて、萌子は胸にハツとするものを覚えた。

——まさか？——

「あっ」

萌子は思わず息をのんだ。

「ミチ……。あなたもなのね……」

驚愕が少し静まると、萌子は溜息と一緒に洩らした。

美千子はどんな表情をしているのか、顔を伏せているのでわからない。

息を殺して、じっとしている。

「昨夜なのね……」

「ええ……」

と、低い答があった。

「鞭打ち？」

こっくりと、うなずいた。

「始めて？」

頭を振って、美千子は、なぜ隠していたと詰られはしないかと、懸念した。

当然、萌子は云った。

「水臭い人っ。明日、私がお腎見せて打明けてしまったのに、それを聞いていて、黙っているなんて……。傷だらけの私のお腎眺めてなんとも思わなかったの、ミチは。私も腎責されると、なぜ云わな



かったの？」

「顔をお見せ——」

髪の毛をつかんで、萌子は引き寄せた。

「ごめんなさい、お姉様——」

「いいえ、憎らしい……」

が、その憎しみをどう向けようもなく、萌子は剥きだされた青黒い無惨な鞭痕に眼を凝らしていた。

——友岡の、ほとんど夜毎と云っていい臀責に、トイレに行くのも苦痛に喘ぎ、この世でこんな目にあう妻は自分だけだと思っていたのに……

美千子もそうだったとは——

意外と云うより、なにか切ないものが心に触れた。

可愛想に、ミチも私も……

萌子の想いが美千子に伝わったように、彼女は静かに嗚咽しだした。

庭に、ふいに日照雨が縞を立てた。

次第に庭は暗く翳っていった。陽の色が消え、雨は大粒の篠をつく本降りとなった。ざざと杉の木立に音を立てる。

やがて、風が加わった。

縁側に雨脚が烈しく降り込んだ。

どちらも形よい臀に責痕のある二人の美女が、あわてて雨戸を繰りだし、繰り終ると濡れたまま再び手を取り合った。

——哀憫。

そんな気持が、いつのまにか二人を一つにしたのだった。

(四)

美千子は昼前町の市場へ出かけて行って、市場とは反対側の商店通りのウインドウの一つを、覗き込んでいる鮮やかな水色の和服の

の後姿に、一瞬烈しく胸をわななかせた。萌子だった。横顔を見せてウインドウを離れて行くその若い女が、人ちがいであったのを認めたとき、反動的に落胆は深かった。

——あの日から、ぶつとりと萌子は姿を見せないのだ。指折り算えると、とうに一月は経っていた。季節はもう初冬だった。

市場には青い蜜柑が姿を見せていた。

その蜜柑も籠に入れて、白く埃風が舞う道を市場から帰りながら、落胆が心に尾を曳いて美千子の足は重かった。

どうしているのだろうと思う。

なぜ来ないのかしら？。

萌子に似た姿のいい人を見たばかりに、堰が切れたように、いっそう萌子への恋慕が募った。

もう一度、もう一度でいいからあの美しい顔を見せて貰いたい。

小川に懸っている木橋の欄干に美千子は胸を寄せて、佇んだ。初冬の淡い陽が、澱んだ水に照り映えている。

慕情のそよぎが身のうちを走った。

ぼんやりと歩きだしながら、美千子はふっと、おぞましい想いに打たれた。

——異常な女。

——同性愛に焦れる女……。

いけない女なのかしら……。

伊地々という夫のある身で、萌子に魂をしびらす自分が、病的な女に映った。

官能の海に溺れるという言葉があるが、美千子にとって、その海は萌子の腕の中だった。

伊地々の腕の中で、その深い熱い海に浸ることはなかった。

夫は、加虐者だった。

鬼としか映らない。連鎖的に夫のこのが考えられると、美千子はハッとして俄に足を速めだした。

土曜日だったのだ。通りの商店の時計を覗くと、針がもう一時近くを指していた。

土曜日は午後から腎責をされるのが習慣となっていた。そのため夫は午迄には帰宅するのだった。

迂闊だった。土曜日を平日と錯覚してしまっていた。美千子は駆けだしていた。籠の底で青い蜜柑が揺れた。

石段を荒い呼吸を帯びて駆け登って、ガラリと格子戸を開けると美千子はほうっと気持がゆるんだ。が、次には脱兎のように部屋に上って服をむしりとると、襦を手早く締めだした。キュキュと締込むと、始めてはっと深い安堵の色が浮んだ。ほとんど同時に、格子戸が開いた。いつものように赤い襦は迎えに立った。

「あっ！」

美千子は驚いた。赤い襦はもう一人いた。それは萌子だった。夫と、もう一人の男に腕をとられて、萌子は美千子とそっくりの襦姿で、三和土の上に引き立てられていた。見知らぬ男の方が、こまで着せて来たらしい桃色の春コートを肩に担ぎ、萌子の穿いたハイヒールが奇妙な感じを唆って映った。

「……あなた……これは……」

と、声が喉の奥で引っかかった。

男二人は、ただ、にやにや笑っている。

「——、萌子さん……」

萌子は顔を挙げた。白い顔だった。ひどい苦痛を堪えて、そのため口も利けないという風なゆがんだ表情だった。

それを見、おろおろと男の顔へ移した視線が、ふっと狼狽した。

萌子の夫だろうか——眼が美千子の躰へ這いまわっている。はじめて顔に羞恥の血がのぼった。

そのとき、萌子が身悶えした。

「ああッ！……い、行かして！」

ウハハと男二人は笑った。

「人の家に来て、お行儀の悪いことを云うものじゃないよ、お前」
やはり友岡だった。萌子の身悶える後ろから抱き上げて、靴を脱ぐと

「じたばたするな」と萌子を叱りながら上って来た。

「奥さん、うちの女房と恋仲だそうですね」

「——」

「おい」

夫が上って来て肩をつかんだ。ピシッと頬を張られた。よろけた
同じ右頬へまた平手打ちが襲った。

「行け！」

どんと突かれて、くるっとまわって部屋の方へたららと駄が泳いだ。

ヒューと、友岡が口笛を吹いた。幾分か薄いあざとなっている責
痕のある白い腎が、赤い筋で仕切られて、眼に飛込んだのだ。

伊地々は追いついて来て、その腎を、足で蹴り蹴り部屋へ追込んだ。そのあとから、友岡が這入って来ると、萌子を一度眼よりも高く差上げてそのまま手を離れた。

どしんとばかり畳に腎餅をついて萌子は大の字に倒れたが、すばやく起上って必死な勢いで、ただと廊下を踏み鳴らしながらトイレへ駆け込んで行った。中扉を開ける音が烈しく立った。

ウハハ……と、笑声が部屋一杯にはじけた。

その笑いがまだ残る声で、

「美千子……」

「は……はい……」

「謝れ。俺と、この友岡さんに」

声が尻上りにきびしく高くなった。

「奥さん……」

これは柔かい声で割込んだ。

「女房の奴がすっかり白状しましてね、私は驚きましたぜ、まったく。人妻同志でありながらねえ……」

「ありながら、おまえは——」

伊地々が語を継いで云った。

「いい恥さらしだ。おい、こら、よくも知らぬ顔を……」

「ひい——」

と、美千子は呻めいた。つつ伏した。思いきり伊地々は腎を蹴っていた。墓のように腎を上に向けて、ほそい肩が喘えいでいる。

ぼんやりした表情で、萌子が部屋に帰って来た。

つつ伏している美千子を見ると、ふいに烈しい表情が走って、美千子の背中へ自分の胸を押しつけて哭くが如く訴えた。

「ミチ！許して……許して。ねえ、ねえ。寝言で二度も三度も、あなたの名前を呼んで、友岡に怪しまれたのかわ。……それで檻禁されて、毎日……ひ……ひどい目に……隠しきれなかったのよ……ゆ……許して……」

熱いものが、美千子の背中を濡らした。ああ、こんなに熱い泪。

美千子は、恨みが、その泪の熱さに溶けてゆくような、感動に揺さぶられた。

こんな形にしろ、萌子と会えたことが、一種満足に似た想いを湧上がらせた。

（……許すわ）

心のなかで、呟いていた。

「……会社へ電話をかけて、御主人に友岡が喋ったの……そしたら家へお見えになって……」

輝をさせたのは、伊地々の発案だろう。コート一枚着せて、ここ

まで——

途中の電車やバスをどんな気持で乗って来たのだろう——

——お姉様、可愛想に……。

「泣かないで」

美千子は小さく、が、はっきり云った。ふいに萌子の胸が引き離された。

美千子は壁を両手で支え、臀を突きだして云った。

「輝のままだ」

「ふふ……まず、そのままで行こう」

後ろで友岡は答えた。

襖を距てた隣間では、もう鞭の音が鳴って萌子の悲鳴が挙っていた。

責めているのは、伊地々だった。

美千子は友岡から——

——これが、謝罪の方法だった。

けだし、これほど苛烈な仕置があるうか。

けれど、美千子は観念した。これで謝罪が叶うなら、それに素直

に服したかった。

それが済むと友岡は水を飲ましてくれた。

「ああッ！もうお臀はやめてッ！ああッ！うああッ！」

萌子の声が目をつんざいた。

と甘い、確かに何か異様に甘い感情が、美千子の胸に突然、霧のように立ちこめて来た。

模糊とした白い乳のような霧だった。

その霧は、美千子の感覚を酔わせ心をしびらした。

軀を這う友岡の視線が、魔法使のように美千子を魅惑した。

「思いきり責めて……」

剥きだしにした臀を、友岡の眼一杯に曝した。

——受難。

——お姉様と……

美千子は白い不思議な霧の正体を、ふと掴んだようだった。

「早くう……」

そう云っていた。

——完——

通信

長瀬昭子様へ挑戦します

隅子 三 千恵

長瀬昭子様、失礼をもちえりみず御たより差上げるぶしつけをお許し下さいませ。十月号に掲載してありました貴女の御通信を拝見して、急にお呼びかけして見たくなりました。

今度、貴女は素晴らしい傑作写真をお撮りになったそうですわね。お美しい貴女が、お綺麗な洋子さんを捻じ伏せて馬乗りに跨っているっしやるお写真は、どんなに美しいかしらと

羨ましくてなりません。さぞお見事でしょうね。出来ることなら、私も一度拝見させて頂きたい気持で一杯です。でも貴女は、腕力の劣った洋子さんを組み敷いて、余り得意になり過ぎていらっしやる様ですわね。何故って弱い者いじめをして、さも誇らしそうに誌上に御発表になるのですもの。そんなことでKKの女王にでもなったつもりでいらっしやるとしたら、ほんとにこっけいですわ。だって貴女よりずっと美しく

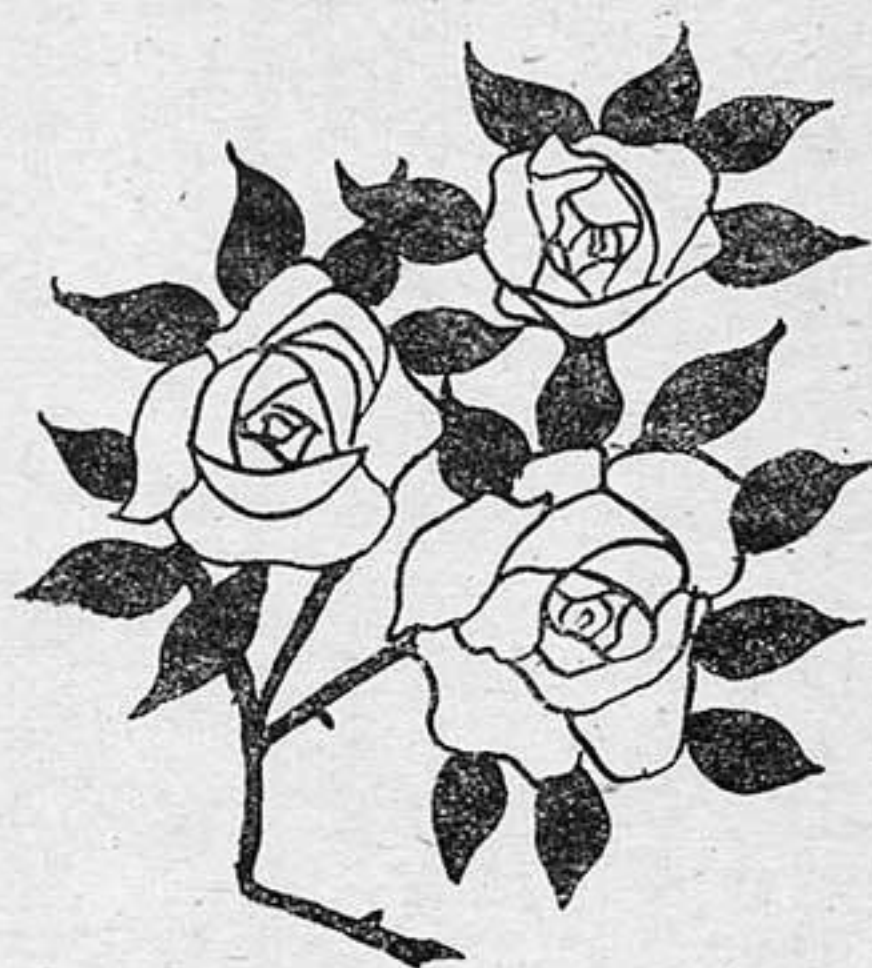
て、うんと強い女性が未だ沢山いることを忘れてないで下さいませ。弱虫の洋子さんを組み敷いた位で天狗になり、女性全部を征服した様な錯覚を起すなんて、少し思いついてはいらっしゃらないかしら。私は貴女の御通信を拝見して、貴女の高い鼻をへし折ってやりたくなりました。如何でしょう、貴女と私の争覇戦を行いましようか？勿論、誌上に其の時の写真と観戦記を載せて頂くのですわ。でもルールやレフリーは必要ありません。どちらか一人が気絶してノビたら、自然に勝負がきまりますもの。きつと凄まじい白熱戦が展開されるでしょう。打つ、蹴る、投げる、押え込む、絞める、何をしても自由ですわ。そうになったら私、貴女にしてみたいことが色々ありますのよ。先ず立技では、最初にボクシングの手を使いましょうね。貴女の丸い頰をガンガンと突き上げたり、目から火が出る程、鼻柱を叩きつけたり、或は貴女の双頬をピシッ、ピシッと力一杯なぐってみたいものですわ。そして貴女がタジタジとなさったら、今度は思い切り脚で蹴り飛ばして差上げましょう。私は試合の時でもハイヒールを用いますから、貴女は固いハイヒールの底で蹴られる覚悟をおきめ下さいませね。私はエイッと脚を上げて、ごっくん、ごっくん貴女の向う脛を蹴りつけてから貴女に近づいて、今度は膝頭でがくつと貴女のものもの辺りを蹴り上げてみま

すわ。貴女が「うっ！」と呻いて眼を白黒させ乍ら飛び上る光景は、いいものでしょう。次には柔道でドタン、ドタンと貴女を投げ飛ばすのです。背負い投げ、腰車、巴投げ、何でも私、得意ですよ。そして貴女がフラフラになったら、いよいよ寝技で押え込んで差上げましょう。仰向きに捻じ倒した貴女の首の上に跨って、顔を太ももの間にぎゅうと挟み込むのですわ。そして貴女の両腕をしっかり両膝で踏み敷いて、股でぐいぐい喉首を絞めるのです。貴女が、やっと顔だけのぞかせて「アップ、アップ」苦しむ表情を、クローズアップで写真に撮ってもらいたいものですわ。それが済んだら、いよいよ最後に私の大好きな奥の手で、貴女にとどめをさしてお見せしましょう。つまり貴女のお顔の上に、私の大きいお尻をべったりのせて腰掛けにするのです。貴女は、お口とお鼻をびったり私のお尻に下敷にされて息も出来ず、声も出せず苦悶にのたうつことでしょう。もしも貴女が死にもの狂いに私のお尻をつきのけることが出来ても、私は何度でもしつこく貴女が気を失うまで繰り返しますから、どうしようもありません。ついに貴女は「うーん」とノビてしまうでしょうね。そうなれば意気揚々と立上った私は、床の上にノビた貴女の頬に片足を上げて、ハイヒールで踏みつけた得意なポーズでにっこり微笑みながらカメラにおさ

まるでしょう。どんなに素敵かしら？

ホホホ、こんなこと申し上げては貴女もそろそろおじけづいていらっしゃるでしょう。コソコソ逃げようとなさる貴女のお姿が眼の前に見える様ですわ。でも、そんな卑怯な真似はなさらなくても結構です。どうしても私に勝ち目がないとお諦めでしたら、そうおっしゃって下さいませ。特別のお慈悲で試合を免除し許して差上げないでもありませんわ。その代り貴女は私の家来になって、絶対服従をお誓いにならなくてはなりません。よろしうございましょうか？そうなれば私は貴女を馬にして乗り廻してみましよう。貴女も私も女性同志ですから、貴女を裸には致しません。けれど勿論、パンティとブラジャーだけにはなって頂きますわ。そして四つんばいにおなりになって、私をのせたまま命令通りに動くのです。若し違反でもなさいますと、私は絶対容赦しませんから、充分御注意下さいませね。

それから私は満二十三才、身長五尺三寸、体重は十五貫ありますから、御参考のため申添えて置きます。職業は会社事務員で無論未婚です。容姿はやや肥り気味かも知れませんが、みにくい方ではなく、まあ普通でしょう。失礼なことばかり書きました、お許し下さいませ。お元気で、さようなら。



創作

宿 直 室

青 榎 村 奏
木 審・画

封書をとりだすと、高原は、達筆な文字で認められた書翰箋に、もう一度眼を通した。

高原七郎は逃げるような足どりで校門を出ると、いつものように電車の駅へ向ったが、途中、何度か生徒に挨拶されながら、まるで気がつかなかった。

二た駅も乗り越して電車を下りると、高原は、まるでそうしないではいられぬように、どろどろ歩いた。

人気の無い川の堤に出ると、彼はやっと足を止め、暫く放心したように対岸の工場地帯を眺めていたが、やがて、グッタリと草に腰を下した。

手は自然に伸びて鞆へいく。恐る恐る白い

高原先生。お驚きになってはいけません。

私は、十五年前、小学校で先生にお教えを受けた木村真です。私が、このたび数多く受けた手紙の中に、先生のお名前を発見したとき、それが全く予期しなかったものだけにその驚き、喜びは、何にたとえようもありませんでした。私は、それこそ、本当に狂喜しました。先生がマゾヒストであったと知った今も、まだ信じられぬくらいです。お手紙の文面からみると、先生は、私のことを、昔の教え子の木村だとは感付いていられないよう

で、もしそれと判っていたら、あのような手紙はくださらなかったと思いますが、今更後悔されても、後の祭です。先生がマゾだと判った以上、私は、決して、先生を逃がしはしません。この期に及んで、いくらジタバタしても、もう絶対に先生は私から隠れることはできないのです。では、いずれ近いうちにお目にかかります。

木村 拝

何度読み返してみても、手紙の文面に変りのあるう筈がなかった。高原は、マッチをすると、手紙に火を移した。

自転車に乗って通りかかった若い警官が、

不審そうに高原のほうを見たが、別に何も訊かずに走り去った。

高原は、何かうしろめたい気持ちになって立ち上ると、駅へ戻りかけたが、頭の中は手紙のことで一杯だった。

高原は、四十二才の今日まで、己の中に根強く巣くっている異常性格に苦しみ通してきた。勿論、必死の努力で抑制し、内攻させている彼のマゾヒズムを、周囲で感付いている者は一人もなかった。当然、対象の得られない彼は、書物や、映画・演劇で僅かに欲望を充足していた。「男責め」のシーンのある（もしくは、ありそうな）映画は、一つ残らず観て回ったが、それらの多くが、低級な通俗映画である為に、教師である彼は、ストリップを観る男達のように、気恥かしい思いをしながら、切符を買わねばならなかった。

或る日。駅の売店で、何気なくパラパラと繰っていた雑誌の「読者交歓室」で、文通を求める欄に、「マゾヒストの男性と文通を望みます。当方サディストの男性」というのを見つけたとき、高原は、呼吸の止まりそうなショックを受けた。夢中でそれを買ひ、その頁だけを破りとしてポケットに入れ、後を肩入れに捨てて電車に乗ったが、胸の動悸は仲々におさまらなかった。

一週間も躊躇したあげく、高原は、遂に手紙を書いてしまった。相手の住所がかなり遠

隔の地であるという安心感もあった。又、文通だけならという、自己弁護も用意していた。投函したとき、ポストの底で、バサリと微かな音がした刹那、後悔の念が彼を襲ったが、それよりも、期待のほうが強かったことも事実だった。

昔の教え子の中に、木村真という名前のあったことは全く忘れていた。かりに覚えていたとしても、二人を同一人物だと判断するだけの余裕が、果して高原にあったかどうかは疑問である。

妻に知れるのを惧れて、学校の住所を書いておいた高原は、毎朝出勤すると、木村からの返事を、今日は、今日はと待った。四日目に授業を終えた高原が職員室へ戻ってくると机の上に白い封書が置かれていた。直感で、木村からの返事だと知ると、彼は周章ててそれをひきだしに隠した。それから、周囲を見回したが、誰も彼のほうを見ている者はなかった。その後は、もう落着こうとしても駄目だった。高原は、すばやく手紙をポケットに忍ばせると、便所の扉を開けた。

木村が昔の教え子だと判ったとき、高原は脳天に鉄槌を打ちおろされた思いがした。今度こそ、本当の後悔が激しく胸を噛んだ。教え子であった人間に、自分の性向を知られてしまったことは、恥かしいというよりは、恐ろしかった。中学校の教頭ある地位が、ガラ

ガラと音をたてて崩れていくような気がして眼の前が真っ暗になった。

（どうしたらいいだろう？……）

高原が毎日考えるのはそれだけだった。しかし、日が経つにつれて、不安は少しずつ薄らいでいった。

半月過ぎたが、恐れていたように、木村から何か云ってよこすこともなかった。郵便物が配達される度にヒヤリとはしたが、木村からの音信は、とうとう一ト月余り無かった。もういいかもしれないと、安心感がでてくると、物足らなさも同時に湧いてきたが、高原は、ともかくも元氣をとりもどした。

運動会も近付いた頃、職員会議を終って廊下へ出た高原は、

「アノ、この方が、先刻からお待ちになっていらっしやいます」

と、事務の少女から名刺を渡された。

「いると云ったのかい？」

そう云う高原の声はかすれていた。顔色も蒼く変っていたが、逆光で、幸い少女には気付かれないようだった。

「いると申しあげては、いけなかったんですか？」

「いや——応接室だね？」

「はい」

応接室の前に立った高原は、少しでも動悸

を鎮めようとして、深く呼吸をしてみたが、何の効果もなかった。諦めて彼は、顫える手で扉の把手を握った。

採光の悪い室の壁際の椅子から、長身の男が影のように立ち上った。

「先生！……お久しぶりです」

「木村君だね——遠方をよく……」

そう云ったきり、高原は、後の言葉が、すぐには続かなかった。少年の頃の木村は、色の白い、神経質そうな顔だちで、頭はよかったが、内気な性格だった。その他には、別に変わったところがあるというでもなく、殊更に目立つ存在ではなかった。

「木村君。君が僕を忘れずにいてくれたことは嬉しく思うよ。しかし——」

高原は、扉を細目にあけて、外に誰もいないのを確かめると、

「しかしね、君に逢うことを、僕は恐れていたんだ。卑怯かもしれない——正直云って、僕は、自分の軽卒を後悔しているんだ。君には済まないが、どうか、このまま、何も云わずに帰ってくれないか。久しぶりに再会した教え子に、こんな冷い態度をとらなければならぬ僕の気持を判ってくれ。君が、少しでも僕のことを思ってくれるなら、僕を、このまま、ソツとしていてくれ。お願いだ。ナ、木村君」

手を合せんばかりに哀願する高原を、木村

は冷然として眺めていたが、唇の端に、あるかなしかの笑いを浮かべると、

「判りました。ともかく、今日のところは、これで引き揚げるとしましょう。ですが、先生。御安心なさるのはまだ早い。私は、蛇のような男です。一度狙った獲物は、決して逃がしはしませんよ。それだけはお忘れなく。では——」

と、妙にゆっくりとした調子で云って、扉を開けた。

その扉が閉っても、高原は放心したように立ったまま、動かなかった。

二

一日、二日と経つにつれて、高原の不安は増大し、職員室でも、家へ帰ってからでも、長いことじっと考え込んでいることがあるようになった。誰も何も云いはしなかったが、内心では、高原の様子に不審を抱いている者があるかもしれない。

宿直の日が回ってきたとき、高原は朝から胸騒ぎがして落着かなかった。それで、食事にも早めに摂り、宿直室を閉めきって、布団へ潜り込んだ。

職員室の時計が十時を打つのが聞えた。就寝前、校内を一巡しなければならぬ。高原は、よっぽどやめてしまおうかと思ったが、それでも気が咎めるので、懷中電燈を持って

廊下に出た。

本館を終って、旧校舎へいくべく昇降口の戸を開けた高原は、渡り廊下の柱の蔭に人の姿を認めて、一瞬軀を硬くした。

それが誰であるか、確かめる必要はない。言葉通りに、とうとうやって来たのだ。

「木村君——」

かすれた声で、呻くように云うと、高原は懷中電燈を消した。木村は、無言で近寄った。高原は、硝子戸に背を支えながら、

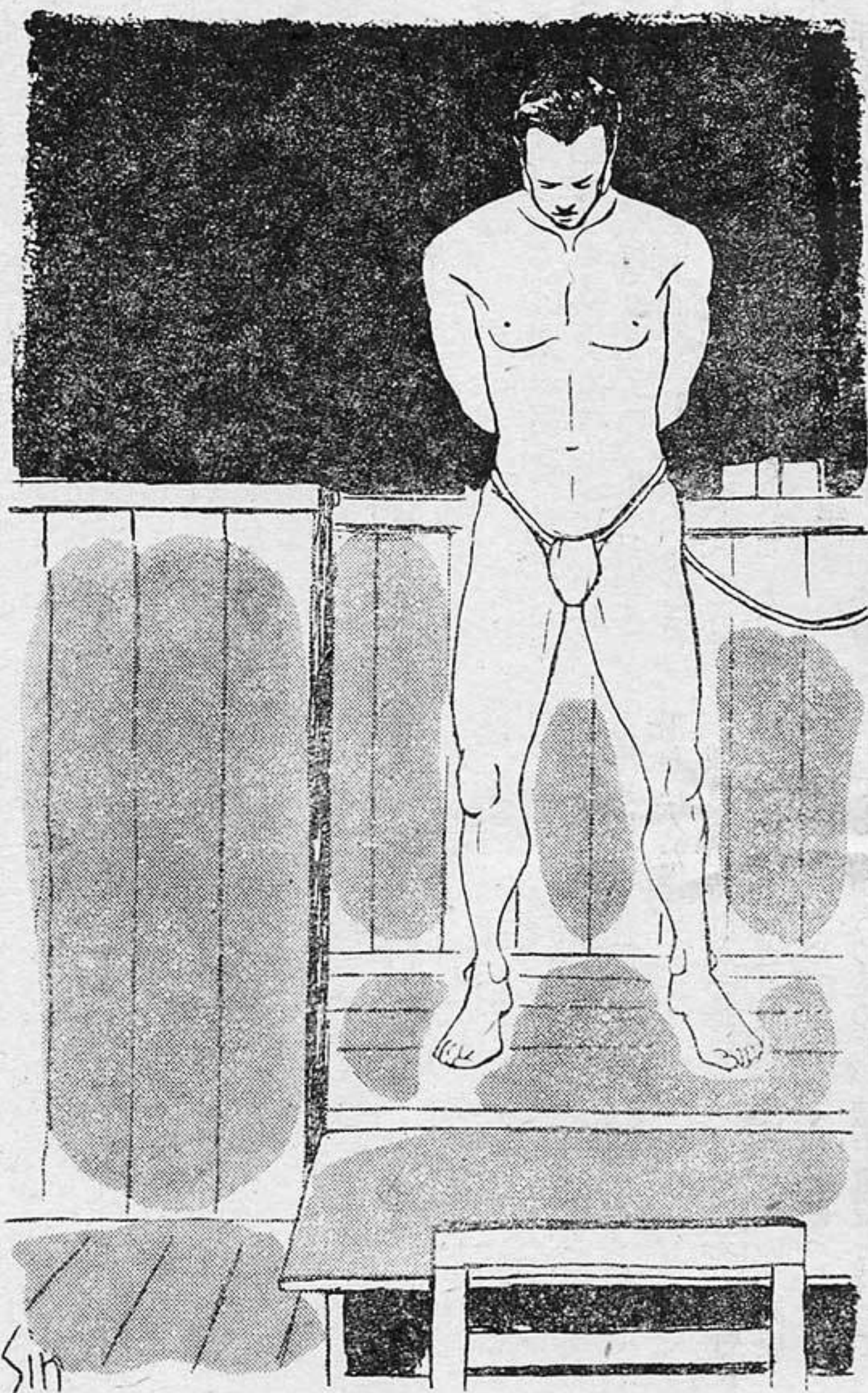
「僕はね、覚悟はしていた。君からは、もう逃げられないと思っていた。しかし、此処は学校だ。こんなところで、君——指定してくれば、どこへでもいくよ。だから、今夜は勘弁してくれ。ナ、お願いだ……」

と、精一杯の声で云ったが、歪んだ貌は、絶望で蒼ざめていた。

「先生。私は、先生を責める場所として、ワザワザ学校を選んだのです。他の場所では面白みが半減します。学校の中なら、先生は自分が教師であることを、絶対に忘れることはできない筈です。私はね、単に肉体的な責めでは満足しないんです。心理的な苦痛も共に与えないんじや、責めの醍醐味は味えませんか」

「君は、悪魔だ……！」

「悪魔ですか。ハハハ、結構です。その称号を喜んで頂戴しましょう」



「ああ、俺は破滅だ！」

高原は、顔を覆い、髪を掻きむしった。

「ハハハ、さア、こちらへ来るんです」

高原のほうに、上背もあるし、胸も厚い。

四十を越したといっても、昔柔道で鍛えた軀で、腕力には自信があった。それが、今は、殆んど無抵抗で、ズルズルと木村に引きずられていく。手足が萎えたようになって、云うことをきかないのだ。

宿直室へ入ると、高原は観念したように、

力なく胡坐をかき、乱れた髪をそのままに俯向いた。引き締った頬の筋肉が、神経的にピクピクと痙攣している。

木村の手がツイと伸び、次々と、邪慳に高原の衣服を剥ぎとっていくと、露出した皮膚は、電燈の光を受けて、若者のそのような光沢を放った。遅しく発達した体軀は、更に研磨されて、壮年のみがもつ精緻な美しさに

完成されていた。

木村の手が、最後にパンツへかかったときそれまで易々としてなすにまかせていた高原は、僅かに抵抗を示した。

「君。それも脱るのかー？」

「パンツじゃね。責めには向きませんよ。とって、かりにも恩師である先生を素ッ裸にもできませんから、かわりのものを用意してきました」

木村のとりだしたのは、带状の白い布で、長さは六尺位あるが、巾は普通褌に用う晒の三分の一位しかない細いものだった。

木村は、六尺褌の要領で、その布を高原の腰に廻したが、前袋は、思いきり下げて後に引き、力一杯に締めたので、尻の割目に深く食い込んだ布は、結目以外は見えない程だった。疼痛を伴う緊縛度は、褌というより、股間縛りといったほうが当たっている。それは、見た目にも、普通に締めた六尺褌よりは、数倍凌辱的だった。

木村は、次に、荷造り用の新しいロープをだして、パリリと解いた。

忽ち、高原の腕が後へ捻じ上げられる。

「どうです、先生。昔の教え子に辱められる教師の気持は――？」

「……！」

高原の臉には、作文の得意だった、腺病質な木村少年の姿が浮かんだ。その足許に、裸

で縛られ転がされているのは、若く逞しい、青年教師の自分である。

屈辱感が今更のように、五官を戦かせた。しかし、いくら酒を飲んでも酔えないときのように、被虐の陶酔はまるでなかった。逃がれられないと観念はしたが、高原は、早く終つて開放されることだけを願っていた。

木村は、ゆっくりと入口の戸を開き、後手の縄尻をとると、高原の肩をこづいた。

「ど、どこへいくんだ——？」

尻込みする高原に、木村は、

「どこでもいい。サッサと出ろ！」

と高飛車に云って、ドンを押した。

高原は、よろめきながら、

「駄目だ！ この中だけにしてくれ——お願いだ。外に出ないでくれ。この室でだけなら、どんなことをされてもいい。頼む。頼むから、それだけは——」

と、必死になって云ったが、木村は、鍵束をグチャリとポケットへ入れると、容赦なく高原を廊下に引きずり出した。

長い廊下をサンザンに引き回されたあげく高原は、一年A組の教室へ連れ込まれた。入口を入った途端に高原は、生徒の席から、一齊に、百近くの視線が此方に向けられたような錯覚を感じて、軀が縮んだ。

高原は、突きとばされながら、教壇に立たされた。彼は、若い頃、幾人かの少年を、こ

うして教壇に立たしたことがある。木村を立たした記憶はなかったが、あるいは、やったかもしれない。

今から数時間前には、高原は、この教壇に立って、社会科の購議をしていた。それが、今は、みじめな裸に剥かれて、罪人のように立たされている。

教室を見渡すと、一人々々の席に、見覚えのある顔が浮かび、誰の顔も一樣に軽蔑の表情をしていた。

「木村君。出よう。出してくれ！ 此処はもういいだろう——」

「ハハハ、先生にも、生徒達の顔が見えるんですね。私もその効果を狙ったんですよ。しかし、出るのはまだ早い。番組は半分進んだばかりです」

「……！」

「ただ教壇に晒しただけじゃ曲がない。お仕置をしなければね」

木村は、黒板のわきから竹の鞭をとると、呼吸を計って、ピシッと打ち下した。

「あッ！……」

鋭い痛み、高原は思わず声をあげた。

生れてはじめて受ける鞭は、本で読んだような甘美さとは、およそかけはなれていた。打たれるという被虐感と、それに伴う疼痛とが、必しも一つではないことをそのときになつてはじめて知らされた。

「痛ッ！……」

痛みから逃れようとして、本能的に身をかかし、逃げ腰になつて教壇を下りた。

木村は、わざと縄尻を離し、逃げ回る高原を追つては打ち据えた。

「アッ。痛ッ……痛ッ。あッ、あッ……痛ッ。助けて、助けてくれッ！……」

悲鳴をあげて、机の間を逃げ惑った高原は遂に追いつめられて、机の上へ仰向けに突き倒され、足を宙に泳がせながら、尚も鞭の乱打を浴びた。

やっと赦されて教室を出た高原は、職員室の前に連れて来られると、再び身が凍んだ。しかし、何を云っても無駄だと諦めた高原は、木村が扉に鍵を差し込んで、何も云わなかった。

中へ入ると、木村は、かまわずに電燈のスイッチをひねった。パッと、室内が昼のように明るくなる。

「何をする！ バカ。消すんだ。小使に見つかったらどうする」

狼狽した高原は、蒼くなって呟鳴った。

「大丈夫ですよ。カーテンが閉めてあるし、電気のポイントが判つても、先生が何か調べものでもしていると思うだけです」

「駄目だ！ 誰かに見られてもしたら、俺は生きやられない。頼む！ 消してくれ！」

「嫌ですね。私は、明るいところで、先生の

苦しむ姿をとっくりと見たいんです。——この職員室は仲々広いんですね。ああ、あそこが教頭の席か——先生、御自分の机のところから、ズツと見渡してごらんない——もし皆がここにいたら、裸で縛られた教頭をどんな目で見るでしょうね。そして、教頭がマゾヒストだと知ったら、どんな顔をするでしょうか——」

「君は、君は、恐ろしい人だ……」

「オヤ、泣いているんですか？——先生。私はね。小学校のとき、先生が校長から叱責されて泣いていたと友達から聞いて、ひどく興奮したのを覚えています。あの、若くて男らしい先生が、本当に泣いていたなんて信じられなかったんですが、それでも、胸がワクワクして、どうしようもありませんでした。子供の私は、大人の男の泣くのを見たり聞いたりすることがとても好きで、ラジオドラマで男泣きの声を聞いても、その夜は眠れない位気が立ってしまふんです。私は、何度も、先生が子供のようになんて声をあげて

泣くのを夢に見たものです。今夜は、先生の泣き顔まで見られて、こんな愉快なことはありません」

「ああ、俺は馬鹿だった！ どうして、あんな手紙をだしてしまったんだろう。今迄せっかく努力してきたことが、みんな水の泡にな

ってしまった！ 俺は、もう駄目だ——もう何もかもおしまいだ……」

高原が、とり乱せば、とり乱す程、木村は冷然として、

「泣くんならお泣きなさい。泣いてどうなるものでもありませんがね」

「木村君。君は、俺の一生をだいなしにしてしまったんだよ。俺は、どうしたらいいんだ——」

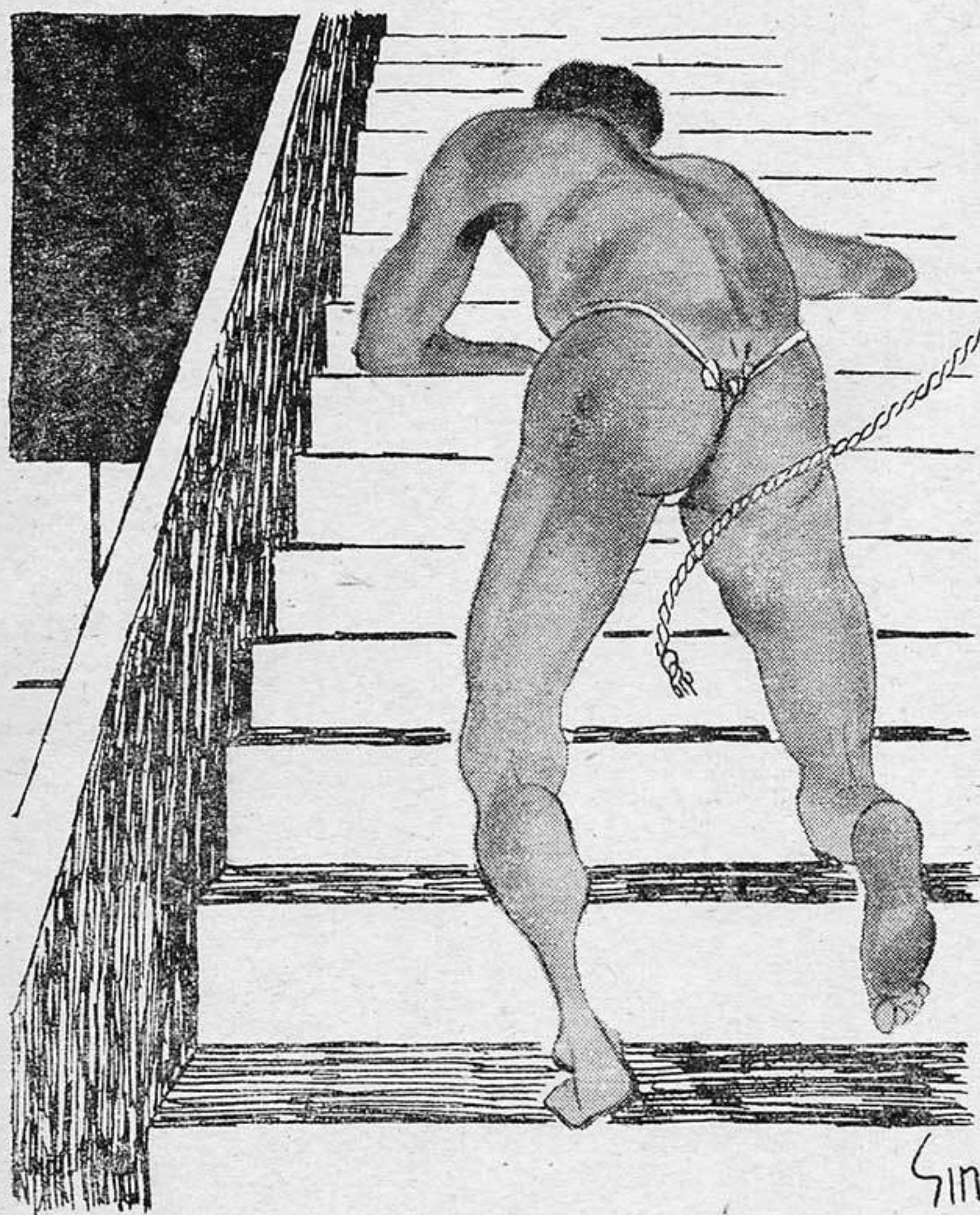
遂に、高原は、声をあげて泣き始めた。まるで泣くことだけが救いでもあるかのように、声を絞って号泣した。後手に縛られたままなので、むきだしの顔は、涙と鼻汁でベタベタに汚れた。

それを眺めているうちに、木村の眼は、次第に狂的な光を帯びてきた。

「泣けッ！ もっと、泣け」

木村は、ズボンのベルトをはずすと、興奮に委せて、力の限り叩きつけた。

「あうう……」



高原の軀が海老のように曲がる。一撃で、浅黒い皮膚は破れ、血を噴いた。

高原の泣き叫ぶ声が、木村の鞭に拍車をかけ、狂ったように打ち続ける。

高原の泣き声が細くなると、木村はやっと鞭をおいたが、その眼は、まだ、飢えた狼のように血走っていた。

木村は、不意に、高原の縄を解いた。

高原は、怯々と木村を見上げる。

「おい。四ツン這いになるんだ！」

その顔へ、叩きつけるように、木村が呟鳴った。

「四ツン這いのまま歩け。さア——」

木村の足が、情容赦なく高原の尻を蹴る。

「さあ、いいか。この階段を屋上まで登るんだ。ソラ」

縄で尻を打たれながら、高原はぶざまな恰好で階段を這い下った。

三

息もたえだえになって屋上に辿り着くと、夜風の冷たさが高原の肌にしみた。

「こっちへ来い」

木村は、高原の手を、左右別々にてすり、へ括りつけた。高原の姿勢は、足を投げだして下体を越し、両手を水平に近く上げた形になった。コンクリートの床へじかにつけた臀部から、ゾクゾクと寒さが浸透してくる。

「先生。それじゃア、私は帰りますからね。朝までそうしていただきましょう。朝になれば、誰かが見つけて助けてくれるでしょうよ」

「何だって？キ、君。それは、本気で云っているのか？」

「本気ですとも。これも予定のプログラムに入っているんです。夜が明けるまでの数時間は相当に苦しいでしょうが、マゾにとってはまんざらでもない筈ですよ」

「マゾ？——木村君。俺は、本当にマゾヒストだったんだろうか？」

「何を云いだすんです。先生が御自分で告白されたことですよ」

「しかし君——、俺は判らないんだ。最初から、何の反応も感じはしなかった。今だってそう。嘘だと思ふならよく見てくれ、被虐の喜びも陶酔もない！あるのは、苦痛と恐怖だけだ。それでも、俺はマゾヒストだろうか——？」

「さあネ。まア、そのことも、朝までにゆっくりとお考えになるんですね」

「木村君。君は、どこまで俺を苦しめれば気がすむんだ——」

それには答えず、木村は、サッサと階段のほうへ戻っていく。

「アッ、待ってくれッ！オイ、おうい。木村君。木村君。待ってくれエ。頼む……」

高原は、足をばたつかせ、上体をよじったが、手首に縄が食い込むだけで、無駄なあがきだった。階段を下りていく足音は次第に小さくなる。

尚もひとしきり腕いていた高原は、やがてグッタリとして動くのをやめた。痛みと寒さが、急に身にこたえてくる。

彼は、もう、泣くにも泣けなかった。楽しい遊戯のようなプレイしか想像できなかった高原にとって、木村の責め方は、残酷な拷問にも等しかった。羞恥や不安が極度に強い場合は、却ってマゾヒズムは抑圧されて、被虐の快感が全く起らないものであることを、彼が納得するのには、もう少し時間が必要だったようである。

傷の痛みに加えて、てすりに固定された腕がジワジワと疼痛を起してきた。冷えて感覚のなくなった下半身を少しでも暖めようとして、小刻みに脚を動かしてみる。その運動は又、尿意を抑えるのにも役立った。

高原は、木村が、二、三十分もすれば戻ってくるに違いないと思い始めた。いくらサディストでも、そこまで残忍になれる筈はないし、少くとも、木村の教養を信じたかった。随分長い時間が経ったように感じるが、実際はまだそれ程でないのかもしれない。

（戻ってくる。必ず戻ってくる）

そう思って、高原は、次第に募ってくる尿

意にも耐えていた。

苛立たしい時間が過ぎた。

屋上はサインと静まり返って、物音一つしない。木村の戻って来る気配は全くなかった。

激しい生理的欲求と戦うのに、彼は今や必死だった。そして、又、時間が経った。

高原は、遂に我慢しきれなくなって、床に水溜りをつくった。

このとき、異常な情況に於ける現象が、高原の心に、全く不意に、被虐感をよび覚したのである。彼は、木村に鞭打たれてのたうち回る自分を想像し、その周囲をとりまいて、面白そうに眺めてい生徒や職員を連想した。羞恥と屈辱に、彼の五官は、顫え、戦いた。

その後に来た虚脱状態が過ぎると、高原は二再不安に襲われた。

気のせいか、東のほうが白んできたように思える。

(ああ、朝になったら大変だ！ とうとう戻って来ないのか——彼奴は、何て恐ろしい奴だろう——そう云えば、子供の頃から、どこか陰険なところがあつた——俺は、マンマと畏にかかったのだ——畜生——)

高原は、気違いのように暴れた。しかし、手首に血が滲むばかりで、縄はどうしても脱れない。高原は、たとえ手首を折っても縄を脱さなければならなかった。脂汗に塗れた彼

の全身を、暁の光が薄白く浮きあがらせてきた。明かるさは、恐ろしい速度で増して行く。高原は、いっそ気が狂ってしまったほうがいいとさえ思った。

人の気配を感じたとき、高原は、全身に悪感のはしり、嘔き気を覚えると、意識が混濁した。それが、木村だと判ると、高原は、カッと眼を見開いたが、激しく軀を顫わせるなり、失神してしまった。

高原は、高熱を発して、三日も床を離れることができなかった。

木村からは、その後、何も云ってこない。出勤するようになって、高原にも、妙に怯えた様子があつた。街で木村に似た男に出会い、ハツとして顔色を変えることもある。

そのうちに、又、宿直の番が回ってきた。

高原は、やはり早目に宿直室へ閉じ込めたが、頭が冴えてどうしても寝つかれない。

一時を過ぎ、二時になっても、気持は昂ぶるばかりだった。

ゴロゴロと、寝返りばかりうっていた高原は、遂にたまりかねたように起きあがると、暫く闇の中で凝ッとしていたが、いきなり懐中電燈と鍵束を掴んで廊下に出た。

彼の足は、物に憑かれたように、一年A組の教室へ入っていく。

歩きながら高原は教壇に上り、暗い教室を

見渡した。彼の脳裡には、マザマザとあの夜の有様が甦えった。

「木村……」

高原は、呻くように口ばしる。想い出が被虐の欲望を駆りたて、無我夢中で衣服を脱ぎ捨てた彼は、ベルトをとると、己が軀に鞭をあてた。教壇を転げ落ち、机にぶつかりながら、床の上をのたうち回った。

やがて、よろよろと立ちあがると、彼は、一人々々の生徒の机に体をすりよせ。その生徒の顔を思い浮かべた。羞恥の念が次第に昂まると、彼は、再びも床に倒れ、急速度に陶酔へひき込まれていった。(完)

◎ 予 告 ◎

限定版『女体緊縛

フオートアラベスク』

予定価格 五百円

新人の美貌モデルを中心に、あらゆる緊縛姿態をお目にかけるべく、目下千数百枚のネガの中から選定中です。緊縛マニアの座右の宝典として珍重するに足る素晴らしい限定版として、何卒御期待願います。

【体 験 手 記】

女 体 臍 相 譚

須 藤 律 夫

十一月号「お臍漫録」の中で、冒頭に占臍術に触れたところ、それがいつか凸臍術となつて居り、余り愉快な誤植なので思わず笑つて仕舞つた。筆者性来の悪筆は免角誤読を招くので充分注意してはいたのだが、偶然のミス・プリントは時として巧まざるユーモアを飛ばす。尤もお臍そのものが大体滑稽なもの、ユーモラスなものなのかも知れないが。同じく十一月号で、「とやま・かづひこ」氏のヘソのファンヘ——と題するレポートにより私も早速、寿屋のP・R誌「洋酒天国」を取り寄せて見た。予期した通り中程にある万里昌代のビキニスタイルは誠に見事である。否、見事なのは彼女の稍縦長、大きめに一寸凹んだそのお臍だ。穴と云うには一寸深さが足りないが、もっと腹部の脂肪が沈着すると

深さも増して、屹度引き立つに違いない。世俗に云うゴマの筋までが極めて克明に刻まれ臍帯結さつの跡がまざまざと俣ばれる。ヌード写真は数多く見たがこれ程に臍窩の奥を露呈したものは珍らしい。それも畢竟臍管が比較的太く、臍窩も余り深くないからであろう。筆者の大まかな分類によれば彼女のお臍はA型に属する。(別図参照)この型は男女共よく見かけるが総じて幸運の相、但し内科的な疾病には充分の注意が必要である。万里昌代のお臍がもっと縦長が周囲の脂肪が増して来ると、穴は益々深くなり、筆者分類の中のB型となる。(別図参照)この型は肥満体質や更年期の婦人などによく見られるが、指で展げなければお臍の奥などは迎も見えない。グラマー女優の中、泉京子(松竹)三原

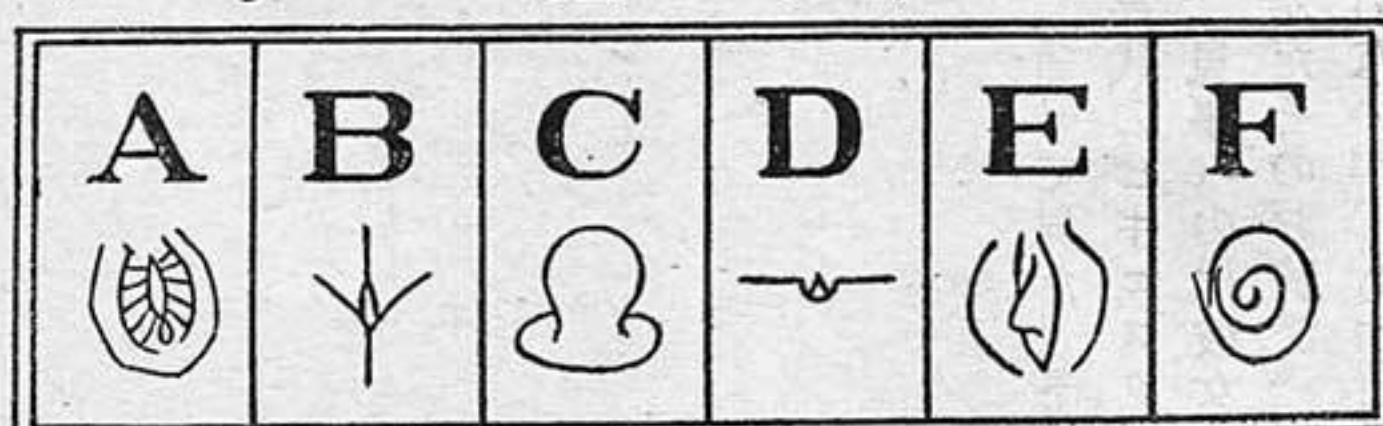
葉子(新東宝)など稍之に近いのではないだろうか。何分にも臍紋が判らぬ為め(臍拓をとれば別だが)占臍術とは云えぬかも知れぬが古来より幸運間違いなしと云われている。

縦長のお臍も充分の深さがないと余り引き立たない。幾ら豊満な美しい腹部でも、その中心に一点の黒い穴がないと、曲線の美も平坦さに打ち消されて仕舞う。よしそれ程でないにしても盲腸の痕跡の様な浅いお臍は何か淋しさ、弱々しさを誘うようだ。筆者は数年前の冬、浅草公園劇場で「ストリップ忠臣蔵」を見た事があるが、内匠頭に扮したヒロセ元美の切腹を見てつくづくとそれを感じ、今も強く印象に残っている。最近では一時去就を騒がれた前田通子(新東宝)なども之に近いのではないかと思う。

先日或る漫画雑誌に、仰向けに横になった裸婦がそのお臍の穴に火箸を刺し込み、「避雷針」と題しているのがあった。火箸ならずとも丸い鉛筆が恰度入る位の小さな、然し深い穴のお臍をよく見かける。日劇M・H運営委員丸尾長顕氏によれば一番美しいものとして読者の御意見は果してどんなものだろう。臍相学上の相当の富貴に恵まれるが、ともすれば吝嗇に陥ると云う。

お臍が漫画の素材に取り入れられる事はよくあるが次もその中の一つ——。

参 考 図 型



或る会社の社長さん、ゴルフの週末旅行と称して秘書を伴って出かけたが、いざとなつて見ると、これが珍らしく飛び出た大きな出臍。そこで早速日頃の腕試しとばかりクラブを握って打ち飛ばす――。ゴルフの球程の大きな出臍は滅多にないが、若しお目にかゝれたら又一つの魅力かも知れない。この出臍も医学上の臍ヘルニア分類C型

(別図参照)であり

手当によって大半は成人迄に治るものだが、稀にはその儘固定して仕舞うものもある。非常にユーモアに富んだものだが臍相学上は余り香しくない。曰く、短命、赤貧、孤独、等々。

中年の肥満した婦人になると、お臍が深く凹んでかくされて仕舞い、真黒なゴマが一杯溜った上、腹壁はくつきりと横一文字の線よって劃される。筆者分類の中D型(別図参照)がそれだ。この奥に臍あり――。人によ

つてはそれ程にかくされて仕舞うものもある。ストリッパー等には殆んど見られないが経産婦等に多いところを見ると、出産と関係があるのかも知れない。運勢は可もなし、不可もなし、財に恵まれると云うのが取得であらうか。

あ、ん、ばんの様にポッコリと凹んだお臍、その奥にチヨコンと臍乳頭の顔を出したような分類E型(別図参照)もよく見かける。非常に愛敬のあるお臍、殊に女性の場合だと何か恥らいを含んだようなお色気も見逃せない。この乳頭の中心に黒子があると大変な幸運の相、男子なら宰相の位に昇り、女性でも栄耀栄華を極めると云うが、よくゴマを掃除してから見ないと間違ふ場合もある。先夜新橋の或るアルサロでこの話をしたところ、本番のルミさんは臍相学に興味があるのか、げげんな面持で尋ねた。

『でも、お臍に相があるなんて、ほんとかしら?』『当るも八卦、当らぬも八卦かも知れないがね、然し趣味として知っていても損はないよ』『こちら、お臍に興味を持ってらっしゃるわね』彼女は私の強いフエティズムを指適するかのようには妖艶な眼ざしで笑う。『興味?興味と云えばそうかも知れないが、然し整った形のお臍には、何か美しさを感じるね。そして、その相が若し我々の運命の一部を暗示するとしたら、尚更興味があるじや

ないか』『あたしも占って戴こうかしら……でも恥しいわ、何だか……』彼女は同輩を顧りみて淋しく笑った。私は吉祥寺の某所に臍相学の易者がいる事、鑑定は特殊カメラで臍部のアップを撮り、更に粘土様のもので臍紋を採る事、女性の場合は口紅も用いられる事など説明した。その夜十二時近くなって折柄の雨は益々激しくなり、私鉄の終電を気にし乍ら出口迄来ると、レインコートと一緒にそつと紙包を渡された。連れの友人の手前その場は何気なく受取り、新橋駅へと急いだのだが、駅のベンチに座り、私はふと最前握らされた紙包に気付き、そつと展げて見るのだった。それは柔かな日本紙に判然とルージュで押された彼女の臍紋、分類F(別図参照)に属するものであり、典型的な渦巻型であった。私に臍相を占えとの謎なのか印象に残るのは真黒なゴマ迄添えられていた事だ。扱、この渦巻も普通は左巻であるが『の』の字型のこの右巻には左利が多い。私は彼女が金を受取る時、そつと左手を差し出したのを想い泛べ、もう一度会って話し合い度いと思ったりした。仕事に追われ、それから二、三日経って再び私が訪ねた時、彼女は既に他の店に替っていたが、私は将来の明朗性が彼女の運命を開き、屹度中運を超えた幸福を把むものと確信している。

(この項終り)

嫁いびり物語

人妻すみれ

東町三郎

☆

半ば人目に隠れつつ
苔むす石の下に咲く
蕙美し唯ひとつ
空に輝く星のごと……

ワーズ・ワース詩

(一)

「夏江！何をグズグズしているのです。一体、何時になったら、お風呂が沸くと云うのかい。」

姑の松子夫人は、手に持った二尺差しの先で、夏江の背をグイと突いた。それでなくても、両手に水の一杯入った大きなバケツを持

っている夏江は、ヨロヨロした。彼女は腰巻一枚の姿にされ、台所から風呂場まで水を運ばねばならないのだ。ピカピカに黒光りに磨かれた廊下には、水一滴でもこぼしたら折檻が待っているのだ。風呂場には勿論、水道の栓があるのだが、松子夫人は夏江が風呂の水を汲む時に限って使わせないのだった。

夏江は、細っそりした腕に重そうにバケツを下げ、冬だと云うのに広い額には玉の汗が光っていた。二カ月前に赤ん坊を生んだばかりの彼女は、その美しい大きな乳房から、たっぷりと乳が出て、重そうに左右に揺れ動いていた。褐色の乳首には、両方共に大きく十文字に絆創膏が貼られているのだ。これは松

子の命令で、夏江が勝手に乳を搾ったり、赤ん坊に飲ませないためであった。

「さあ、早くするのだよ。もう、三時じやないか。お客が来る事は知ってるだろう。」

松子は、夏江の瓜実顔の悲しそうな表情を痛快そうに見て云った。

ザアーと水を大きな風呂桶に開けると夏江は、ホッと息をついで手で後毛を掻き上げて額の汗を拭いた。

「お母さま。一寸、休ませて下さいませ。お乳が張って、とても苦しいございます。」

夏江は、よく澄んだ声で哀顔した。だが無情にも、無言で松子は夏江の細そりとした白い肩に物差しを打ち落した。ビシリと音が風

呂場中に響いた。

「怠け者！そんな根性で、よく市村家の嫁になる気を起したものだねえ。」

と松子夫人は、憎々しく云い切った。

松子夫人は小間使だった夏江を、一人息子の正太郎の嫁にした事が、残念でならなかったのだ。小間使で居た時は、夏江がお気に入りだった松子夫人も一度、伴の嫁となつてからは、手の裏を返す様に憎んだ。勿論、息子正太郎と夏江が愛し合った事を知って、カンカンに怒ったのだが、正太郎のたつての願いに仕方なく二人の関係を認め、一応、嫁としたのだ。孝行息子の評判の高い正太郎は、一度も母親に楯ついた事はなかった。だが、この時ばかりは、何と云つても夏江と結婚したいと強硬に主張した。心中騒ぎも起しかねないので、松子夫人も、やっと二人の結婚を認めたのだが、その後も決してこの家族は、正太郎を除いては夏江を嫁として扱った事はなかった。女中部屋から夏江の荷物を移したとは云え、与えた部屋は前の女中部屋より悪く、一日中、日光の当たらない階段の下にある六畳だった。夫婦となつてからも、夏江を正太郎と一緒に部屋に寝かせる様な事は一回もなかったのだ。だから正太郎は、今でも夜中にコソコソと妻の部屋にしに行く以外はなかったのだ。

松子夫人は早く夫を失い、女手一つで息子

の正太郎と三人の娘を育てた事が自慢でもあった。松子夫人は、その昔、芸者をしていた事があるが、今では大家の奥様として押しも押されぬ貫祿を持っていた。株屋の主人が残した財産を、何十倍にした腕は、女がこうした事に手を出さない時代にしては、全く大したものであった。だから、二言目には「市村家」が出て来るのだ。だが、こうした経済的手腕を持った松子夫人であるが、子供の育て方は甘い一方で、どの子供も満足な人間はいなかった。正太郎は、女の中で育った男で、気の弱い人間だった。母親に頭が上らないばかりか、姉達に対しても言葉返しが出来なかった。色白で優男の彼は、頭はよかった。一中、一高、帝大と云う秀才コースを出て官吏になった。だが、入った所が悪く農林関係で地方を転々とするやら、出張が多く、家にはゆっくりと腰を落ちつけなかった。夏江が、この家に小間使として来て、一年以上も若旦那様の顔を知らなかった程であった。変に暗い性格の青年だったが、正太郎は、まだ、この家では世間並みの人間と云えた。長女の菊子は、嫁に二度も三度も行ったが、何時も夫と喧嘩別れして、今も家に帰って来ているのだ。母親に似て恐ろしく気の強い女だった。次女の梅子は、三十を過ぎても嫁に行こうともせず、手芸に夢中になっていた。リボン刺繍の腕前は玄人で、これで食べられる程なのだ

が、人に教えるでもなかった。気が向かねば一カ月でも家族と口をきかない事もあった。三女の蘭子は、三人娘の中で一番美しく、おしやべりだが、彼女も一度結婚に失敗して家に戻って来ていた。蘭子は、母親や姉達が何度叱つても、平気で男と夜遊びはするし、放蕩の限りを平気でやってのける女だった。こうした小姑を三人持った夏江は、それだけでも苦勞なのに、この三人の小姑は、心を合せて夏江を虐待したのだから、夏江の毎日は文字通り針の筵の上に坐った生活だった。だが心の優しい彼女は、じっと堪え忍んで来た。子供が生れたら、皆の心も変ると思ったのも空頼みであった。逆に女達は、これで、もう彼女を追い出せなくなったと思い、その虐待も激しくなる一方なのだ。

女中は一人、夏江が来る前から居る中年のお里がいるだけで、彼女は炊事以外は殆んどしなかった。だから一日中、家族の事と広い家の掃除の総ては、夏江の肩にかかって来るのだった。彼女は、十八の時に小間使としてこの家に来た。彼女は、下町の大工の娘だったが、頭もよく小町娘とさえ云われた。しかし、母親に早く死なれ、後妻が来てからは、呑ん兵衛の父親は、すっかり若い後妻にまかれてしまつて、彼女は苦勞して育ったのだ。だから小間使に出た時も、継母の手を逃れた事に喜んだ。その後、父親は中風になるし、

殆んど家とは絶縁状態であつた。だから、夏江が正太郎の嫁になると云う時も、家では反對もしなかったし喜びもしなかった。夏江は唯一つ、夫である正太郎の愛を望みに、どんな虐待にも堪え抜こうと固く決心していた。「夏江！何をマゴマゴしているのよ！」

外出姿の蘭子が、やっと風呂の水汲みを終って自分の部屋に行き、着物を着ようとする姿を見て頭から叱りつけた。

「ハイ、只今。蘭子お嬢様。」

夏江は、恥しそうに両手で乳房を押さえ、頭を下げると走り抜けた。正太郎の妻となった今も、夏江は、この人達を、お嬢さまと呼ばねばならなかった。

夏江は部屋に入ると、大急ぎで巾の広い、長い晒を出して、乳房にギリギリと巻き始めた。生れつき乳房の大きい彼女は結婚後、姑や小姑達から、「お前は着物の着方も知らない。牛の様な乳をして何ですか！晒をギリギリと巻くのだよ。」と罵られた。小間使時代には一度も、そんな事を云わなかったのに、嫁となると、人前だろうと何だろうと叱りつけられるのだった。夏江は、現在で云えばバスト九十何センチと云う乳房は、美の中心として人々

に褒め讃えられるだろうが、大正末期の当時は、乳房の大きいのは淫ら女とされ、非難の的となった。彼女自身も、自分の乳房の大きいのが恥しく、悲しくさえあつた。

市村家の嫁とは思えない程、粗末な着物を

着て、夏江は客の接待に出ねばならないのだ。赤ん坊の泣き声が聞えるが、彼女は自分の生んだ子供さえ抱く自由がなかった。赤ん坊はミルクで育てられ、一番上のお嬢さま菊子様が育て下さるのだった。夏江は一日の中



で、一度でも赤ん坊の顔を見る事が出来れば幸福だ、と思う様になった。

或る日、正太郎が会社から帰えると、三人の女客が来ていて、夏江は夫に言葉さえかける閑がなかった。奥の間に料理を運んだり、女ながら酒を飲む連中なので、お酌の相手もしなければならなかった。こうした時、女中のお里も、お嬢様方も何一つ手伝っては呉れないのだ。手伝うどころか、逆に自分達の食事の用も夏江にさせるのだった。

「オーイ、夏江、僕にビールを持って来てお呉れ」と正太郎は妻に命じる。「夏江、お風呂の仕度は出来てるのかい！」と一人で先に食事をした梅子が云う。全く夏江は、頭の中が混乱するほどの忙しさなのだ。その中で、菊子は、冷然と夏江の行動を見守っているのだ。

「姉さん、今日の客は誰だい？」

正太郎は、姉の菊子と向い合って食事をしながら訊ねた。

「ホラ、母さんの昔のお友達よ。山田さんやなんか」

「ああ、芸者家のおかみさん連中か？」

正太郎は一寸、嫌な顔を見せた。その時、夏江が走って入って来た。

「あの、菊子お嬢様。紫色の小皿は、何処にございますでしょうか？」

と立ったまま云った。だが菊子は返事もし

なかった。夏江は、ハツとして、今度は丁寧に坐って両手を畳につけ、同じ事を云った。

「知りませんね、私は。母さんに聞いたらいじやないか。」

菊子は、肥った松子夫人とは似ても似つかぬ痩せてギスギスした顔で冷く云った。夏江は、もう一杯に涙をためた目で二人の顔を見た。とても客の前で、姑にこんな事は聞けないのだ。

「正ちゃん、このお肉は柔かいねえ」

菊子は、そこに夏江が居る事も知らぬ様に別の事をゆっくり云った。

夏江は仕方なく、再び客間の方に出て行った。思った通り夏江は、客の前で惨々、松子夫人から罵られた。

「お前さん、この家に、何年居るんですか。」

正太郎の嫁になって、いい気になってるんだろうよ。能なし猿！まあ、皆さん、見てやって下さい。このだらしない着物の着方！」

「今の若い方は、仕方がありませんわ。奥さま。芸者さんでも着物の着方を本当に知ってる人が少くないのですもの。若奥さまなんか洋服になさったらいいでしょう。肉体美でいらっしゃるんだから」

眼鏡をかけた客が、ジロジロと夏江の胸を見て云った。

「それがねえ、山田さん。この人は痩せてるんですよ。それでいてお乳ばかり大きいんだ

から呆れちまいますよ。昔から、淫らな女は痩せていて乳が大きいと云いますからね」

「本当に、そう申しますわね。でも、お乳の出はよろしいんでしょう」

一人の客が云った。

「ええ、出るには出るのですが、この人は脚気ですから、赤ん坊には飲ませません」

松子夫人が厳然と云った。脚気等とは全くの嘘っぱちだった。夏江が入った産院の医者は、「こんな素晴らしいお乳が出てよかったです。奥さんのお乳は申し分ありませんよ」と云って呉れたのだ。

夏江は、こうした罵しりの言葉を黙って坐って聞いていなければならなかった。乳が張って来て肩が重苦しく、息をするのもつらかった。もう何時もなら乳しぼりの日課が済んでいる時間だったからだ。

(二)

客が帰えったのは、十時を過ぎていた。この間、正太郎は妻に言葉さえかける事が出来なかったのだ。書斎で一人で読書をする、二階の自分の寝室に引き上げてしまった。彼は妻の姿を頭に描いてみたが、一度も夏江が苦しい立場に置かれている事は思った事さえないのだ。彼は妻を愛していた。しかし彼には、夏江の細かな苦勞を思いやるだけの気持は持っていなかった。彼は肉親を信ずる心が

強く、多少妻が虐待されているのも、何か彼女が気がきかないからだとは思っていないかった。

夏江は、客の後かたづけをして姑の部屋に入ると、松子夫人は夏江の乳をしぼり取る洗面器を持って待っていた。

「何をノロノロしてるんだよ」

「ハイ。只今」

と夏江は松子夫人の前に坐ると、急いで肌脱ぎになり、乳房に巻いた晒をとき始めた。

「この巻き方は、なんだねえ。ユルユルじゃないか」

松子は憎々しげに云うのだ。固く巻かれた布が除れると、松子は片手を伸ばして夏江の一方の乳首に貼ってある絆創膏を勢いよくピツとはがした。夏江はキチンと膝をそろえて坐り、両膝の上に洗面器を乗せ一方の手で自分の乳房を押した。乳首から白い液体がシューと音をたてて流れ出て来た。実際、一日中肩のこる程に張っていた乳だから、夏江にとっても快よかった。指で乳房を押さえているだけで、乳はドンドンと流れ出た。絆創膏の貼ってある方の乳首からも乳がジクジクとにじみ出る思いがした。しかし、乳の出は次第に細くなり、ポタポタと流れ落ちる白い液体も速度が遅くなって来た。

「洗面器を押さえているんだよ。今度は私がしぼってあげるよ」

そう云うと松子は、嫁の乳房に両手をかけて、力一杯にしごき始めた。

「もう、こちらは出ませんから。お母さま、今度は……」

「何を云うのさ。乳が張るとギアギア云ってた癖に、これっぽちなのかえ。まだ出ますよ」

松子は、こう云って何回も何回も乳房を揉み、押しつぶす様にした。そして、いよいよ出ないとなると、ガラスの吸乳器を出して、乳首が赤く充血するまで、一滴残らずに吸い取るのであった。

そして、松子夫人は新しい絆創膏を取り出すと、十文字に夏江の乳首に貼った。これが乳しぼりの日課なのだ。姑の目の前で、晒をギリギリと巻き「おやすみなさいまし」を云って、自分の部屋に帰るのは十二時近くになっていた。

夏江は薄い蒲団にくるまって、やっと一日の労働から解放されて、ホッとするのだった。愛する夫が帰えっても、言葉一つかけられなかった。先刻、廊下で正太郎に「後で二階に来いよな」と云われたが、そんな事でもしようものなら、後でどんな折檻を受けるか解らないのだった。

「済みません。あなた……勘忍して。私は本当に悪い妻です。私は、お母さま達に折檻されるのが怖ろしいのです」

夏江は床の上に伏して、声を忍んで泣いた。だが、正太郎の妻である以上、何時も何時も、こうしてばかりは居られないのだ。

（もう殺されてもいいわ。どうなってもいいの）と夫の胸に身を投げる事だであるのだった。そうした翌日の苦しめられ方は一通りのものではなかった。現に、その翌晩、姑はわざと夏江を起しに来るのだった。

「夏江！一寸、来てお呉れ。胃が痛くて仕方がないから、薬をつくってお呉れ！」

と廊下中に響く様な声で呼び、それでも聞えないと思うのか、夏江の部屋の前まで呼びに来るのだった。もう夏江は、幸福感などは消え、ただ、恐怖に震えるだけであった。

「ハ……ハイ。只今……」

そう云って顔を赤らめて出て来る夏江の細い手首を、松子はギュッと握ぎって、奥に引きずる様にして連れて行くのであった。正太郎は、何一つ抗議の言葉さえ、母親に云えないのであった。

(三)

こうした事が発見された夜は一晚中、夏江は姑の前に坐らされていびられるのだった。胃が痛い云うのは全くの嘘で、部屋に夏江を連れて来るなり、松子は寝巻を脱がせて、いやがらせを云い出すのだった。

「お前、誰に断わって晒をお取りだね……」



と猫撫声で始めた。夏江は顔を赤くして、恥しそうに首をうなだれているのだった。

「絆創膏は、どうおしな

んだね。はがれてしまったのかい？」

「……」

「返事をしたらどうなさ。聞えないのかよ」

松子の手は、夏江の耳を掴んで、ちぎれるほど体を揺すぶった。

「いい覚悟だよ。私の命令に逆う気なんだね」

「お母さま……決して……そんな……」

夏江は、悲しそうに姑を見た。

「さあ、手を後に廻すのだよ。罰を受ける覚悟はあるんだろうね。ピイピイ泣いたら承知しないよ。」

夏江は、細い手首を背中と合わせた。松子は戸棚から細引を出すと、後手に縛り上げた。キチン

と揃えて坐っている夏江の太腿も細引でギリギリと縛った。そして、どんと肩を突いた。

夏江は、膝を折ったまま仰向けになった。松子は、愛用の灸の道具を出して来た。

「どれ、久し振りに、お灸を据えてやりましょうかね」

そう云って、太い線香に火をつけて片手に持ち、自分の前に倒れている嫁を樂しげに眺めた。モグサが、夏江のふっくらとした両の乳房の上に据えられた。そして火がつけられた。

「アッ：アッ：熱うございます。お許し……」

夏江は、低い声で涙ながらに云った。

「熱いさ。お前の様なウスノロでも、熱いと感じるんだね」

松子は、ユラユラと煙の上る乳房を憎々しげに見ていた。

「ウッ：カンニンして下さいまし。もう致しませんから……」

夏江は、身をもだえた。松子は、片手の線香の火を腹部や太腿につけては楽しんで居るのだ。我慢出来ずに叫ぼうとする夏江の口を松子は、側にあつた布で押さえつけた。白い肌に線香の火を押し当てるのは、松子にとってこの上もない喜びなのだ。

「どうかね。少しは、性がついたかい！」

「……」

「それでも、私の命令に逆う気かい！返事を

「おし！返事を。」

「ハ……ハイ。もう、決して……」

「正太郎の云う事と、私の云う事と、どっちが大切かお解りかい！」

「……ハイ」

「今晚は、一晩中そうやって居なさい」

松子は面白そうに、手足を曲げて背中縛られてゐる夏江を見下ろして電気を消して自分だけは床に入った。

その翌朝も、誰よりも早く起されて、一日の労働に追いたてられるのであった。灸を据えられた跡が痛んでも、顔色に出す事さえ許されなかった。

正太郎は姉達と喋り、チラッと夏江の方を見るだけで、サッサと出勤してしまった。正太郎が留守になると、また、公然と夏江の折檻が始められた。用が遅いと云っては打たれ返事がハッキリしないと云っては、つねられた。お茶を持ってくるのが遅いと云って梅子に、手芸の針で着物の上から太腿を刺された。三人の娘達は母親から云われたのか、今日の夏江に対する態度はかなり激しいものがあった。

蘭子は洋装で出かける時、玄関で穿いたままの靴を夏江に磨かせた。そして、アツと思ふ間にハイヒールの踵で、夏江の指を土間に踏みつけた。

「蘭子お嬢さま……」と夏江が顔を見上げて

云つても、指を踏みつけたまま蘭子は睨みつけていた。

「夏江！少しは痛いかい」

「ハ……ハイ」

夏江は、もう涙ぐんでいた。

「こんなになされても出て行かないの。宿なし犬！」

蘭子はそう云うと、やっと靴を上げ、バタソと音をさせて出て行った。夏江は、踏みつけられた中指が切れ血が流れ出ているのをじっと見ていた。（こんなにもされて、この家にいる事はない）と心に思った。だが、二階で泣いている赤ん坊の声を聞くと、一人で家を飛び出す気も崩れてしまうのだった。（私の様な女は、一生飼殺しにされても仕方がないのだ。若旦那様に、一度でも本当に愛していただけたのだから、それだけで満足すべきなのだ。どんな扱いをされても、立派に若旦那様の妻として我慢するのが、私の生きて行く道なのだ）そう思って気を取り直した夏江は、そっと目を拭いて玄関から上った。

「夏江！赤ん坊のミルクを持って来てよ」

菊子が二階から呼んだ。

「ハイ。只今」

夏江は、台所に駆けて行った。だが、台所まで行かない間に、松子の冷い声が叱りつけた。

「何ですか、バタバタ廊下を駆けて。何の騒

ぎなんですか」

蛇の様に冷い目が夏江の行手を止めた。

「ハイ。誠一のミルクを持って行こうと思ひまして……」

「誠一？誠一って誰の子ですか」

夏江は、ハツとした。そして、大急ぎで云い直した。

「誠一さまのミルクを」

自分の生んだ子供でも「さま」をつけねばならなかったのだ。

「お前さんには、何度云つたら解るのですかよ。あれは、市村家の孫ですよ、腹は借りものと昔から云うでしょう」

「ハイ。解っております。お母さま」

こんな風に一日中、夏江はあちらでこずかれこちらで叱られているのだった。だが、こんな哀れな夏江にも時には幸福な一日があるのだ。夫の正太郎と二人になる事は本当に珍しかったが、時にはあった。そんな時、夫の正太郎は妻を限りなく可愛がって呉れるのだった。どんな粗末な着物を着せられていても、夏江には天性の美があった。そして若さと共に、それは怖ろしい虐待の中でも失われていなかった。二人で歩いているのを見た人は「本当に美しい、何て可愛い奥さまでしょう」と正太郎に云う事があった。そんな時は、正太郎も得意になった。

「この前に遊びに来た山田の奴な。お前の事

を美人だつて云つてたよ」

と愉快そうに語るのだった。だが、そんな噂でも、姑は勿論の事、姉達の耳に入ったらそれこそ大変な騒ぎになるのだった。

夏江は、和歌を作るのが好きだった。彼女は、ひそかに歌を書き、雑誌に投稿した事があった。それが選者に選ばれ、一等になったのだが、夏江は誰にもその事を隠していた。

夫の正太郎だけは、後になってこれを知り喜んで呉れたが、他の人は夏江が歌を作るなどとは思つてもいなかったのだ。彼女は、自分の苦しい生活を歌によって慰めていた。彼女のひそかに持っている赤い手帳には、一杯に和歌が書かれていた。この彼女の楽しみが遂に、姑達に発見される日が来てしまった。それは、その後、送った数首の歌が、ある有名な歌人の目にとまり、非常な賞讃の手紙を送つて来た事からであった。

夏江が歌を作る。それも、市村家の内情を暴露する様な歌が新聞に出たとあつては、松子夫人の怒りは頂点に達した。三人の姉の憎しみも想像以上であった。

その晩、夏江は四人の前に曳き出されて惨々に折檻を受けた。そして目の前で、赤い愛用の手帳は焼かれてしまったのだった。だが不思議な事に、その晩の夏江の折檻は、彼女が怖れていた程のものではなかった。何故か四人の女は、口では罵したが夏江の体を責

め苦しめなかった。

「もう、決して歌等を作りません」と夏江が誓つただけで許された。正太郎が、その晩早く家に帰えつていた事もあつたのだが、どうしても夏江には、その理由が解らなかつた。(歌を作つていた事を発見されたら殺される)とさえ思つていた彼女には、四人の女の態度は氣味が悪かつた。

それから、一週間程は、氣味悪い沈黙が続いていた。だが、矢張り無事には済まされなかつたのだ。

珍らしく家中が留守になった翌日の事であつた。突然、ヒステリックな叫び声が、蘭子の部屋からした。

「母さん！大変よ。私の首飾がなくなつてい

るわ。ダイヤの……」

蘭子が、バタバタと廊下を駆けて、松子夫人の部屋に飛んで来た。

「エッ！何ですって……」

松子夫人も大いにあわてた。一同が蘭子の部屋に集つて探したが、首飾は発見出来なかつた。

「夏江！お前は知らないかねえ」

洗濯したままの手を拭きながら上つて来た夏江を、三人の冷たい目が凝視している。

「私……存じません」

夏江は何となく、体中が震えるのを覺えた。顔色は蒼白かつた。

「昨日、皆の留守にお前、蘭子の部屋に入つたのじゃないかい？」

「ハイ。一度、お洋服を持って入りましたけれど……」

「お前、正直に白状した方がいいよ。歌の本を作るお金に、あの首飾が欲しかったのじゃない？」

菊子が、ギスギスした顔で親切そうに云つた。

「まあ……菊子お嬢様。私……私、そんな」

夏江は余りの事に、黒い大きな瞳を見開いた。

「どうだかねえ。この人ならやるかも知れないね」

松子夫人が、娘の方を見て云つた。

「夏江！正直に白状した方がよいのよ。そうでないと拷問しても白状させるから」

梅子は、ジロツと睨みつけた。

「何処にやったさ。さあ、お出し……」

もう松子夫人は、夏江を盗人と同様に見て云つた。

「知りません……私」

夏江は、ワツと泣き伏してしまつた。

(四)

夏江は、あれからも何時間責め続けられているのか解らなかつた。裸にされ猿轡をかまされ、土蔵の天井から吊り下げられている

のだ。髪は乱れ目は血走り、苦しげに呻き続
けていた。あの白い肌は棒で打たれ、竹の鞭
で殴られ、血がにじみ出ているのだ。

やっと曳き下ろされた夏江は今度は四角の
太い柱に後手に縛られていた。

「まだ白状しない気かい。首飾
りを何処にやったのさ！」

蘭子が憎々しげに、夏江の髪
を掴んで揺すぶった。ガクガク
と力なく夏江は首を振った。猿
轡がゆるんだ。

「ミ……水を……水を下さいま
し……」

夏江は、カラカラにかすれた
声で頼んだ。

「さあ、何処にやったのさ。云
うのだよ！それでないと、この
火で乳首を焼くよ」

松子夫人は、ローソクの火を
夏江の胸前に持って来た。

「知……知りません」

「それでも、云わないかね」

ローソクの火は次第に、美し
い乳首に近づいた。蘭子も、菊
子も、面白そうにそれを眺めて
いた。梅子は例の如く一人だけ
この拷問には加わっていないかっ
た。彼女の役は、正太郎や女中

を土蔵に近づけない仕事をしていた。

ジリ、ジリと熱さは、乳房に感じられて来
た。

「ヒィー」とこの世のものと思えぬ哀れな叫
びが夏江の口からもれた。そして夏江は、目
をカッと見張っていたが、急にガククリと氣
を失ってしまった。

「何て強情な女だろう」
松子夫人も呆れ顔で夏江を見降して
いた。

「母さんの様に、そう急に白状させ様
としても駄目よ。ゆっくりと責めるが
一番だわ」

菊子が冷然と云った。

「そうだね。死んでしまつては、つま
らないものね」

「本当よ。土蔵に入れて、食物も水も
やらずに、じわじわとしめ上げるの
よ」

「そうしようかね。一分だめし五分だ
めしと云うやつでね」

二人は両手、両足を棒に縛ったまま
この夏江の体を二人で持ち上げた。髪
はグッシヨリと濡れて垂れ下り、首も
力なくガククリしていた。右の乳房は
焼けただれ、左の乳房には点々と針を
刺した跡が残っていた。

夏江の拷問は毎日続いた。夏江にと
って運の悪い事は、その翌日から正太
郎が北海道に出張してしまったのだ。
時は、暑い八月の末である。土蔵の
中は蒸し殺されそうに暑かった。



「水を……水を下さい」と夏江は、気が狂った様に叫び続けているのだ。針を刺され、火で焼かれる拷問は続いた。傷跡がうみ出して来た。傷口に塩をつけてもまれる苦しみは、夏江には拷問以上であった。しかし、どんなに責められても夏江は首飾は知らないのだから白状の仕様さえなかった。猫の食べる皿に御飯を盛られ、一杯の水しか与えられない夏江は、自由になる一本の手で、それを手掴みで食べて生きていた。

夏江が土蔵に入れられて五日目、九月一日の朝が来た。夏江は、昨夜の拷問で身動き一つ出来なかった。一本の紐さえ彼女を縛っているのではないのだが、床の上に倒れたまま彼女は死んだ様に、もう何時間も動かないのだ。だが夏江が死んでいない証拠には、肋骨が数えられる傷だらけの胸が、かすかに上下している。昨夜の拷問で紫色に脹れ上った両の乳房も上下している。細いぺちゃんこに見える腹部には、ローソクの蠟が一面に白くついていて、昨夜は灼烙の刑を受けたのだ。十一時を過ぎた。誰も土蔵に入ってきて来なかった。

夏江は、もう何も考える力さえ失っていたのだ。殺すなら早く殺して貰いたいと、その事だけしか思っていないかった。目を閉じて、渴きと飢えに堪えているだけであった。その時だ。夏江はハッと目を開けた。

何と云えない地鳴りと共に、大地震が襲って来たのだ。起き上ろうとしたが、手足が動かなかった。死ぬのが怖ろしいのではない。何と云う気もなく、起き上りたかったのだ。

土蔵は波の様に揺れた。白い壁に大きなひびが見えた。窓の外を見た時、何とも云えない大音響と共に、砂煙がパーツと窓から入って来た。体の弱った夏江は、それと同時に気を失ってしまった。

何時間過ぎたのだろう。夏江は、気がついた。土蔵は無事だった。夏江は目を窓にやった。何時もなら、窓は本宅の屋根が見えるのだが今は青空が見える。美しく澄み切った夏の空だ。何の音も聞こえない。

夏江はボンヤリと外を見ていた。別に何を考えるでもなく――。

夕方になった。次第に暗くなって来た土蔵の中は、不思議な桃色の光に照らされているのだ。その光は窓から流れ込んで来るのだ。何の光か知らないが、夏江の疲れ切った頭には天国の光の様に思えた。体の痛みを忘れて夏江は黙って見入っていた。

土蔵の扉が勢よく開いて一人の男が飛び込んで来た。それは夢にも忘れない正太郎だった。

「夏江！無事か！」

ワイシャツ一枚でズボンをはいた正太郎は夢の中の夏江を抱き起した。

「あなた！」

夏江は、そう一言だけ云うと、後が云えなくなった。

「夏江、大変だ家がつぶれたぞ。皆死んでしまった。お前だけだ、助かったのは」

「……」

夏江は、何の事か解らなかった。

「大地震だぞ！東京中が火の海になる。今、下町の方は、ほとんど燃えてるのだ。」

「火事なの。この明るい光は、火事なの……」

夏江は、ボンヤリと言った。

「さあ、逃げるんだ。着物を取って来る。お前歩けないんだね。」

正太郎は、始めて、愛する妻の体を見た。だが興奮している彼は、何も言わなかった。

関東大地震は市村家の人々の命を奪った。

それは、天の怒りとも思えた。一瞬にして倒れた家の下になり、松子も菊子も梅子もそして蘭子も、孫の誠一も、即死してしまったのだ。女中のお里は、使いに行つて居て助かった。正太郎は北海道からその朝、帰り、そのまま会社に居て助かった。

夏江が動ける様になったのは一カ月以上も過ぎてからであった。広い屋敷の跡に、ポツンと残った土蔵を中心に、バラックを建て、正太郎と夏江は住んで居た。それは哀れな家だったが、夏江には天国の様に思えた。若さ

は、夏江に美しさを取り戻して呉れた。夏江は、死んだ誠一は可哀そうに思えたが、その他の人が死んだ事を神に感謝した。生れて始めて、夫婦らしい生活が出来るのだった。例え体中に傷跡が残り一方の乳首は黒く焼けてなくなつて居るとは言え、スベスベの白い肌

は、日増しに美しく回復して来たのだ。「僕が悪かったんだ。僕が、何とかすれば出来たのに。済まない」と両手をつく夫に、夏江は優しい微笑を浮べて言うのだった。「もう、そんな事はおっしやらいで。今度の震災で、沢山の人が焼け死んだのですもの。

これくらいの傷は何でもないわ。私、誰も恨んでは居ません。可哀そうな誠一には、済まないと思うけど、新しい生活をこれから切り開いて行きましょうね」夏江は、夫の手をしっかりと握った。彼女の黒い瞳は、夢みる様に輝いていた。

臨時増刊号 『悦虐小説と緊縛写真』 特集号

十二月上旬発売!

定価三百円 (送共)

四馬孝画、悦虐口絵並に最近撮影の新人モデル嬢の緊縛フオトの傑作数十点を以て巻頭グラビヤ頁を飾って、視覚を通じて十分皆様の眼を楽しませるようになります。本文では、昭和二十八年度の本誌に掲載しました悦虐傑作小説を網羅し、挿絵は四馬孝氏を煩して、全部新しく揮毫して頂きました。何卒発売を御期待下さい。予約下されば印刷出来次第急送いたします。

◎本文の主な項目◎

夕の朝顔(那須不二夫) 28・9
長期刑(古川裕子) 28・9
呪縛(辻村隆) 28・11

私の思い出(岡田咲子) 28・10
片耳伝奇(窪村弘) 28・8
続・囚衣(古川裕子) 28・4
受難記(岡田咲子) 28・3
雌獣の手記(近見啓) 28・5
縛られた妻以前(早川新二郎) 28・5
地獄絵行脚(長岡変一郎) 28・4
妻は縛らず(岡田圭介) 28・1
色狼(児島光) 28・8
怪奇曼陀羅教(緑猛比古) 28・12
私の主題(岡田咲子) 28・7
燐光(久留木栄) 28・2
女奴隷の手記(北山カオル) 28・12
悦虐の旅役者(青山三枝吉) 28・11

臨時増刊号

「責小説特集号」

一部 定価二百円(送共)

大好評 売切れ近し!

昨年十二月に「責小説特集号」として、昭和二十七年度発行の本誌の中から、責小説の傑作二十点を選んで刊行しましたところ、好評裡に最近残部僅少となりました。東京にて本号の海賊版を作成する悪質出版社が出現して話題を呼んだ問題の特集号であります。只今、残部数を若干保有しておりますから、何卒売切れにならない中、御申込み下さるよう御待ちしております。

現代マゾヒスム芸術時評

原 忠 正

復刊第七十八項

歌劇「ラ・トスカ」

デアコモ・プッチイニ作

ガエタノ・ドニツエッティ (Gaetano

Donizetti) や、ジュゼッペ・ヴェルディ

(Giuseppe Verdi) が大半完成してしまった

伊太利歌劇は、ヴァークネルの影響をうけつ、再び混沌とした時代を迎えるかに見え

た。一方、ピエトロ・マスカーニ (Pietro

Mascagni) と、ルッヂェロ・レオンカヴァル

ロ (Ruggiero Leoncavallo) の二人が、それ

ぞれの新作の小品「カヴァレリア・ルステイカアケ」と「道化師」(Cavalleria Rusti

cana: I Pagliacci) を発表して所謂、ヴェリ

ズモ(真実派)と呼ばれる一派を形成したが、

これとて決して支配的な勢力ではなかった。

どちらかというと、難解なヴェルディの後期

の作品や、余りにも写實的なヴェリズモの作

品との氾濫は、人に魅力的な新作の登場を期

待させた。其処にデアコモ・プッチイニは「ラ

・ボエーム」を携げて登場したのであった。

庶民階級に題材を採った美しい旋律と、近代

的手法によって創作されたラ・ボエームは、

新しい形のヴェリズモの作品として、プッチ

イニの名を一躍有名なものとするに十分であ

った。つづいて、ベラスコの原作から、イリカ

とデアコモオザが脚色した「マダム・バタフラ

イ」は「ラクメ」や「イスの王」とは違った

意味での妖しいエキゾティズムによって人々

を捉えた。その上、エキゾティズムの華やか

な衣裳が人々に飽きられる頃になると、この

作品は今まで表面に出ていなかった、魅力的

な、純欧州風の数知れぬ特長や、剣劇音楽の

最も効果的な使用法を徐ろにしかし着実な速

度で展開し始めたのである。現在、余りにも

有名なこの作品は、その中の日本的な要素に

よって重要視されているのではなく、実に、

心理的な盛り上げ方、結合、そうして確実に

迫ってくる涙の誘惑によってのみ評価されて

いる。同じ頃に発表された、「ラ・トスカ」

は「ラ・ボエーム」や「マダム・バタフラ

イ」と同じく、稀に見る甘美な旋律にも恵ま

れているが、しかし、それ以上にサルドオの

原作以上に、生々しい、そうしてロマンティ

ークな劇的要素に富んでいる。

第一幕の冒頭に、壮大な反響を以って始ま

るスカルピアの主題は、各所にその悲劇的な

姿を現わし、処々に散在する古来の歌劇の遺

物である詠唱の部分の存在にも不拘、劇の心

理的発展を助けるのに、重大な役目を果して

いる。

本欄は「ラ・トスカ」の第二幕、スカルピ

ア警部が、歌姫トスカの愛人である、カヴァ

ラドッシ青年を拷問にかける部分の故に採り

上げた。この部分は恐らく歌劇に於て、直接

的な描写を以てする残酷な場面として最大のものである。(「アイーダ」の四幕目、終曲の生理めの刑や「サンソンとダリラ」の紛れなき場面は夫々注目には価するが、前者は古代埃及の話である上に、ヴェルディの音楽はこの場面を殉教者の崇高さを想わせる清冽なものであって、むしろ、天的なものへの熱烈な願いが強調されている。後者は正しく両眼をダリラの脆計によって盲目にされたサンソンが、奴隷として牛の代りに粉挽臼をひかされる場面であるが、むしろ、サンソンのダリラへの恋慕が主体となっており、サン・サロンスの音楽が又、余り粘液質ではないので残酷感は伴わないのである。)

やがて、カヴァラドッシの惨状に耐えかねてトスカは国事犯、アンデエロツティの居場所を白状してしまい、その上、カヴァラドッシの釈放を条件として、スカルピアに身を任せることを約束させられるのであるが、時間にして約十五分間、此の血醒め場面はつづく。重い鎖を引ずる様な連想を起させるスカルピアの主題、動乱のローマに近づいてくるナポレオン・ボナパルトの軍隊、そうして王党のスカルピアの嫉妬と、義務感と、焦燥との混り合った凄じい気魄が漲り、この深い愛の物語りは、愛がどの様な苦病、流血によって購わねばならないかという事を、悠然と語りつづける。この部分の台詞は、前述の様に

可成り長いものである。従って、それをここに書き記すことは避けるが、是非一度レコードでもお聴きになることをおすすめする。

猶、LPになって、レコードでは黄金盤といわるべきものが出ています。コロムビアから三年程前に発売された全曲がそれである。この指揮者は実にヴィクトル・デ・サバータである。この隻脚の名指揮者は非常にレコードの少い人である。ヴァルタアの優雅とトスカ・ニニの気魄とフルトヴェングレルの神経を併せ持つといわれるサバータは、この有名な作品を殆んど理想的に再現する。特に第一幕の後半から終曲に至る永い部分は、その起伏、その緩急、そうして完璧さに於て特筆に価する。録音も決して悪くなく、すぐれたものである。

復刊第七十九項

「アウシュヴィッツの魔女」

雑誌「裏窓」十一月号

此の雑誌は決して信憑性の高いものとは思えない。特にアブノーマルな部分については作りものの作品や、告白が多い様に思われる。かつての「風俗草紙」誌の残党が編集しているこの雑誌は、又、「あまとりあ」誌の発行所と同一の版元から出版されているが、十一月号に掲載された「イルゼ・コッホ」についての記事は、他誌(外国の雑誌の何かである)から敷衍したものとしても、可成り

まとまった印象を与える。筆者はコッホについて再び言及するのを避けよう。同誌はコッホの色情狂的な一面と、人間の皮膚を使用した件について詳細に記している。勿論出典は明示してないが、或る程度の資料に基いていふらしく、これまでの他誌によるものよりはずっと良心的である。参考として御覧になった上で、詳しくは沼氏の手帖「逆さ記の影」とか、黒田史朗氏の記事、及び本欄の旧号に拠りたい。

復刊第八十号

「女兵に暴行された男」宮本 潔

小説倶楽部十一月号、二九〇頁

先年の洪牙利動乱の際の一エピソード、信憑性は可成りあるが、詳細な部分には、大分創作がされていると思われる。或る兄妹が反乱軍に属して戦斗中、不覚にもソ連軍の手中に陥ち、兄パウエルはソ連軍婦人大尉ソニアに暴行され、妹リッサはその部下の婦人兵達の手で「変態的な淫虐行為」の末、殺される。パウエルは監視の女兵二人に更に暴行されるが、隙をみて女兵を殺して脱出するといふ。

末尾に本記事は、前駐洪牙利米大使、ジョン・エク・モントゴメリー氏の依頼でパウエル・ガズオルが米下院の委員会の諮問に応じて提出した文書の抜萃であるとしている。そ

の真偽は別として本記事は可成りの蓋然性を持つていえると思われる。只、二、三の箇所に於て資料的な価値には大きな疑問が持たれるが、読物としての興味はこの疑問箇所によって増えたというべきであろう。猶、諸大衆雑誌でよく外国物を翻記している。これら宮本潔氏とか、他に二、三の頻出する翻訳者は恐らく架空ではないかと思われる。即ち、訳出に当って、人名地名等についての正しい知識を欠いているのみならず、各術語等に可成り誤った解説が見られ、それらが必ずしも一定していない為である。筆者はこうした実話をもって正しい姿で、発表されるべきであると考えてる。

復刊第八十一項

「映画のサド、マゾ時代」南部喬一郎

小説倶楽部十一月号、二九六頁

この名前の通った筆者は、変質者とサド、マゾヒストを同一視している。「吸血鬼ドラキュラ」が女の生血をすすめる場面について、南部氏は「マゾヒストにはかみつかれる側で、サディストにはかみつく側で」満足を与えるといい、フォックス映画の「蠅」(THE FLY)や「泣きさけぶ頭骸骨」「マカブル」等の例を挙げて、世はサド、マゾ映画全盛だという。

これは明らかに怪奇性や残忍性と、サド、

マゾヒズムを混同している誤りである。怪奇幽霊などを主題とする映画や物語りは、淫虐性とは程遠い場合が多いということを、門外漢たる氏は忘れていたのである。つづいて邦画の作品からも「金がなくなれば盗む、女がほしくば強姦して売飛ばす」様なものが、サドやマゾだというのだから恐れ入る他ない。これは淫乱であって、サド、マゾとは全く関係がないことを知らないのである。ただ女を殺せばサディズムであるというならば、何者とも知れぬ加害者の手で裸の女が八つ裂きになつて街の中でバタバタする場面などは、サド、マゾヒズムのエッセンスの筈だが読者の中で共感を感じる人があります。更にいうならば広島原爆被災の図は、サド、マゾヒズムを刺戟しますか。するとすればそれは他の意識の加入によって可能だけである筈だ。大体一般にはサディズムは殺人淫楽症のことであると思ひ込み、更に殺人そのものがサディズムと関係があると思ひ込む人が多いのである。南部氏の迷作文の最後に曰く、「最近(サド・マゾ映画が横行する中での意)『野ばら』も、三時間の大作『静かなるドン』も双方共にヒットしている事実は、或る程度これら変質者的作品傾向の突破になるかも知れない」と。処が氏がサド・マゾ映画として挙げた淫乱や、殺人狂映画が、全くサド・マゾヒズムに対しての関連を持たないのに対し、

氏が「清らかな映画」として挙げた「静かなるドン」こそは、野性的なサド・マゾヒズムのよき引例となるものである。「静かなるドン」には、マゾヒストやサディストの夢が可成り具象化して見られるのである。「静かなるドン」については改めて詳述しよう。只、世をまどわす南部氏辺りの珍説をここに紹介して置くわけである。

復刊第八十二項

「裸女売ります」日影丈吉・作

小説倶楽部十一月号 一八八頁

かくれつつある売春組織を題材にした作品が近頃よく見られる。これもその一つ。興味を呼ぶのは、無智な女達を狩り集めて、全スト・ショウを上演させる悪人の一味にまじって、調教師として、黒いジャケツとタイツの、鞭を持つ美女が登場することである。勿論、この女についての描写も少しいし、重要な人物ではない。しかし女達を鞭で強制して教えこむというアイディアは一寸面白いと思う。詳しくは原本に拠りたいが小説としては、決してサド・マゾヒズムとは関係はないものである。

◎戦国衷史

美女処刑之賦

近藤

一

由紀姫が処女の夢や憧れのすべてを悲しく諦めて隣国へ人質に送られて行ったのは十五の春であった。

別れの言葉を述べた時、父は、「呉々も体をいとえよ。」と云っただけで横を向いた。母だけが門の外まで見送ってくれた。供をするのは美禰という十八になったばかりの腰元が一人きりだった。

美禰は美しい娘だった。めっきりと女らしく肉づいた肌合や淑やかな物腰は由紀も見惚れる程であった。生きて還ることを望めぬ旅に、父は由紀姫の一番の気に入りの美禰を供に選んでくれた。有難くもあったが、主命を拒み得なかった美禰が哀れでもあった。美禰が生まれて初めての恋心を悲しくも秘かに燃やしていることを由紀姫は乙女の敏感さから知っていた。恋をする女の美しさに由紀姫は眼を瞠って、深い嘆息を漏らしたものであった。出発前の僅かな暇を見て由紀姫は美禰の片想いの相手と呼び寄せ、それとなく別れの

盃を交わさせたのである。

人質の乙女の最期は悲惨なものであった。由紀姫が万一辱めを受けたならば武士の娘として其の場を去らせず命を断たせるのがせめてもの情と考えた父が、由紀姫への忠誠無比な美禰の幸せを心を鬼に蹂躪した。由紀姫の名誉のために由紀姫を刺すべき懐剣を手ずから美禰に授けたことは母さえも知らないことである。

人質というもののあることを識ってから、由紀姫は時々妙に恐ろしい夢を見た。惨酷極まりない責苦のあと、敵将は由紀姫を極刑にして殺した。大勢の見物人は人質の由紀姫の処刑に歓喜していた。然し幼い頃の恐怖は単純であった。それが女体の悲しみというものを本能的に感じ取るようになる、新たな怖ろしさが胸を締めつけた。一日々々眼に見えて女に育って行く自分の肉体が疎ましかった。

た。見す見す弄ばれるために、美しくなるような無心の生理が哀しかった。

愈々現実に入質に送られることになった当初は屢々うなされた。美禰に床を並べて寝て貰った。

父の居間から戻った時、血の気の失せた顔でふらふらと倒れてしまった美禰。父の讒意を乞おうとすると「私がお供を致しませぬでも誰かは参らねばならぬのでございましょう」と淋しく微笑んだ美禰。黒襦子の帯を立矢の字に結んだ矢羽根模様の衣裳の下に由紀姫をも魅了する、艶やかな色香を包んだ美禰。生涯に一度の恋をも打ち明けぬまま諦めて、青春を抛って、自分のために死を迎える美禰。そんな美禰に、由紀姫はもう主従の地位を感じていなかった。この世に甘えて縋れるたった一人の姉であった。

城主の前に出て由紀姫は型通りの挨拶をした。満座の眼は冷く注がれた。おめおめと最愛の姫を入質として差出さざるを得なかった弱小勢力を軽侮する視線だった。覚悟はして来たものの、由紀姫は針の席にいる想いだった。

本丸の隅の居室に定められた部屋は、四帖半と六帖の二部屋だった。廊下も庭も見張が厳しく、人眼につかずに部屋を出ることはできなかった。しかも部屋の出入は外から錠のおりる杉戸のほかにはなかった。

「そなたが由紀姫様ですね？」

「ハイ。」

「お綺麗な方。」

城主の息女、綾姫であった。

「あなたが綾姫様ですか？」

「ええ、これから末長う、仲良うして下さりませね。」

綾姫もまた美しい姫であった。年は十七、姫の美貌と、その背後の強大な権力を得ようとして、縁談は降る程にあった。強国の姫なるが故に綾姫もまた、真の女の幸福を掴み得ないことを疾うから識り、諦めていた。今、入質に送られて来た乙女の可憐な美しさに心は悲しく痛んだ。立場こそ互いに対立するものの、似たような運命に弄ばれる二人ではないか。綾姫は由紀姫を見て妹にめぐり逢ったように想い、由紀姫も、同じ年輩の美しく優しい綾姫に親しみを覚えた。綾姫に乞われ、美禰の進言を容れて、由紀姫は綾姫と秘かに姉妹の誓いを取り結んだ。

由紀姫を入質に取ってから城主の猜疑は変らなかった。余りにもあつさりと由紀姫を差出した裏には、却って覚悟の程も窺われる様に思っただ。由紀姫と美禰は益々厳しく監視された。囚われの身の僅かな安らぎを見出すべき睡りさえ、常に侵され続けた。美禰を頼りに仮眠する由紀姫はともかく、重大な使命を帯びた美禰は一度も許されなかった。拝領の懐剣を握り締めて、由紀姫の可憐な寝顔に幾度涙したことか。

そのような日常の中で、綾姫に招かれて過ごす僅かの時間が唯一の憩いであった。綾姫の前に出るには厳重な衣服の検めがあった。

「姫、お守りを……」

由紀姫は老女に懐剣を渡した。老女は腰元達を指図して総ての衣類を着換えさせた。雪白の項をぽうと桜色に染めて眼を閉じている由紀姫を見て美禰はいたわしかった。

「美禰、お手向かいはなませぬ。」

懐剣を渡すことを拒んだ美禰に、由紀姫は優しくたしなめた。由紀姫と美禰に与えられた衣類は特別の計らいで許された綾姫の持物であった。

取上げた懐剣を綾姫は、そっと美禰に返してくれた。

「そなた達は懐に入った窮鳥、綾は獵師です。そなたがこれを手放さなかったのには、定めし深い仔細がある筈。いかがです？」

「いいえ、そのような……」

「このお品は、そなたの持物ではありませんまい？ 姫の守り刀ですね？ そなたのお役目は、唯姫をお守りするばかりではない、万一の場合はこのお品で姫のお命を……」

綾も武士の娘、それ位は心得ております。そなたのお蔭で由紀という可愛い妹を得た私です。綾は姉として出来得る限りのことは致しますが、もしもの時にはそなたが頼り、綾からもよろしう頼みます。」

綾姫の言葉を美禰は否定し得なかった。せめても肯定しないことが心の慰めであった。抵抗を許されぬ美禰を、綾姫は油断ならぬ女として括り上げ、由紀姫から離して奥の寢所へ連れて行った。そして秘かに柔かい眠りを与えてくれた。綾姫に呼ばれることは、こうして心身共に憩いであった。

「姫と、そなたを牢にお移し致します。」

綾姫に伝えられて美禰は、はっと顔を上げた。堪えられぬ屈辱に唇がワナワナと震えた。

「分ります。よう分っております。そなたの気持は……でも堪えておくれ。」

「私は、私は喜んでお受け致します。でもお姫様は、由紀姫様は……」

「辛いでしようが、これも姫を救う途です。姫は、この儘では必らず殺されるのです。綾は妹を殺したくない。綾は自分から姫を牢に移せと父に申し出たのです。分っておくれ。」

綾姫は顔をそむけていた。

間者に入り込んでいた腰元から、美禰は密書を受け取った。翌る月の三日に挙兵と決定したこと、十五日の夜半に由紀姫の救出の手筈を調べたこと、万一の場合の由紀姫の処置を呉々も誤らぬこと、この書面は直ちに焼き捨てること等が、性急な調子で書かれていた。その夜から由紀姫と美禰は牢に下った。

牢は西丸の綾姫の部屋近くに、由紀姫達のために特に造られた。牢の鍵は綾姫が保管することになった。

来月十五日と云えば、あと二十日程のことである。その時、無事に由紀姫を救い出せばよし、もしもそれまでに姫の身に危難が及べば……、だがそれまでは自分一身はどのような危険に曝されても姫を守らねばならないのだと、美禰は改めて心に云いきかせた。

月が変って、三日には予告通り戦火が挙った。雌伏幾年であったろうか。弱小と輕侮された由紀姫の父の勢力はなかなか烈しかった。周辺の小国が連合して挙って立上った。綾姫の父は自らの疑いが事実となって現われて激怒した。

牢にいる由紀姫と美禰は、綾姫から与えられた衣類を直ちに剥ぎ取られ囚人としての扱いを受けるよう云渡された。綾姫は父の命令に抗いようもなく暗然とした表情で由紀姫の着換えを手伝った。唯一人、由紀姫だけは健気にも綾姫や美禰を却って慰め、淋しく微笑んでいた。

美しい女囚であった。由紀姫も美禰も髪は只束ねて背に垂らしていた。どちらも丈は腰の辺りを超えていた。白粉もなく紅も刷かず汚れ易い白木綿の腰のものと囚衣に包んだ肉体からは、それでも無垢の乙女の色香が匂うように発散されていた。

二日、三日と日が経つのに一向に好転しない戦況に城主は烈火の

如く憤った。

「見せしめじや。人質の女共を大手の前で血祭りにせい！ 賜り殺しにするのだっ！」

七日のうちに城下町の辻々には高札が立った。人々は人質の女達に下される惨たらしい処刑の期待と興奮で頻りに噂し合った。

美禰は牢の中でその話を聞いた。短い間にも優しい女囚の主従には、秘かに親しみを見せてくれる腰元達もでき、悲しい運命を一緒に哭いても呉れた。

八日の朝早く綾姫は城主の前へ出た。

「お父上にお願いがござります。入牢申し付けました人質の娘由紀、並びに腰元美禰につきまして吟味の筋がござります。綾直々に取調べます故、処刑の順を繰り下げて下さいませ。」

由紀姫と美禰は囚衣の身を高手小手に縛しめられて綾姫の居間へ引立てられた。

「姫、愈々お別れの時が近づいたようです。短い間でも綾は良い妹を持って幸せでした。お覚悟を定めて姫君らしい御最期をあそばすように……」

綾姫は哭いた。侍女に命じて由紀姫に湯浴みをさせた。その間、項垂れて引据えられている美禰に、綾姫は涙を抑えて囁いた。

「早まってはなりません。綾も隙を窺って逃がす手だてを考えているのです。そなた達の処刑を一日でも伸ばすよう、吟味を口実に猶予を頂きました。明日からはそなた達を責めねばなりません。綾も辛いですが心を鬼にします。許しておくれ。美禰。」

「ハイ、勿体のうございます。私は疾うに覚悟致しております故、どのようなになされましょうとも……。只、お姫様には、何卒、お情を……」

「心得ております。不憫とは承知の上で、そなたに苛責を負わせません。何事も姫のためと忖えておくれ。ただせめてものに鞭は綾

が自分で振ります。優しいそなたを鞭うつ綾の苦衷も分って貰えましょうか。」

「ハイ……綾姫様。お情に縋って未練者とお思いでしようが、私達の命、この月の十五日まで美禰にお預け下さいませぬでしょうか？」

「何か良い思案でも？」

「ハ、イエ、唯、十五日はお姫様のお誕生の日故、気儘を申し上げましただけ……」

美禰は綾姫を欺いて苦しかった。綾姫は美禰にも入浴を許してくれた。

八日には、或る城主の妻とその母が処刑された。六十九才の老いた身に折檻は受け兼ねた。矢来に近く寄った群衆の耳をゼイゼイと苦しげに喘ぐ呼吸が悲鳴の間奏として聞こえた。四十六才という妻は鞭打ちのあと一枚の湯文字のみしか許されなかった。艶に衰えが見え、中年の肉附きにもたるみを見せてはいたが、膚の白さとたっぷりした体量には城主の妻の威品が備わっていた。老母は絞られて吊るされた。妻は両手を束ねて吊るされた。無数の矢が故意に急所を避けて射込まれ、女の体は針鼠のようになって揺れていた。

九日には別の武将の愛妾と、二人の子供が処刑された、女は二十六才という熟れ切った肢体に似合わず愛くるしい顔をしていた。七才の女の子も六才の男の子も母親によく似ていた。女は晒台に昇らせられても子供を前にしては舌を噛むことさえできなかった。火刑柱の前に小さな杭が打たれた。二人の子が繋がれた。子供達は火に焙られて苦悶する母の姿を目の前にして、許された行動半径の中で必死に手桶で水をかけた。母親が焼け爛れたあと、子供達は猛犬に噛み殺された。

無抵抗の弱者が賜り物にされ惨殺されるのを見ながら、戦国の民は僅かばかりの同情と、より烈しい興奮にざわめいた。次の犠牲が

頻りに待たれた。

十日には犠牲者は出なかった。戦況は益々激化し、綾姫の父は屢々苦戦に陥った。方々の出城からは救援を求める早馬が次々と駆けつけた。打続く軍議はいつ果てるとも知れなかった。

由紀姫は、もう観念しきって
いた。

「由紀が真先にお仕置を受けるべきでしょうに、今日もまた長らえましたね。代りに一日早くお命を終る方があるのですね。美禰、そなたには済みませぬが早うお調べを終えて頂いて由紀の運命に従いたいと思います。」
——あと五日、あと五日、何と
してでも耐えなければ……

美禰は十五日の脱出を姫に知らせていなかった。失敗した時の悲哀が歴然と心にあたったからである。美禰は、じっと唇を噛んで呟えた。

綾姫は男姿に装っていた。藤色の扱帯を襷に結び、袴のもも立ちを高く取った。

牢を引出された美禰は勿論、
高手小手に縛められていた。綾

戦況は益々激化し、綾姫の父は屢

姫は胸、胴から太股迄更に嚴重に縄をかけた。脱げ落ちることの容易な囚衣を抑えて吟味中に恥辱を与えまいとする心遣いだった。

綾姫の居室の縁先に近く引据えられた美禰は、荒席の上で「どうぞ御存分に……」というように、綾姫を見上げて淋しく微笑んだ。

振り上げた弓の折れが美禰の体に当る寸前に綾姫は力を抜いた。然し、いかに戦国武將の娘であっても馴れぬ仕事にすぐ疲れを覚えた。止める力が弱まり答は柔らかい美禰の肌を容赦なく責め苛んだ。

「許して！ 許して！」

綾姫は祈るように口走りながら美禰を打ち据えていた。

十二日には由紀姫も綾姫の答を受けた。綾姫の力で底うにはこれより他に途のないことを察して美禰も眼を閉じていた。
「さぞお苦しゅうございましたでしょう。」

「いいえ、由紀は左程でも……それよりそなたは毎日の責め折檻に良う耐えてくれますね。」
「何事もお家のお為でございます」



すもの、それに私は折檻には馴れております。よく粗相をして御方様に叱られましたから……」

「ね、美禰。由紀は生まれながらの囚われの身なのでしうか。牢の中に入れられても、縛しめの身を曳かれても左程に厭わしくないのです。本日の折檻が綾姫様直々のもの故かも知れませぬが、苦しみというより、嬉しいような何かしら不思議な胸の騒ぎを覚えるのですよ。由紀は、きっとそなたよりも折檻には強いかも知れませぬ。明日からはそなたの苛責を少くして、代りに由紀を虐んで戴きましようね。」

美禰が重大な秘密を知っているというのが責めの口実だった。美禰の口を割るために由紀姫の処刑は日延べされていた。

「知らぬことは申し上げられませぬ故、これで私の命の続く限り、お姫様は御無事でいらっしやるのですね。」

美禰は綾姫の足許で喘ぎながら苦しい笑みを見せた。

——あと三日、あと三日。——

美禰は齒を喰い縛った。

十三日から主従に苛酷な拷問が開始された。城主が業をにやして自ら吟味の指図をした。後手に縛められて坐っている美禰の背に重さ十五貫余りの大石が括りつけられた。美禰は匍いつくばったように圧しつぶされた。城主は髪を吊って顔を起こさせ、眼の前に由紀姫を引据えた。

ピシーリ、ピシーリ！

綾姫は、かなり強く叩いた。

「姫、もっと苦しんで。呻くのですよ。」

「もっと、もっと強く、打って。」

綾姫の好意に由紀姫は背いた。

「手ぬるいゾ、綾。代れ代れ！」

屈強の若侍が弓の折れを握った。

ピシッ！ ピシッ！ ピシッ！ ピシッ！

ひイーッ！ ひえーッ！

重い石に圧されて大きく張り出した美禰の臀部の豊かな肉付きにも、腰巻一枚のみの上から容赦ない笞が降り続けた。

びイン！ びイン！ びイン！

ヒエー！ ヒエー！ ヒエー！

乙女達の絶叫が交互に高く響いた。綾姫は恐怖と戦慄に胸がひしがれ、思わず耳を覆った。

翌日の拷問は更に酷かった。

由紀姫は仰向けに杭に括りつけられ、胸の膨らみや、腹部のスロップをビシビシと打たれた。

ぎやアッ！ ぎやアッ！

断末魔のような絶叫が紅唇から進った。次には由紀姫の口から多量の水が注ぎ込まれ、姫は、ぶ、ぶぶぶと溺れた。胸の下が奇妙に突き出た由紀姫は、庭の樹木に逆吊りにされて鼻の穴からも水を吐き、咳込んで揺れた。その揺れを助長するように弓の折れがとんだ。由紀姫のこのような惨状を見ても尚、齒を喰い縛って耐えている美禰に、城主の怒りは惨忍な嗜虐に転化して行った。

坐ったまま動けぬ美禰の腿に、ズブズブと小柄が立てられた。

あうっ！ うっうっ！ うアうっ！

小柄はズブズブと腿に没した。そのような女囚の肩や腰の豊かな肉附に、更に幾本もの小柄が突き立った。呻きが長く尾を曳き、肩先から肌を染めた血の流れが脛を伝ってポタポタとおち、砂に浸み込んで行った。笞が血を飛ばした。

「美禰ッ！ 由紀が許します！ 大事とやら、よいから、云うてお

しまい！」

然し美禰は由紀姫を見上げて、唇をひくつとさせただけで意識を失ってしまった。

由紀姫の汚れた体は、綾姫の手で浄められた。漆黒の髪も輝きを取り戻し、無数の傷痕に優しい介抱の手が触れた。

「御遠慮遊ばさず、もっと惨うお扱いになって下さりませ。綾姫様のお手でならどのようなお仕置に遭いましょうとも、少しも厭わしゆうは思いません。由紀は却って嬉しゆう思いますものを……」

囚われの美姫は悦虐の性に生まれついたのか、綾姫の思い遣りを怨ずるのであった。

行水に拭い清められた由紀姫は、再び汚れた囚衣を纏い、綾姫の手で縛められた。綾姫は淋し気に呟いた。

「女子の身で縛めが上達するなど、綾は我身が哀しゆうなります。そなたと代って、そなたに縛められたなら、どのように嬉しかろうと思います。」

由紀姫は侍女に曳かれてよろよろと牢に下って行った。

美禰は、然し立てなかった。小柄を刺し込まれた創が足の筋を痛めたものか、踏み出すことさえできなかった。綾姫は焼酎を布にひたして創口を洗い血止めの粉を塗って晒を巻いてくれた。美禰は呻きを洩らした。

「明日は十五日ですね。よう忪えられたと綾は驚いています。そなたのような強靱さを不死身というのでしょうか。でも、明日は無理をせず牢にいらように綾が計ります。不憫でも明日のお調べは姫お一人で堪えて戴きましよう。今宵は美禰を綾の許に泊めます。明日の夜は、綾が心ばかりのお祝いを致しますからね。姫には少し心淋しい想いをおさせした方がよいのですよ。」

烈しい傷の痛みに転々と苦しみ悶える美禰に、明十五日の夜亥の

刻を期して救出の手筈が整ったことを間者の腰元が伝えに來た。

——愈々明日、亥の刻に……——

美禰は一人淋しく牢に端坐する美しい由紀姫の蒼白い頬を思い浮かべた。

十五日になった。

朝食を済ませた綾姫は、今日が誕生日という由紀姫の祝いに、姉らしい心の弾みを覚えながら才覚を娛しんでいた。

老女が具足姿の若侍を二人伴れて入って來た。綾姫は訝しげに顔を上げた。

「何事ですか？」

「姫様、本日はお部屋からお出かけなさること、御無用に願いまする。」

「何故？ 綾はこれより人質の由紀を吟味に参るのです。」

「なりません。」

「綾はそなたの指図は受けませぬ。」

「殿の御云付ですぞ！ お聞き分けなくば是非もない。それっ！」
老女の合図で若侍の一人が綾姫にとびかかり、座を立たせもせず組みしいた。

「姫君、お手向い、御免！」

「何を、何をするのです！ 放して！」

逃げようとした綾姫は、腰を浮かせただけで若侍の膝に背を圧され、腕を捻じ上げられて、あうっ！ と呻いた。戦場で虜囚を縛るような緊く烈しい縄目であった。縛められた綾姫は由紀姫を恋うた。さっと不吉な予感が走った。叫ぼうと開いた口に小ぎれが詰め込まれ手拭いでその上を覆われた。

「姫様は御不例じや。入るでない。」

老女の声がした。

床柱に胸ごと括りつけられた綾姫は、屈辱と由紀姫への危惧と不自由のもどかしさに、老女達が去ると大粒の涙をこぼした。涙は口を縛った布に吸われ、声も出せなかった。

次の間の屏風の蔭に匿まわれていた美禰が全身で匍い寄って来た。歩みを奪われていた美禰は肩の肉を刺し貫かれて指の運びも失っていた。真珠のように美しい歯が若侍の施した拘束に挑んで行った。

——綾の膚を噛み取ってもよい。由紀姫様が気懸りです。早く解いておくれ——。

声にならず言葉にならない綾姫の意志は通じなかった。美禰の歯はギイギイ鳴いた。歯茎が真赤に擦れ、唇が所々裂けて血が滲んだ。それでも縛めはびくともしなかった。

由紀姫は牢の中で仮睡から醒め、その日に加えられる拷問を待つて独り端坐していた。

がちやり！ 鍵があいた。

牢の外の武士達はいつになく物々しい。

「由紀姫殿、お覚悟を」

「エ？ では……」

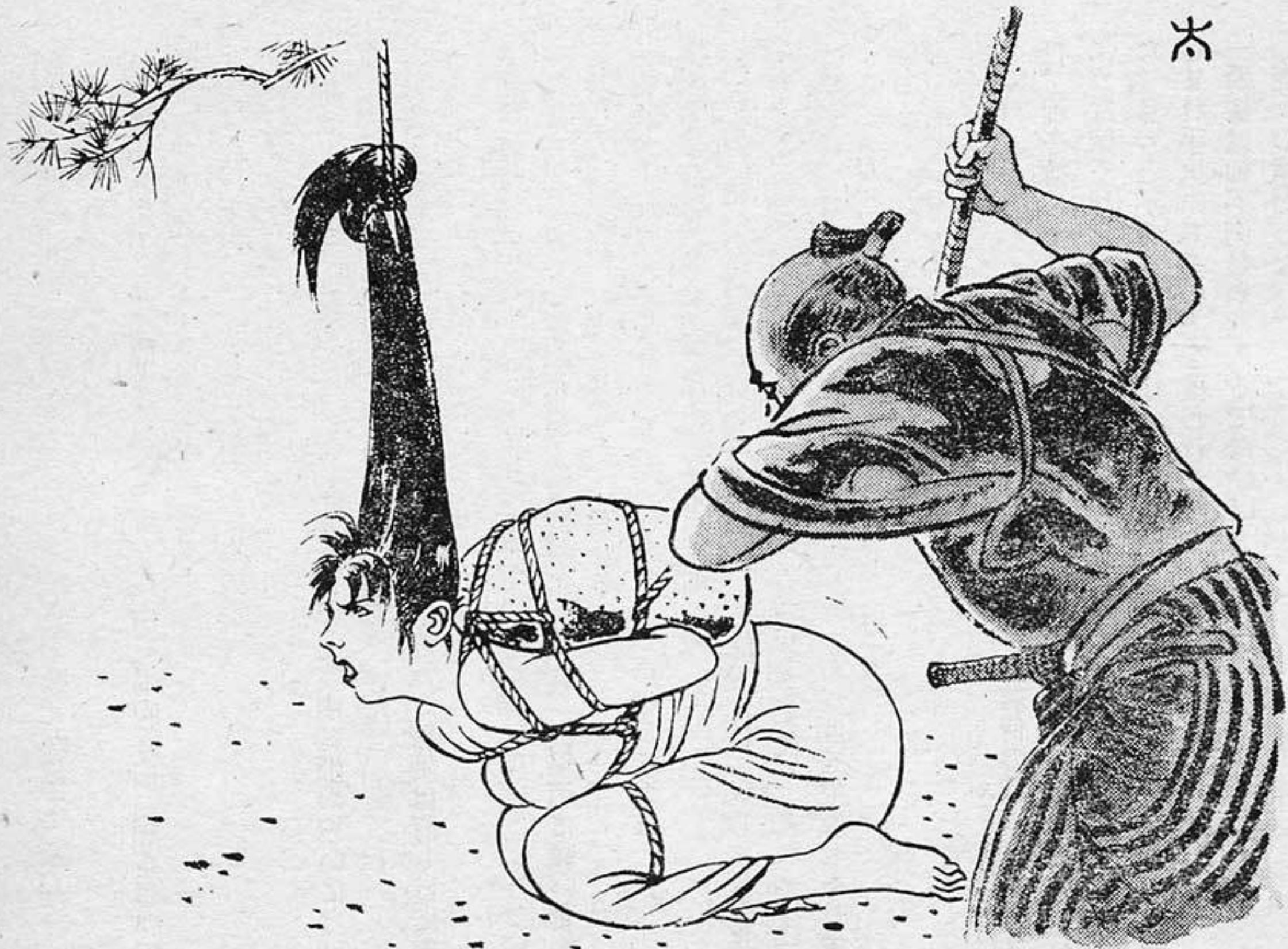
姫の顔から一瞬、血の気が失せた。失神一步手前で姫は気強く立直った。父の名にかけても取乱したくはなかった。

「お仕置になるのですね。愈々由紀も……」

あとは声にならなかった。咄嗟に綾姫を想った。綾姫の力でせめて美禰だけは助けて貰いたいと思ったが、侍達には云えなかった。促がされて由紀姫は白く柔らかな腕を背に廻して組んだ。伏せた目許が美しかった。

由紀姫はうす汚れた囚衣のまま獄舎から曳き出された。勿論、後手の高手小手、縄は胸から胴、太股にまで嚴重にかかり、足首には

太



鉄の鎖を嵌められた。素足を小砂利に噛まれながら由紀姫は不浄門から表へ曳き立てられた。高札を見て集っていた群衆が制止もきかずバラバラッと走り寄って来た。哀れな身を晒す由紀姫には敵の將兵や群衆の無遠慮な視線が痛く感じられた。

従容として死に就こうと心を決めた由紀姫に、武士の娘として、又女として耐え得ぬような思い切った屈辱を与え、悩乱の果の取乱した姿態を衆目に曝させることによって、城主は復讐と士氣の昂揚を図ろうとした。

由紀姫は晒し台に追い立てられた。思い切り両足を開いた恰好で由紀姫の肢体は台に置かれた。見物人は柵につかまってジロジロと由紀姫を見つめた。

美囚の露わに覗く膚が桃色に染まった。羞恥の責苦は次の引廻しに進んだ。席も置かぬ裸馬に乗せられた。馬の歩みの揺れに落馬を防ごうとして、姫は太腿を堅くして馬の胴を締めつけなければならなかった。氣の遠くなるような、痺れる想いの羞恥だった。

町の大通りを引廻されて、行列は大手の広場へ着いた。磔柱が寝かしてあった。

馬の背から降ろされた姫は手首や腕の縛めだけを解かれ磔柱の上に仰向けに寝かされる。

十字の柱が高く押立てられた。胸、胴、太股に縄がかかっている姫の肢体は、喉、腋、二の腕、肘、手首、腹、足首を柱に括りつけられ、可愛く拳を握った腕を真横に張って縛られていた。両脇下の囚衣を左右に押し拡げられ、十五才という年令には見えぬ成熟した胸の隆起を群衆の視線に曝していた。うぶ毛が陽光に金色に輝いて水蜜桃の匂いがするようだった。赤みを帯びた乳首が震えて見えるのも可憐だった。

真槍が眼の前に出され、穂がきらめいた。

姫は眼を、そっと閉じて顔を起した。

えいっ！

うおうわあっ！

槍は由紀姫の丸く膨らんだ腹部を貫いた。

えいっ！ やア！ えいっ！ やア！

槍は非情であった。肩を、腕を、脇腹を、そして太腿から足の甲を刺し貫いた。

城中から葦毛の駿馬が大手門を駆け抜けて来た。綾姫であった。髪や衣服の乱れに、縛めを脱するための長時間の苦闘が現われている。竹矢来の中まで葦毛は駆け込んだ。

「控えイ！ 綾を妨げますのか！」

綾姫は磔柱の前で、ひらりと駒を降りた。一面に血沫がとんでいた。頬を貫かれて由紀姫は顔から喉、肩、胸、腹、腿を血潮の流れに彩られ、爪先から滴り落していた。

「由紀ッ！」

綾姫は無惨な義妹の名を、只一言悲痛に叫んだ。

由紀姫は綾姫を見た。口の中が生暖い液体で一杯になった。全身がガクガクしていた。眼の前が暗くなる想いだった。

「綾姫様、コワイ！」

それが綾姫には「姉上様、こわいっ！」と聞こえた。綾姫は傍の侍から槍を取った。

エイッ！

ひーッ！

エイッ！

むうーう。

綾姫の二突きは右の乳下と左の乳下を貫いた。乙女の鮮血が、びゅっ！と散って綾姫の髪や衣服にかかった。

由紀姫は群衆の環視の中で惨殺された。

十五日の午後だった。

その夜、由紀姫の遺骸は綾姫の手で浄められた。美禰は自由のきかぬ身を悶えて、絶え入るように泣いて縊った。

亥の刻、手筈通りに救出の武士達が来た。美禰の初恋の人もいた。綾姫は由紀姫と離れ難いが父母を裏切れぬと哭いて、自ら縛めを望み囚われの身となって馬の背に乗った。つい先頃、涙ながらに出発した故郷へ由紀姫は冷い屍として、美禰は傷痕深い不具の身に変わり果てて戻って行った。

主の亡くなった由紀姫の部屋が綾姫の居室に当てられた。綾姫は心から義妹の由紀姫の霊に仕えた。美禰も可憐な落着きを取戻すと共に身の自由も幾分か取返して、綾姫の助けを借り常に身を潔く保っていた。

戦況は漸く終局に至った。激しい攻防の果に綾姫の父は討死、母は捕われの身を嫌って自害した。戦国の習いで血腥い結末だった。綾姫は義妹への情と父母への情の板挟みになった。極刑に処されることは、もとより覚悟の上であった。自ら望んで由紀姫と同じ苦しみを味い命を断たれることを求めた。既に由紀姫を失い、今またその代りに養育したいと思う綾姫を、敵将の娘として処刑しなければならぬ、由紀姫の両親の心は暗かった。

美禰も死を望んだ。一身を賭けた使命を帯びながら、傷つき果てて不具の身となり、結果として由紀姫を屈辱極まりない刑死に追いやったことは、たとえ主君に許されようと自らの心が許さなかった。せめてもの情に、罪人として首を刎ねられるよう希った。

由紀姫の母は無言で二人の乙女のために白無垢の用意をしてやった。

綾姫と美禰の最期の日が来た。

綾姫と美禰は連れ立って湯殿へ行った。心ゆくまでの沐浴に身を

浄めた二人は部屋へ戻って死装束を身につけた。うっすらと紅を刷き、白粉に粧った乙女は匂うような色香を漂わせていた。由紀姫の霊前に香を焚き祈念を凝らす二人だった。

「拙い筆の跡ですが見てくれますか？」

綾姫の辞世の短冊であった。流石に娘らしい優雅な水茎のあとを見せていた。

喘ぎつつ迎るよみちの嶮しくも

ゆきを頼りの灯にして

夜路と黄泉をかけており、ゆきは勿論雪と由紀をかけた言葉である。綾姫は美禰を顧て、にっこりした。

「そなたも一筆残しませぬか。」

「勿体のうございます。美禰は罪人として首を刎ねて頂いてお姫様のお跡をお慕いできますことで嬉しゅうございますのに……。」

数ならず、罪おへる身の許されて

みあと慕へる今朝の嬉しさ

美禰も認めおえて、にっこり微笑んだ。

「綾姫様、いろいろお世話をおかけ致しました。綾姫様がお姫様になさったように、私が綾姫様にして差上げなければなりませんものを、私の身が不自由なばかりに申訳もございませぬ。御最期お見届けできませぬ代りには、せめて美禰が一足お先にあの世とやらへの御案内を勤めさせて頂きとうございます。どうぞお心安らかに御立派な御最期をお遂げ下さいませ。」

端坐して時を待つうちに、若い心は静かに澄んで行った。

白百合か牡丹のような女囚だった。背に廻した手首もほっそりと白魚と形容される指先に桜貝のような爪が可愛く光っていた。縛めは特に選ばれた紅白の稍、太目の綿縄だった。乙女の処刑らしく静かな華麗さがあった。



太

裸馬の背に莫塵が敷かれていた。美禰は足輕の手を借りて跨った。綾姫は横乗りを拒んでやはり跨った。流石に胸がふさがる想いがしたが気丈に顔を起こして引かれて行った。

刑場選ばれた小高い丘の上には竹矢来が組まれていた。綾姫の希望を容れて集められたのであろうか、かなりの群集がいた。然しいずれも、由紀姫の処刑を待ち焦がれた群集のような、冷酷な、卑しい感情は持ち合わせていなかった。一様に憂愁が漂っていた。

馬の背から下るように降りた美禰は、左足をまだ大きく曳き摺って歩くのが痛々しかったが、それでも誰の手も借りずに定めめの位置へ歩いた。綾姫が曳かれながらも見守っていた。

「由紀姫様腰元美禰、御役目不都合之廉有之、死罪可被申付者也。」
処刑を行う者も、見る者も、命を終る乙女の心情に憐憫を禁じ得なかった。

綾姫の架けられた柱が立った。杉の白木の五寸角の柱には足台もなく、十七才の乙女の肢体の苦痛を柔らげるために腕、肘、手首、胸はしっかりと留められ、殊に腹、股、足首は噛み入る程の緊縛が施されていた。

「美禰殿、最期の際に申し置くことがあれば遠慮無う申されよ。」
「ハイ、美禰が貴方様の御刀を汚すこと、何卒お許し下さいませ。罪人の私故、御存分にお斬り下さいますように。」

綾姫様、いろいろと有難うございました。美禰は一足お先に参ります。」

「美禰、由紀姫様に対する忠節、綾も嬉しゅう思います。綾もすぐ参ります故、案内を頼みますよ。」

刑架の上から綾姫は悲痛な叫びを上げた。

美禰の想い人が優しく髪をかき上げてくれた。丈なす髪を束ねて胸に乗らすと、項が殊に白かった。白布で両眼を覆われた。
「覚悟はよいか？」

「ハイ。」

坐した席の前の穴の方へ、美禰は心持ち項をのぼした。

一閃！ 綾姫はハッと眼を閉じた。

想いを切なく秘めたまま、想い人の白刃に頸をさしのべて、美禰は幽冥境を異にした。穴に落ちた首はうっすらと笑を浮かべ、後手に縛められたまま、穴の底に俯伏している乙女の肉体は鮮血を迸らせて美しかった。

十字架上の綾姫は静かに眼を開いた。心を絞られるような緊張に蒼ざめながら、まるで自らの死を見極めるかのような表情だった。両脇を裂かれた衣服は胸の上と帯の前で結ばれ、雪の膚が滑らかに露われ緊張と苦痛に小さく喘いでいた。

十字架の上で身動きもならぬ綾姫の眼の前に槍が交叉して突き出された。眼隠しを拒んだ綾姫は槍の動きをじっと視ていた。

掛声諸共、鈍い音を立てた槍が綾姫の右脇にグサッと突き刺さった。初めチカッとした衝撃、そしてギリギリと全身を刺し貫く激痛に乙女は緊縛の下でグウーッと身をのけぞらせようとした。次いで左の胸にも。

あう、ううっ！

呻きと共に身を悶える綾姫。又右脇に。今度は穂先が肩まで貫けていた。槍を肉体の中で一捻りされ引抜かれる痛さ、生暖いものが飛び散り、胸を濡らし、腹部に浸みて行く。もう次の槍が入るのは分らないらしい。

——綾の弱虫！ でも良かった。綾には由紀と同じ苦痛に耐える力はないのだから。由紀よりもっとひどい死に様を曝さなければならなかった筈だ。由紀は恥ずかしい姿だったのに綾は白無垢をきちんと着ている。槍も鋭利で使い手も名ある武士らしい。思いやりに満ちた計らいに、綾は精一杯の努力をして姫らしく振舞って報いるのだ。笑おう。微笑んで死んで行くのだ——。

何かしら目の前が暗くなるように綾姫は思った。痛みは段々に薄らいで来た。落ち入るような気を励まして綾姫は自らの胸の辺りに眼をやった。先程まで純白の白無垢に包まれた胸の辺り、そして両袖も、どうやら裾の方まで真紅に彩られていた。また槍が左の胸に入る。もう感じる痛みは無く、唯槍が引抜かれた後から汚れない鮮血がパツと飛び散った。四辺は暗く、美禰の死体は見えなくなった。目を閉じて瞼の裡に七彩の光を認め、綾姫はもう一度由紀姫の父母のいた辺りに瞳を向けた。竹矢来を通して大勢の人達が見守ってくれるのが見えた。感じられたのである。

ぼんやりした色の集まり。真暗な混迷。全身が深く深く陥ちて行くようであった。力をふり絞って見た。心からの感謝と訣別をこめて……

幽かに安堵すると綾姫は、ガックリ項垂れてしまった。

緑の丘の上に三つの墓石が並んで建った。その下に浄められた三人の乙女の永遠の安息があった。

綾姫と美禰に見守られた由紀姫が真中であつた。

吹く風さえ清らかに薫っていた。

◇——◇——◇——◇

毛利綾子、大川由紀子両嬢を偲びつつ綴りました。昭和28年4月号、6月号、7月号、9月号、12月号を参考に、就中、由紀子のお仕置、磔になったお姫様、女囚処刑之図を骨子にお借りしたのです。

◇——◇——◇——◇

マゾヒズムへのいざない

(十六回)

告白 (その3)

黒田史朗

女子学生作家とぼくとの関係をさきの告白であきらかにした。ぼくは低脳児ということになっており、彼女はそのぼくを指導する教師といった関係である。彼女は当時二十才(あるいは二十一才になっていたか)ぼくは二十七才であった。彼女とぼくとの関係は、誰にも知られず誰にも見られず、全く二人だけのことなのであった。彼女が関西の自宅からくれた手紙に〇〇先生というふうに宛名を書かないでほしいという要望があった。家の者に見られるのが、まずいらしかったのである。

る。何故まずいのか、それは当人に訊いてないので分らぬが、別に深刻な理由があるからではなく、恥ずかしかったり、テレくさかったり、そういう気持ちからにすぎなかっただろう。つまり、家人である父や母、特に兄達からひやかされるのが面映ゆいのであろう。ということとは、つまり家にあつての彼女は、女子学生作家というよりも、ちよつと小生意気なところのある娘、あるいは妹にすぎないのである。その娘や妹が、いくら相手がバカとはいへ、彼女の兄よりも年上であるところの

独立した男性に、先生とおおっぴらに奉られるのは、ちよつとテレた話であるし、彼女としても聊か気づまりなのであろう。

ところが、下宿先に戻った彼女へは、〇〇先生と書くことを彼女は拒否しなかった。ばかりでなく、ぼくが彼女に、先生、先生と呼びかけるのへ応揚なうなずき方をしたものだ。

人の目のあるところでは、彼女は普通の娘らしさをてらい、目がないところでは完全に彼女の天下であつた。相手は低脳児である、という気易さの上にあぐらをかいた女性は、これこそマゾヒストにとっての絶好の対象物でありうるのだ。

この種のぼくの演技は、けだし絶品であるう。ぼくはそのとき、それが演技であることを意識しない。崇高で絶大なる権力の主たる女性の前では、ただ、ちぢこまるしかない。彼女の前ではぼくの僅かな知識は全くの無智と等しく、ぼくのささやかな体力も、彼女の一撃にあつたら直きに消しとぶほどの無力なるものだ。ぼくは、ぼくのこの種の意識の中に自分をすっかりとじてしまふ。するとひとりでそこには低脳にして力弱き臆病な男が出現する。女性は完全なる優越感の揺籃の中で、小気味よく己が支配下の男性を見下す。こういう状況に立ちいたるのである。

どういふ女性がサジストであるか、サジズ

ムの女性よ、どうぞわたしの前にあらわれて下さい。と、いくら願っても、その実現は容易ではない。女性がサジストである必要もなければいわれもない。多くの告白にある低脳児演技もひとつのルートである。誰でも女性は、いくらしとやかだつて飼犬が足先にたわむれるのを別に羞じはしない。かえって自分の飼犬を誇らしげに人に披露しながら、靴先や靴下の先で犬の鼻先をなぶったりするものである。これが普通の状況である。この普通の状況、あたりまえの風習、そういう社会的条件の中にあるところの彼女は、別にそのことを意識しない。その意識しないところを意識する神経こそがマゾヒズムの大事な要素の一つである。問題はサジストを探し出すのではなく、状況をつくりだすことである。条件を生み出すことである。マゾヒズムは実に積極的な創造的産物なのである。そのことを普通に考え、あらためて意識されない社会、しかも完全なるマゾヒストにとっての理想郷ヤプーのイース国は、サジスチックな女性を発見したがための成功ではなく、実にそれを普通に考えるところの社会機構、制度化の成功によるものだ。幸いにして、今の社会風習にあつては、飼犬の鼻先を足でなぶることは普通に考えられている。故にここで取らるべき手段の一つは、犬とそれほど大差のないところの、ぐんとおくれた智能指数を相手に示すこ

とだ。だからといって、それが急に成功するとは限らぬ迄も、状況の演出効果によっては全く意想外の成功を示すものである。

まず朝の新聞に目をとおしてみよう。他の新聞ではダメで、朝日に限る。朝日の求職欄に、家庭教師の口が随分と出る。その多くは男子の学生なので、ちよつとがっかりだが、中には女性の家庭教師求職者が、それでもかなりの数に上る。ぼくはいつでもそう思うのだが、もう一度子供になつてそうした若い先生達に、きびしいしつけをしてもらつたら……と考えるのである。で、ぼくは遂に決心して、年令的には不可能だが、精神的な子供にたちかえつたのである。ぼくは杉並区松ノ木町に住む、女子大卒というのに白羽の矢をたてた。いきなり出かけたのではどうも工合が悪い。まず相手に予備知識を与えておかねばうまくない。住所を明記しての、タドタドししながらもめんめんとした訴えは、若き女性の心に訴える力を持つ。ぼくは例のごとくに手紙を書いた。頭が悪いこと、勉強したいが年が多いのではずかしいこと等。

勿論、ぼくの家人には絶対の秘密である。ぼくはそのことで一応の危惧は感じるのだが、案外簡単には秘密は洩れるものではない。手紙の住所をたずねて、直接彼女がぼくの家に来はしないか、特に留守中に来られたりなぞしたら、ことだと思ひはしたが、ぼくは、そ

の危険率の僅かなパーセンテージには目をつむつた。彼女への手紙に、ぼくは家の者達がなかなかにうるさいこと、勉強するのもこつそりやること、自分の貯金のお金で勉強することなどを、真実こめて書きつづつたのである。十日程して返事が来た。内容を原文そのまま次に紹介する。

お手紙読みました。貴方の御希望も大体は分つたのですが、御会いして色々とお話しすれば、もっと良く理解出来ると思ひます。頭が悪いとおっしゃいますけれど、誰でも始めから良い人はいないので、その様なことを気にせず勉強するのが大切で、私はこの春、学校を出たばかりで、御一緒に英語をしたいと思ひます。優しいつもりです。から心配なさらずに来て下さい。十五日の午前十時頃に来て下さい。地図は別に書いておきました。きっとすぐ分ると思ひます。早く出来るようになってお父様達を驚かせましょうね。年令など問題ではありません。安心して来て下さい。その時、今使っている教科書を持って下さい。御時間を間違えぬ様に。ではお待ちしています。

以上は、まさしく原文のままである。字はまるっこい感じの、うまい字ではない。学校といつても短大であろう、卒業したての少女である。その少女が、年令など問題ではない

頭が悪くてもかまわないから、万般の指導をしてやろう、というのである。手紙をもらったときの気持は、とても形容出来るものではない。

彼女の家は古い二階家で、記帳面な官吏の家庭とでもいったかんじ。まず出てきたのは三十才近い太った女で、ぼくは最初、この人かと少しばかりがっかりの態だったが、そうではなく、先生は妹さんだときき、安心した。二階に招じ入れられ、やれ羊羹だ、やれ果物だと大事にされたときには又がっかりした。先生は小柄のまるっこい顔立の、かわいひとである。ぼくはすっかりそれには満足して、イウレイって、ホントにいるでチュかとかなんとか、トンチンカンな質問で相手をすっかり信じこませることに成功した。チェンチェイは、おこるとこわい？というあどけない質問に、うん、こわいわよ、といった御返事をいただいたりした。

しかし、ぼくはいささか功をあせりすぎたようであった。ぼくは、いろいろと接待されるのをいって、お茶碗や果子皿などの片づけ物を、いいですから、と、とめるお姉さんの制止にもかかわらず、強引に台所に出しやばって、洗ったり、ゴミを捨てたりした。

初日から、なんともこんな風なので、お姉さんとかいう三十年輩の女の人や、それから夜に帰宅してくるお父さんなどに警戒された

らしい。その次の予定日に参上すると、遠まわしにことわられてしまった。失敗である。功を急ぐのはやはりよくなかった。失敗の原因が、ぼく自身、実によく分るのである。あせりさえしなかったら、そして根気よく待つことをしたならば、きっと成功していたにちがいないのだ。

さて、この稿のおわりに当って感じたことを一つ二つ。本誌十一月号、馬場好男氏のマゾヒズム百景の中に、お金や威力の前に女性をしてサジ化せしめるより、その目に見えない僅かの間の女性のサジ的姿態が我々の心を妖しくかき乱すのはたしかである……男性が女性を苛めるもの、という通念から女性が男性を常に苛めるもの、と世相が変れば案外マゾヒストはなくなるものであるまいか、と下手な結論を出してみたりするのである。という一章は、大事な事項を含むものと思う。何故馬場氏は、その大事な自分の考えを、下手な結論という風に、へり下ったていで、その実、他をおもんばかるアリバイを設定したのか。ということとは、私も本当のところ、馬場氏の所感に共鳴するからである。私はこれを決して下手な結論というふうにはり下りたくないものである。正論だと思う。マゾヒズムとプロテスト精神（秩序拒否）との関係を重要に見るからである。

それから、とやまかづひ氏へ、折角トル

コ風呂へ入りながら、何故実際に彼女等への奉仕をやらなかったか、何故実際の馬とならなかったのか、残念である。ぼくもトルコ風呂にはよくお世話になるからこそののである。（未完）

附記

原 忠正氏へ（2信）

懇切なるお便り、ありがとうございます。反論というよりも、お互い、いろいろと語り合うことによって、たしかめたり、是正したり、とまあ、私このように思いながら筆をすすめます。残念ながら予定の紙数と時間がないので、コッホのことは省きます。私にとってはさほど重要な問題とは思えません。私に与るところが、「サディズム」という滅多に存在しない種類の女性、というあなたの言葉は私は看過出来ません。これは反論のためでなく、私自身ギリとさせられる言葉であるからです。私はその滅多に存在しない女性の存在を疑うものではないのです。それをもし疑うとしたら「残虐なる女性達」の意味がまるでないことになります。私は「残虐なる女性達」というあなたの作品を常に高く評価してきたつもりです。勿論マゾとサドはそんなに御都合よくは対応してくれません。そのことも辨えております。しかし私はサジスチンといわれる女性の意味について、もうす

こしよく考えてみる必要があるように思うのです。私はあなたと同様サジスチンなる特殊の女性の存在を信じているものなのですが、しかし、だからといってその特殊さを他と明確に区別する必要は、これを認めないので。ひとつの歴然とした境界線を設けて、線の向うにサジスチンを置いておき、線のこちら側からあれがサジスチンだというふうに見るその態度に疑問があるのです。便宜上の区分を設けること自体は止むを得ない仕儀であり、別に異議はないのですが、実際上の問題として、そのような歴然とした区分けは困難だと思ふのです。

古代はいうに及ばず、中世、近世にかけ、貴族の女性が奴隷に示した一部の行為は、たしかにサジズムそのものであり、その行為に特別な興味を感じていた一部の女性はたしかにサジスチンであります。又、公開された街頭の死刑状況を、喜びさざめきながら見物した西欧の殊に貴婦人達の態度は、まさにサジスチンのそのようであります。彼女等の行為をそうして丹念に一つ一つピックアップし「残虐なる女性達」を執筆された貴方の着眼もまさに時宜を得たものと言えるのです。ここで考えねばならぬことは、彼女等をサジスチンなりと判別するにあたって、当時の彼女等を取りまく各条件が、実に理想的に出来上っていたことです。分りきった話かもしれま

せんが、サジスチンなることを、それをまず真先に判別したのでなく、彼女等のサジスチックな行為の表出によって、しかる後サジスチンなることをはじめて判別出来たという事実を見のがさないで下さい。外からうかがい見られるところの行為が、何を言っても一切の手がかりです。行為なくして、サジスチンの見分けは皆目見当がつかないのです。とすれば、そういう行為を発揮出来る、何等かの条件の具備なくしてはサジスチンはあらわれないことになりそうです。奴隷制時代の貴婦人には、その条件にはことかかなかったわけですが、現今の女性には果してどのような条件が残されているのでしょうか。

私が言いたいのは可能性についてであります。サジスチンなる一部の女性を、その名によってそのとおり断定してしまうことは、他の女性を全く否定してしまうことに一面通じるのではないのでしょうか。現在、只今の女性にも直ちに適用出来るサジスチンの意味は、そしてそれを、さなりと断定する為の手がかりは、これを一体どこに見出せばよいのでしょうか。奴隷とか、虐殺とか、戦争とかの条件がまるっきり無くなった現今の世情の中で、何を根拠にすればサジスチンが発見出来るのでしょうか。サジスチンとは結局当時の社会条件がもたらしたひとつの産物にすぎないのではないかの疑念を拭いきれないのです。しか

し、サジズムの可能性について考えるとき、私ははじめて安心出来るのです。サジズムをサジスチンというひとつの型でとらえるよりも、それをサジズムの可能性においてとらえたいのです。論理的必要性からサジスチンを一般女性と峻別することに異議はないとしても、条件に対応されてひき出されるひとつの過程、プロセスを重点にサジズムをとらえたのです。先天的にサジスチンとしての資質を備えた女性でも、それを発芽させ、それを発揮出来る条件と環境に恵まれなかったら彼女はサジスチンとはなり得ないのです。しかし、女性は環境には順応し易きものであります。サジズムをこのように条件によるところの可能性の面においてとらえるならば、我々の一般女性に対しての期待と希望は限りなく拡がるのです。

ただし、サジズムを次の二つに分け、私は考えます。一つは病的嗜虐者、それから今一つは、主に階級的優越感からくるところの誇りたかさ。他の有色人や、身分いやしき者を獣並に蔑視した特権女性の立場。この二つをこそ峻別したいのです。後者は実に現代女性の一般心理に媚びる面を有し、サジズムを決して特定のサジスチンだけのものとして、閉じこめさせてはおかないのです。意をつくしませんが、あしからず御諒承の程。

夜を賭ける男

弓 沢 俊 二 郎
馬 孝 画

(一)

余り目立たないネオンに『ホールパイソ』と出ている。

店の構えは立派なものだが、それにしてはどうしてもこのネオンはちよつと釣合いが取れないような感じだ。

もっとも、よく見ると豪華と言うよりも品のある落着いた店だから、かえってこの方が良いのかも知れない。それに此処はいわゆる銀座の住宅地とでも言った方が適當と思われるような場所である。

ズラリと周りにバーやキャバレーなんかが立並んでいる所ではないのだ。喧噪たる華や

かさとは裏腹の静かな一劃である。——近くにある建物がホテルや、オフィスの多いせいかも知れないが……。

そのパイソのドアを押して、今一人の男が中へ入っていった。鼠色のソフトを真深に冠った一見、中年の紳士である。

彼は、もうこの店には何度か出入りしているらしい馴れた様子で、テーブルにつくと早速ボーイに飲物を注文する。

適度な明るさを持った店の中に、妖しい雰囲気を感じ上げるようなメロディーが流れている。

男はゆっくり煙草に火を点け、一わたりあたりを見廻した、と間もなくボーイが飲物を

運んで来ると、男は静かな声で

「佐藤さんに逢いたいんだがね」と言った。

「ハあ、佐藤さんですかア、ちよつと今出掛けていますので」

「解っている。三時頃だろう？」

ボーイはそれを聞くと、黙って頭を下げて行ってしまった。ボーイもちよつと変だが、尋ねた男も別にそれをとがめるでもなく見送ると素知らぬ顔でグラスを口に運んでいた。

そうして、やや暫くすると男は立上り、落着いた足取りで出入口と反対の奥の方に入っていく。すると細い廊下の突当りに、先程のボーイが待っていて無言で会釈した。

男はポケットから何やら紙片を覗かせるとボーイはそれを確めてから、どうぞと言う風に先に立った。どうやらこれを見ると、先程二人の取交した言葉の意味が何か重大な符合のようなものだったようである。あれが第一の関所だとすると今のは第二の関門である。と、この一見落着いた感じの、優雅とも見える店にも、表と裏があるのか、――

そうだとすると、その裏は生優しいものではないようである。ホールに居る客の中、大半はまさかそんな事があるとは夢にも知らないのだろうが――ボーイは廊下の両側に幾つかあるドアの一つを開けると、合図のボタンを押した。と室の一隅が音もなくポツカリ開いて、其処にきちんと背広を着た男が立っていて、丁寧に

客を迎えた。

「いっしやまし。どうぞ」

男は、軽くなずいただけで奥へ入って行く。と彼は地下に通じる階段を下りながら、案内の男に小さく

「暫らく連絡がなかったんで待遠しかったぜ今夜のは期待していいんだろうな」

「御安心を。それこそ開闢以来というものですよ。この前は惨々御叱言を戴きましたからね」

「二度とその跌はふまんと言う訳か」

「私にも見る眼がない訳じゃありませんからね。今夜のは絶対ですよ」

「ふふふ、今度はその方が絶対でも、かんじんな、この方の目がどう出るかな」

男はそう言いながら何枚かの札びらを無造作に案内人の手に握らせる。

これは、まるで約束事のように何のためらいもなかった。

「ハハハ、大丈夫ですよ。目が出るように祈ってますから」

地下に造られてあるその室のドアを開けると、先ず眼に入る真昼のような明るさである。そしてその明るさ以上にきらびやかな雰囲気、かなり広いその場内を押包んでいた。正しく、それは場内と言うにふさわしい広さと設備を持っている賭博場であった。

客の数も、上にあるホールに居るそれとは



比べものにならない位の人数だ。それが皆んな立派な身成りの紳士達であり、派手な美しい衣裳の女性の姿もある。

そしてそれは日本人ばかりではないのだ。数多くあるデスクや競盤にそれ等の人々が群がり、雑談や笑声にまじって時々、嘆声ともつかぬどよめきが起ったりしている。あたりに渦巻く煙草の煙だけが、冷静そのもののよう絶える事なく上っている。勝負に疲れた人達が喉をうるほすボックスも、ちゃんと備えられてあり、すでに其処にはかなり酔の廻っているらしい何人か姿もあった。

案内の男はゆっくりその場内を見廻すと、眼であそこですと脇に居る男に合図した。そしてニヤッと笑うと

「成功を御祈りしてます」

と小さく言って引返していった。男は無表情で教えられたデスクの方を見ていたが、すぐには其処に行かず、先ずボックスに行くと何杯かグラスを煽った。ソフトを冠っていた時は解らなかったが、こうして見ると年令の割にしては幾分頭が薄いように見える。

どんな職業の男か解らないが物腰態度、そして眼の動きは何か底気味の悪い位の落着きがある。彼は、すでに此の華やかな賭博場にも馴染の客なのかも知れない。こんな所がこの東京の中に幾つ位あるのか解らないが、これと類似のものが時々、司直の手入れを受け

て世の新聞紙上ににぎわす所を見ると、決して少なくないのかも知れない。それにしても盛況である。あっちこちのデスクの上に乱れ飛ぶ札束は、どれ位の額なのだろう。それが一瞬の内に所と持主をかえて目まぐるしく動いているのだ。

一日の勤労に汗水たらして何がしかの報酬を受けている人々には、これはおよそ縁の遠い別世界である。

くだんの男は、やがてボックスを離れるとゆっくり目当てのデスクに近づいていった。其処には何人かの紳士に混って一人の女性がカードを握っていた。電光に映える鮮やかな黒っぽいドレスに、肌の白さがくっきりと浮んでいる。男はその顔を見ると、さすがに眼を輝かせた。

——美しい。成程さっき、あの男が言った絶対とは、正に嘘ではない凄い美人だ。どちらかと言えば、日本人離れした整った顔立ちである。マツ毛の長い瞳、高い鼻、形のいい唇、とそれに肌の白さはどうであろう。

男は素知らぬ振りで、つぶさにそれ等を観察しながら煙草に火を点ける。

これだけの逸品、一体正体は何んだらう？が、そんな詮索等どうでも良いのだ。現実は今眼の前に居るこの凄い美人に、男はただ眼の焦点を会わせているのである。

彼は、そっと胸の所に手をやった。懐には

手の切れるような札束が、ずっしりとした重みを持っている。

この金が、果して自分の目に出るか出ないか。男は、まるでそれを占うかのようにじっとそこに立ったまま、デスクの上のカードの成行を見守っていた。彼は人知れず、ひそかにその美人と勝負を初めたのである。勝つか負けるか、手際良く配られるカードの運に、じっと男は息を詰める。と、どうやらその運は男の思うつぽに走ったようである。彼女は見る見る手持の駒を全部失ってしまった。美しい眼元が、何か諦め切れない様子だった。それを見ると、デスクの係が彼女のそばへ来て、どう致しますかとばかり丁寧に頭を下げた。彼女はスッと立上ると

「後を続けますから、ちよっと失礼致しますわ」

と言って、その係をうながした。どんな話をして来たのか、待つ間もなく彼女は再び戻って来ると、前よりも一層真陰な面持ちでカードを手にした。白いすき透る程の顔が幾分上気して、妖しいまでの美しさだ。男は、そんな彼女と、デスクのカードを半々に見ながら尚も身じろぎもしないで佇んでいる。勿論、そんな男の事などその美人は意識していなかった。それからカードも彼女には幸いしなかった。いたずらに時間を掛けただけで結局は前と同じく彼女は綺麗に負けてしまっ

たのである。恐らく金額にしたら拾万とは下らない額だろうと思われる。しかし彼女は、負けてしまうと返って諦めよく、その美しい顔に笑みさえ浮べながらしなやかな細い指先に煙草を挟んだ。綺麗に磨かれた爪がキラキラと光る。くだんの男はそれを見ると、ほっとして初めてその顔に薄い笑いを浮べると、内心の動揺を押え切れず、そそくさと精算所へ急いで行った。

後から席を立った美人は、係の者に案内されて場内とは別の控室に入っていく。

「どうも、すっかり御運が向かなかったようですね」

「ホホホ、仕方がないわ。そういつもいい事ばかりはなさそうよ」

言いながら彼女は、ゆったりしたソファに形のいい細い足を組み合わせて坐った。

「では失礼ですが御約束ですから、此処で暫く御待ちになって下さい」

「解ったわ。でも御約束の時間だけは間違いなくして戴きたいわ」

「大丈夫です。契約は絶対に守りますから御安心を」

それだけ言うと、係の者は出ていった。

(二)

一夜にして数拾万、いや時によってはそれ以上の金を得る人間も居れば、又反対にそれ

を失くする者も居る。得る者は有頂天になつて歓喜の酒盃を上げ、失った者又、憂散の酒盃をくむ。——これは華やかなこの世界の厳しい現実である。

だが、しかし賭博に勝つても負けるでもなくして、此処で大きな金を惜し気もなく捨てる人間も中にはいるのだ。

あの男、そうである。懷に温もり返っている分厚い札束は、この男に限って賭博の為ではなかった。いや彼自身にとっては勝負した金であつたかも知れない。もしもそれに万が一負けたとしても彼の場合、その金は使い道がなくなる訳だからだ。しかし今夜は、男はその勝負に勝つた。懷にした重い札束は、わずかに一枚の薄い紙片と交換されたのである。

「さすがに御眼が早い、残念です」

「金には換えられませんかね？ 貴方は金の方が商売の筈だが」

「どう致しまして、あの逸品を見ては商売を抜きにしても惜しくはありませんよ。残念です」

「フフフ、それに嘘はなさそうですね。道理で高い」

「しかし、それ以上の値打はありますよ」

でっぷり太った支配人は、そう言いながら男を案内して別室に入った。其処で男は初めて、あの美人と向い合つたのである。彼女はそこに立っている男がずっと前から自分を凝視していた事など知る由もなく、その美しい

顔にしいて感情を押さえながら儀礼的に挨拶しただけだった。しかし、さすがに女らしい差いの色は隠す事は出来なかった。此処ではお互いに余計な事はしやべらず事務的な言葉を交すと、支配人は

「では後は、どうぞ御二人でよろしいように」

と言って、出ていってしまった。

男は、ゆっくり煙草をくわえ火をすつたがいつになくその手は微かに震えていた。

やがて二人は其処を出ると、直ぐ車を拾つた。行き着いた所は、お定まりのホテルである。男は度々、其処を利用してゐるらしくかつた。室の中は余り広くはないが、感じ良く整頓されている。

「たいして上等ではないが静かでしょう」

「随分御利用なさっているんですね」

「いやあ初めてとは言いませんが、それ程でもありませんよ」

男は薄く笑いながら洋酒の栓を抜くと、彼女にも如何ですかと言つた風に眼を向けたが彼女は軽く頭を振つた。男は、そこで初めて自分の名を沼部と名乗った。

「あたしの名は適当に付けて下さつても結構ですわ。ホホホーそれとも、どうしても言わなければなりません？」

「いや、そんな事はありません。御随意に」

「わたくしは、ただ御約束の事だけは守りま

すわ。それ以外一切の事は此処では必要ない
じやあ、ありません？」

「成程、いや解りました。余計な詮索めいた
話は止めましょう。どうせ今夜一晩だけの御
附合いですからね。ハハハ……しかし私には
今夜は夢のような晩です」

沼部はそう言うと、静かに彼女の手を握っ
た。

彼は、とうとうこの美貌を自分の思う通り
にする事が出来る喜びに、狂ほしい程の興奮
を押さえる事が出来なかったのである。考え
て見れば、その代償は余りにも大きい。しか
し彼にとって、それは決して大きな代償では
なかったのだ。何故なら、それにはそれだけ
の価値があるからなのだろう。

「今夜はどんな事があっても貴女は私のもの
なのだ。いいですね」

沼部はそう念を押すと、静かに着ている上
衣を脱いだ。覚悟して来たとは言え、さすが
に彼女はその後、当然来るべきものを予期し
て身を固くした。が、それから起きた事は彼
女の予期していた事とは全然違う余りにも恐
ろしい事実だったのだ。沼部は無言をいわず
彼女の着ているものを剥いでしまうと、いき
なりその細い両手を背中に廻さして布で縛り
形のいい両足も揃って縛ってしまった。彼女
がアッと叫ぶ間もない位、それは素早い行動
だった。それが終わると彼は、やほらポケッ

から鍵を出しドア
に固く錠を下ろす。

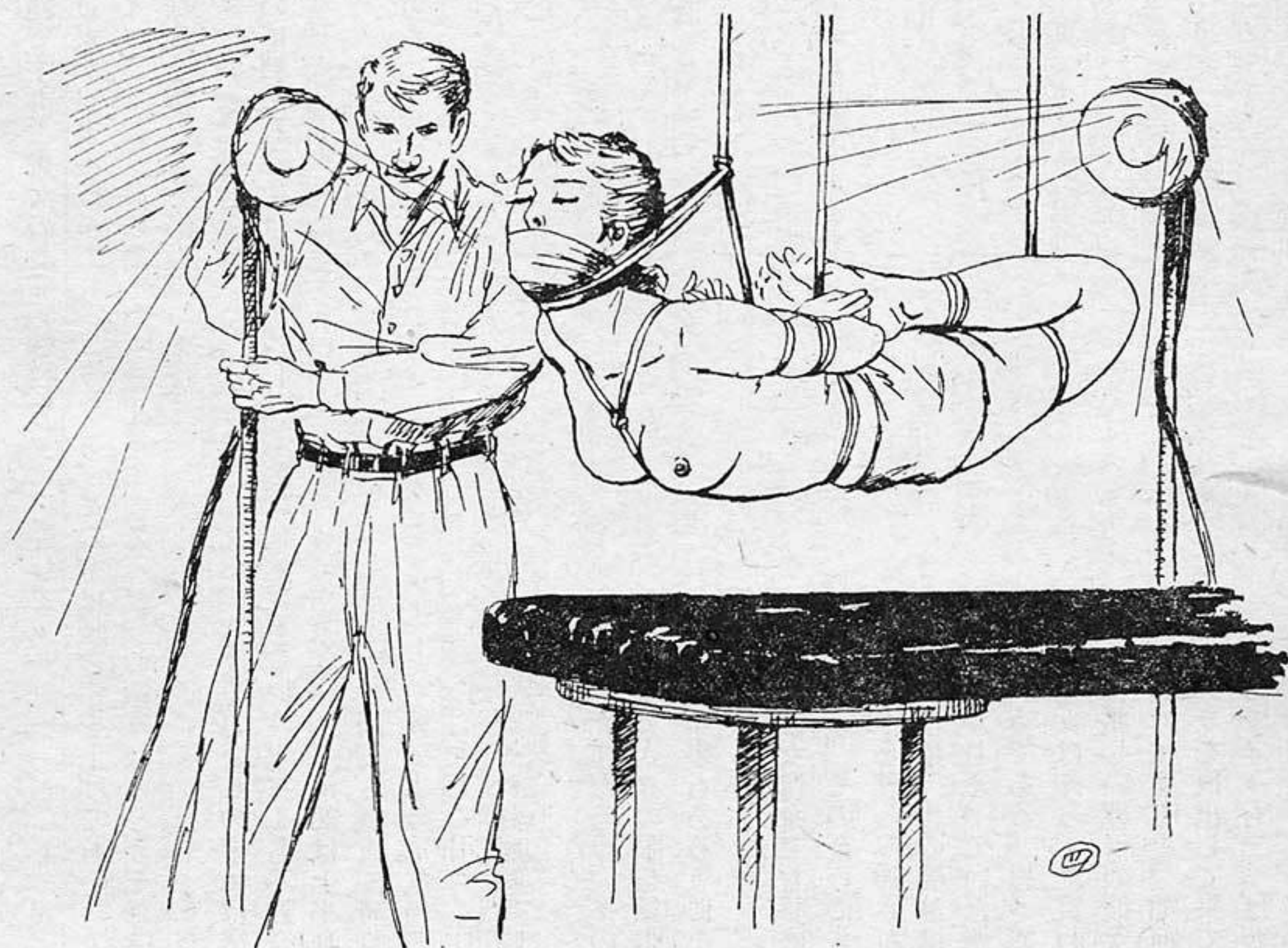
「貴方はッ、こんな
事してどうするん
です。ひどい事は止
めて下さいッ」

「ハハハ、どうし
ようと私の自由で
す。明日の朝まではね。」

私は私の気に入った
様にやるだけです。
それに文句はない筈
だ。一晩貴女の身体
を自由にするのもき
まったやり方だけと
は限らないんでね。

私は普通の男の様に
歯の浮くような優し
い事が出来ない性分
なんだ。だから私は
私のやり方で貴女を
可愛がって上げよう
と思っているんです
よ」

沼部は、そう言い
ながら室の洋服タン
スを開けると、中か



ら幾つもの麻縄の束を取出しそれをドサッと床の上に置いた。そして更に隅に下がっているカーテンを取除くと、そこから大きな細長い台のようなものを取出した。見ると、それは表面が黒光りの皮で出来ていて、それを丸い二つのテーブルの上に載せて止めると、まるでそれは手術台のように見える。沼部はさつき、時々此処へ来ると話したが、こういう所を見ると時々来るどころではなく、この室は彼の持物ではないかとさえ思われる。ちよつと見たのでは解らないが、総ての段取りに事欠かないものが、ちゃんとこの中に秘められているようだった。表面は、なまめいた如何にも甘美な雰囲気を持たせよわけては居るが――

沼部は仕度が終ると、身を固くしている美人をその台の上に移した。ひんやりした皮の感触に、白い滑らかな肌がかすかに震え、彼女は異様な予感に唇をわななかせながら身をくねらせ

「酷い事は止めてッ。御願いですから乱暴な事はしないで頂戴」

と白い顔を振った。

「フフフ、何も取って喰おうと言いやあしませんから御安心を」

彼はそう言々と、笑いながら彼女の眼の前で麻縄をしごき初めた。

「これは何をするものか判りますか。えゝ、

之は貴女を縛り上げる麻縄ですよ。貴女のようない人な美しい人を縛り上げる事が出来るなんて夢の様ですよ。私はサディストでね。その為なら今夜の様に幾ら莫大な金を掛けても惜しいとは思わない男なんです。貴女は賭博という国禁を犯した。その償いに縛られる位は当然でしょう。マア私の様な紳士的サディストに依って今日の損害が補われるということはある意味で一挙兩得というものでしょう。これに懲りて今後は賭博などやらんことですな」

沼部は、しごいた麻縄を手にとると、否も応もなくその言葉の通り美しい彼女を縛り初める。その動作は驚く程早く、そして手馴れたものである。又そうしながら彼は如何にもそれを楽しむかのように、絶えず片頬を歪ませているのだ。その眼は、まるで今迄とは違つて何かにつかれてでもいるかのように不気味にさえ見える。布で結かれていた彼女の細い両手はそれを解かれると、今度は本格的に思い切りそれを背に押上げられて麻縄で厳しく縛られ、その縄はふくよかな胸を幾重にも締め上げて、更に二の腕、腹部までも網の目のように縛り上げられた。低い皮ベッドの上に、彼女は思わず苦痛の声を上げながら悶える。しみあと一つ無いスベスベした肌は、きしむ縄の音に無残に噛まれて痛々しい。

「アアッ……止めてッ。止めて下さいッ……

……許してッ」

「フフフ、この室は幾ら声を上げてもいいように出来ているんだ。お望みならどうぞ御遠慮なく」

成程そう言えば、よく見るとこの室には窓らしいものは何処にもない。ドアも不釣合いな程頑丈そうに出来ている。沼部は上半身を縛り終ると、更に彼女の両脚も厳重に縛り上げた。そうして終ると、棒のようになって身動き出来ない彼女の身体を上下に引っくり返したりして、更に縄目を調べたり感触のいいその肌を觸ったりした。

あゝ、その姿のなんとした事だろう。あの恍々たるシャンデリヤの下で人々の眼を見張らせ、足を留めさせた美人が事あるうちにこんな無残な姿にされようとは――

これは恐らくその当人の彼女自身でも夢にも想像しなかった事であろう。その余りにも美しいが故に、多くの男達から慈しみ通されて来たのであろう。それだけに、世の男達は皆んなそうするものだと思っていた所に、彼女の不幸があったようである。思っても見ない地獄の一夜に、彼女は知らずに買われてしまったのだ。沼部は厳しい縄目の彼女を先ず皮ベッドの上に上向けにすると、如何にも性能の良さそうなカメラを取出して来て三脚に据えた。強い光りのライトも二つばかり取付けられ、準備が終ると彼はそれを何枚

かフィルムに収める。そして更に今度は、引っくり返してうつ伏せにした所や無理に坐らせ横から縦とあらゆる角度から、彼女の無惨な縛り上げられた姿を写した。彼女は、もうその美しい顔に涙をにじませながら、しやくり上げ沼部に哀願したが、彼はそれを見ると楽しそうに眼を輝かせるのである。

「美しい貴女を忘れない様に、こうして何枚も撮って上げるんですよ。まだまだ色んな風にしてね」

沼部はそう言うのと、少しの躊躇もなく再び彼女を上向けに皮ベッドの上に横たえ、別の麻縄でその儘動けないように確り其処に括り付けてしまった。彼女の美しい顔を上向けにのけぞられるだけのけぞらせ、縄で動かさない様にしてしまった。

「アアッ！許してッ！アアッ——」

苦痛に喘ぐ悲鳴も意に介せず沼部は薄い笑いを浮べ、更に固く縛り上げられきちんと伸びている彼女の両足の形のいい両拇指に、かなり太い銅線をぐるぐると容赦なく巻き付ける。

とそれを別の縄に繋いで、壁際に取付けられてある金属製の輪に通し、グイグイ引きしぼって固く縛った。彼女の身動き出来ない身体は更に引伸ばされた恰好になり、可愛らしいその足の指は血の気を失って白くなっている。哀れな彼女は顔も動かす事は出来ず、切

ない悲鳴を上げるだけだった。沼部は、そんな彼女に又ライトを当てて何枚か写真をとった。彼はこの美しい女が、かつて誰にも見せた事がないであろう惨めな姿を余す所なくフィルムに納めて置くつもりなのである。

シャツターを切る彼の手は、内心の興奮を懸命に押さええているかのようなのである。ようやくそれが終わると、沼部はホッと肩をゆすって一休みとばかり煙草に火を付けた。休んでいる間でも彼は絶えず薄笑いを浮べて哀れな恰好の彼女を見下し、その身体をつねったり、爪先で蹴りつけたりして翫った。

(三)

すでに夜も相当更けている頃合いである。が、しかしこの異様な雰囲気を持つ室の中は、惶々として外部からは全く遮断されて動いているのだ。外からの一切の物音が入らぬように、中の物音も又外部には洩れないのである。サディストと自ら名乗る男の飽くなき執拗さは益々激しくなっていた。彼は厳しく縛り上げた上、更に無惨に足指を絞って引伸ばした美人のすぐそばに、何やら平ったい小さな機械の様なものを置いた。見ると、それはテープレコーダーである。こんなものを一体どうするつもりなのだろう。

沼部はその調節が終ると、室の隅から手頃の太さの棒を引出し、それで彼女の足指を

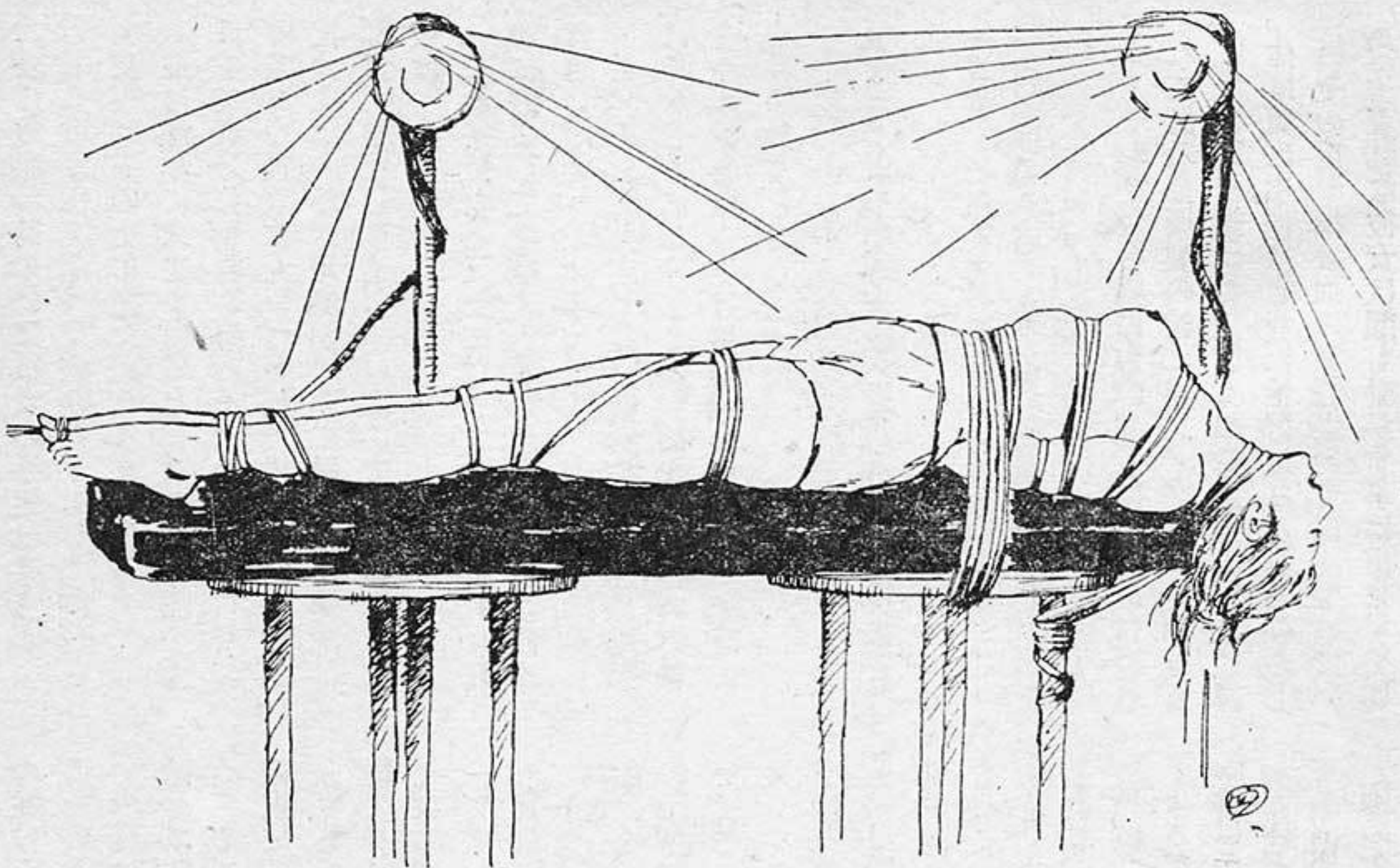
本誌百号突破記念

懸賞原稿募集について

本誌通刊第百号突破を記念いたしましたして懸賞原稿の募集をいたしましたところ、多数の読者の方々から御応募頂き厚く感謝しております。

募集以来、優秀作品は、すでに本誌七月号誌上に花巻京太郎氏の「お町の最期」をはじめとして、八月号では、路加比利氏の「身悶える妖精」九月号では、沖竜彦氏の「草双紙に於ける責場の研究」を。更に十月号では市田健次郎氏の「女水兵哀史」(女奴隷愛好者の遍歴より)十二月号では真木不二夫氏の「白い玩具」と近藤一氏の「継母」の二作を発表いたしました。更に本月号に於ては蒼野礼氏の「花臂(かでん)」を掲載、皆さまの御高評を仰ぐ次第であります。

尚、只今手元に届けられた数多くの応募作品を鋭意検討中ではありますが、皆さまをアッと驚嘆させるような傑作にめぐり合わさないので残念に思っております。これはと思う優秀作品は逃さず掲載いたす考えでありますから、何卒奮って、傑作を御寄せ下さるよう御待ちしております。



伸ばしている縄にからませると、ぐいぐいこじって絞り初めた。それだけでなくとも、強く引伸ばされて痛さに呻いていた彼女は

「アアッ……アッ……」

と絶えられない悲鳴を上げる。沼部はそれにも構まわず、尚もグイと少しづつ縄を絞る。彼女の悲痛な叫びは益々高く激しくなつて、哀れに可愛い足指は今にも千切れてしまふのではないかとさえ思われた。その苦しみはか弱い彼女にいつまでも耐え切れるものではなかった。やがてその儘、彼女は気を失ってしまったが、沼部はそれを見ると如何にもしようがないと言った風に一旦縄を弛めた。しかし彼はすぐ気付薬を取出すと、そのガーゼを彼女の鼻に嗅がせ、すぐ意識をさまさしてしまひ間もなく再びその責めを繰返した。きりきりと絞られる縄に、彼女は身動きもならず切ない悲鳴を上げる。

「アアッ……アッ、許してッ！アッ！」

沼部は、その悲鳴を聞きながら「フフフ、それじゃあ、そろそろ言う事を聞かせるかな。先ず初めは名前を言うんだ。えゝ、そらッ……」

言わなければこうだとばかり縄を絞られる激痛に、彼女は戦いて小さく

「敦美と言います」

と言ったが、沼部はわざと声が小さいとばかり何度でも言い直させ、それをちよつとでもしぶると容赦なく縄を絞った。そして更に住居は何処だとか、何をしているのかとか、それだけの美人にパトロンの居ない筈はあるまいとか、その数は何人位なんだとか、あらゆる事を大きな声で答えさせた。

哀れな美人は泣きながら、せい一ぱいの声を上げて彼の嗜虐を満足させなければならなかったのである。そしてそれらの事は、余す所なく傍らのテープレコーダーに收音されたのである。

「フフフ、こうして縛り上げた恰好もいいが美人の泣き声って奴もたまらない魅力だね。私には貴重ですよ。高いもとでも掛っているしね」

沼部はそう言うと、それを大事そうにしまひ、それからゆっくり彼女の固い縛めを解いた。

柔らかい滑らかなその肌には、もう相当の時間厳しい麻縄が喰込んでいたので、彼はそれを弛めるつもりらしい。縛り上げる時もあり手間が掛ったが、いざそれをほどくのも仲々時間が掛る。これを見ても驕奢な美しい奴女が如何に厳しく縛り上げられたかが解つた。しかし、沼部は一たん麻縄は全部ほどい

だが、最初の時の様に彼女の手足は柔らかい布でその自由を奪って置いた。そして相変らず皮ベッドの上に横たえたままである。

彼は煙草に火をつけると、グラスに酒をつぎ立て続けに何杯か煽った。そしてからそのグラスを彼女にも一つ如何ですかと眼の前に持っていった。可愛想に涙に洗われた綺麗な顔は、まだしやくり上げていて首を振る。と彼は

「これを飲むと元気になりますよ。それに親切に飲まして上げようというんだからお飲みなさい。えゝ、ホラッ」

と、それでも応じない彼女を見ると、沼部はそれじゃあこうしてと、彼女の形のいい鼻をキユンと抓み上げ唇を開かせると、無理にそれを飲ましてしまった。

一瞬、苦しそうにむせる彼女を見ながら、彼はニヤニヤ笑うと改めて自分の腕時計を見た。

「成程、そろそろ急がないと夜が明けるか」

沼部はそう言うと、再び麻縄を手でしごいた。彼女はやっと今その厳しい縛めを解かれたばかりだと言うのに又、改めて縛り上げられるのだ。

細い手首にはまだ赤くさっきの縄目が残っているのに、その上を容赦なく固い縄がぎりぎりとからむ。しなやかな両手は、前と同じ様に背中が高く組合わされ縛り上げられると

今度はその縄目は前と違った形にされ、後手のその縄は彼女の身体を縦に締め上げた。固い麻縄は、ふくらした二つの乳房の真中を通って腹部をくびり、更にそのまま背中に廻ってそこで一端結ばれる。両足も前と同じく嚴重に縛られると、その足は今度は、後に折曲げられて、そのまま肩から腹部に廻された縄でグイグイ絞り上げられ、まるで彼女は白えびの様にされてしまった。

「アアッ……アッ……」

切ない悲鳴を上げながらその白えびは、黒い皮ベッドの上に新たな涙を流すのである。沼部はそうしてすっかり彼女を縛り上げると、それを、あらゆる角度から何枚も写真にとった。そしてそれが終わると、今度はそのままの彼女を足と腹部と、両手三力所に別な縄を結び付け室の中間、丁度手頃な高さにキリキリと吊上げてしまった。天井にはその為の鉄輪が、ちやんと取付けられてあったのだ。哀れな彼女は無惨な恰好の儘そこにぶら下げられると、更にその涙の顔も思い切り上向けに動かせないように縛り付けられ、そして今度はその口にも固い嚴重な猿轡が嵌められたのである。彼女は息も詰まるばかりの苦痛にも、今はもう悲鳴すらも上げられなくされてしまったのだ。何と言うそれは痛々しい姿であるう。――

沼部はそんな彼女を見ながら、カメラを正

「の顔のまん前に据え付けた。どうやら、今度こそ苦悶に濡れた彼女の美しい顔だけを撮るつもりらしい。彼は、そこで何やら金属製の器物を取出して来ると、それを固く嵌まっている彼女の猿轡の上にゴムバンドで止めた。見ると、それはよく眼科の治療の時に眼の下にあてがう水受の器具と同じようなものである。それよりは少し大きく出来ているが、それが今彼女の猿轡の上から落ちないように確りかと留められたのだ。

一体これでどうするつもりなのか。沼部はそれが終わると今迄二つだけ使っていた明るいライトを幾つも増やして、それをズラリ周りに立てた。明るいのを通りこして強すぎるそのライトの熱は、四方八方から無惨な恰好の彼女をまるであぶりつけるかの様に輝いた。彼は、わざとこうして次に来るべきものを、じっくりと待っているのかも知れない。厳しい縄目と吊りの苦痛に重なって、こうして強いライトの熱にむされる彼女はどんなだろう――。

沼部は濁った眼をそれに注いでいる。と時のたつのに従って、見る見る彼女の身体は汗ばみ、その美しい顔からは苦しい玉の汗が滴り初めた。

溢れる涙もそれと一緒にになり、更にヒクヒクと形のいい鼻の穴を一ぱいに拡張して、そこから流れるキラキラする涙水も一緒になって

それらは何条ものしずくとなり、そこに取付けられてある金属製の器の中に流れ落ちるのであった。

沼部はそれを見ると、喰入る様な恰好でその彼女の顔を矢つぎ早やに写真に撮った。悲鳴に似た荒い息が彼の顔に掛る。上から下から左右から余す所なくそれを写し終ると、尚もその儘じつとその顔を凝視していたが、やがて哀れな彼女は、そこで再び気を失ってしまったのである。沼部はそれを見ると先ず猿轡の上の器物から外し、吊ってある縄をほどくと順々に彼女の固い縛めを解いていった。そして今度は、皮ベッドではなく柔らかなベッドの上に痛々しい縄目の跡だらけの彼女を横たえると、彼は静かに、今外したばかりの器物に溜っている液体を、小さなガラス瓶に入れて確り栓をした。

「フフフ、俺にとつてはこの世に又とない高価な美酒だ？」

沼部は時計を見て、ニヤッと笑うと、今迄使った様々なものを綺麗に片付けた。そしてグラスで何杯か酒を煽ると、やがて頃合いを見て倒れている彼女に気付薬を嗅がせた。

「ハハハ、如何ですか。随分御疲れになったでしょう。さあ、まず衣裳を、……ハハハ、もうそろそろ御約束の時間ですよ」

彼はそう言うのと、ポケットから取出した鍵で静かにドアの錠を開ける。

彼女は汗と涙に洗われたその美しい顔を伏せたまま衣服を身に纏ったが、白いぬめぬめとしたその肌に残る余りにも無残な縄目を見ると、かすかに肩を震わせた。

沼部はそんな彼女を見て、さっきの小さな瓶を手に取ると、

「貴女には大変御期待にそえなかった様ですが、これも初めの約束事ですから、どうぞ悪しからず。しかしこれで総て契約は終了しましたから、どうぞ御安心下さい。貴女とは二度ともう御逢いする事もないでしょうから、その為にせめて、これは大事にしまつて置きます」

す。私の得た一夜の報酬でもありますから」
そう言うのと、彼は笑いながらそれに目礼するふりをした。

彼女は顔も上げ得ず、一時も此処に居る事がどんなにかたまらない素振りや、沼部が帰りの車と呼ばうと言う言葉も聞かず、彼女は逃げるようにして室を出ていった。

彼はその姿に笑いながら、再び手に持った小さなその瓶を捧げた。

いつの間にか、もう外は明るい朝の陽が射しているらしい。

(終り)

◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙(9センチ×13センチ)焼付

愛川悦子嬢の巻

★ベッド変型縛り(略号1)

四枚一組 三〇〇円

ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクションをふりまいてゆく。

★全裸強烈縛り(略号2)

四枚一組 三〇〇円

山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖し

くゆらめく。

大塚啓子嬢の巻

★股間縛り(略号3)

六枚一組 四〇〇円

その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

★全裸縛り(略号4)

五枚一組 三五〇円

豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ

田中芳代嬢の巻

★セーラー服縛り(略号5)

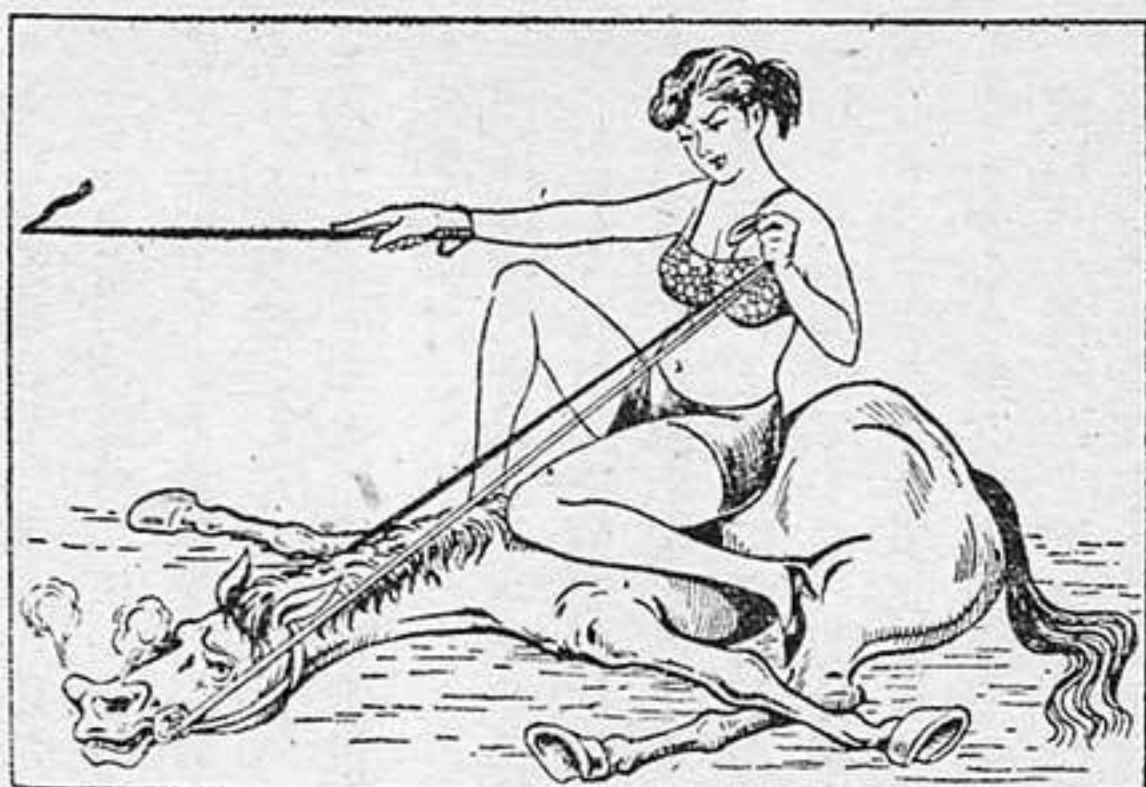
五枚一組 三五〇円

可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまとう縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

★股間しばり(略号6)

四枚一組 三〇〇円

ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。



☆ K K ス ク ラ ッ プ よ り ☆

馬 化 白 書

(その一)

鞍 良 人

ま え が き

◎テキストをそのまま引用するに当っては努めて原文を尊重する様心がけました。

◎全体として種々な関係から送りがな等に於いて統一を欠くことを免れませんでした。

◎谷崎やその他、戦前の文を引用する際には最少限現代仮名づかい風に改めました。

◎此の度の原稿では、手持ちの資料を殆んどあらいざらいに用いました。いつまた執筆の機会があるか予期できないからです。それでも海外小説からの資料を使うことは、どうしても今回は出来ませんでした。

僕の名前は、今、明らかにしませんが、これまで本誌は勿論のこと、その他の会社に対しても、ただの一度だって原稿を寄せたことはありません。全く初めてです。

僕が限りなく尊敬している沼先生の「家畜人ヤブ」が休みになっていることは、淋しくて仕方ありません。その歴史的大作については、殆んど言及するところがありませんでしたが、かねがねこの覆面の碩学「沼正三」の謎が解けないままです。一体どなたなのでしょう。沼氏がこの大作並びに手帖その他にさかれる時間とエネルギーは、決して道楽の暇つぶしと云った並大抵なものでは

いことが想像されます。彼程の人ならプロフエッサーでも第一線の人物に間違いありません。「サドル氏は「日本の国宝」と云って居ります(三十二年十一月号読者通信)」。医学者か、大ドイツ文学者か、心理学者か、大僧正か?

並居る寄稿家、錚々たる大家諸先生に較べれば、全く貧弱にして低劣な嗜好しか持ち合わせない僕ですが、僕が真実である限り、いつの日か顔も名前も暴露されたにしても、いささかも恥と思いません。

本誌の様な、雄々しくも真面目な書物が陽のあたる正規の販売網に乗り得ない現今の社

会では、自分の名前さえ公然と発表出来ない情ない状況ですが、この様な社会を一日もはやく打ち砕くためにこそ我々は、既に住所も氏名も明らかにされている前衛的先輩（鬼山氏の如き）の驥尾に付して、不屈の粘り強さをもって立ち上がらねばなりませんし、僕が多忙の中にもこの稿を執筆したのは、実にそう云った闘いの一つの手はじめとしてでありました。（一九五八、八）

（一）馬場さん有難う

馬場好男氏「マゾヒズム第七景」（三十三
年九月号百五頁）に、前から見たいと思って
いた映画「十戒」の記事がありましたので、
急に見たくなりました。直ぐピカデリーに行
くと丁度、午後の部が始まるうとしていまし
た。随分長い映画でした。場内は冷房が利き
過ぎて寒い位のもので、第七景にある
馬乗りシーンが来るのを今か今かと待って居
ました。遂に確に来ました。モーゼがなか
か山から帰って来ない間に、偶像崇拜のエジ
プト神の信仰を唆かされた民衆が、金の牛の
周りで狂った様に踊りまくっている。天の岩
戸の前の騒ぎもかくばかりか、「拍手と喊声
と、拍子木の音とが、耳を聳するばかりに続
けられた。もはやそこには、一人として正気
な者はいなかった」とある「踊る一寸法師」

（註1）そのままの有様です。と、どうでし
よう四つん這になった男の人の背に一人の若
い女性が躍りかからんばかりの荒々しさで遅
しく打跨がってしまう。その有様が丁度、画
面のやや右寄りの辺りに大寫しに現れる。甚
だ感動的な貴重なシーンです。期待していた
よりも一層すさまじかったので、すっかり氣
に入ってしまった。僕はとてもああ云う
のが好きで、あそこ（註2）が何回も見たい
し、又何回見ても飽きることがないだろうと
思います。しかし一回毎の入れ替えですし、
もう一度ははじめから、あそこまで見るのは時
間的にも大変です。

女の人が、男又は女を組敷いて見たり、馬
にしたりする様な事は現実には見る機会是全
くないと云っても過言ではないでしょう。た
だ子供がやっている馬飛び遊び（註3）や、女
レスリングでたまに見られる位なものです。
ですから、女性の馬乗りが見たければ絵か映
画で探さねばならないことになるのです。僕
自身の体験からしても、生れてからたった一
回、それも幼稚園か小学一年位の時のがある
だけです。畳の上に仰向きに寝ている僕のお
腹の上に六つ年上の姉がふざけて跨がってど
しんどしん、お尻をはずませるので苦しくて
苦しくて、今おもい出しても、ちっともいい
氣持ではありませんでした。あれがもし、ず

っしりと組敷いていて、僕が撥ね起きようと
暴れてもそのままいつまでも乗っているのだ
ったら、きつといい氣持だったのでしょう。
姫の家宝を盗んで逃げた武士が、強い腰元に
捉まえられて裸馬の背に仰向けに縛りつけら
れ、腰元の鞍代りにされる話がありました。

（二十九年九月号？田村実）それは馬が走る
度に「馬の背と腰元の尻との間に圧迫されて
息の止るほどの苦しみ」だったそうです。馬
乗りでなくてさえ、つまり踏まれることでさ
え、やはり子供の頃一回体験があるだけで
す。仰向けに寝ている僕が、遊びに来ていた
隣家の同年輩のM子に、体の上を踏んずけて
くれと頼みましたところ、お腹から胸から顔
の上まで汚れた素足でグダグダに蹂躪して歩
いてくれました。その場合は、かなり快感を
伴った記憶があります。

本誌九月号には、ニューヨーク・シティー
バレエ団の「檻」の事が三カ所で言及されて
います（四十三頁鬼山純策、百五頁馬場好男
百三十頁沼正三）。いずれも、雄ぐもが女王
ぐもの股に首を挟まれて締め殺されることが
感慨深げに述べられていますから、見逃がす
べからざる舞台だったのでしょう。僕は、バ
レー団が来た事は新聞で知っていましたが、
あいにく、そんな勇壮なのがあるとは全く知
りませんでした。本誌六月号、姫馬痴人氏の

読者通信で初めて知ったのです。女性達がギョウギウウにのした雄ぐもを担ぎ上げ、その上に女王、王女が馬乗りに跨がったまま舞台を行進する等いかにも勇ましい。僕も日本のバレエ(註4)でそういう「檻」を公演してくれることを望みます。なにしろ、映画でも芝居でも、殆んど皆、終って了ってから初めて、そう云うのがあったのだと知らされるので困ります。何とか終らないうちに知りたいものです。そう云う点からも、「十戒」の馬乗りシーンは間に合ってよかったと思います。馬場氏に大いに感謝致します。そう云う本誌には僕の好きな絵や、記事があつて大いなる喜びでもあり又、役にも立つわけです。

しかし僕は、やたらに縛ったり鞭うったりするのは好みませんので、全分量からすれば、気に入らない所の方が多いとも云えます(それぞれの好みの方には申し訳けない云い分ですが)。女レスリングでも、やたらに投げつけたり、蹴ったり痛いことをするのはいやで、がっぷりと組打ちをして、上になつたり下になり、組んずほぐれつ絡まり合っている様なところが好ましいのです。例えば、「彼女が木島レフェリーを首投げで、派手にリングの中央へ投げとばし、続いてとびかかつてきた相手の女を腰投げとばすと、これがレフェリーの上へドタンと折重って倒れ

た。丁度、女の子のお尻がレフェリーの顔の上にドシンと落ちて、重ね餅になったところを、佐々木一校が二人の上に馬のりに跨がって蒲団むしの要領で上からグイグイと押し潰す場面」(三十年十一月号百五十三頁鬼山絢策)と云う様なのは好きです。ただ、こういう記事の所も丁寧な挿絵があると大変いいと思っています。

(二) 絵で見た情景

僕は、本誌の表紙の白いのは全部あります(沢山あつて置き場に困る位です)が昔の色付きのはほんの数冊しか持っていません。それらの中から、僕の好きな画(写真も含む)を拾って見ましょう。

(一) 人間馬(天泥盛英指導)二十九年五月号口絵写真。(二) 通り魔(畔亭数久画)二十九年五月号口絵。(三) かづ子と松崎(二百字讃歌より)二十九年五月号九十五頁。(四) 馬を御す婦人。女王様とホース(ダイアナ夫人より)二十九年五月号百二十二頁。(五) 奴隷の誓。海老責(春日ルミ・湖田平雄)三十年二月号口絵写真。(六) 名コンビ写真(春日、伊吹二嬢)三十年二月号口絵写真。(七) 猫とお尻。近子の秘密(弱者劣者にサジを感じる女より)三十年二月号二百五十七頁、二百五十八頁。(八) 昭子と洋子(私の

体験記より)三十年三月号百七十頁。(九)

「アッ……」郁子の君臨(ヴィナスの重石より)三十年三月号百九十六頁、二百十頁、二百十五頁。(一〇) 女優と痴漢。女優の戯れ(手帖から)三十年三月号二百三十四頁、二百三十七頁。(一一)「あら、いい気味だわ」

(長瀬昭子画)三十年三月号二百九十六頁。(一二) 目次のカット、三十年四月号四頁。

(一三)「ヒップでも重石となれば地獄なり」(滝れい子画)三十年四月号(アブ川柳十態)(一四)「ノローマの休日」(小川哲男画)三十年四月号百十四頁。(一五)「坂は

てるてる……」(木曾のノダイコより、三条春彦画)(一六)「いやン！擦ぐったいわ。」天女雲上を渡る。お風呂の中の遊戯(牛乳風呂より)三十年四月号二百十八頁、二百二十二頁、二百三十三頁。(一七) 女武者(アブ

追求三十年より、杉原虹児画)三十年四月号二百九十頁。(一八) 目次のカット。三十年五月号。(一九)「どうだい、この坐り心持は？」「動くんじやないっ」(春日ルミ)三十年五月号口絵写真。(二〇)「馬乗り」(春日・伊吹)「妾宅で」(杉原虹児画)三十年五月号口絵写真及口絵。(二一) 女の禪(アブ追求三十年より)三十年五月号百十頁。(二二) 昭子と洋子レスリングごっこ(女サデ

イストの手記より、長瀬昭子画)三十年五

月号百五十九頁、百六十一頁。(二三) ゆかりと長尾(奈落の欲情、四馬孝画) 三十年五月号百六十五頁、百六十八頁、百七十一頁。(二四) 利子と信一(悪癖より杉原虹児画) 三十年五月号百九十頁。十月号三十頁、三十二頁。(二五) 奴隷ライオン(編集者へより) 三十年五月号二百九十二頁。(二六) 二頭立馬車(畔亭数久画) 三十年十月号口絵。(二七) ゆかりと長尾(奈落の欲情より、四馬孝画) 三十年十月号五十五頁。(二八) 仁田スタイル(連載カット) 三十年十月号百二十八頁。(二九) 表紙の裸女(三十年十一月号)(三〇) 「女調教師」(杉原虹児画) 三十年十一月号口絵。(三一) 目次のカット、三十一年五月号。(三二) 豚乗りの三十一一年六月号表紙。(三三) 「馬を御す令嬢」(北原純子画) 三十一年七月号口絵。(三四) 散歩道、三十一年十月号表紙。(三五) 幌馬車(オラミより) 三十一年十二月号六十三頁。(三六) ペガサスの飛翔、リンの背中に(ヤプーより) 三十二年一月号九十四頁、百二頁。(三七) 「紳士はブルネット娘と結婚する」三十二年二月号口絵写真。(三八) アシク用例。フット・ネッキング(ヤプーより) 三十二年二月号八十五頁、四月号百五十五頁。(三九) 明子と絹子(女給の体験より) 三十二年六月号三十七頁。(四〇) 可奈子

馬(続・潰滅の前夜より) 三十二年八月号百六十頁。(四一) 畜人馬アマデオ、肉踏台(ヤプーより) 三十二年九月号八十六頁、十月号百五十六頁。(四二) 「夜の脱衣場」(滝れい子画) 三十二年十二月号口絵。(四三) 靴拭い(靴への愛慕より) 三十二年十二月号四十四頁。(四四) 慶子と敬之(ダイヤナ夫人より) 三十二年十二月号七十四頁。(四五) 権利宣言、セントーア(ヤプーより) (四六) 膝は肩を越えて。千恵子と泰子(交ないたずらより) 三十三年四月号八十二頁。五月号二十九頁、三十頁、三十一頁、三十三頁。(四七) 浴室のプレイ(杉原虹児画三十三年七月号口絵。(四八) 佐代美の馬(私の馬より) 三十三年七月号百十四頁。(四九) 踏絵(受刑の肌より) 三十三年九月号三十一頁。(五〇) 鞍を置かずに(裸馬との対談より) 三十三年九月号百十八頁。

以上は、主として構図の面から好ましく思ったものを挙げたので、画風としては、その外に好きな絵はありますし、同じ構想で、もっと綿密な(写實的)タッチで描かれたリアルな画風にしてもらいたいと思うものもあります。例えば、「馬を御す令嬢」などはパンツ一貫の娘さん(この種の女性を「馬乗り姫」と呼称しましょう)が勇ましく馬に打ち跨がって、鞭を振り上げているところで、圧倒的

に好きな構図ですが、慾を云えば馬が小さいのか迫力に欠ける様ですし、乗っている令嬢が、もっとドッカリ跨がっていて欲しいし、手綱の具合がどうもわかりにくい等々です。北原さんは病床におつきとかで、現実にはこう云う姿になった馬乗り姫を御覧になった経験がないのかも知れません。

(三) 稽古四態

(3) (4) (15) (44) は、いずれも馬乗りの好きな娘が「お馬の稽古」を、している図です。(3) は、真砂十四郎「二百字讃歌」の挿絵で、和服姿の書店の若夫人(かづ子)が、以前の書店主松崎を乗り廻して愉しんでいる。なんとも可愛らしい。(4) は、乗杉貴代子「ダイヤナ夫人人妻期」中の挿絵。夫達が一日先に帰宅して残った若妻連三人が山中湖畔の室内馬場で終日人間ウマに乗る快を恣にする。啞のウマが三輪車風の車輪に手をついて這い、その背にあでやかなショートパンツ姿のレイデイ達がかわるがわる散々に跨がって、障碍を無理やりに飛ばせたり鞭の雨を打下したりするところです。迫力に満ちています。ウマはヘトヘトになってしまします。(15) は緑猛比古「木曾の野幫間」中の挿画。バクチに負けた野幫間の狂狂が裸にされてひずめ屋の妓花奴に馬乗りされる。扱帯

に凛々しい恰好になると思います。

(四) 仁田スタイル

日嬢の顔付はむしろコワイので、もっと愛嬌ある顔をしてもらった方が好ましい。

(五) 女 と 女

(13) (82) は、以上とは違い仁田四郎ばりに後向きに乗っているから、お馬の稽古とは云えません。イノシシ退治のスタイルです。

(13) では、経緯はどうなのか、乳あてとパンツだけになった露わな娘が、学生風の男を組敷き、豊満なお尻を男の頭にどっかと乗せて散々潰そうとしています。哀れな男は重くて抵抗も出来ないでペシヤンコ寸前です。

(28) では、ズロース姿で乗った方が左手にハタキを持っています。鞭がわりでしょう。

甚だ魅力的な構図ですが跨がった人の上半身が見えません。下敷かかっている男は長い責めにすっかりヘタバッている様子です。(これは連載カットですから後の号にも現れます)

(5) の、「奴隷の誓」では、水着みたいなものを着た春日ルミ嬢が湖田平雄の顔を、お尻に敷き潰しています。湖田氏は、顔を横向きにして居ますから鼻も口もペツタリと塞がれてしまうと云うことはありません。呼吸は極めて容易です。これは丁度(13)みたいであつたものが、とうとう潰れてこうなつたのかも知れません。何とも好きなシーンですから、僕も誰かをモデルに使つてこの様な写真を是非撮影して見たい位なものです。この春

を手綱にして跨がった花奴は、唄をうたいながら部屋を五回廻らせて一両もらう。ただ花奴は、和服のまま乗っているの、ダイアナ夫人の様に脚なんか見えません。しかしなかなかのナマメカシさです。(44) は、乗杉貴代子「ダイアナ夫人未亡人期(二)」中の挿絵。構想は(4)とかなり似ています。乗杉夫人が或日、ひそかにK大の男子学生工藤を馬にして室内馬術の練習をしていると、外出から戻った慶子が目ざとくそれを見破ってしまう。慶子は乗杉家で一緒に暮している短大出身の才気活潑な娘です。しかも豊かな体格と健康にめぐまれたスポーツ好きの娘です(身長一・六二米、バスト八九糎、体重五五斤)。ショートパンツの上に前の割れたスカートを着けたこの慶子が、乗杉夫人の真似をして早速、四つ這になつた工藤の背にヒラリと跨がる。履き古しのファッション靴下でこしらえた手綱をとった彼女は、ハイシハイシとスカートを工藤の背中中、もみ破らんばかりに前後に又、上下にゆり動かして征服的な気分を満喫しています。工藤が、こう責め立てられては苦しくて辛抱できないと云い出してても彼女は馬も潰れよと、益々激しくあおり出すばかりで下りようとしません。彼女は拍車付きの乗馬靴を履いていますが、一そスカートなんか脱ぎ捨ててしまった方が、更

(22) では、下敷かかっている方も女性です。誰もいない広いタイル張りの浴場で、洋子が俯伏せになったまま長瀬昭子にひどい目にあわされています。しかし辛うじて片頬を地べたについていますから、鼻は潰されることを免れています。ペツタリと相手の頭をお尻に敷いた昭子は、逆向きになって相手の両腕を背中にねじ上げる様にして押さえ付けています。二人ともフンドシの様なパンツを穿いていますが実際は浴場の中ですから、そんなものは無いわけでしょう。洋子は上半身はびくとも動かすことが出来ず、かすかに「うっ」とうめきをたてて足をばたばたさせるだけです。昭子は片頬だけにしろ、とにかく相手の可愛い顔をお尻で敷く事が出来たので、ぞくぞくとする程の勝利感にどうすることも出来ぬ昂奮を覚えるのです。そして何時までもそのまま乗り続けていたい気がするのです。(46) では、大きい水玉模様のワンピースを着ている千恵子が、仰向きに押し転がされた泰子の喉の上に勇ましく逆馬乗りになっています。ハイヒールのまま右足で相手の右手を踏んづけています。その見事な脚の逞しさよ

！敷かれています泰子は苦しまぎれに足をばたつかせ、左手で相手のすそを掴んで懸命にもがいていますが、どうにもはねのけることが出来ません。(8)では、逆馬乗りではなくて、フンドシ姿の長瀬昭子が洋子を正馬乗りで、むんずと組敷いています。洋子の腕をギョッと踏み敷いている昭子の脚の逞ましき事！(長瀬昭子は身長五尺二寸五分、体重十三貫五百)これ程までにどっしりと敷かれてしまつては、かよい洋子がいくら暴れて見ても、どうする事も出来ません。暴れば暴れる程、上の昭子は膝下で苦しむ、くやしい相手を見下す心ゆくまでゆっくり楽しみます。得も云われぬ快感に何もかも忘れてしまつて、このままの姿勢で相手が力つきて動けなくなるまでゆっくり楽しみます。次第に、にじり上って行って、遂に洋子の可愛らしい顔を太腿の間にぎゅっと挟み込んでしまふに至つて、快感もその極に達します。その絵が(11)「あら、いい気味だわ」で、長瀬昭子自身の筆に成るものです。洋子の顎から唇、鼻のあたりまでが昭子の汗でぬれた股にぎゅっとすき間もなく押しつけられます。最後ののたうちが、断末魔の苦悶で、ふりしぼられると、その息で昭子の股のあたりはジーンと焼けつく様な熱さを感じます。(46)も殆んど(11)と同じです。上が泰子で、敷かれて

跳ね返えそうと腕いてるのが、桂子なのでしよう。「女性が女性を組み敷くのは、まったく愉快(註5)なもの」だそうです。(93)でも、日下絹子が突き倒され、その胸の上に明子がドウと馬乗りになります。尤もこの絵では、(11)程のどっしりと組敷いている感じは見られません。(46)は乗り手が千恵子で、下が泰子です。こんなに乗られてしまつては、泰子もただ苦痛だけで脚さえ動かすことが出来ません。息の根も止まってしまいます。乗っている千恵子の顔が可愛い。これでもう一步お尻をグイッと上へずらせば、泰子の顔はまともにお尻の下に敷かれて声を発することはおろか、息さえつけません。しかも更に、千恵子は全身の重味をかけて、「これでもか、これでもか」とばかり身体を上下にゆするのだそうです。女性として、女性を征服するには、これ以上の方法はないと云います(後で引用する昭子宛の千恵子の通信参照)。

デパートガール(註6)の三木恵子は、同じ売場の妙子が美貌であると云う理由で、仰向けに捻じ倒して顔の上にペツタリお尻をのせて馬乗りに跨がり、口と鼻を息も出来ない様にぴったり蓋をしてしまいました。その時わざとすき通る様に薄いナイロンのパンティー(註7)だけを穿いて行つたと云います

(三十一年十月号百六十五頁読通)。白木近子も(これは挿絵がなくて残念ですが)、孤児Y子を浴場で抑えつけ、二十三才十三貫のお尻でY子の顔を潰してしまします(三十年二月号二百五十九頁「弱者、劣者にサジズムを感じる女性からの通信」)。又、戸破貞子(五尺二寸、十四貫)も高校三年の時、「薄いパンティ一枚」の姿で友人のK子の顔に跨がって太股でうんと首を締めつけてしまします(三十年三月号三百六十頁読通)。長瀬昭子もその後、デパートに勤め(註6)ましたが、薄い絹のパンティを穿いて「うんうん」呻らせるまで相手の顔に乗れる様になつたらしいのです。そして洋子までが、昭子やその友人の顔に乗る時があると云います(三十二年十二月号百七十頁読通)。

(20)の写真では、草むらに俯伏せになった伊吹嬢の背に、パンツ姿の春日嬢が臼の様に完全に跨がっています。下手に縄なんか使わなくていいから、もっと前の方に上体を真直にして、堂々とした恰好で乗るといいと思います。そうすれば伊吹嬢の顔を無惨にも地面に押しつけることも出来ましょう。そうして勝利笑みをたたえた満足な顔を、こちらに向けて下さい。

(六) 下敷男

(10) になりますと、組敷かれていますのが男性です。男は、夜中に女優の家へ便所から忍び込んだので女優が、その男を縛って蹴倒して、組み伏せたのでしよう。蹴倒す時の女優の表情もいいし、ギューギューと締めているそのむっちりとした腿の辺りも魅力に富む。(17)の絵では、風呂敷様のきれを覆面みたいにかぶったきつい顔の逞しそうな美女(註8)が上から男の胸ぐらをグッとつかんで短力を凝している。下半身の方が描かれています。ですが、どうやら女はその男を組敷いている模様です。この「女武者」の項には、筆者の山田正実氏が、花見に行った折、酔払った女の子に組み敷かれ咽喉を締めつけられたことが書かれてあります。更に、木曾の駿馬にガッシと打ち跨がった巴御前が、名だたる坂東武者を組み伏せて苦もなく首を斬り落す様な場面を京マチ子にやらせた天然色映画(註9)を作れと云った希望が述べられています。その後「義仲をめぐる三人の女」と云う映画が来て、京マチ子の演ずる巴御前が、立廻りの末、実盛を討ち取るシーンが確にありました。但し、その映画がカンルやベニスで入賞したかどうかについては知りません。

(30) (40) 「妾宅で」は、縛られた旦那を組み敷いている美しい妾は、思わず口ずけでもしたくなる程の艶っぽさで描かれている。

大刀を突きつけられた旦那は死にもの狂いで暴れている。甲斐甲斐しく襷掛けをしたこの奴、惜しい事に跨がってはいけません。迫力が感じられる絵です。(27)では、ストリッパのゆかりが乳あてとバタフライだけの姿で、仰向けにされた道具方の長尾にズシリと跨がって撲っています。長尾は抵抗もしないらしく、その点、すさまじさに欠けた感じですね。しかし、この様な肉体美女が、露わな姿のまま、まともに男性のお腹に馬乗りになっているシーンは外に殆んど見ることは出来ません。こんな場面のある映画やバレエが沢山あるといいです。以前、新宿のミュージックホール(その頃はフランス座)でショーを見ていたら、社長の役を演じている男が、トルコ風呂に行つて、ミストルコ(註10)に一揉みしてもらおうとすると、ミストルコ役の太った踊り子が、舞台中央でガッシとばかり社長を敷き潰してしまふ。俯伏せで、文字通り馬乗りになられた社長は、「コワレちゃう……」と悲鳴を上げる。ほんの一瞬の出来事で、物たりなかったが、あんな場面はもっと長く、しかも、しよっ中やって欲しい。

(七) 人間競馬

ストリッパと云えば、中野あたりのあるやき鳥キヤバレーで、韓信股ぐり競技と云

うのが行われた話がある。僕は、事情でそれを見そこないましたが、バタフライ一本の踊り子の股ぐらをお客が這いつくばってぐりっこするものらしい。その位の事なら、フランス座あたりで、いつでも簡単に出来そうなものだのと思う。そんな、くぐるなんて云うのではなく、踊り子を背中に跨がらせて人間競馬(註11)みたいなショーをやればいいと思う。春木俊野「続映画に観た淡いマゾ」及び沼手帖「雑報欄一〇九」に「無頼の谷」の人馬競争の事が記されている。酒場の姐さん達が、四つ這になったお客共を馬にして一齊にスタートする。大体がそのスタートラインについて馬をおりながら並んでいる時の場面から、興奮の渦につつまれている。途中に柵みたいな障碍があつて、その上に酒が乗せてある。人馬共にそれを飲み干してそこを乗り越えて行く趣向です。更に前方にはピアンノの下をくぐる障碍もある。中には、スタートラインから一步も進めないうちにあえなく巨大なお尻の下に潰れてしまふ馬もいる。真紅のドレスに身をやつしたデイトリッヒ騎手(オルター・キーン役)は、とうとうゴールにまで乗り着けてエースかなんかのカードを拾う。ところが力つきてその場に潰れてしまふ馬の背に、かまわず艶然と跨がったまま悠々カードを掲げて見せている。潰れてもな

お馬乗りのままでいる点に於いては「十戒」の馬乗りシーンよりも更にすさまじさがあると思える。ただこの場合のデイトリックヒは、長いドレスを着ているために折角の脚も膝から下しか見えません。従って馬を潰してしまった時には馬すらかくれてしまいそうです。ピチピチとした腿ごと、こう云う風景を見るには、中学や高校の運動会で、競馬競技と云ったものを発明すればよいと前から思っています。紅白に別れた生徒の中、赤チームの男子の背に白チームの女子が跨がり、白チームの男子に赤チームの女子が乗る。白馬遅かれと努めるし、逆に赤馬に跨がった白騎手は、赤馬を乗り潰そうと努めるでしょう。見物席からの喚声に渦まき運動場の真中で、太腿も露わなブルマー姿(註12)の女学生が、男の子を悠々と尻の下に潰している姿とか、女の子の股の下で歯をくいしばって起き上がろうと懸命にもがいている男の子の、けなげな姿などが展開されて、一寸楽しめるショーとなります。

(四) 馬 と び

去る五月十一日に秩父の宮ラグビー場で体操祭が行われた時、その一つに中学校(？だと思ふ)の男女生徒(混合)による集団体操がありました。その中で男と男と組んだ時一

方の男児が、四つ這になった他方の男児の背に跨がって馬上体操みたのをするのがありました。僕の場合には何故か相手(一それが僕の場合には男児？だったと思う、が間違いかも知れない)の背に跨がらずに、腰の辺りに踏台の様に乗って立つだけでした。しかし、そうやって一齊に立ったら、拍手が湧きました。あの時、男児同様に跨がるのでしたら、観覧席はもっと拍手で埋まったかも知れず、残念でした。せめて降りる瞬間だけでもドシンと馬乗りになればよいのに。

「ダイアナ夫人未亡人期(二)」の中で慶子が「私も高校生と馬とび遊びをしたけど跨がりながらジャンケンに勝つ気持悪くなかったわ……」と云う降りがあります。ここで云う「馬とび遊び」と云うのは、幾人かの子が、馬側と乗り手側の二つのチームに別れ、馬側は、一人が壁などを背にして股を開いて立ち、はだかると、その股に他の一人が前から頭を突っ込み両腕で、立っている子の脚をかかえ込む様にして馬を作る。残りの者は以下順々に前の馬の股ぐらに頭を突っ込んで並ぶ。すると乗り手側は一人ずつ馬の後部の方から走って来て飛び乗る。全部乗った所で、一番前から一番後の子が、馬側の最初の立っている子とジャンケンをすると思った様な遊びを指すのでしよう。馬側が勝てば、次回は乗り手

側になる。慶子の場合には、乗り手側が勝ったので、またしても乗れるのでしよう。馬上で「勝ったア」と喊声を上げながら、その手をさし上げている慶子の得意な顔が想像されます。乗り手側が全部乗らないうちとか、ジャンケンの勝負がきまらないうちに馬が潰れたら、乗り手が地面に足をついたりしてしまったり、乗り手側の勝となったり、或は馬側の勝となってしまう。人数が多い場合は乗り手側が先の子程遠くまで飛ばないと後の子の乗る余地が無くなってしまう。従って先の子を這いつくばらして鞍みたいにしてその上に後の子が跨がる様な場合も生じます。そんな風にして何重にも重なり合った人間の層の一番上に最後に飛び乗ると、その拍子に馬が潰れることがある。最後に折角跨がったのが女の子なんかにあつた場合、あつてな過ぎ詰まらない彼女は、潰れた馬に乗ったまましばらくは下りようとしません。主として冬期、殆んど子供がやるので、高校生や大人がやっているのを見たことはありません。しかし、ショーとしてこんなのを舞台でやれば楽しいでしよう。男性チームがジャンケンに負けて馬になると、肌も露わなダンシングチームが元気よく飛び乗って、ジャンケンしないうちに馬を潰してしまふ。従って何回やっても踊り子は乗る方ばかりで遂に馬がへたばっ

てしまう。踊り子達は潰れた馬の上で狂おしげな舞踏を開始すると云う趣向です。

△註V

註1、江戸川乱歩の作品名

註2、モーゼから云うと、甚だ「悪しき」と。

註3、「八、馬とび」の項参照

註4、「アサヒグラフ」2月23日号の表紙に若い、如何にもヤンチャ娘らしい顔のバレリーナが出ています。「この下をくぐって見ない？」とばかり得意げに御自慢の脚を開いている様な恰好ですから、こんな人が雄ぐもの上に乗る役でもしたらいいでしょう。奥尚子さん(17才)——横山はるみ稽古場所属とあります。それから、桶口芳男の婚約者で、その遅い体で芳男氏を責めつけるのが好きなバレリーナ嬢も適任でしょう(犬に喰われる)の項参照)

尚、竹村健一「バレエ鑑賞の手引」(関書院)には、「檻」の写真と簡単な梗概が出ています。尤もこの写真は殺しているシーンではありません。

註5、女が女を捻じ伏せる。起き上ろうともがくのを押えつけ、さあどうだと馬乗りになる。徹頭徹尾痛めつけずにはいられないという激しい憎悪と、それを成し遂げる悦楽とは女同志でなければ抱き得ないものな

のかも知れません。

容貌、能力、財産といった要素が総てわたくしより劣っているもの、そういう者(※)に対してならば、わたくしは春日さんより勇敢に振舞って、馬乗りという完全な姿勢の醍醐味を満喫することとさせていただきます。(三十年二月号二百五十七頁)

(これは、猫をお尻にぎゅうぎゅう敷きながら書いたと云います。猫は十三貫ぐらいの下敷きでも死なないものであるらしい。)

※乱歩の「芋虫」に出る肉独楽なんか、これに当るのでしょうか。

註6、デパートガールとかデパートに勤めているとか云うだけでは、売子かどうかかわかりませんが、三木恵子も長瀬昭子も池田ふみ子もデパート勤めです。三木恵子は売子なのでしよう。デパートの売子が軽んぜらるべき職業かどうか、沼氏は「ある夢想家の手帖から(第一百十二黒人女王の間馬)」の中で次の様に書いています。

……混血の女王の脚の下に首を差し出して馬として使役されることを辞さぬこの奴隷達は、白人女性——たとえばデパートの売子でも——を肩に跨らせることは、より一層の光栄を感じないだろうか。(三十二年七月号五十二頁)

沼氏がなぜ、たとえばデパートの売子でも

と云い加えたのか気になるわけです。

註7、三木恵子は組み伏せた女性の口紅がついたパンティーを溜めて行こうと云う計画だそうですから、既に幾枚か溜まっているでしょう。

註8、荒井貞子を思わせる。「※ジャンゴ潰し」の項(46枚目)参照。

註9、京マチ子ばかりでない「体格のいい藤田泰子辺りを巴にして……」と、藤田泰子の名も見える(三十年四月号二百九十二頁山田正美「アブ追求三十日」)。藤田泰子のことは、別に「エデンの海」に於いても話題となっている。「藤田泰子のポリウムのある海水着姿が裸馬にまたがったのは中々壮観であった」(三十二年十一月号百四十三頁九雅節夫「特異な角度から」)

三条春彦画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十円(送共)

- 一、女スリと岡引き、二、八百屋お七
- 三、淀君と千姫、四、小柴と悪旗本連
- 五、犬公方と侍女、六、新選組と芸妓
- 七、山法師と静御前、八、十郎左衛門と腰元。(以上八枚一組)

註10、映画「坊っちゃんの主将」紹介写真中ミストルコを演ずる毛利郁(?)子、腹這いになっている柳家金語楼を馬乗りに敷いているところがありました。「画報近代映画」三十二年八月号あたりだと思えます。映画では金語楼を尻に敷き潰す様なことはありませんでした。

註11、江戸の地下歓楽境に文字通り人間馬として飼われる男達、その人間馬の騎手になってこれを訓練し乗廻すのを仕事とする美女達、地下の大広間の奇妙な競馬、——女騎手達は良い成績をあげるため馬を酷使

し、走らせながら足で責めて男の肋骨を蹴折って殺してしまうことさえある……(三十年四月号百十三頁「手帖速報欄三五」)

註12、私の体操パンツ(キヤルマタ)は薄手の黒木綿ですが、前は太股の附根ギリギリの短かさで、後はお尻が半分程、露出します。裾には勿論、ピッチリ締るゴムが入っていて、ブルマーでは普通ホックで止める様になっている横の部分はチャックで止める様にしています。この女生徒用キヤルマタは足を太股まで最大限に露出しますの

で、非常にスマートで履き心地もいいもの

です。

長いダブダブのブルマーは、私達の学校から追放されつつあります。女学校の歴史と共に長かった体操用ブルマーの歴史もここに終止符がうたれて、モダンでスマートなキヤルマタの時代に入ってゆくのです。(参考までに申し上げますが、全国どの女子高校でも、体操部員や、ダンス部員は殆んど全員ブルマーは着用せず、キヤルマタ式体操パンツを着用している現状です)(三十二年七月号百三十四頁、池田ふみ子「褌とブリーフ(三)」)

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに三十五号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
 復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
 復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽
 復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
 復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
 復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽

復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
 復刊第8号 (昭和31年9月号) 二百円
 復刊第9号 (昭和31年10月号) 二百円
 復刊第10号 (昭和31年12月号) 二百円
 復刊第11号 (昭和32年1月号) 二百円
 復刊第12号 (昭和32年2月号) 二百円
 復刊第13号 (昭和32年3月号) 二百円
 復刊第14号 (昭和32年4月号) 二百円
 復刊第15号 (昭和32年6月号) 二百円
 復刊第16号 (昭和32年7月号) 二百円
 復刊第17号 (昭和32年8月号) 二百円
 復刊第18号 (昭和32年9月号) 二百円
 復刊第19号 (昭和32年10月号) 二百円
 復刊第20号 (昭和32年11月号) 二百円
 復刊第21号 (昭和32年12月号) 二百円
 復刊第22号 (昭和33年1月号) 二百円
 復刊第23号 (臨時増刊号) 定価二百円
 復刊第24号 (昭和33年2月号) 二百円

復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
 復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
 復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
 復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
 復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
 復刊第30号 (サド特集号) 三百五十円
 復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円
 復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円
 復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円
 復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円
 復刊第35号 (増刊号青い廃院) 定価二百円
 復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一緒に求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。



涙は宇宙空間に輝く (下)

— 悲運に悶える緊縛の令嬢天文学者 —

浦 田 紀 夫

(十四) 美しい実験動物

轟然！閃光、赤黄いろい炎、数百メートル四方を掩う爆煙がほとばしった。

発射だ！、ボタンは押され三段ロケットは、たちまち噴煙をあげて天空高く上昇する。

最下段ロケットは分離した。快晴の夜空、遙かに消え去る光。つ

づいて、第二回目のロケットが大爆煙とともに発射された。人工衛星発射基地、ケープ・カナベラルの眼、眼は悉く夜空に吸い寄せられている。

一時間半後……「成功だ！」どよめく科学者達。受信器は規則正しく衛星十一号、十二号の発信音を伝えている。二つの衛星は、実験動物を載せて、見事に軌道に乗ったのだ。赤道へ六〇度の角度で今地球を回りつづけている。時に一九五九年五月二十六日。

米大統領の喜びにふるえる声が電波に乗った。

「受像準備完了」

科学者達の眼は、室中央の大テレビに吸いつけられる。衛星の発信する電波が、衛星内部の実験動物の模様を、天然色で手に取るように映し出すのだ。ダイヤルが回された。映像は豆ランプに照された気密室内の動物の姿を……

「あッ」「おお」「何だッ」?

驚愕、どよめき、狐につままれたような顔、顔。だが、夢ではない。間違いない衛星十一号の内部——何という意外な、そして何という酷たらしい姿。

女だ。白人の若い女が縛られてる! チンパンジーの代りに縛られた女が気密室に押し込められてる!

金髪のすなりとした長身を折り曲げ、立て膝の上に顔を埋めている。小さい気密室はそれ以上、顔の上げようはないのだ。白の長手套の両手は背中に捻じ上げられ、固く嵌った鋼鉄の手錠。両脇にも手錠が嵌まり銀色の細グサリがそれをギュッとしばって繋いでる。長い両脚は、黒の網の目のストッキングを両腿の付け根まで深く穿き、金色にグリーンと紫の線の入った派手な靴下留。つややかなチヨコレートのハイヒールのパンプス……両足首には鋼鉄の足錠。そしてほっそりした二の腕から胸へ、両腿、膝頭、膝下、足首をビッシリと締めつけている革ベルト。

白大理石のような体は、無残にも裸に剥かれていた。口と鼻は革マスクが嵌められ、それは流動食と酸素ボンベにビニールパイプで繋がれていた。何たるありさま、見る者すべてが真青になった。

テレビが音響を伝えはじめた。

「オホツウウククツウウオーンウエーンウウツウククウオオエエホツククウオーン……」

身の毛もよだつ怖しい女の泣き声。二五〇〇キロの高空から伝えられて来る絶望の身悶え。女は泣きながら僅かに顔をテレビカメラの方へ傾けた。

「あッ」

「アッ……ミス……ス、カーレット!」

「スカーレット!」

行方不明の婦人天文学者スカーレット・ハワード、何者かに誘拐され、無残な拷問に苛まれてる姿を全米のテレビの前にさらした悲運の天才令嬢が、今、人工衛星上の実験動物として、縛めのまま宇宙空間に投げ出され、回ってる。

そして衛星十二号のテレビ電波からは、スカーレット嬢と同じ姿に縛しめられた日本人と思われる若い女性が、彼女の方は黒の網の目の長手套、コーンのフルファッションを紅とブリュールの靴下留で穿き、ストッキングの上に白ソックスを重ね、ブリュールのハイヒール姿で縛られていた。それがあのカオル・チノ令嬢とは、まもなく解ったことである。

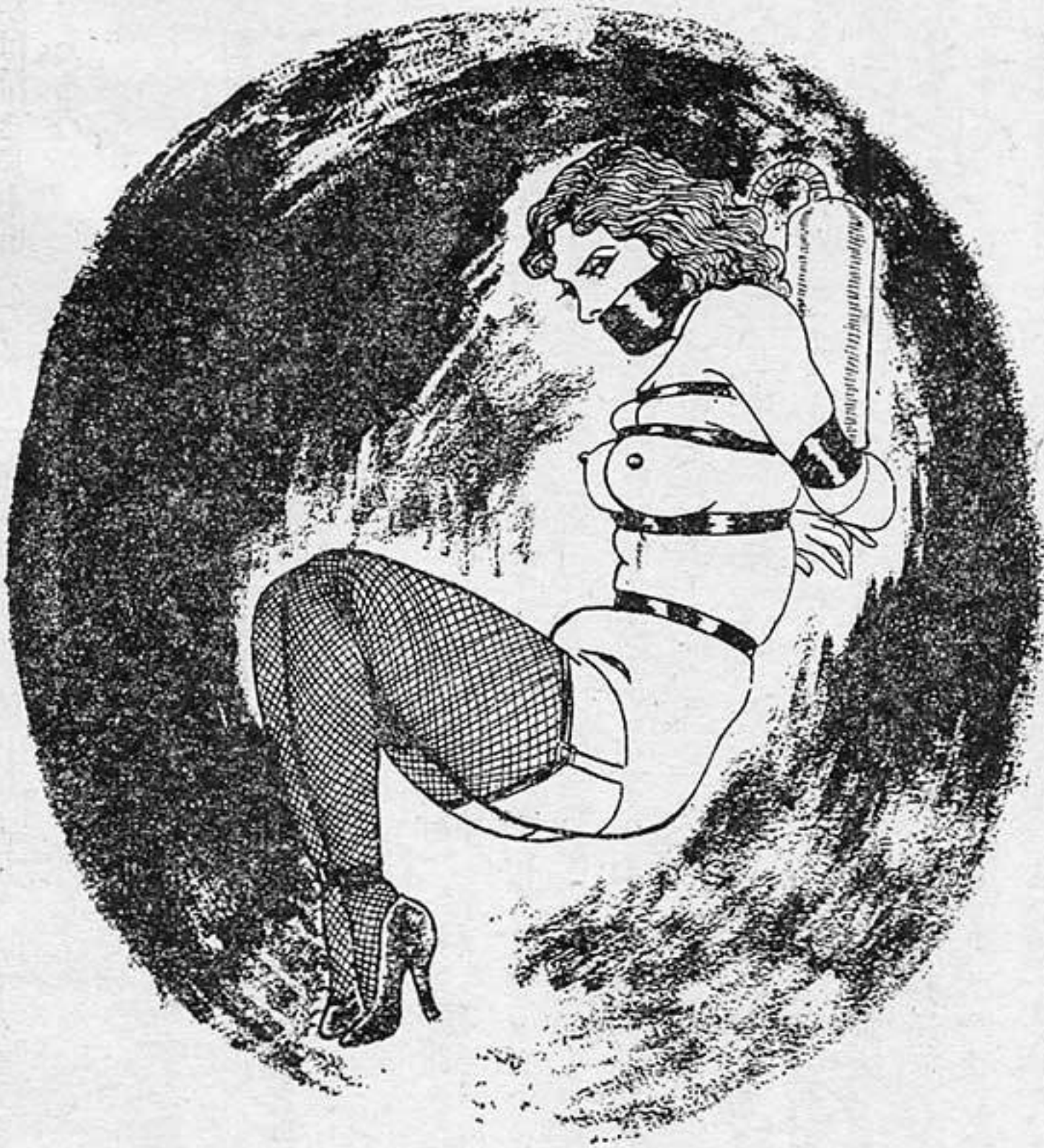
(十五) 苦悶悲泣する星影

全世界が驚愕した。

あの星、未明の空、夕空を横切るあの光が、悲運の二人の美女、天文学者のお嬢さんの変り果てた姿なのだ!

全米の新聞はテレビの二人の無惨な写真を大々的に掲載した。二人がどのような経路でこういう運命を辿ったかは、嚴重な調査にも拘らず今もって不明である。しかし、現実にはあまりにも奇怪とは云え、科学者達は事実としてはっきり認めなければならなかった。

カオル令嬢の故国日本でも、言語を絶した騒ぎだった。あまりにも悲惨、とは言いながらも東京の各新聞雑誌は、二人の酷たらしい被縛の電送写真を掲載せねばならなかった。そして、四日目からM



TVも衛星の電波を中継し、東京上空を通る十一号、十二号の内部の惨劇を五分間づつ放送しなければならなかった。

喫茶店は満員だった。観客は——それは日本では天然色ではなく白黒だったが——若々しい美しい女性の絶望の身悶えごとに息を呑んだ。

「悲惨な二人の令嬢の生命を救え」の叫びは世界中にまき起った。同情が、救出の訴えの投書が新聞紙上を埋めた。

だが——救出の計画は、無論立たなかった。二人は、二五〇〇キ

ロの大气圏外にあるのだった。

無惨さは、そればかりではなかった。

人々は、顔をそむけ、或はスイッチを切った。ただ、ケープ・カナベラルの科学者達のみが、わななきながらも、その状況をジッと見守り、惨劇を忘れてうなずくのだった。

千野薫令嬢の家庭、東京杉並の××鋦山社長千野家では、両親も弟妹も身も世もあらぬ思いだった。既に娘の運命に一年を泣きあかした母親は、悲報が真実と判った時からドッと病の床につき、あまりの心配に勇を鼓して入れたテレビのスイッチも、一眼見たなり卒倒した。しかし、娘の生命の火のある限り見ずにはいられない。周囲の制止を押し切ってスイッチを入れては気絶する毎日だった。

妹の由美子さんは、お茶の水女子大に入学したばかりの明るいお嬢さんだった。テレビを見るに忍びない彼女は、夕空を飛びゆく光を仰いで涙にくれた。

ボストンのハワード家でも同様だった。スカーレット・ハワード博士——書き落したが、彼女は誘拐後、消息がなお不明なままに一九五八年七月、星間物質の研究で理学博士の学位を得ていたのだ。当時二十三才の若さでもって——の妹、ボストン大学生グレース・ハワード嬢の室は、心配して詰め掛ける女子学生達で一ぱ이었다。その中にはグレースのクラスメートで、カオル・チノの親友でもあるヘリーン・ワトソン嬢もいた。

あらゆる人々が、ただ空を仰いで、二人の消えようとする生命の火が、今宵も燃えついでくれと祈るばかりだった。

そして、テレビの画面に映るスカーレット嬢の痛ましい泣き顔、酷たらしい呻き声にひきかえ、衛星十二号の千野薫さんの蒼白な顔は、かすかに歪んだまま静かに、一すじ二すじの涙のあとが光るほ

かは泣き声も聞えなくなって来た。かの女は、もはや力も尽きたのであろうか。

(十六) 令嬢科学者の観念

衛星発射とともに、二人の令嬢は氣を失った。

だが間もなく、恐ろしい重力の爪が、上昇する衛星を引きもどそうとする地球引力の重圧が、二人の内臓まで引き出す程にのしかかって来た。苦悶……。

やっと苦痛から脱した時、二人は既に大気圏外にあったのである。秒速八キロの衛星、しかし気密室内はまったくの静かさ。そして勿論、手足を縛られた二人は身動き一つ出来る筈もなく、また密封の衛星内部からは外の状態は何一つ判らなかつた。

「最期よ。とうとう宇宙空間に射ち出されたんだ。あとは、死だよ。ああッ情ない、何てみじめさ。こんな姿、こんな有様で殺されるなんて……ああッ、いやッ、いやッ。死ぬのは……でも、もうだめ、みんなだめ。だめなんだわッ……」

美人の理学博士も、天才の女子留学生も、もう見栄も自制もなかつた。テレビが、一切を放送しているとは露知らず、二人はオイオイと子どものように泣き、わめき、身悶えした。力尽きて意識が遠くなり、眠り、眼がさめると泣きわめき、腕いた。

流動物の栄養をパイプで与えられた、二匹の美しい実験動物は絶望に、わなないた。

だが……泣こうが、腕こうが、それがどうなるというのだ。一切は無駄であつた。

「そうよ。そして、どうあろうと、死、もう数日の生命なのよ。それが今の運命。……天文学者らしく死のう。見苦しく取り乱しちやだめよ。ねえカオル、私は世界人類の中で宇宙空間に出たはじめての人間よ。それがだれのためであらうと、そして今、私に何も術が

ないとしても、息を引き取るまでは研究を続けるのが科学者のつとめよ。ね、スカーレット、貴女もきっと私と同じように空間の何処かを回っていらっしやるのね。科学者らしく最後までベストを尽して、死にましようね」

薫さんは自分で自分に言いかけせるのだった。

そうだ。宇宙空間の無重力状態で人間の生理現象はどのような作用をするのか。日々の「生活」で千野薫さんは自分の肉体を実験台にして、その状態と変化を注意深く見つみるのだった。

それは、やがてスカーレット博士も、そうだった。

(十七) 消えんとする小さな生命

記者団を前に、沈痛な面持ちのロバート・ヒューストン博士は、重々しく口を開いた。

「二人の婦人科学者は、なお生存しています。まだ五日間は多分、大丈夫でしょう。実は、自信のないことを軽々しく発表するのはと思って差し控えていたのですが、衛星十一号、十二号は、何れも発射十日後に遠隔操作で気密室部分を切断し、衛星より後方発射で回収することにしていました。ですから十一日目に、ケープ・カナベラル上空通過の際、分離ということになる訳ですが、それが可能かどうか、また分離落下しても、海中に落ちるか山中に落ちるか、その回収発見については、実は全く自信ありません」

発射七日目に行われたこの発表は、忽ち世界に、前にもまして大反響を呼び起した。

「生きて帰ってくれ」「何としても二人の女性を救出しよう」全世界に落下する衛星発見のための大探査網が、あらゆる地点、あらゆる人々によって張られたのである。人類は、一縷の望みを取り戻した。全人類の眼前で行われる惨酷極る処刑から、美女を何としても救出しなければならぬのだ。

「おお、由美ちゃん！よく来てくれた」

「兄さん！」

「由美ちゃん、泣いちゃいられない、すぐ出発するんだよ。兄さんといっしょに行くんだ」

「行先は？わかってるの？」

「うん、ワイオミングだ。ロッキー山脈の中だ。いま十時、もう五分もすれば、ミス・ヘリー・ワトソンとミス・グレースが来る。薫ちゃんの友だちとスカーレットさんの妹さんなんだ。ミス・ヘリーの計算でワイオミングへ落下するって云うんだ。十時四十分にはジェット旅客機がソルトレーキシティへ向って離陸する。すぐ行くんだ」

東京から急遽、特別のビザをもらって空路ロスアンゼルスへ駆けつけた千野由美子さんと兄の千野敏美君だった。工学博士の千野敏美君は、失踪し凌虐の限りを尽されてる妹を探す目的も兼ねて、今年の始めからカリフォルニア大学に留学してるのだった。

そして午後〇時半、グレース嬢の操縦するヘリコプターがソルトレーキシティの飛行場から東北へ向って飛び立った。

「だけど、衛星の気密室って直径一メートル余りしかないのですよ。どうしたら見つけれられるかしら……」

由美子は不安げにつぶやいた。

「ええ、それが心配なの。それに、今日が十一日目、二人の肉体はたとえ無事に地球上へ戻っても、気密室内の栄養・酸素は、あと一日しか無いって云うのよ。だから早く見つけないと……」

ヘリー嬢はそういうと歯を喰いしばった。四人ともが、恐らく不可能だ。でも、二人の亡きがらなりと、どうしても探し出さなくちゃ、と思いつつ、それは口には出せないのだった。

(十八) 全員 捕縛

機上の短波ラジオが、ブザーを伝えた。

「衛星第十一号、ハイチ上空で分離」

四人とも、ハッと顔を見合わせる。いよいよ！それは予定通りだった。だが果して落下地点は？……続いて十二号も分離。

ヘリコプターは大きく旋回する。五分、十分……ブザー、緊張。

「落下地点、西緯百九度、北緯四十三度附近と予測されます。繰返します……」

ヘリコプターは大きく揺れて針路を西へ。

その折も折、ダダダッという音。

四人の血が凍った。ヘリコプターが二機、両側に迫って、機銃が連射されている。脅しだ。白い旗が下へ向って振られている。

ヘリー嬢が思わず敏美君にすがりついた。

「やられる……同じ奴らだ」

「くやしいわ！」

だが、着陸しなければならなかった。谷間。やがて、眼隠しされた体を三機のヘリコプターに分乗させられ、五時間後――

四人の青年男女は、冷いコンクリートの監房に手足を嚴重に縛り上げられて監禁されていた。紅いネッカチーフ、紅と緑のタータンチェックのブラウスにブリュールのショーツパンツ、網の目の黒ストッキングに紅いハイヒールの軽快な姿のグレース嬢。

淡オレンジのボンネット、グリーンのジャケットを黒ナイロンの巾広いバンドで締め、エンジ色のズボンに編上の黒革長靴姿の科学者ヘリー嬢。

水色の背広とショーツパンツに、紅とグレイのタータンチェックの毛の長靴下、黒短靴に白ヘルメットの美青年千野敏美博士。

袖口を折り曲げた純白のブラウス、ブリュールの広いバンド、青紫のショーツスカートからまるい膝をのぞかせ、肉付きのよい脚にピタリと六〇ゲージのフルファッション、純白のハイヒールを穿い

た日本女子学生、千野由美子嬢。

四人とも、かつてスカーレット嬢と薫嬢が監禁されていたその同じ地下牢獄に、第一種縛装のまま捕えられたのだった。

「姉さんは……」「妹はどうなったろう」四人は縛られながらも二人の女性の運命に身も世もあらぬ思いだった。

男達が入って来た。

「フフフ……可哀想にねえ。さ、みんな来るんだ」

鉄柱から解かれ、後手のまま曳き立てられる憐れな捕虜。

「ウウ……」

猿ぐつわの下で、由美子は一声呻くと気を失った。見よ、隣室に置かれた金属製の物体二つ。パシユートが付き、明らかに人工衛星の気密室。だがその前に縛られたまま蒼白な顔をあおむけに、固く眼を瞑って倒れてるのは、まぎれもない姉の薫。そしていま一人の白人の美女はスカーレットに違いなかった。二人は、死んだのか？

敏美君とヘリー嬢はそれをジッと見つめた。二人は、生死は不明だ。しかし、遂に地上へ戻ったのだ。だが、再び怖しい奴等の手に。ああとこまで不運な二人。でも、まだ……ああ、生きていてくれ。生きてさえいてくれれば……。敏美君とヘリー嬢はジッとお互いの眼を見つめあった。

(十九) 群衆の前に

「ワッハッハッハッ」

笑声の中にスカーレット博士と薫さんは、ぼんやりと再び眼を開いた。恐しい悪夢のあと、地上へ引き落され、気密室の蓋があげられた時、二人は、そのまま気を失ってしまったのだ。

が、ああ、救いの主は……

この上、私達に何をするか。恐怖と憎悪と哀願の眼を上



げる二人の科学者。

「どうしても逃げられないんだよ。ねえ、スカーレット嬢。君達が監禁中に余計な研究をするから、そのノートが役に立って真先にわれわれが君達を拾ったという訳だ。もうこの辺で詰らぬ意地は止めたらどうだ。またこれからも、同じ責苦や辱しめに甘んじるつもりかい？」

団長の言葉に皆、笑った。青ざめた唇を噛む二人。

だが、スカーレット博士は首を振った。

「私もです。これ以上どんな目を繰返されようと、二人は正義を曲げません」

薫令嬢も言い切った。

「フフフ」

二人の前につきつけられる写真。おお、妹の由美ちゃん、敏美兄さん、クラスメートのヘリー、グレース……

「でも……私たちがやっぱりそうだわ」

呟くと二人は、またも気が遠くなった。

「そうか……強情な奴らだな」

団長は大きな息とともに吐き出した。

二週間が過ぎた。

落下した衛星は、遂に発見されなかった。二人の女性は、既に絶望と断定された。

だが二人の姉妹達は、なおロッキーマウンテンを探索し続けているものと見られていた。

六月十九日の朝――

「あれは何だ」

ガヤガヤした声がやがて大騒ぎとなり、喚き、叫び、混乱……。

ニューヨークの中心街は野次馬で一杯になった。摩天楼の窓と云う窓、屋上と云う屋上が鈴なりの顔、顔。

エンパイア・ステートビルの上から、高々と揚げられた大アドバルーン二箇。その大きな広告文字には、それぞれ、

「二十世紀最大のショウ」

「緊縛宇宙女性一時返還」

の大文字。そしてその下にぶら下げられてるのは……ああ、金属製の大きな容器二箇、そして、手足をがんじがらめに縛られた人影が二人ずつ、束になってロープでぶら下げられてる。

真紅の長手套、ブラジャー、コルセットに紅のナイロンフルファッション、紅いハイヒールに紅のボンネットが燃えるような長身で

ポリウームのあるグレース嬢と、小柄で肥った日本の女学生姿の由美子さん。

そして、髪をセシルカットに短く刈られウェーブされた上、スカ―レット嬢が捕らわれの当時着ていたジャケツト、スカートとハイヒールに、ヘリー令嬢の穿いていたストッキングを穿かされ、ルージュまでさして女装させられた美青年敏美君と、金髪を短く刈って分けさせられ、敏美君の背広、パンツ、ストッキングをつけさせられた男装の少女ヘリー令嬢。二人の体は固く縛り合わされていた。

「くやしい。だが、希望を失っちゃならないのよ!」――そう云いたげに、縛られたまま敏美君に頬をすり寄せてるヘリー令嬢。

報道陣の、アマチュアのカメラ、カメラ。

その中に四人と二箇の衛星は引き下された。衛星の蓋が開けられ縛られた女は外へ転げ出る。幾百のシャッターがその瞬間切られていた。

(二十) 宇宙服緊縛の恐怖

十人程の女性が、木蔭のヴェランダで静かに話し合っていた。ワード邸のひと時である。

あれから、極度のショックにめげず、スカ―レット嬢とカオル・チノ嬢は、宇宙空間での「生物」の状態について研究をまとめた。ジャーナリズムの奔流にもまれながらも、二人は自己を守って無駄な時間を割こうとはしなかった。

そして今日一日、ほんの友達だけで一年ぶりに、こうしてお互を慰さめ合うのだった。

「でも本当に酷かったわね。私達、悪いけど貴女達の姿をテレビでその度に見てしまったの。見ては気が遠くなりそうだったけど、見ずにはいらなかったの。苦しかったのね。」

スカーレット嬢は静かに云った。
木の下で——ヘリーン令嬢は敏美青年に歩み寄った。
「ね、ミスター敏美。私達だつてよ」
「そう、そうだよ。ミス・ヘリーン」
二人は烈しく抱き合い接吻した。
「敏美！」
「ヘリーン！ぼく、好き、君が好き！」

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 糎)

七十組七十枚	六十組六十枚	五十組五十枚	四十組四十枚	三十組三十枚	二十組二十枚	十組十枚	五組五枚	一組一枚
四〇〇〇円	三五〇〇円	三〇〇〇円	二五〇〇円	二〇〇〇円	一四〇〇円	七五〇円	四〇〇円	一〇〇円

R 10	R 9	R 8	R 7	R 6	R 5	R 4	R 3	R 2	R 1
鎖しばり晒責	股間しばり	鏡に映つた後手	後手足しばり	後手猿ぐつわ	海老責しばり	高手小手猿ぐつわ	床間の飾り物	海浜に於ける緊縛	柔肌に強烈な荒縄
(萩千恵子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(花坂道子)	(佐賀美智子)	(萩千恵子)	(須川令子)

R 32	R 31	R 30	R 29	R 28	R 27	R 26	R 25	R 24	R 23	R 22	R 21	R 20	R 19	R 18	R 17	R 16	R 15	R 14	R 13	R 12	R 11
薄羅の後手緊縛	くさりゼメ	松樹後手じばり	変型足手しばり	高小手しばり	逆エビ責め	股間しばり後手	後手吊りゼメ	逆さ本吊りゼメ	梯子責め	強烈な梯子ゼメ	帆立しばり	いたぶり	足揚梯子ゼメ	緊縛横臥	立木野外しばり	トイレでの縛り	猿ぐつわの魅力	開股しばり	尻立後手しばり	女学生制服しばり	股間しばり正面
(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(荻千恵子)	(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(中塚文子)	(同右)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	(荻千恵子)	(春日ルミと伊吹)	(伊吹真佐子)	(厚狭春江)	(村田那美子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)	(川辺砂登子)	(荻千恵子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)

R 71	R 70	R 69	R 68	R 67	R 66	R 65	R 64	R 63	R 62	R 61	R 50	R 49	R 48	R 47	R 46	R 45	R 44	R 43	R 42	R 41	R 40	R 39	R 38	R 37	R 36	R 35	R 34	R 33
帆立舟のセメ	樹間のハリツケ	落花狼藉間の緊縛	股間しばり	本縄しばり	ヌードしばり	腰元の吊り責	振袖の緊縛	開股椅子ゼメ正面	逆立の折檻	全裸の股間しばり	折檻の魅力	くさりゼメ	御開帳	後手しばり	手と足と緊縛	股間しばり	コルモツト縛り	松樹縛り晒責	後手猿ぐつわ	お灸ゼメ	肉体美への折檻	乳房下しばり	後手首縄ジメ	仰向全裸悦虐責	和服の後手しばり	手足逆吊り	首縄股間しばり	股間タテしばり
(益田房子)	(川辺砂登子)	(田中芳代)	(村井知可子)	(愛川悦子)	(花坂道子)	(大塚啓子)	(須川令子)	(川端多奈子)	(荻千恵子)	(加賀利江子)	(同右)	(村田那美子)	(中塚文子)	(荻千恵子)	(伊吹真佐子)	(伊吹二嬢)	(村田那美子)	(加賀利江子)	(川端多奈子)	(藤田節子)	(伊吹真佐子)	(坂口利子)	(中富綾子)					

R 100	R 99	R 98	R 97	R 96	R 95	R 94	R 93	R 92	R 91	R 90	R 89	R 88	R 87	R 86	R 85	R 84	R 83	R 82	R 81	R 80	R 79	R 78	R 77	R 76	R 75	R 74	R 73	R 72	
乳房搾りゼメ	開股正面いじめ	トイレ正面排泄縛	野外バンド責め	乳房くさりゼメ	仰向開股しばり	女学生のしばり	破れたシユミース	後手股間しばり	腹部丸出し猿轡	臀蕐責め	ガンジガラメ	全裸乱れ髪	ヌード股間縛り	亀ノ甲縛り	全裸床柱縛り	開股ベツド縛り	乳房しばり	後手高小手	目隠し開股縛り	下着の色模様	尻立逆しばり	湖畔の宿にて	ハイヒール	ビクニツク	全裸横臥緊縛	ヌード縛り	変形全裸股間縛	逆エビ責め	
(佐賀美習子)	(伊吹真佐子)	(中塚文子)	(村田那美子)	(川辺砂登子)	(須川令子)	(荻千恵子)	(坂口利子)	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(愛川悦子)	(川辺砂登子)	(大塚啓子)	(愛川悦子)	(荻千恵子)	(愛川悦子)	(花坂道子)	(愛川悦子)	(田中芳代)	(大塚啓子)	"	"	"	(須川令子)	"	"	(村田那美子)	(荻千恵子)	(花坂道子)	(愛川悦子)

(終)

創作

從 卒

(じゅうそつ)

營 良 太

この一篇の告白形式の物語は、こけしで有名な東北のS温泉の旅館の風呂番が偶々、私に洩した事実である。東北訛で語られたものを便宜上標準語に改めた。

1 諫早中尉

へえ、もうこんな山深い温泉宿の、それもしがない風呂番風情でございですが、十七、八年前はこれでも未だ体も氣もしゃんとしておりました、立派なお国の干城となる帝国軍人でございました。いえ、私も、もとは氣仙沼の漁師の伴として生れたのでございますが、どうせ貧乏漁師の三男では財産も貰えない、それどころか船一隻も分けてもらえそうもないので、入営を機会に軍人でもって自分の立身の道を立てて行こうと考えたのでございました。入りました処はS市の聯隊で、青年の氣概に燃えておりました私は、人の辛いという軍隊生活もただ面白く、すべて上官の命令に服従して高麗鼠のように走り廻っております。軍隊という処は、今でこそ何

やかと批判致しますが、若い血氣のものにはこんな住みよい世界はなく、私のようなみじめな漁村の三男坊には結構たのしく暮らしている所でございました。真面目にやったものですから成績も悪くなく、苦しい初年兵生活も何とか終り、一等兵もやや板についた頃のこととございました。聯隊の教導隊の隊長をしていられた諫早中尉という陸士出の方の從卒に選ばれました。

諫早中尉という人は無口で、いつも怒ったような顔をした恐ろしいような人で、剛直な氣性というか曲った事が何より嫌いで、よく上官と衝突をするというので有名でした。何でも薩摩の生れだという話で、妥協性のない人だったのでしよう。從卒といっても普通の兵隊と変りない生活でしたが、他の兵隊より訓練が少く、午後とか夕方、將校の身邊の雑用を弁じるのが主な役目でした。

諫早中尉はその頃、三十を一つ二つ出たでしようか、栗色にやけた肌とよく整った目鼻とやや大きく一文字に閉じた唇をもった人で、別に美男という程の人ではありませんでしたが、いかにも戦時下の青年將校を代表するような凛々しい風貌でした。唯、特徴と言えは瞳のきれいに澄んだ方でして、時々じっと何かを見つめていられるような時がありました。そんな時が一番あの方らしい印象をもっていました。諫早中尉の宿舎は、市の

南にある浄厳寺坂という坂の上にありました。その辺一帯は将校の宿舎部落でした。将校といっても独身のやうくり中尉の事で、三間ばかりの小さっぱりした家でした。私が最初に中尉の官舎に行った時驚いた事は、中尉の部屋にはろくな道具がないのに、書籍が山のようにあるのに驚きました。漁師の子せがれの私ですから、書物といったら雑誌しか手にした事はありませんが、その本は殆んど洋書で、むづかしい横文字がぎっしりとならんでいるのに二度驚きました。将校といっても無学な者の多い聯隊で、中尉はめずらしい文学好きのインテリの将校だったのでしよう。「中尉殿はよく勉強されますが、何のためにそんなに横文字を勉強されるのですか」とある日、思いきって尋ねてみた事がありました。すると中尉は澄んだ目を一寸睜ったようにして「何のためという事はないが、これから戦争は外国の事情をよく知っておらんけりやならん。竹槍戦術じやあ勝てんからなあ」と言葉短く申されました。

2 男の愛情

私は初めは恐ろしく唯、びくびくして仕えていましたが段々、中尉は軍人として稀にみる教養と知識と愛情をもった人だという事が分ってきました。将校といっても学問も教養もない人たちは、暇さえあればS市の花柳界

で酒色に溺れたり又、聯隊の首脳部の将官にとり入る事に専心している中で、諫早中尉はそうした附合を極力避けて、いつも自宅に帰ると書齋で夜おそく迄、洋書に読み耽けつていられるようでした。冷厳寺坂と並んだ坂にみろく坂という坂がありまして、その中程にワシコフという中年の露人の家がありました。何でも日系の亡命露人で、S市の大学のロシア語の講師をしているということでした。いつ知合になったか、諫早中尉はこのワシコフの家にロシア語の文法を習いに行くようになりました。白系露人と言っても昭和十六、七年の頃ですから、外国人については極端に警戒している時でしたので、諫早中尉の行動は余り思慮あるものとは思われませんでした。白系露人という信頼感から又、市といっても東北のことで適当なロシア語の指導者がなかったもので、案外ものにこだわらない性質の中尉は、このワシコフの元に週一度、ロシア語の勉強に通ったのでした。このことがあんな事件を引起す原因になろうとはほんとうに夢にも考えられませんでした……。

「ワシコフ事件」をお話する前に、お恥しいことですが、私と中尉との関係について少しお話ししなければ話の筋に入れませんので……思い切ってお話し致しますよう。

何でも毎日、雨ばかり降っている頃ですから六月の入梅時分だったでしょう。中尉が

雨中の演習から帰って来て、ひどく汚れていましたので、私は風呂を焚きました。裸になった中尉は元氣よく湯をざぶざぶ浴びていましたが、頸筋など真黒になっていますので、見かねた私は焚口から「中尉殿、ひどくよれておられますが、お流ししましょうか」と声をかけました。「お、杉一等兵か、じゃあ、少し流してもらおうか」と言われましたので、私は軍袴の裾をまくり上げて流し場へ来ますと「そんな恰好じやよう洗えんだろ。シャツも脱いで裸になれ」と申しますので、私は越中褌一つになり中尉のうしろに廻りました。栗色にかがやいた皮膚、巾の広い形のよい背、私は洗いながら青年期から壮年期に入る男性の肉体の美しさに思わず恍惚としてしまいました。背中を流すと「ありがとう。もういゝ」と中尉は申されましたが、私は思わず「もっと、お流ししましょう。大分お疲れのようですから」と咄嗟に口に出てしまったのです。言ってしまったから私は顔が赫らんでしまったのでしたが、中尉は感じないようで「そうか、じゃあ流してもらおうか」と軀を私の方に向きました。低い踏台に腰を下した中尉の軀は肥り肉ではありませんが、肩や胸の各部がよく引緊って彫刻の裸像のように美事でした。毛深い体質なのでしうか、かなり濃い胸毛が生えておりました。両股は強靱な青桐の幹を思わせるようにはち

切れそうな若さと健康感が充ち溢れていました。両腕、胸、足と石鹸の泡をゆかたに立てながら洗っている私の胸は、不思議にときめいてくるのでありました。私が湯を中尉の肩からかけますと「よし、ありがとう」と言っ

て中尉が立上りました。裸で仁王立ちになった姿は、絵でみたミケランジェロの彫刻より美事な肉感が充ちていて、そのまばゆさに思わず目をそらした程でした。中尉は一寸照れるように「どうだ、毛深いだろう。俺は熊襲の子孫だからな」と言っ

て掌で胸板を撫でながら、呵々と大笑されました。

そんな事から一日置きの中尉の入浴の度、私はかならず臍を流すことになり、又それが私のひそかな欲びにもなりました。ある時、

中尉は私に「杉一等兵、貴様はふんどしの縫い方知らんか。俺のふんどしは大部古くなつたから、一つ新しいのを作ってもらいたいんだが、今迄は下宿のおばさんに頼んだが、こゝは女がいなくて困つとるんだ」私は、はつとしましたが、さり気なく「兵隊は皆、私物のふんどしは自分で縫います。うまくはありませんが、お作りしましょう」と言いました。翌日、私は外出の時、町の呉服屋から晒木綿を一反買って来て、風呂焚きの余暇に縫いはじめました。越中輝は、その人の体によつて長さも紐の長さもちがうので、その人の体に合わせるのは仲々むづかしい事でした。

殊に前下りの部分は、長すぎても無恰好ですし、短くてもいけません。丁度、股下のあたりまでなくてははいけませんでした。私は中尉の古い輝が前下りが短かすぎると、紐が太すぎるのをよく知っていたので、この点を注意して四本程縫い上げました。純白の晒木綿の匂うような白さに眼をしばたかせながら、私は理由のない幸福感にしばしば溜息をついたのでした。

数日して入浴の時、諫早中尉は思い出したように「杉、貴様が作ったふんどしは実に具合がいいぞ。俺の臍にぴったりだ。貴様はふんどし作りの天才だぞ」と言っ

て又、呵々と大笑されました。私は自分の心の中を見抜かれたような気がして、狼狽してひそかに赫くなったのでした。

その後、気の付いた事です。諫早中尉は極端な女嫌いで、殆んど女性との交際はないようでした。何しろ当時軍人、殊に若い将校は株を上げていた時代でしたから、素人娘といひ、花柳界の女といひ、中尉に好意や媚態を示すものがかなりあったそうですが、中尉はいつもそれを避けて、独りの磊落な生活を楽しんでいるようでした。中尉は「戦時の軍人に女はいらん。いつ死ぬか知れたものじやない。それよりきれいな臍を大君に捧げたい」と申しておりました。本当に諫早中尉の私生活は、磊落な中に実に秩序正しい清潔さがあ

りました。酒は好きのようでしたが、乱れることなく、日曜の昼などよく私を相手にして二合ほど呑みました。少し酔った時の中尉は仲々元気よく、大声で談笑したり急に黙ってしまつて詩を吟じたりしました。

尋陽江頭夜客を送る

楓葉荻花秋意々：

という「琵琶行」という詩が得意のようによく吟じていました。じつときいてみると、涙が出るような声でした。中尉は実に汗つかきでしたので、汚れ物が毎日のように出ました。これを洗うのが又、私の仕事でしたが、実に壮年期の男特有の熟れたような甘酸っぱい体臭をもっていて、それがどの肌着にも泌みこんでいました。

夏も終りの頃、ある晩、中尉は珍らしく酒に酔って帰って来ました。きつと誘われた宴会だったのでしよう。中尉は白緋に着替えると「おい杉、貴様は熊倉大佐をどう思う」と突然、申されました。私は一寸、返事が出来ないでいますと、「おいどう思うか、卒直に言ってみろ」と畳みかけて問われるのです。熊倉大佐は聯隊の司令部付の将校で、疎腕と才謀のある幹部将校であります。軍人というより、むしろ政治家的な行動のある人で実権の割合に信頼の多い人でした。

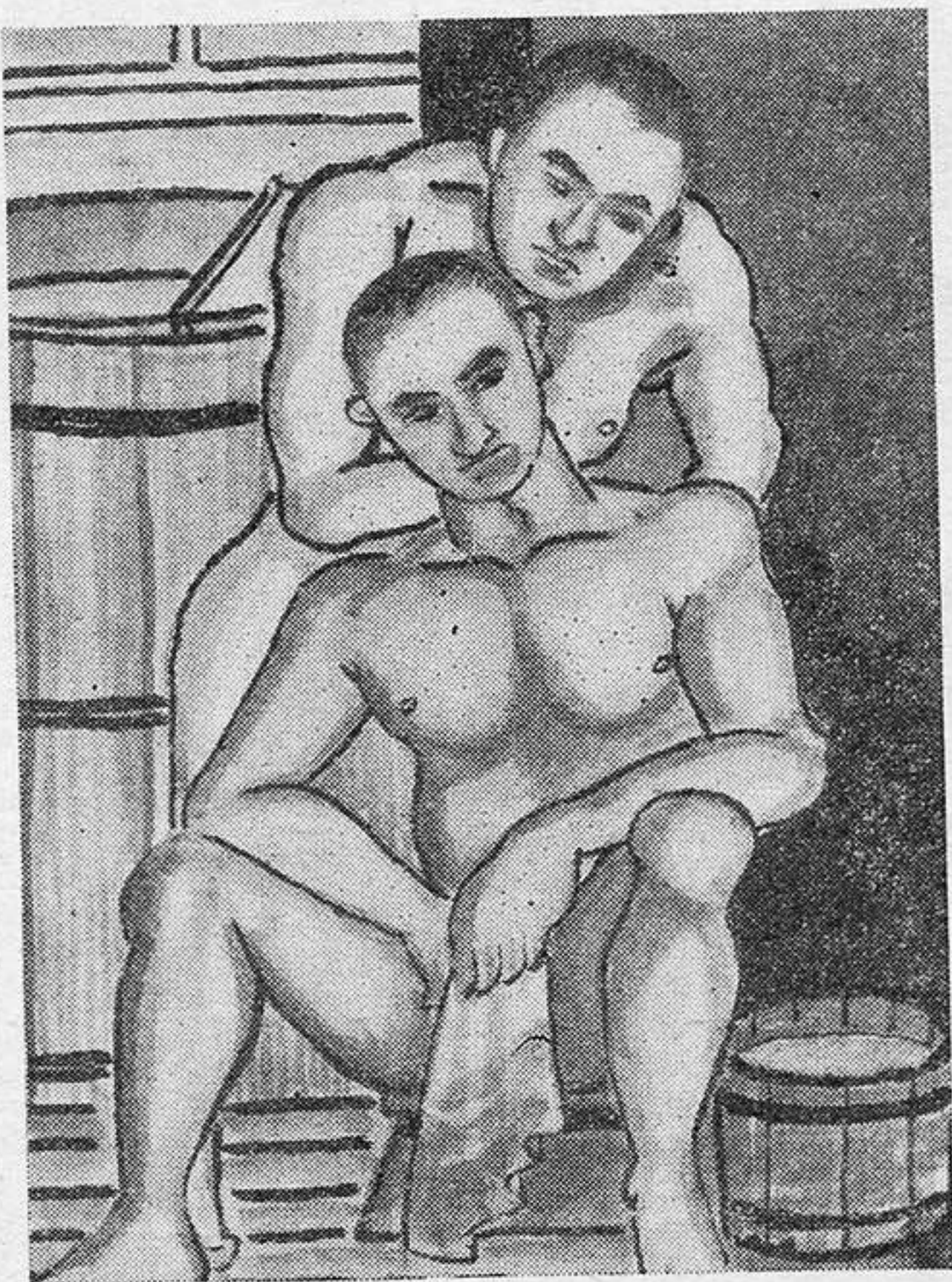
しかし、一等兵の分際で上官をあげつらう事は出来ませんので、私は言葉をにこして

ますと、「熊倉という奴は実に怪しからん奴だ。幹部将校でありながら、御用商人などと結託して軍機をゆがめようとしおる」と憤慨しているようでした。後にきいた話ですが、小生一本の諫早中尉は熊倉大佐や風巻少佐、小沢少佐等という幹部将校と、宴席上で論戦をしたという事でありました。その夜でした。私がいつものように中尉の軀を洗っていますと、未だ酔のぬけない中尉は「おい、杉一等兵。貴様も一しよに風呂に入れ」と言うではありませんか。私は瞬間はっとして、ためらっています。「おい、入るんだッ」といって、いきなり私の腕を掴んで湯槽の方に引っぱりました。狭い風呂桶の中に大の男が二人入ったのですからたまりません。湯はたちまち溢れ出るという騒ぎです。

3 ワシコフ事件

今でこそ、記憶は薄れておりますが、あの頃、世間を震駭させたワシコフ事件というのは、私が大尉の従卒になってから約五、六ヵ月たった頃、S市を中心に大変騒がれた事件でございました。大学のロシヤ語講師をしていた白系露人ワシコフは、実は赤系のスパイだったという事でした。事件が発覚したのは、ワシコフがソ聯に引上げてしまった後なので、憲兵本部の取調べも困難をきわめたそうですが、S聯隊の重要な機密の大部分が彼

によって本国に牒報せられたという事件で、このため大学の教授、学生などが次々に憲兵隊本部に連行されて取調べをうけたのでした。その時の学生の口から、諫早中尉が毎週ワシコフとよく深夜会っていたということが語られましたので、憲兵本部ではただちに諫早中尉を召換しました。スパイ容疑者だと言っても聯隊の将校でございますので、聯隊と憲兵隊との間にいろいろと面倒な交渉があったようでしたが結局、聯隊幹部将校立合の上で取調べするという事になりました。いよいよ憲兵隊に出頭するという日、さすがにやつれた中尉は、湯に入って体を浄めて肌着一切を新しくすると、軍服をつけて「杉一等兵、貴様にはえらい厄介になったが、どうか元気でいい軍人になってくれ。俺の潔白は、お前だけは信じてくれるだろうな」と例の澄んだ瞳で、じっとみつめて言うのでした。私



は「中尉殿は潔白です。私を証人によんで下されば、立派に言い開きをします。安心して下さい」と言ったのでしたが、あとは涙が出て多くは申せませんでした。

中尉が憲兵隊に召換されて、三日程経った頃、憲兵隊員が数名、宿舎に来て証拠品として、書斎の露西亜語の書物をリヤカーに満載して行きました。私も立会人として呼び出されましたが、一等兵の身でどうする事も出来ません。押収にきた憲兵の一人が「フン貴様が諫早の従卒か。スパイの手下という処か。」

その中、貴様も憲兵隊へ呼んで締上げてやるぞ。待っている」と憎々しく言うのです。私は恐ろしさに身慄いしました。しかし、もし中尉が責められているのでしたら、私もしよに拷問をうけて、その苦しみを分かちたいと思う勇氣が 出ました。毎日の新聞に報じる「ワシコフの事件」の報道は諫早中尉に不利な証言者ばかりでした。殊に不利だったのは、中尉は隊の仕事としてかなり軍の機密に属する事にタッチしていたという事でした。隊に戻れば同僚からスパイの片割れ扱いをうけ、私も本当に苦しい数日をすごしました。ひどいことには、新聞では「諫早、未だ口を割らず」とか「諫早、取調べに対して頑強」とか、もはや軍人としての取扱いではなくスパイ扱いです。一週間程して、私は班長に伴われて聯隊の幹部将校の取調べを受けました。私が中尉と一しよにみるく坂のワシコフの家に行った時の様子をくわしく聞くのでした。私は、中尉はロシアの文学が好きで、ドストエフスキーや、シヨロフなどの小説を原語で読んでいたり、ソ聯事情に興味もって、それらに関するものを読んでいただけで軍の機密を売るような人ではないと言い張りました。この時も、私は必死で中尉のために言い開きをしたのです。その夜から私も監視のつく身となり営倉入りをしましたが、翌日憲兵隊本部へ連行されることになりました。

私は諫早中尉に逢えるという喜びで、護送自動車など恐ろしいとは思いませんでした。

4 容 疑 者

何しろ、その頃の憲兵隊本部と言ったら、恐ろしい軍隊を更に上廻った軍隊警察ですから、本当に泣く児もだまるという処でした。しかし私は、中尉に対する愛情がそうさせたのでしょうか、むしろはやる気でその門を潜ったのでした。取調べをうけた部屋は薄暗い地下室で、昼間だというのに電燈をつけていました。裸電燈の妙に赤っぽい光りが陰惨な雰囲気漂わせていました。私は隊でしかれたような事を、又くどくど尋ねられました。もう今度は度胸がついたというのか、私は割合に昂奮せずにハキハキ答えました。すると取調べの憲兵伍長は「さすがスパイの乾分だけあって大した度胸だ」と言うのです。今度はもう一人の伍長が「こいつは女ぎらいな諫早の従卒だというから、稚児さんだろう。一寸可愛い面をしていやがる」と言うのです。この言葉に、私は自分のもっている唯一つの秘密をさぐりあてられたように、はっとして顔を赫らめてしまったのです。「どうだ、凶星だろう。赫くなつたな」というのです。私は「そんな事ありません。諫早中尉殿はきれいな気持の方です。潔白な方です。早く放免してあげて下さい」と口早に申します

と、「もう諫早は中尉なんかじゃあないんだ。官位は剝奪された罪人なんだ。それも国賊なんだぞ」と言うのです。あまりひどい事を言うので「中尉殿が国賊なんかである筈はありません」と思わず声高になると、伍長はそれを制して「しずかにしろ。あの音を聞け。あれは貴様の主人の責められている音だぞ」と言うではありませんか。昂奮していた私は何も気がつかなかったのですが、どうやら隣も取調室であるらしく時々、声高に怒鳴る声がかきこえたりしていましたが、それにまじって、ぴしりッぴしりッと鞭打つ音とともに「うーおッ、うーむッ」という人間が苦悶する声がかきこえるではありませんか。私は思わず立上ると、憲兵伍長は私の腕を押えて「貴様の主人の変り果てた姿を見せてやろう」と言って、私を引ずるようにして隣室との境の板戸を荒々しくあけました。

何という凄惨な場面でしょう。剣道場か何かに使用されている二十畳程の板敷の部屋に五、六脚の木椅子があり、そこに熊倉大佐や風巻少佐、小沢少佐、その他聯隊の幹部と憲兵隊本部の荒瀬大佐などの顔がみえ、中央の梁に輝一つに剝かれた諫早中尉が無惨にも逆吊にされて、憲兵の下士官どもの竹刀の鞭を右左から受けているではありませんか。例の栗色の筋肉質の整った躰は後手に緊縛され、更に膝頭で一度括って、更に足首という

風にかなり念入りな縛り方にも彼らの憎悪をこめられた拷問だという事が直感的に分りました。鞭をうける度に軀を海老のようにかがめ、又干魚のように反り返ったりして、その都度に水のようなものがばらばらと音を立てて床の上に散るのです。多分、五体から吹出た脂汗なのでしょう。私は思わず足がすくんでしまい、昨日まであれ程、颯爽とした少壮将校であった諫早中尉が軍服はおろか下着まで剥ぎとられ、褌一貫の姿で盗賊を責めるような逆吊とはあまりの侮辱であり、惨酷ではありませんか。「貴方は鬼ですか、諫早中尉はスパイなどではありません。立派な忠誠のあつい帝国軍人です。それをこんな……こんな姿にして責めるなんて、それでも人間ですか、軍人ですか、軍人なら軍人らしく情を知っている筈です」と私は思わず高官の前も忘れて叫びましたが、それが言い終らない中に、伍長の火のような鉄拳が私をその場にうち倒しました。そして私も、よってたかっでたちまち縛り上げられた上、その場に蹴倒されてしまいました。「生意気な野郎だ。小便可さい一等兵の小僧のくせに」と伍長は憎々し気に私を足蹴にかけのけました。葉巻煙草を喫っていた風巻少佐は、これを機会にゆっくり葉巻を消すと、下士官達のもっている竹刀を借り、逆吊になった諫早中尉の臍のあたりを小突きながら「どうだ、諫早。もう証

拠はあの通りそろっているんだ。男らしく白状したらどうだ。いさぎよく罪に服したら、軍人のよしみで減刑の歎願運動ぐらいはしてやるぞ」と逆さに吊られた顔を覗き込むようにして言うのでした。すると諫早中尉は、真紅に充血し青筋の立った顔をふり立てるようにして、「自分にスパイの事実を白状しろというのですか。いくら責められても腹にない事は言えんです」と苦しそうに言うのです。すると喧嘩早い事で有名な高科中尉が立上って「諫早、貴様と俺とは同期生の仲じやあないか。その同期生からスパイを出したという事は不名誉だ。たまらん事だ。貴様はきつとワシコフに乗ぜられたに違いないのだから、男らしく白状して罪に服してくれ」と叫ぶのです。すると諫早中尉は「高科、貴様までが俺を信じないのか」と吐き出すように申しました。風巻は「ええい、問答無益だ。高科中尉、もっと責めろ」と下知しました。途端に右左から竹刀の鞭が諫早中尉の体を吊床か何かのように左右に揺るのでした。

「ぴしりッ」「うーむッ」「ぴしりッ」「うーむッ」という鞭とうめき声が、交互につづくのでした。やがて憎悪を罩めて打つ風巻少佐の竹刀の先が、諫早中尉の急所に触れたのでしようか「うーむッ」と一声高く呻くと、ぐったりしてしまったのです。「とうとう伸びてしまいやがった。下せ」と風巻少佐は命じて又、喫いかけの葉巻をくゆらませました。どかりと音がして諫早中尉の体は床の上に転がされた。「水をぶっかけろ」という下知で、かねて用意に汲んで置いたバケツの水をざぶりと浴せました。「うーむッ」とかすかに呻いて、中尉は失神から覚めたようでした。

すると小沢少佐が「この一等兵は奴の稚児さんだそうだ。こいつを責めたらどうだろう」と言うのです。風巻少佐は「それも又一興じやろう。裸にしてな」と言うのです。獄卒どもは雁字搦めの私の縄を解くと、よってたかつて軍服を脱がせ、下着までも脱がし、諫早中尉と同じ越中褌一つにすると、再び縄で縛り上げて、諫早中尉に代って天井の梁にかけられました。「どうだ、諫早。こいつは貴様の稚児さんだそうだな。貴様に代って責めてやるぞ。よくみて置け」と言いました。私は、もう苦しくて鞭の一撃も喰わない中に失神してしまいましたが、諫早中尉の責の幾分でも味あうことが従卒の道だと考えて、できるだけ耐えようと思いました。すると諫早中尉の声で「卑怯な事はよせ。杉一等兵は何の罪もない兵隊だ。責めるなら俺を責めてくれ。可愛そうな事はするなッ」と申すのです。その言葉を待たない中に私の軀に火のような打撃が加えられました。いくつ打た



れたでしょう。私は夢中でした。しかし打ちすえられている中に苦しみよりも夢うつつの世界にさまよっている感じでした。「杉、許してくれ。俺のために罪もない貴様にこの苦しみを与えて……どうか俺を許してくれ」という声が伝わってくるではありませんか。私は夢中で「いいえ、中尉殿さえ潔白なら、自分はこのまま責め殺されてもいいのであります」と言っていたつもりでしたけれど、何しろ逆吊にされていたので、諫早中尉に通じたかど

うか分かりませんでした。しばらくして私も床の上に投下されるように降されました。

5 呵責の音

その夜、縄だけは解かれて四畳ぐらいの暗室に檻禁された私は、もはや起きる力もなくぐったりと横たわっていました。何時頃でしょう、隣室で人の足音がきこえ怒号する声

ら隣の取調室の中を覗いてみました。

そこは生憎、建付が嚴重で灯が洩れながらも隣室の内部を充分に見極める事はできませんでした。五、六人の下士官らしいのが集って一人の容疑者を責め立てているらしく、時々「未だ泥を吐かないか」とか「強情な奴だ」とかいう罵り声がきこえ、その間隙を縫うようにして「うーむッ」「うーむッ」という呻き声がきこえるのです。私は、その責められている容疑者が諫早中尉なのか、他の人間なのか、よく知りたいとあせって戸の隙間へ顔を押しつけたのですが、下士官達の姿は見えても、責められている男の姿が見えません。まさか昼間あれ程、責めた諫早中尉を執拗に深更まで責めるとは考えられません。きつとこのスパイ事件の他の容疑者だろうと思っていたのでした。それにしても、どんな拷問で責めているのかと、ふと興味がつたって、更に内部を覗いたのでした。

裸電気の灯った殺風景な室に五、六人の下士官が寄ってたかって縄で縛り上げているらしく「おい、縄」とか「腕をもっと捻じ上げろ」とか云う声にまじって「うーむッ」という呻き声がきこえて来ます。その責手の中に、小沢少佐らしい姿がちらりとみえましたので、もしかすると又、諫早中尉が責められているのではないかと云う予感が、私の体中を稲妻のように走ったのです。昼間あれ程、

責めておきながら深更にまで責めるとは、あれでは、いくら若い健康な諫早中尉だって、第一審の軍法会議まで体がもつ筈はありませぬ。この責苦でたとえ諫早中尉が虚偽の自白をしたとしても、あの方の事ですから、必ず第一審の軍法会議で不法拷問の事実を暴露し、スパイ事件の潔白を申立てるに違いないと思つたのですが、この昼夜を分たぬ拷問にはおそろく諫早中尉の躰は続くまいと思われのでした。すると「責めるのはいいが、軍人を辱かしめるのはよせ」という声は、まぢがいもなく諫早中尉の声なのです。すると「売国奴のくせに、軍人がきいてあきれぬ。貴様はスパイなんだ。いぬなんだ。だから犬あつかいにしてやるんだ」という声は、小沢少佐の声です。つづいて大ぜいの軍靴の音にまじって「そこを縛れとか」「もう一本縄をかけろ」とかいふ声がします。私は諫早中尉が、どんな拷問に遭っているのか見ようと思つても、何分隙間がせまいので見る事が出来ず、うろろしてしまいました。やっと空箱をみつめて、それを二つ重ねてその上にのり板戸の隙間に目をおしあてましたが、やはり四、五人の軍人が何か荷作りでもするように足をかけたりして縄で縛っている姿がちらりと目に入るだけでした。「そこで力を入れてぐっと緊め上げるんだ」という少佐の声に、兵隊たちは「ウーむ」と力を入れて緊め上げ

ています。途端「ウーッ」と何とも云えない悲痛な動物的な悲鳴が起りました。大抵の苦痛には耐え忍ぶ我慢づよい中尉が、あの声をあげたのですから余程、苦痛を加えたにちがいありません。すると少佐の声で「どうだ、少しは応えたらう。これは海老責という拷問だ。よく覚えておけ」という声がしました。海老責という責が日本の拷問にあつたという事は、無学な私も知っていました。江戸時代の重罪人にかけた拷問の中でも惨鼻を極めた拷問です。罪人の後手を捻じ上げて緊縛し、胡坐をふかくかゝせ肩と膝とを密着するまで緊め上げるのです。これが昭和の聖代の憲兵隊本部で行われようとは夢にも思いませんでした。しかも私の愛する諫早中尉がそんな屈辱的な姿をさせられていると思うと、私はもう居ても立っても居られません。私は身も世もなく身悶えしたのです。今度は諫早中尉の声で何か怒号しているらしいのですか、もう声もしわがれて言葉ははっきりきゝ取れませぬ。しかし、この言葉が彼等を刺激したのか、「この野郎、この態になつて未だ憎まれ口をたゝくのか」と云つて靴で蹴上げたのか「あッ」という声がきこえました。その部屋中を蹴転がされているのか、引ずり廻されているのか、しばらくはにぶい肉体の音と呻き声と怒号と靴の音が乱れてきこえました。しばらくすると、これらの音がびたりと止んで静

かになりました。私はこの海老責の拷問で遂に諫早中尉は失神されたのではないかという不安が急に胸に兆しました。するとその不安をうち消すように「ナ何をするッ」という諫早中尉の声がきこえました。私ははっとして耳をすますと、つづいて兵隊たちの笑聲がきこえました。「くつくつくつ……」という忍び笑いに混つて「諫早どうだ。もう軍人の面目もなくなつたらう、その態ではな。ハッハッハ」と小沢少佐の声なのです。そして「もっとやってみろ」という声につづいて又兵隊たちの笑いがつづきます。「うーむ、うーむ」という低い悲痛な呻き声が洩れてきこえます。……私はあまりの昂奮と衝動のためにそのまゝ気が遠くなつてしまいました。

6 幸福なる廢者

諫早中尉が死んだという知らせをきいたのは、それから十日程後でした。私は憲兵隊本部に数日置かれ、それから衛戍監獄に移されました。スパイ行為幫助と上官反抗という罪名でした。勿論、私は憲兵隊でも狂気のように諫早中尉の名をよびつづけ、熊倉大佐達の陰謀を叫びつづけていたのです。そうです、明らかに熊倉大佐や風巻少佐達が自分の瀆職を諫早中尉にかぎつけられたのを「ワシコフ事件」を好機におとし入れ、生命さえも抹殺しようとしていた事は、あの執拗な拷問のや

り方で明白だったのです。しかし一等兵の私
が何を叫んでも、言論の自由のない当時に、
きき入れられる筈はありません。そのため、
私は何処でも殴られ蹴られました。私からす
べての事情を聴取した私の班長でさえも「何
事も胸におさえている」と云ってなだめすか
しただけで、上申してはくれません。自暴自
棄になった私は、ある日、廊下で逢った小沢
少佐を銃剣で刺そうとして捕えられて刑務所
入りになったのでした。

諫早中尉の死は、熊倉大佐らに詰腹を切ら
せられたといふ又、兵隊の帯剣をうばって割
腹自殺をしたのだとも云われていますが、私
はこれらの言葉を信じません。潔白な中尉が
どうして自ら死を選ぶ必要があるでしょう。
諫早中尉はやっぱり拷問によって責殺され
にちがいありません。卑劣な熊倉大佐らは、
己が非を軍法会議で暴露されるのを怖れて、
小沢少佐に命じて日夜の拷問できつと責殺さ
せたのです。私が最後に諫早中尉に逢ったの
は、中尉が海老責に逢った翌々日の夕方です。
一切、口をきかないという約束で看視立
合の上で一目、諫早中尉との面会を許されま
した。中尉は留置室の畳敷の室にじずかに端
座していました。シャツとズボン下だけの惨
めな姿でしたが疲れた様子も見せませんでし
た。短い半袖のシャツやズボン下の下から紫
色をした鞭の跡や緊縛の条痕がいたましく私

の目にうつりました。きつとあのシャツの下
の胸に背に無数のさいなみ創があるのだと思
うと、私は胸が一ぱいになりました。中尉は
やゝ伸びた髭を淋しくなぞて微笑しながら
「杉か、俺のためにずい分苦しい思いをした
な。許してくれ。俺の事など忘れていゝ人間
になってくれ。俺の潔白はその中分ってくれ
る時がくる」と淋しく云いました。私は、も
う何も云えず唯泣いてばかりいました。あの
別れが最後だったのです……。

その後の私ですか……。それはひどいもの
で刑務所内でも手のつけられない暴れ者でし
て二年の刑が三年に伸びました。囚徒を煽動
する、看守には乱暴する、何しろやけくそで
したから何をしたらか知れやしません。そのた
め搾衣という皮で作った刑衣をきせられ、水
を浴せられました。これは水を含むと、皮が
緊って五体をしめつけるんです。囚人は、口
から涎を流して苦しむ残酷な刑衣ですが、こ
れにも度々かけられました。この時、私は諫
早中尉の海老責の責苦を考えてじつと耐え忍
びました。又、寒中裸で水槽に浸けられる水
責の責苦もうけました。どんな責苦でも私は
諫早中尉の辛さ無念さを考えて忍んでいまし
た。そうして忍んでいる中に、そうした責苦
に歯を喰しはって耐え忍んでいる時だけが、
はつきりと人間の生きる「甲斐」や「張り」
を感じる時だと感じるようになりました。

責苦といえ、諫早中尉についてその後、
憲兵隊に勤務していたという男と偶然、刑務
所内で逢いましたが、その男の話では諫早中
尉の拷問は刑務所開始以来の凄じいものだっ
たそうです。私が見た逆吊り、海老責の他に
ゴムホースで水を口に注水し、満水して膨れ
た下腹をホースで殴るといふ水責、大の字の
磔柱に縛しての火責にかけられそうです。最
剛気な彼はあくまで耐え忍んだそうです。最
後に三角柱を跨がせて両足に重石を吊された
木馬責にかゝった時、その圧迫感に悶絶した
そうで、それが中尉の死の原因になったのだ
ろうということでした。その男も語っていま
したが、やはり諫早中尉はあの悪辣な熊倉や
風巻、小沢達の餌にかけられたのでした。

私ですって？ いえ、もう三十七にもなり
ますが、未だ妻帯しておりません。いろいろ
と薦めて下さる方もございますが、私も諫早
中尉と同じように一生、女嫌いで通しそうで
す。諫早中尉の想い出が私にとって結構伴せ
なのでございますから、決してお気づかい下
さいますな。それより夜が更けて、大分冷え
て参りましたから、お風邪を召さぬように、
もう一風呂お浴びなさって、お寝みなさいま
し。私が加減をみて参りますから。本当にく
だらぬ愚痴話を長々と申上げまして申訳ござ
いませ。どうか旅のつれづれとしておきく
捨て下さいまし。

(終)

(70) 文明病?

九月二日附、東京毎夕新聞から。

まかり通るマゾヒズム

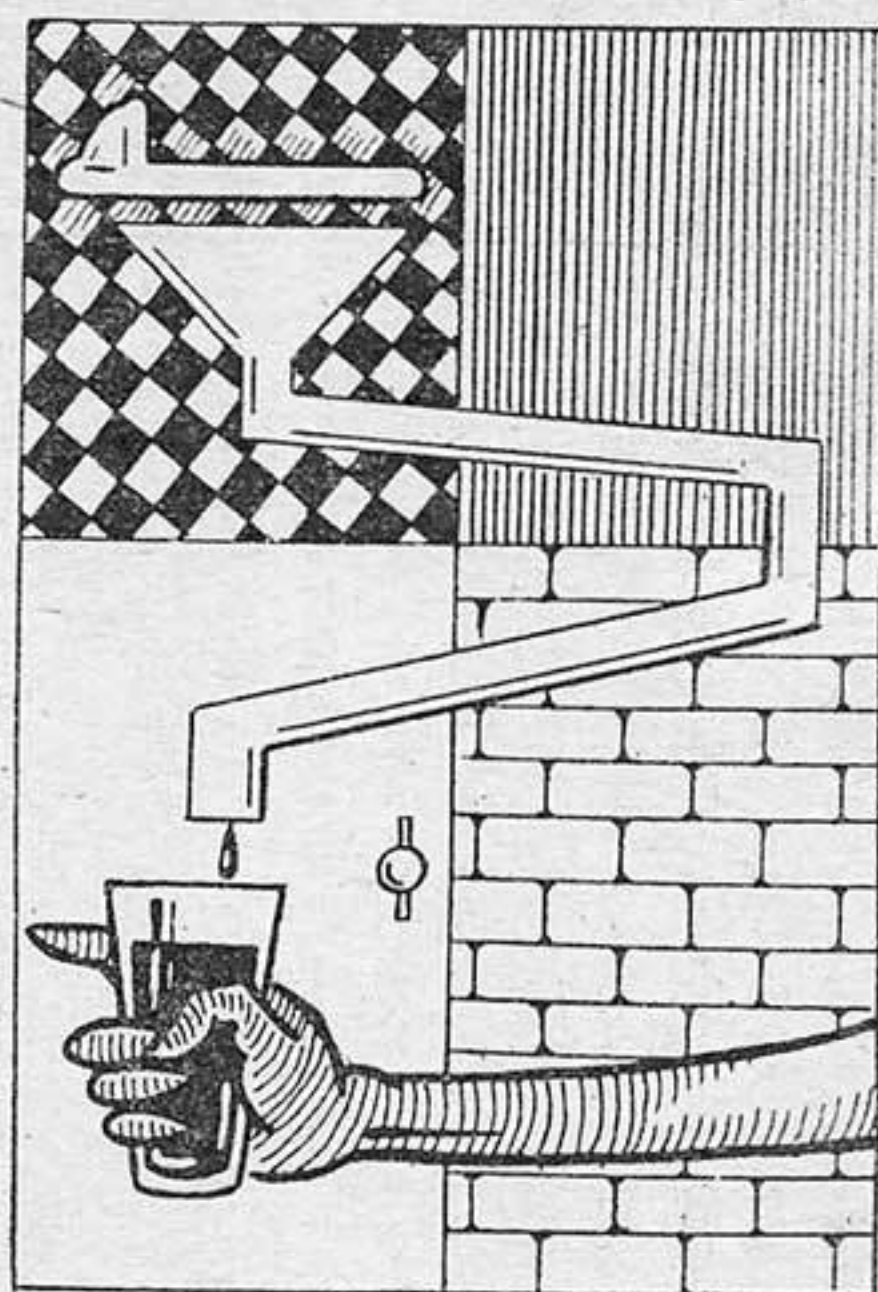
残酷なる文明病?

というドギツイみだしが目を惹く。

みだしは更につづいて、『煙草の火を背にコスル』で常人は身震い、『ゲシユタポ顔負けの光景』と、ゾクゾクする謳い文句だ。

では、全文を紹介しよう。

◇…性のとうさくゲイ・ボーイも今がピーク。その道のツウはこの冬ごろからそれも落目になり、こんどはマゾヒズム(被ぎやく趣



マニヤノート 愛好者の記録

—コプロマゾヒストの手帖から—

とやま・かづひこ

味)がはやり出すという。

◇…それをしようちようするように、海のかなたでは目下マゾ・クラブが流行のきざしという。そして近着の洋誌はそのクラブを写真いりで紹介している。かくて、その写真をここにごらんにいれよう。

◇…まず写真①これはマゾの第一課ともいうもので椅子に手足をしばりつけて動かないようにしてもらってから、頭にバケツをかぶせてもらう。そしてバケツをガンガンたたいてもらうのである。耳が鳴り、目からホシがとび出し三分もすると、ワアワアわめき出しなくなる。ところが、これがマゾヒストには

たまらない喜び、むしろ快感が体内にみなぎって来るのだという。

説明によると、このマゾヒストも初歩のうちには女、それもホレてる女にバケツをたたいてもらいたがるが、だんだん病氣(マゾも一種の病氣だ)がこうじてくると女では駄目、ほれた「男」にたたいてもらわないとすまなくなる。そうならないと本当のヨロコビは味わえないとマゾヒストたちはいつているそうだ。

◇…写真②は、かくてクタクタになったところで眼かくしをし、鼻のアナにクギやらエンピツを差しこむデ。それもコチヨ、コチヨと

くすぐるように入れるから、クシヤミは出るし、涙もこぼれる。眼かくしのタオルはその涙がこぼれるのを未然にふせぐためだとある。涙がこぼれても一向かまわぬようだがマゾヒストは汚らしいものを嫌がるのだ、とわかったようで分らぬ説明がついている。

◇：写真③は、第一課がおわると、そのままの姿勢で背中火のついた煙草をこすりつけて貰うもの。戦争中のドイツのゲシュタポ、いにしえの日本特高のごうもんもこんなひどくはなかったと思われるヒドサ。まともな神経の持主なら正視するにたえない光景だ。

◇：最後はグロッキーになったところを写真④のように足からブラさげ、頭に血をあつめたところで心臓を圧ばくしてもらう。心臓を圧ばくすると、それでさえ充血している脳が割れそうに痛む。これが快感を与えるというのだからいうことなしである。

◇：このほか、シバリつけた体に三時間も水をかけ続け凍死寸前までにするのからハイヒールの「かがと」で踏みつけにしてもらうのまであり、東京にも三、四カ所その同好者グループがすでにうまれているという。とにかく文明がすすむとゲイ・ボーイとかマゾヒストとか奇妙なものが流行する。「人間よ自然にかえれ」といったルソーの言葉はてき中した予言だったらしい。

文中、写真とあり、四枚ほどのシヤシンは

入っているが、印刷不鮮明のため、お見せできないので、想像しつつ読んで頂きたい。

かづひこは、身体を痛められたり、傷つけられたりの願望は全くない。

しかし、このように活字で読むことは、決してきらいではない。この記者は、マゾとサジを取りちがえ、原文は全部サディストが、痛い目に合わされるようになっていたので、便宜上、訂正しておく。

(73) 人体掲揚式

日本観光新聞に、何年間も連載されている福田蘭童先生の人気読物『うわばみ行脚』には、時々興味のあるシーンが展開されるが、今回の小ミダシは人体掲揚式。

その小ミダシの如く、五、六人のストリップアが、よってたかって、主人公のうわばみ先生および、同行の画家先生を責めるところ。

すっぽりと頭から女のパンツをかぶせられたウワバミ先生の格好をみて、踊り子たちは「あっぱはっは。わっはっは……」

一齊に笑いだした。しかしノッポのストリップアだけは笑いをかみこころして

「このオッサンを裸にしてから、清美さんはこのオッサンの手を、シゴキでうしろ手に縛ってね。それから足のほうはミハルちゃんか

縛って……」

と半命令的にいった。

「いいわ。うんときつくしばって、このオッサさんがどんなに暴れたって解けないようにするわ」

ウワバミ先生は黒パンツの覆面をかぶせられたままで

「痛いじゃないか。お前たちはオレをどうしようというんだ？」

と腹話術の人形みたいな声を出す

「黙って黒覆面をかぶっていいの」

「あんたたちは足のほうを、あたしたちはアタマのほうを持っていくわ。いいこと……」

「オーライ」

踊り子たちは、ウワバミ先生をまるで死体をはこぶような調子で持ち上げ、ワッショ、ワッショと掛け声をかけながら台所へ運んでいった。

ということになって、ストリップアたちは面白半分に『人体掲揚式』をはじめめる。

さすがは、当代随一の作家だけあって、責め場面もいたずらにくらぐならず、それどころか、朗かに明るく、そのくせ、新しい趣好で軽い責めを展開している。

同好のみなさんと共に、この小説の次号を待ち、大いにウワバミ先生の健康を祈ろうではないか。

(71) 残パン

友人K君のはなし。

彼は、アメリカ軍のオフィスにアルバイトのボーイとして働いており、時々会々と、色々面白い話題を提供してくれる。

物量ゆたかなアメリカさんのこととて、食事なども、タップリと人数の五倍ぐらい調理をして、盛り残しや食べ残しは、石油カン一本八〇〇円ぐらいで残飯として払い下げる。

これを日本人の業者が買って、盛り場のマーケットに持出し水でうすめ、大ガマで煮て栄養シチューとして、井一ぱい二〇円で売っている。

終戦以来、大切な栄養源として、東京を始め全国の屋台で売っており、何しろうまくて安いので、食べた人も多い筈だ。

ところで、K君のオフィスでも専属の商人が居て、奪い合いのようにこの残飯を払下げてゆくのだそう。

払い下げの現場に立合うのは、むこうの女将校か下士官で、気の強い、男そこのけの婦人だという。

ところが、このアメリカ婦人、残飯の行方を知っているの、意地のわるいイタズラをして、せっかくの残飯の価値を下げてしまうという。

たとえば、タンを吐き込んだり、ハナ汁を

まぜたり、ガムのかみすてや、さくらんぼのタネ、タバコのすいがら、一度などは、自分のはき古した古靴下を、かまわず放り込んだという。

仕方がないので業者は、形のあるものは取り出してなるべくまざり物がないようにするが、頭髮や手足の指のツメなどは、仲々取り出せず困るそう。

隊の規則で、日本人の従業員の食事には、この残飯を使わせられることもあったが、さすがに従業員からの反対があったので、いまでは、もっぱら隊外に払下げということだ。『知らないうちに、どっかで誰かが、そんなものを食べさせられているワケさ』とKは云う。

何故、この女の兵隊がこんな不法をするのかというと、要するに業者を困らせて、止めさせようとしてコムミッションをもつてくるのを待っているのではないかという。

ソレが証拠には、人形か何かを贈ったら、しばらくは、そのようなイヤガラセが止んだそう。

かづひは、こう考える。

イヤガラセもあるうけど、その女性にはSの心理か、フェティシズムがあるのではなからうか、と。

有色人種のべつ視もあるのかもしれないが、ブタの餌以下に汚物で汚れたそのシチュ

ーを、うまそうに食べた(かづひもその一人)ヤブーが沢山あったことは事実なのだ。但し、この話は占領当時の採集で、かづひこのノートから改めて抜きがきしたものであることをつけ加えておく。

(72) その値段

雑誌『衣食住』四月号一〇七頁から。

最新新しく『尿尿分離式便所』が考えられました。これは排泄のとき、大便と小便が前後に泣き別れとなる構造で、肥料には小便のみ使い、大便は使わないという考え方です。私たちは一年間に肥料に換算して四百円ほどの大、小便をたれますが、そのうち三百円は小便の値打です。二割五分に当る百円の大便是捨てても惜しくない。小便こそ貴しいというワケです。——云々とある表題は『子供の健康を妨げる色々な寄生虫』、筆者は石垣純二氏。

× × ×

小便が一年分で三百円とは余りに安すぎる。おもうひとのものであれば、そして、それをかづひこの肥料として、充分与えてくれるならば、一滴一滴に千円を投じてても惜しくない。

このような燃ゆる思いに日夜、見はてぬ夢をもつ者、その名は、コプロラグニスト、そしてかづひもそのひとり。



夕べは何んと云うことなしに寝苦るしかった。おはぐろ橋を渡って次郎吉に案内させたことは覚悟の上だが何処まで行ってもドブの匂い。人、畜生の汚物をたっぷり吸い、鼻持ちならぬ臭みは俺（長谷川一夫）の枕元まで漂うて動こうともしなかった。俺が伝馬町の牢屋から煙草入れ一つを持って出獄したことは筋書の通りだ。ただ、なぜ偽って遊び人清次と名乗り、この巷までのさばって探ろうとしたか、その訳と次第はここで話す訳には行かねえ。

赤犬の巳之吉（黒川弥太郎）とはゆうべ、一ぜんめし屋で逢った。いい男だが妙に線が弱い。俺の前で殺し屋が商売さと言ったが人の嫌やがこの離れ小島の特殊部落で寝起する男にしては全く惜しい人物……だが、呉

服問屋の和泉屋善兵衛を悪の張本人とにらんだ俺の眼玉の黒いうちは、巳みのとはただの遊び人兄弟として、それ以上の交際つきあいは無用だ。

浅草観音寺境内を紙一枚隔てての姥ヶ池に屯ろする陋巷に、スリ切れた青みっぽい単衣をはしよって草履ばき、女房（阿井美千子）が見たら、さぞや驚くことだろう。

それにしても陋巷の下賤人共に薦冠りの酒を振舞おうとする聖天嘉兵衛の一人娘おしん（香川京子）の気立っぷりはどうだ。人もあろうにこの俺を擱えて「虱たかりの清次」とののしった挙句、咄嗟に身を交わした盃の酒が流れて「やるだろうと思ってたよ、餓鬼の時からこの手が好きだったからな。アハハッ……」の俺のタンカは盃蘭盆燈籠流しの宵に





しちや上出来だった。

ただ——この臭い部落のだ真ん中で、女房のあるこの俺を一目惚れで慕い始めた次郎吉の姉嬢っ子お千代（新人岸正子、本篇のヒロイン）の熱情には、ほとほと手を焼いた。

その証拠はトップタイトルに写った顔を見てみな。誰に恋を吹掛けたか身も心もねえ始末は捕物を進める俺にや苦手だ。苦手序でに今一こと云っておこう。暗くて犯人を捕えるのに苦労する人間さま以上にこの映画をスナップなさろうとするカメラマンさまはなあ、断り書きが緊縛とあっちゃや、シャンデリヤの輝く真昼間の縛り物ってねえ筈だ。暗くて写りが悪かろうとそこは我慢と云うものさ。

おっと……忘れてた、今一人の色女があるんだ。確かお糸（淡路恵子）とか申す料亭の

女で、こいつにはお千代以上の身も心もとろけそうだったが危い処をズラかって逃げおうせたものの、鼓樓の殺し場へお糸に代ってこの俺が水色縮緬の蹴出しも鮮かに女装して乗込もうたあ、何処まで人を喰ったことをさせやがるか、映画でなくっちゃ出来ねえ相談だ。

もっともその前に最前のお千代に「ついて来れば判るんだよ、黙ってついて来な」と口説かれ、今は探そうって無え『花やしき』の池の端での打明け話。明けすけに精一杯の恋心を聴かされたのはいいが、白地に薄とき色の腰巻をチラツカせやがって如何にもカスパの女の代表者、女優さん商売も楽じゃねえ。



さて……色んなことを考えながら俺の十八番、一文銭を宙で数えているうちに、

『モシ、モシ、遊び人清次兄貴、いや銭形の親分さん、お起きなすって……いえ、何にねたった今しがた、聖天一家の三下野郎が、ホラ、あんたを慕う例のお千代坊を痛い目に合わせるんだと飛んで行きやしたよ。奴等にかかっちゃ、まとな姿じゃ帰って来ねえ。赤の裸にむかれるか、戸板ぐるみの大川流し、所詮まともにや見られねえ無惨絵だ。仏心がおあんなさるなら一つ走り、ねえ親分さん、お願い申しますぜ……』

と来た。捕物芝居に女の一人、二人の縛りは付き物だが、お好きな胡堂さんの平次と違



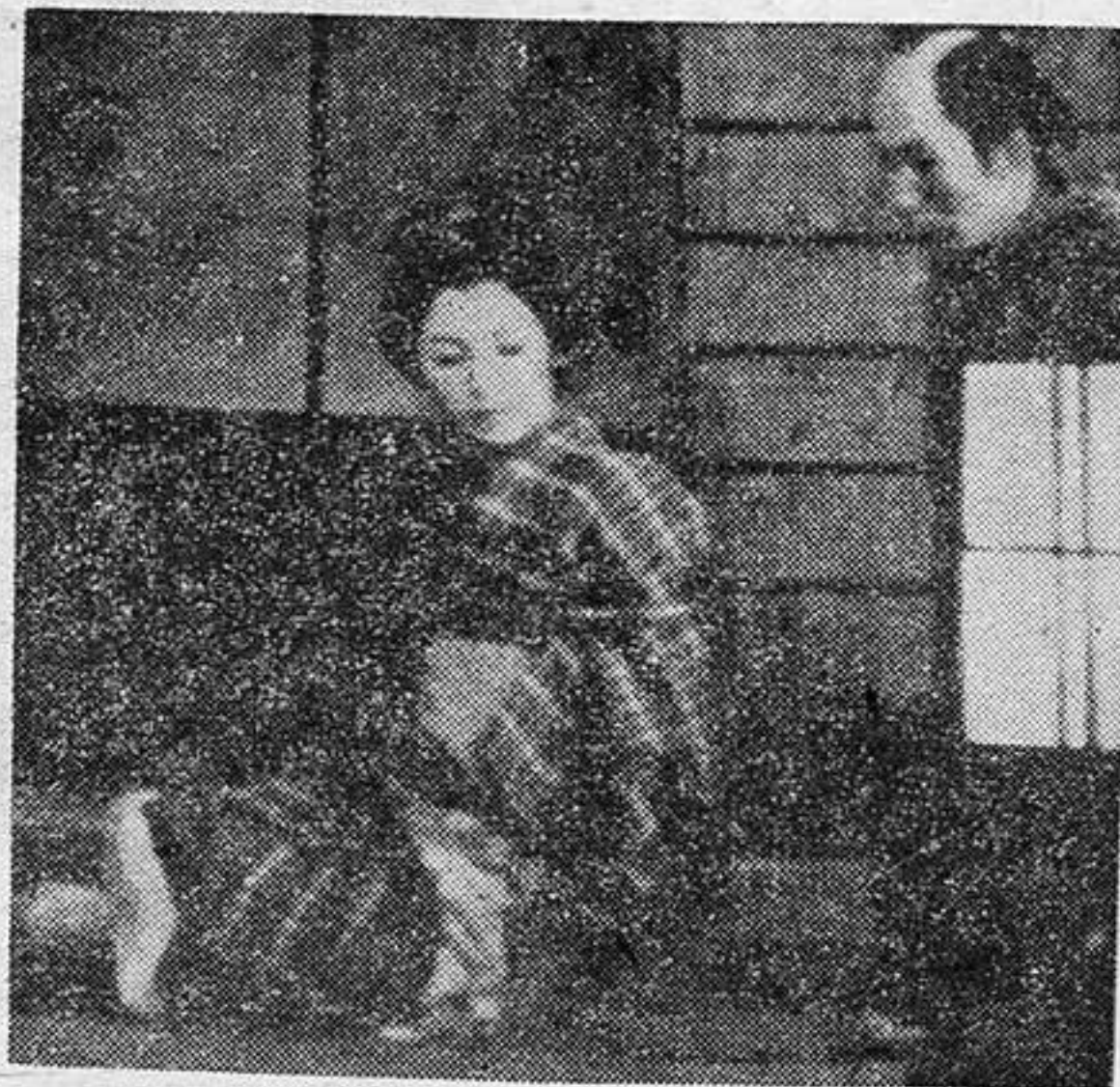
って俺が飛び出してどうなるんだ。まして相手はお千代坊だ。それよりか、さっきから何んにも知らねえ子供等のことが気になって堪らねえんだ……。

『お母あちゃん。この映画つまらぬから、もう帰えろよ。あたい、あの眠くなるような伴奏の音楽を聴いてると、あくびが出ちゃったもん。どっちがいい人、悪い人、ちっとも判んないから……』

悪るかったなあ、叔父ちゃんが謝まるよ。マニアの叔父さん達もいなさるだろうが、あの音楽が上等でいけなかった。その代り……ホラ、叔父ちゃんがこう身構えて十手を楯に投げ銭を——ピューン、どうや、坊達、当っ

たろう。

待ってました、御存知十八番！ ぐるりと囲まれた何んとか寺境内の大広場。ただ断っておくが俺は刀を抜いて相手を斬る訳には行かねえんだ。情にほだされると折角の投げ銭をバチリン：チャラチャラツと棄てる羽目になる。いや棄てるうちにはいいが天下の美男士銭形の親分も、危うく鼓樓に吊られる処だった。これで御見物のお客さんも波乱万丈、胸のしこりもスツとなすったで御座んしよう。処で最前からお待兼ね、お千代坊受難の巻は皮肉にもあめやに化けた和泉屋善兵衛の化けの皮をひん剥いて巧みに繰られた、や



くぞ仲間に正体を明かしてやろうと俺が激闘している最中に、おっ始まっていたんだぜ。踏み込めば、たわいもなく出鼻をたたき折れる聖天一家の子分だが今は、かまっちゃおられねえ。

幸い、おしんが親爺の嘉兵衛を見くびったからいいようなものの、女の責場に男と女を敵に廻わしちや責められる女は惨めだ——と思うからこは一つ新しい江戸は西方、山の手の森の蔭に住むと云う牧親分に代ってお話願うことに致しやした。おッ、もう一人の親分さん、すっかりやっておくんないよ……と云う訳で十手ならぬペンを持って登場はしたものの、とても長谷川さんにはかないませんよ。と云って引下る訳にも行かないし弱っ



ちやったなア。

これと云うのも、お千代坊が今一ふん張り抵抗すれば、ちやんと逃れられたのに監督さんから云われるままに方何尺の六畳の間にウロタエルからそんなことになるんだ。もっとも細縄を持った三下野郎の手をくぐって何処かに行っちゃまっちゃ、マニヤの皆さんに済まないだらうけど……。

で、君は観念したかのように一ぺんは腕を捻じ廻わされたね。はずみを喰らって縛り役の子分先生は、ポロリと縄を落したぜ。こいつは面白い縛りが演んじられるわいと思ってるうちに、おしんが出て来た。ジロリと例の



皮肉たっぷりな冷たい目付をして、云ったねえ。

『この女を……縛っておやり』と。

こう幕が切って落とされちや、何処のどいつか知らないが縛り役、

『へいッ、承知しやした』とばかり、お千代坊の手首を握ったかどうか判らぬままに、クルクルのグルリと縄を二巻き掛けて得意顔——をしたが、こ奴、仲々のくせ者とにらんだ。第一探訪カメラでなくっっちゃ判らぬ位、巧妙に女を抱いている。余程のしたたか者か



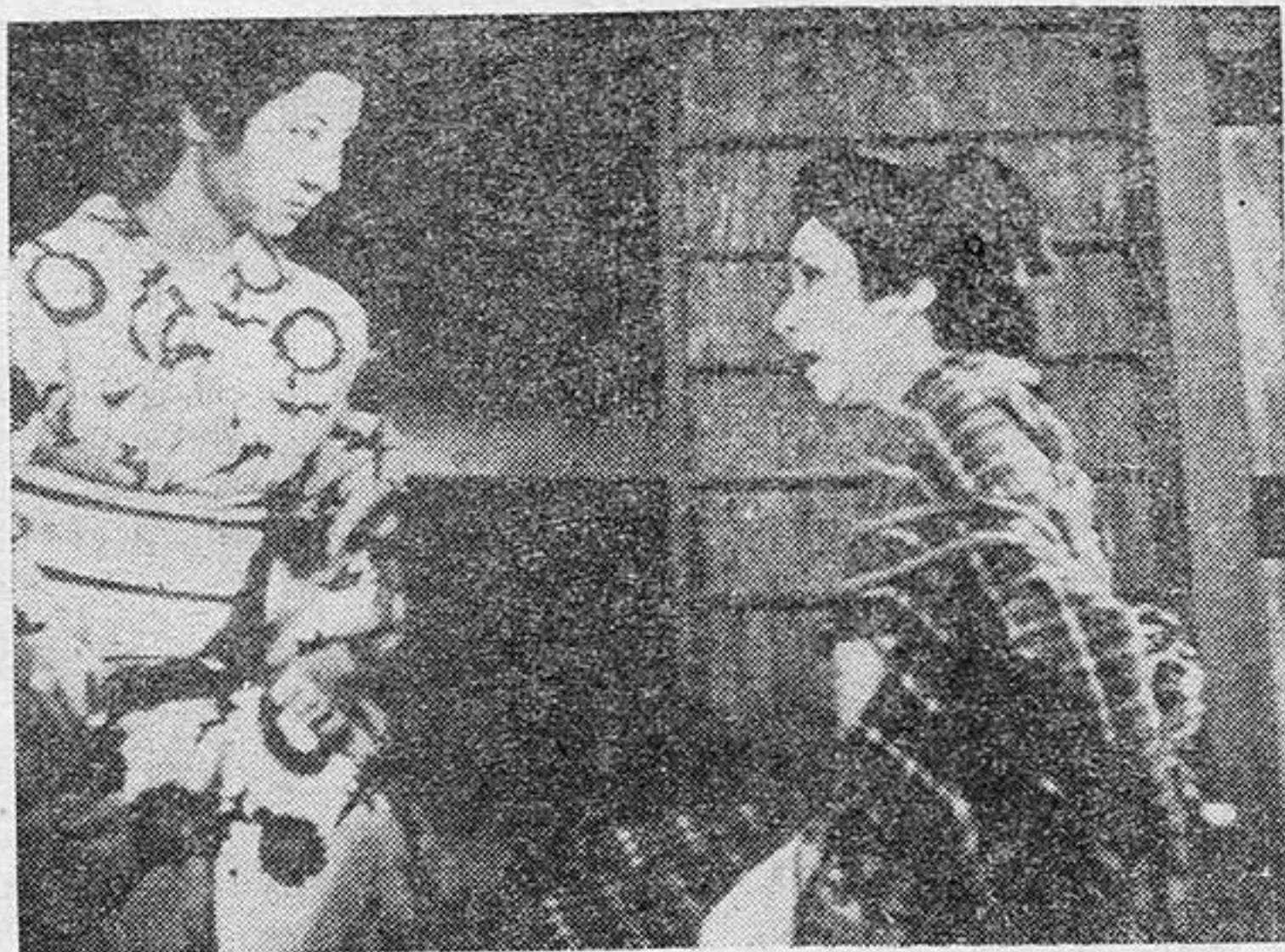
も知れない。詳細に描写するなれば、女の両腕を後に廻したまま左膝で抱き込み、それでも暴れようとするお千代坊の帯の処を、念入りに右の腕をぐっと差し伸べてしっかと抱きながら右の手で縄を握むと云う早業である。

物事は相談だ。序でにこの男に折檻させたなら映画はグンと面白くなる（かも知れない）、お千代を後手に縛っている間中、縛りの醍醐味に徹したものか無気味な面に笑いを

浮かべ、後を見なければ本縛りかどうか判らぬが、二巻き目を結び終ってぼんやりしてしまった。

一方、おしん女史？の方はあざみ模様の浴衣の着流し姿で立ったまま、同性が念入りに縛られるのを監視していた処を見ると、おしんの心理、いや、なべての女性の心意気なるものが判るぜ——と云った男がいた。

とまれ、お千代に取っては片や縛り手下、



片や、おしんとの間に挟まれて無念やる方なく、真白い歯を喰いしばって投げ足の縛られ姿——は、さしずめ床の間の福寿草と云ってよかろうか。おしんは近寄って静かにしやがみ込む。

『あんたを縛ったのはちと訳があるんだよ』
『知りません……』

とお千代はあらぬ方に眼をやる。脚本を読まないんだからセリフの内容は知らないが、スナップの表情は相当深刻だ。もとはと云えば仲間だと思ってたおしんの声がかかりで、こゝうも後手に縛られては、たとい『お退り』と

云われて引退った手下野郎が姿を消そうとも、フリーのおしんが何をしてくるか判ったものじゃない。映画は半信半疑で恐ろげながら漸くのことで耳を傾ける、お千代をクローズアップで描いていく。

女同志の会話——今思うと、おしんの独りセリフにほんのあいづちをしたに過ぎない。お千代に云い含めて、安緒したものか——の取引が済むと、矢庭に背後にかくし持ったドスを抜いたから、縛られた女が驚くのも無理がない。スナップはその間の情景を見事に捕えて余す処がなかったと自負したいんだが、万事が芝居事だから相方の眼のやり取りが違っているあたりに、読者大方の眼を注目せられたい。

おしんの右手に握られたドスはお千代の胸を突刺ささず、予想通り縛しめの縄を切る段取と相成った。

どなたかの不満言葉じゃないが、後手のあたりを見せずに縄を切ったり解いたりするその早さは、アツと思う間に済んで了う……これが毎度のことながら公開映画の安全弁である。

『そうじや御座んせんか、銭形の親分さん』
『アハハハ……まあ、そうともなりやしようねえ。何処かで撮られた映画のように、女を縛って穴の中に埋めるナンテ、到底、あつし見たいな性分には出来ませんや。如何に胡

堂さんが好きであろうと、松の木に吊すのが精一杯じや御座んせんか。とてもとても御冗談仰言っちゃ困ります。それじや盆の精霊祭りの鬼火灯籠が泣きますぜ。ここは一つごかんべんなすっておくんなせい。お千代坊も

あれだけの事で助かり大きに有難う御座んした。これで和泉屋の極悪人も洗うことが出来、色女お糸も眼が覚めたようで大団円、お蔭さまであつしも久し振りに脚を伸ばして女房お静の膝枕、ヘッヘッヘッ……悪く思わな

いで下せいよ』

(緊映シリーズ第四回作品・終)

〔次号予告〕二月号誌上には

松竹作品『七人若衆誕生』

を予定して居ります、乞御期待！

呼びかけ

益田愛子さんへ

近藤

(昭和31年12月号参照)

本や文通などでなくさめるように心掛けております。私は体は小柄で五尺そこそこ、決して魅力的な者ではございませんが、私のような者でも責めてやろうと云われる方がございますでしょうか。以前と違って、今では文通のあつせんもして下さらないそうですので私の住所を発表して頂いたらいいのですが、今のところそれなりません故、編集部の方へお願いする次第です。若し、そういう方がございましたら、文通だけでもいたしたいと存じますので、よろしくお願い申し上げます。

(京都・益田愛子)

『……………』

私は年令は二十三才ですが、すでに三才になる女の子の母親です。二年程前から縛ら

れるということに強い関心を持ちはじめ、一度そういうことを体験してみたいと思うと、矢もたてもたまらなくなり、せめて御



愛子さん！ 敢えてこう呼ばせて頂く。愛子さん！
貴女のあの通信を一読した時、私はドキッとして、背筋が寒気を覚えた。身の引締まる一種の恐怖をすら感じた。あんなに慎ましい、それでいて思い切った呼びかけは、本当に珍しいと思う。

愛子さん！

私は、貴女のマゾヒズムの呼びかけの中に、KKを讀って初めての罪の意識をそくそくと感じた。貴女は二十三才という若さだが、然し既に母親と呼ばれる人だという。三十娘の汜濫する現代、貴女は、まだ確かに若い。だが、母である身は、それにふさわしい思慮分別を要求されて当然な筈だ。貴女は少なからず軽率だったようだ。

愛子さん！

貴女は自分を人妻だとは云わなかった。唯「三才になる女の子の母親です。」と云っただけだ。然し同時にまた、「私は未亡人です。」とも、「私生子の母です。」とも云わなかった。私が貴女のあの通信を讀んで、貴女を夫ある人と思ったのは許される筈だ。私は貴女が、何故自分の夫に、自ら欲することを求めないのかと疑った。私は、貴女が自分の心の叫びを夫に秘めているものと断じた。夫に打明けた時、或いは貴女は途方もない侮蔑を受けるかも知れない。然し、夫婦と云うものは他人であった者が、他人でなくなる結合なのだ。貴女の努力次第で、貴女の欲求は必らず

理解される筈だ。失敗すれば、それは貴女の努力が足りないのだ。だがもし失敗しても、夫に軽侮されることは、夫に隠れて不貞に出るより数等優っている。乱倫の被虐は、名譽あるマゾヒスティンの執るべき行為でない。夫の持合わせぬものを求めて姦通に走るといふのは、巷間通俗の事例に過ぎない。

愛子さん！

貴女は、自分には夫は無いとおっしゃるかかも知れない。或いは、自分の言動は少くとも夫の承認を得ている、と釈明するかも知れない。それならば結構。私は何も云うことはない。貴女は存分に悦虐に歓喜すればよい。

愛子さん！

貴女は、唯、幼い子の母親であることを忘れるべきではない。貴女の子の中には貴女の生命の分割があり、貴女の血が脈々と流れている。貴女は、可愛くあどけない女の子を、

自分と同じマゾヒズムの運命に就かせようと思ふだろうか。私はそれを疑う。

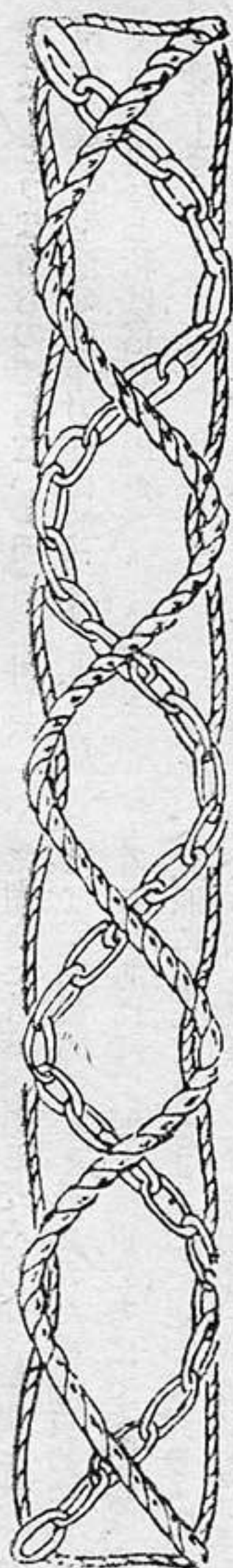
愛子さん！

私は、かつて「苦しみを求めて」を書きながら、貴女を想い浮かべていた。恵以子という女が、次第に多くを求めるようになりながら、得る処が少なくなつて行く姿を追った。恵以子の初めての微温的な味気ない被虐は、「濡れぬ先こそ露をも厭え」の露となった。

恵以子は別の男の許で雌獣として飼育された。或る時は、責の画や責の写真の被写体という口実の許に、身も心も引き裂かれる思いの拷問にのたうち傷ついた。而も尚、恵以子はもしや？ というはかない可能性を夢見て男を求め、悦虐に放浪する。

愛子さん！

私は、一人の青年を登場させた。そして、恵以子を夫や子供の許へ帰した。やがて、恵以子は、ささやかな満足をつや子供に安易に出だす筈であった。だが、私の考えは安易であつたらう。私自身になぞらえた青年は、実にキザな言動をとった。現実に渴えたマゾヒスティンの欲求は、このような常識的な解決



では、どうなるものでもないと思う。併し、現代の社会生活の秩序の裡に於ては、この解決が妥当だと私は信じたのだ。

愛子さん！

私達が現行秩序の中で胸を張り、吾に過ちはなく、吾は決して孤独でないと云い切る環境があるだろうか。悦虐に関しては加虐被虐のバランスに依る外はない筈だ。つまり、マゾヒスティンは、自らの強弱の度に応じたサディストとの組合せを得る以外に途はない。貴女がもし、夫以外の男性を求めねばならぬ事情にあるのなら、貴女に相応な相手を見出すべく努めることだ。家庭と社会の秩序の裡で解決出来る範囲内に於て……。そして相手の立場、将来ということも考慮した上に於て。

愛子さん！

「私は体は小柄で、五尺そこそ決して魅力的な者ではございません。」という箇所で、私は貴女の謙虚さに打たれた。だが、私はこの文句を、渴望が云わせた謙遜だと思う。豊かな女体、秀麗な容姿ばかりが被虐美を独占するものではなく、小じんまりした平凡な女体をすら秀逸に飾り立てるものこそ、被虐の快感だと、貴女自身思っている筈だ。

愛子さん！

「私のような者でも責めてやろうと云われる方がございますでしょうか。」こんなに自信

に満ちた言葉があるだろうか。「縛って」ではなく「責めて」と云うのだ。「責めて下さる方があれば、どんな責め方にでも、きっと立派に耐えて見せます。」という言葉が聞こえるように思った。貴女は、精神にも、体力にも、恐ろしくかなり強固な自信を以て、この通信を書かれたことと思う。サディストの群への呼びかけとして、誠に良い覚悟だ。「あまり酷くはしないで」などと怖気を見せないで、二年程前に「縛られたい」と思ったにしては、恰も俎上の鯉の如く、驚くべき神妙さだと思う。

愛子さん！

できれば私が名乗りを上げたい。しかし、京都は東京の近くではない。交通機関の発達には日進月歩でも、やはり距離に応じた障碍は残る。お互いに別個の環境を持っていてもいる。残念ながら、誌上の交歓しか許されない。

愛子さん！

私は、文通だけでも願う、貴女に安堵する。余りにも大胆で卒直な貴女だが、貴女の環境を破壊し、生涯を破壊せしめる愚行を敢てすることはないと信じている。

貴女は子供を愛し育くむ良い母親の筈だ。貴女の純粋さに好感を覚える。貴女は長女であるなら一人娘だったのだろうと思う。いずれにしても、所詮、貴女は女だ。本質的に受身であり、マゾ的である。私はそんな貴女にそこはかとなない好意を感じる。

愛子さん！

私は貴女が好きになった。心から貴女の幸福を祈る。……平和な家庭の雰囲気浸って、愛児の成長を見守る優しい母親であるように……。

そして、——時折は、満足する迄強く縛られ、烈しい責めに歓喜する女でもあるように……。然し渴望に悶える間だけが真の幸福期間であることをお忘れなきように。

益田愛子様

若輩の私が、思慮浅薄にせまかて僭越な言辞を弄してしまったと思っています。何故かしら、妹に対するような想いを貴女に感じた結果なのです。どうか、御寛恕の程、お願いします。

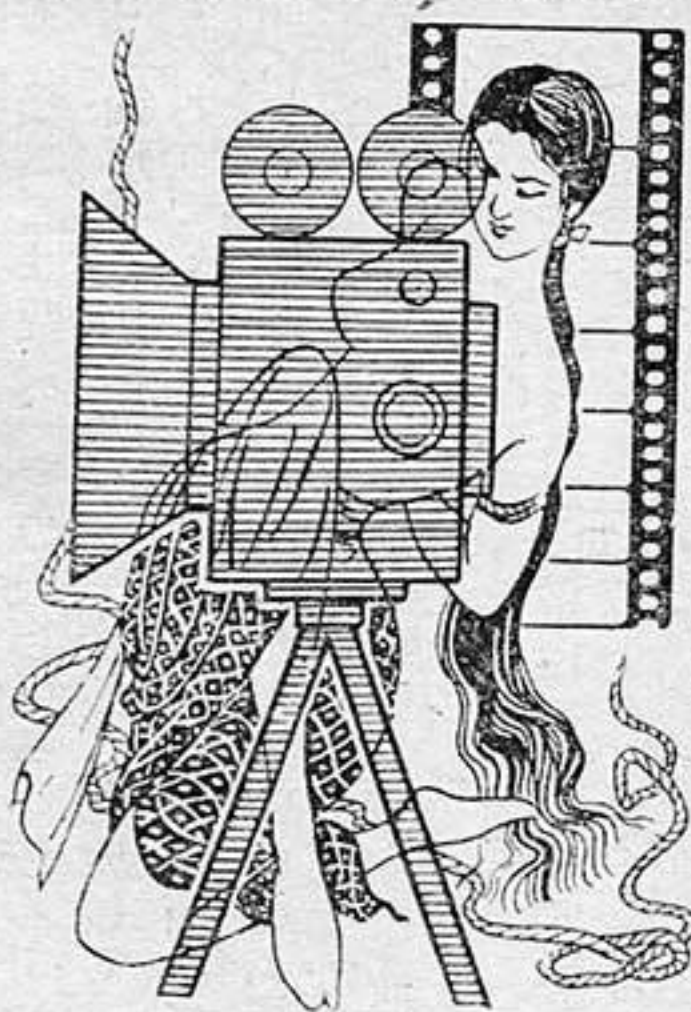
時節柄、呉々も御自愛の程を。御機嫌良う。



〔映画通信〕

今月の 縛られ 女優達

大河原珠樹



最近の時代劇映画で、ひよいと感じたこと
 なんですが、いままで女優の縛りシーンをあ
 まり使っていないかった大映や松竹が、案外縛
 りシーンを観せてくれるようになったんじや
 ありませんか。女優の縛りシーンなら東映
 か新東宝と考えていた認識は、東映が製作本
 数の割に近ごろ縛りを手抜きしていたり、新
 東宝が時代劇をへらしたりしていると、どう
 やら前者は大映に、後者は松竹に、それぞれ
 お株を奪われそうな気がします。まあこれは
 いい刺激で時代劇の発展上よい傾向だと思っ
 たり、われわれマニヤにとっては、この上ない
 喜びで、東映や新東宝もまた奮起一番——て
 なことを考えるのは私一人でしょうか。

▽七人若衆誕生（松竹作品）佐乃美子

女人禁制の高野山へ愛人をたずねて来たが
 密会中を山の役人達に見えられ縛られる。寺
 の住職である裕弁律師の前に引きだされるが
 胸を強く食い入るばかりに数巻され後手縛り
 で庭さきへひきすえられる。折から雷鳴が轟
 き、雨にうたれて縛られたままうつ伏してし
 まう。

次に入山の罪で石籠詰の刑にされるため、
 矢来に囲まれた刑場の中で同じ後手縛りのま
 ま座らされる。これから自分達を生理にする
 穴をみて恐怖におののく姿はただけ。そ
 して石籠詰にされ首から下を小石で埋められ
 て苦悶する。

▽七人若衆誕生（松竹作品）富士真奈美

高野山の寺小姓の一人久米之介をしたう雑
 賀屋の娘お梅が父の借財のため年の違う男に
 結婚をしいられ、その仮祝言の直前に山を逃
 げて来た久米之介に助けられて逃げるが、そ
 の途中で裕弁達の悪僧につかまり、裕弁の部
 屋へ閉じ込められる。グルグル巻の後手縛り
 幅広い布で猿ぐつわをされ、裕弁の淫らな毒
 牙がせまり、逃げ廻るシーンはまず及第どこ
 ろか。このほか久米之介の幻想で二人が石籠
 詰の刑にされ苦しむ一カットもある。

▽緋ぢりめん女大名（新東宝作品）

田原知佐子

豊臣家再興を口実にする婦女誘拐団に押し
 入られた伊勢屋の娘お春が長じゆばん一枚の
 しどけない姿で拐かされる。しどきで後手縛
 りにされ二人の黒装束の肩に仰向けにかつが
 れて運ばれる。そして大神道場の地下牢の中
 に入れられる。そこには腰巻と肌じゆばんの
 あられもない姿にされた若い女達が大勢入れ
 られており、この女達は外国に売られるため
 に背中に入墨をされる。上半身を裸にされた
 女が俯伏せに横木へ両腕を左右にひろげて手
 首を縛りつけられて入墨をされて体をくねら
 せて悶えるシーンはいささかグロテスクな感
 じだ。

▽鬼火燈籠（大映作品）

岸 正子

江戸の姥ヶ池に「シマ」と称ぶ暗黒街があ

り、そこには聖天一家の殺し屋達が住んでい
る。銭形平次が清次という遊人に変装して、
「シマ」へさぐりにもぐり込む。この清次に
「シマ」でそだった野性的だが純情娘のお千
代が慕うようになるのだが清次の正体発覚。
さしむき、お千代は人質の形で聖天一家に捕
われる。逃げ廻るお千代を、子分の一人がひ
き据えてグルグルと三巻ばかり荒っぽく縄を
巻き後手縛り。ところが折角縛りあげる順序
をえがきながら、手首は後へ廻しているもの
の、そこを縛る様子がみられなかったのは手
ぬかり過ぎる。胸の縄もわるい。なおこの岸
正子とは最近まで松竹にいた加賀ちか子のこ
とで転籍・改名とともに新氣一転して時代劇
に専念とのこと。小柄だが可憐なマスクの持
主だ

▽月の影法師、山を飛ぶ狐姫(大映作品)

岸 正子

真田幸村が埋蔵した軍用金の有り家を知る
夜叉王作の「小面」「般若」二つの能面を巡
って善悪いり乱れての奪い合い。そこにこれ
また面を求める半悪玉的な真田の血筋をひく
狐姫を主領とした「むらさき党」が一枚加わ
る。その狐姫とは、仙台の伊達藩のため
に「小面」を求める三世仙之助の泊った宿の女
中千代で、むらさき党の野望を知った仙之助
は姫に軽拳をいさめ、ききいれぬのでやむな
く山小屋の中へ縛り、自らは「小面」を持つ

副首領金井玄齊のもとへ……。で縛り方は、
勿論後手縛りでかなり太い目の縄で胸を四
巻、形をくずさずに座っている。手首の縛り
具合をみようと思ったが、体の陰にしてとう
とう見せなかった。一寸体を動かした時に胸
の縄がズレたところをみると、おそらく化粧
縄だろう。「鬼火灯笼」の時と同じで不満。

▽月の影法師、山を飛ぶ狐姫(大映作品)

三田登喜子

「小面」の面をあずかる能楽の名門多生家の
息女美乃が、三世仙之助を慕いつつ盗まれた
「小面」をたずねるが、その面がやっと仙之
助の手に入った時には美乃は、むらさき党の
手に……。定刻までに「小面」を持参せねば
美乃の命は失われる——と、急ぐ仙之助の前
に悪党達が立ちふさがる。むらさき党の本拠
では、男装の美乃が後手に縛られ縄尻を柱に
つながれて座っている。胸を三巻、手首の縛
り目は柱の蔭でわからず。定刻の鐘がなるが
間に合わぬ仙之助、美乃の処刑がはじまる。
岩壁に植え込まれた金輪に、美乃は両手を左
右にひろげて手首を金輪に縛りつけられる。
両脚も揃えて膝下で縛られている。(但しス
クリーン外だが袴の様子で推察)ハリツケに
された美乃に鋭い釘を沢山植込んだ扉が刻々
と近づく。恐怖に顔を振り悶える美乃。その
時、仙之助は悪人の鉄砲に谷底へ……。この映
画の終りとなる。僅か手首縛りだけというの

がもの足らぬが、一面では、のがれようのな
いギッシリと縛ってあるのがよくわかった。

▽地獄の午前二時(東映作品) 中村雅子

これは縛りシーンではないが、中村雅子の
ふんする八島常子が悪人達に毒殺されるシー
ンがすさまじい。大の男が三人がかりで、一
人が背から羽がい締め抱き、もう一人が頭
髪をつかんで顔を仰向かせ、親分格なのが両
頬をグツと押えて口を開かせ、その中に毒薬
を流し込む。中村雅子はこのシーン撮影後、
口を三針も縫ったそうで、実に凄惨なりアル
なシーンだった。

なお予報として「次郎長意外伝・木曾の火
祭」II東宝IIで横山道代が吊し責にされる。

また「大江戸の鐘・開花篇」II松竹IIで瑤
峨三智子が珍らしく囚衣で高手小手に縛られ
刑場へと裸馬に乘せられて引廻しにされる。
「底抜け忍術合戦」II宝塚IIでは環三千世の
扮するところの男装の麗人(女忍術者)が樹
に吊り下げられる。大映作品「血文字船」II
戦時中に剣劇の無い時代活劇だった「横浜に
現われた鞍馬天狗」のヤキ直したがIIでは、
浦路洋子、小野道子らが後手縛り、柱縛りな
どにされるそうであるこのほか「日蓮と蒙古
大襲来」で大部屋組の女優(もしくはエキス
トラ)が大勢、珠数繋ぎにされて蒙古兵達に
連行されるシーンがある。

◎レーゼ・シナリオ◎

河内山 遊 俠 傳

海 野 築 朗

・仮想配役・

河内山宗春	金子市之丞	片岡直次郎	芸妓 三千歳	その妹 お冬	井上河内守	山崎和泉	森田屋清蔵	中野碩翁	梶川平馬	仲間 三吉
市川右太衛門	中村錦之助	大友柳太郎	花柳小菊	千原しのぶ	東千代之助	大河内伝次郎	吉田義男	進藤英太郎	志村 喬	月形哲之助
										番頭 里見浩太郎

雪 姫	腰 元	町 娘	武家娘	芸 者
大川恵子	丘 さとみ	桜町公子	中原ひとみ	長谷川裕見子
その他、武士・町人多勢				

◎(山路)

行き交う旅人もまばらな山路。
 四方の景色、道端の立木は秋色がみなぎっている。近くを流れる
 川の音。
 “御用金”と書いた木札をつけた荷馬数頭と、物々しい警固の武士
 がくる。

その先頭は（奥州棚倉藩家老）金子主膳と市之丞である。
市之丞 父上、間もなく江戸でございますな。
主 膳 うむ、奥州棚倉を出てから、もう一月になる。だが、まだ、気を許してはいかんぞ。
市之丞 はッ。
と行く。



市之丞が駆け降りて来て、旅笠で水を汲むと、それを両手に持つていく——。
◎（峡谷にかかる橋）
荷馬の一行がくる。
主膳と、荷馬が橋を渡り切った時、突如、待ち伏せていたらしい黒装束の一団が襲いかかる。

行先の道端に、脇腹を押えて苦しんでいる旅の若い女（お冬）がいる。
市之丞 ……思い切って引返してくる。
市之丞 これ、お女中、如何いたした？
お冬 はい、にわか差込みで…
市之丞 うむ。旅の冷えであろう……。これを……。
と、腰の印籠から粉薬を出して、お冬に飲ませようとするが、お冬は、ムセンで飲めぬ。
市之丞 困った、ムセンか？
お冬 はい。申し訳ございませぬ。
ほって置いても程なくなおると思ひます故……。
と、言い乍らも、身をよじり、眉を寄せているお冬。
市之丞 よし——。水を汲んで参る。
と馳け去る。
その間に、荷馬の一行は遠くなり、やがて切れる。
◎（川原）

これを合図に——一大轟音と共に橋に仕掛けた火薬が爆発する——。

この為、主膳と荷馬を残して、警固の主力は全滅する。

やがて主膳は仆され、黒装束の二団は荷馬を引いて去る。

市之丞が駈けてくる。様子を見て仰天し

市之丞 父上!!

と絶叫する。

後からお冬くる。

為す、すべなく市之丞の混乱した様子を瞞める。

◎(大名屋敷)

それにだぶって

T 奥州棚倉三万五千石、井上河内守江戸屋敷。

◎(一室)

上座に井上河内守と家老山崎和泉。平伏している金子市之丞。

和泉 市之丞、其方よく生きておめおめと殿の前に出られるな?

市之丞 申し訳もござりませぬ。

和泉 御用金は盗られました。父は殺害されました。警固の者の

中で、其方だけたった一人生き残ったのは何故じや?

市之丞 はっ、それは……(と言ひ洩る)

和泉 話す事が出来ぬか、恐らく逃げかくれいたして居ったに相違なからう。

市之丞

いえ、決してその様な。

和泉 では、其方一人生き残った理由は何じや?

河内守 待て、和泉。市之丞は事に望んで逃げかくれする者とも思われぬ。

和泉

然し乍ら……。

河内守 捨て置き。それより我が棚倉藩は、先に將軍家より、因幡沼埋立の課役仰せつけられ、その御用金を取戻せぬ時は、

如何なる事態に立到るかも知れぬ、危急存亡の折じや。一人の男の、生死の理由などかまっては居られぬ。藩の全力を挙げて、一日も早く御用金の行方を探すのじや。和泉、早々に手配せい。

和泉 はっ。

河内守 市之丞。そちには永の暇いそぎをとらす。

市之丞 殿! 御用金の行方は必ず私奴が……

河内守 犬の遠ばえ見苦しいぞ! もはや目通り叶わぬ、退れ!

市之丞 は、はッ。

と、断腸の思いで、襖をあけて退下しようとする、腰元を連れ

た雪姫廊下からくる。

雪姫 (なつかしように) 市之丞ではないか? 国表より、いつ

着きました。

市之丞 ……………。

河内守 雪。市之丞には永の暇をとらした。以後見参無用にせい。

雪姫 えっ! 永の暇を? 何故でござります、兄上様!

市之丞 姫、御免!

と足早に去る。

雪姫 市之丞! 待ちや…………

と、追う。

その様子を凝視する山崎和泉の眼に、ある光が浮ぶ。

和泉 殿、万一、御用金の行方が判らなくても、我が藩の危急を

救う道はただ一つだけございます。

河内守 何? して、それは?

和泉 はっ、恐れ乍ら雪姫様でございます。

河内守 何、雪を

和泉 はっ、大御所様側近の中野碩翁様の駿河台の、御屋敷へ……

河内守 たわけた事を申すな!

◎(中野碩翁の屋敷) 夜

豪壮な構えである。

数人の武士に前後をとり巻かれた町駕籠が一挺くる。

◎(裏門) 夜

周囲の様子をうかがって、駕籠が屋敷の中へ入る。

◎(庭) 夜

数奇を凝らした庭を駕籠がいく。

◎(離れ座敷の中)

燭台に、眩しいばかりの綸子の夜具。

その傍に駕籠が置かれている。

しばらくは、何の音もない静けさ。

と、駕籠の中に人の気配——。

……………うー。

と、押し潰された、甘酸っぱい声と共に、駕籠の中から転がり出

たのは、黄八丈の美しい町娘。

高手小手の縛めに、厳重な白布の猿轡。

娘は必死に跳いて、立上ろうとする。その動きに、燭台の灯がゆれる。

と、ぎい——と離れに通じる廊下の戸があいて、手に竹の鞭を持った中野碩翁が入ってくる——。

◎(離れ座敷の外) 夜

雪が降り積っている。

◎(その中) 夜

夜具の上で跳いている高島田、武家風の娘。燃える長襦袢一枚で後手に縛られての猿轡である。

傍で、娘の姿態を眺めている中野碩翁。

手には、あの鞭が握られている。

◎(離れの外) 夜

梅が咲いている。

◎(その中) 夜

派手な芸者の、裾模様の衣裳が散っている。

裸のまま後手、猿轡の女。

碩翁の鞭が、振り下ろされる。

う！……………

紅の悲鳴をあげて、女の姿態がのたる。

◎(一室)

河内守と和泉いる。

河内守 御用金の行方は、未だにつかめぬか？

和泉 はっ、必死の探索も甲斐なく……………。

と、意味ありげに見上る。

和泉 殿！この上は……………

と、一膝乗り出す。

和泉 御家、御家の為でございますぞ。雪姫様を……………。

河内守 ならぬ。

◎(廊下)

雪姫が、庭を見ている。

雪姫 (つぶやく様に) 市之丞……………。

◎(茶屋の前)

花見の客で賑っている。

床几で、桜湯を飲んでいる深編笠が、表の騒々しさに、ふと見上る。

金子市之丞のやつれた顔である。

片岡直次郎と番頭、争い乍らくる。

番頭 若し、御番所はこちらではございません……………。

直次郎 いいから、黙ってついて来い！

番頭 そうは参りません。一体どちららへ御出でになりますか？

直次郎 ここまで来て、気が付かねえのか、すぐ先は練堀小路だ。

番頭 えっ！ 練堀小路と申しますと？

……あの、お数寄屋すとのめのお坊主様の？ ……。

直次郎 知れた事よ、当時名代の、河内山宗春よ！

番頭 (どきまぎして) そ、それじゃ、

あなた様は……。

直次郎 (せせら笑って) その河内山の弟

分だよ。おい！ 見損こなうな。

俺を一体誰だと思ってやがるんだ。しがねえ姿はしているが、旗

本、大名、御公儀迄のやりくり御

用の渡り用人、片岡直次郎とは俺

の事だ。通り名前が直侍、頂く扶

持は僅かでも、れっきとした御家

人様だ。それを、さっきはよくも

盗ッ人扱いしやがったな！

と尻をまくる。

番頭 申し訳ございません。河内山様の

御身内とも知らず、とんだ粗相を申しました。どうか御許

し下さりませ。

直次郎 (図にのって) 何を！ 盗ッ人の濡衣を粗相で済まそう、

てのか！

だんだんとり巻く見物人の中に芸者の三千歳がいたが、とうとう

市之丞の側に来て

三千歳 若し、お武家様……

娘は必死に蹴って

立ち上ろうとする

その動きに

燭台の灯が

ゆれる



れっ子
お

市之丞 何だ。

三千歳 何だじゃ、ございませんよ。お武家様はさっきから様子の

始終を見ているじやありません？

市之丞 見ているから黙っているのだ。

三千歳 まあ、そんな法がありますか、相手は名うての悪なんです

よ……。

市之丞 そうだろう。小面憎い所があいつの身上らしい。あれも商

売。傍から出て邪魔したくない。

三千歳 何ですって……

と思わず、ムツと詰め寄る。

市之丞 半年前の拙者なら、斯うは思わなかったろうが……兎に

角、人助けは御免こうむる。

と、立上って、茶代を置いて去る。

三千歳 まあ……

と、しばし呆然と見送る。

その三千歳の様子を先刻から、ジロジロと見ている梶川平馬と仲間三吉。

平馬 三吉、あの女は？

三吉 へい、柳橋の芸者で三千歳という、売れっ妓で……。

平馬 うむ。仲々生きがよさそうだ。碩翁様がお喜びなるかも知

れぬ……（と一寸考えて）三吉耳を貸せ。

と、何事か囁く。

一方こちらでは、直次郎の前に番頭が手を突いて謝まっている。

番頭 どうぞ御勘弁なさって下さいまし。

直次郎 いや、勘弁出来るものか、俺もちつとは人の口に上る男

だ。ここで手前を殺し、俺も立派に腹を切って見せるぞ。

と、懐の七首を抜く。

番頭 そ、そんな無茶な……。

直次郎 何が無茶だ。どうせ相場のやすい時に仕入れた命だ。さ

あ、覚悟しろ！

と、七首を振りかざすと、その手を

……待った！

と掴む者がいる。

森田屋清蔵である。

番頭（ホツとして）あっ旦那様！

直次郎 あ、痛う、痛う、何だ手前は？

清蔵 はい、手前はこの者の主人、森田屋清蔵で御座います。

と、手を離して

清蔵 店の者の落度は、主人の落度、重々お詫び申します。

直次郎 いいや、こうなっちゃー、死花を咲かすだけだ。

清蔵 死ぬの、生きるのと事を荒だてるより、如何でございました

よう。ザックバランに申し上げて、どの位で御納得いただ

けましょうか？

直次郎（得たりと）何だ、金で話しをつけようと云うか？

清蔵 はい。

直次郎（一寸応揚に）金で済まぬ事もあるぜ。

清蔵 その済まぬ事も、一切金で済ますといたしまして……

直次郎 うーむ。

と合点して、七首を仕舞う。

◎（神社の境内）

平馬と、三吉が町駕籠を一挺連れてくる。

平馬 この裏でかくれている。

と、拝殿の裏にいく。

三千歳 くる。

手を合せて何事か拝む後に、平馬ぬーと立つ。

三千歳 驚くじやありませんか！

平馬 もっと、驚かしてやる。

と、いきなり三千歳の手をつかむ。

三千歳 何をするんです！

平馬 良い所へ連れて行く。

と、その手を捻じり上げる。

三千歳 あっ！ 無体な！ 何を……

と叫ぶ口へ、後から三吉が手拭を押し込もうとする。

必死にかぶりを振った三千歳。

三千歳 誰か、助けて！

平馬 騒ぐな。三吉、早く口を塞げ……………と争う。

市之丞 無言で姿を現わす。

平馬 (ぎよっとして) 何奴？

市之丞 御遠慮なく——。

と、そのまま去ろうとする。

三千歳 あっ、お武家様！ 助けて下さいませ！

市之丞 知らぬ。人助けは御免だ。

と冷く言い捨てて去る。

平馬 (見送って) おかしな野郎だ。まあ良い。三吉猿轡だ。

三吉 へい。

二人がかりで三千歳に猿轡を嵌め、扱帯で後手に縛り上げると

平馬 駕籠屋、出て来い。

と、叫ぶ。

然し、駕籠が出て来ぬ。

平馬 (焦だって) 駕籠だ！

と、拝殿の裏よりノッソリ出たのは、宗匠頭巾の河内山宗春である。

平馬 やっ？

宗春 勇ましい事をやってるじゃねえか。何処の誰だか知らねえ

が、練堀小路の鎮守様で女を手籠めにするとは驚いたぜ。

平馬 貴、貴様は誰だ？

宗春 矢張り俺を知らねえのか、この宗匠頭巾を。

三吉 あっ、旦那、こいつは河内山宗春ですぜ！

平馬 何！ 貴様が河内山か？

宗春 やっと気付いたか、おい、そうと判れば女を離しな。気狂

いじやあるめえし、見れば可哀想に、ひどい猿轡を嵌めて、二人がかりで押えつけたら、さぞ苦しいだろうに……………平馬 ほざくな！

と矢庭に斬っかかるのを、軽くいなし

宗春 そうか、御覧の通り、おいらは茶道だ。だが折角の機会

だ、一寸剣道を教えて戴くか……………

と、立廻りになるが、忽ち平馬と三吉は、投げられ、蹴倒され

て、ホウホウの体で逃げ出す。

河内山は三千歳の縛めと、猿轡をとく。

宗春 とんだ目に遭ったな。さあ、行きな。

三千歳 有難うございます。私は柳橋の三千歳と申しますが、どう

ぞその辺迄、御一緒に……………

宗春 何だ、怖いのか。

三千歳 は、はい。

と、衣紋をつくろう。

宗春 だが柳橋の姐さんが、ゆすり坊主と悪名高い河内山と、一

緒に歩いて見な、すぐ変な噂が立って、お前さん首をつら

なきやならなくなるぜ。

三千歳 まあ！ ご冗談を。ねッ旦那、妾は今夜という今夜は、意

地も張りもなくりました。御願いでございます。明るい

所迄連れてって下さいな。

宗春 江戸で名代の鼻つまみ男と、それを承知で、お前さん頼む

のかね。

三千歳 はい。近頃は、女の拐かしが流行っているとか聞いています

し……………

宗春 成程。じゃ、裏の駕籠屋を叩き起として送ってやろう。

と、三千歳の手をとって、拝殿の裏へ行くと、伸びている雲助二

人を、活を入れて起こす。

宗 春 さつ。柳橋迄、この姐さんを送ってやんな。途中で変な了

見を起すと、こんどは承知しねえぞ。

雲 助 へ、へい。河内山の旦那は、江戸ッ子の守り神でございま
す。決して……

宗 春 ごまするな。じゃ、三千歳さん、縁があったら、又逢おう
ぜ。

と、去る。

◎（柳橋）

しだれ柳の下を、芸者達行き交う。

三味の音など聞えて――。

◎（料理屋の一室）

山崎和泉と森田屋清蔵いる。

和 泉 森田屋、其方から買入れた異国の火薬、良くきいたぞ。橋
諸共、十数人の男がすっ飛んだ。

清 蔵 左様でございますか、御役に立って、なによりでございま
す。然し山崎様、この森田屋清蔵もいつまでも御法度の抜
荷買をしても居られませぬ。くさっても鯛、徳川御公儀の
御威光がございます。

和 泉 うむ判って居る。棚倉藩は、因幡沼課役の不行届で、近く
お国替えになり、棚倉藩の封地は、そのまま徳川为天領と
なり、その代官役に斯く申す拙者が任命される事になって
居る。その時はその方を手代頭と致し、江州米三万五千石
は、我等二人の思いのままじゃ。

清 蔵 （にんまりとして）そのお約束をお忘れなく……。

和 泉 心配いたすな。これも皆、中野碩翁様のお力じやが、その
前に中野碩翁様にお渡しせねばならぬものがある。

清 蔵 雪姫様でござりますか？

和 泉 うむ。河内守はさすがに、いくら甘言を持って釣っても、

承知せぬのだ。此の上は、非常手段あるのみじゃ……。

清 蔵 その手段とは？

和 泉 雪姫は、棚倉藩の勘定奉行の息子、金子市之丞を心密かに
想っている様子。……それで……。

◎（廊下）

直次郎、立聞きしている。

◎（別の一室）

直次郎入って来て、胡坐をかい腕組み。

直次郎 森田屋の奴、どうも金使いが荒いと思つたらとんだ鼠だ。
それにあの山崎和泉とかいう家老……おいらも悪党だが、

こいつはどっちに味方するか、とっくり思案をしなくちや
なるめえ。

と、独り言。

お冬、ちよう子の替りを持って芸者姿で入ってくる。

直次郎 もう、ぼつぼつ帰ろうと思うんだが……

冬 まあ、森田屋さんを置いてお一人で、ですか？

相次郎 何、森田屋とは、ちよいちよい一緒にくるが、あんな野郎
と、おいらは仲間でも何でもねえ！

直次郎、いきなりぱつと蹴ね起きると

直次郎 おっと、今、思い出したが、お前がこの三千歳姉さんを
たよって江戸へくる途中、金子市之丞とかいう侍に助けら
れたとか話した事があったな……。

冬 直さんは、市之丞様にお逢いになりました？（と喜色が浮
ぶ）

直次郎 いや、まだ逢った事はねえが、聞けば護送中の御用金を奪
われて、浪人をしているのは本当か？

冬 はい。それにお父上迄、曲者の為に斬られて……

直次郎 よし。決めた！

と、坐り直して

冬 まあ、何を決めたんですの？

直次郎 お冬さん、おいらも片岡とか直次郎とかいわれる河内山の

弟分だ。悪に強けりや善にも……だ。実は、その市之丞さんと、その棚倉藩に大変な事が起ろうとしているんだ――。

◎（廊下）

森田屋、何か不思議そうな面持でくる。

向うから三千歳くる。

清蔵 おう三千歳。直侍を知らねえか？

三千歳 直さんなら、つい今、急用が出来たから、先に帰るとか言
つて……。

清蔵 急用だ？ ふん、あんな野郎にも急用があるのか。

と、言い捨てて去る。

お冬が一室から、手招きして

冬 姉さん、一寸。

三千歳 何？

冬 お願いがあるの。

と真剣な表情。

◎（一室）

お冬と三千歳話している。

三千歳 そう。山崎様と森田屋さんが、そんな悪だくみをしていた
の……。

冬 姉さんは、河内山様とは知り合いなんでしょう。

三千歳 まあね……。 （と苦笑する）

冬 河内山さんは、江戸っ子の守り神様と言われるお方。姉さ
ん河内山様に一切話して、お力になって貰って……。

三千歳 でも、直さんがいるじゃないの？

冬 直さんは、江戸中の遊び仲間を集めて、市之丞さんを探し

出すと言っていました。

三千歳 じゃ。妾が練堀小路へ行つて、旦那に話して見るわ……。

◎（夜道）

三千歳、小走りにいく。

◎（境内）夜

三千歳くる。ギョツとして立止る。

平馬と三吉と出合ったからだ。

三吉 あっ、旦那、三千歳ですぜ。

平馬 うむ。天の助けだ、それ！

と、二人襲いかかる。

◎（拝殿の中）夜

後手に結わかれ、猿轡を嵌められた三千歳が横たえられて、腕い
ている。

平馬 三吉、一寸酒でも飲んでこい。

三吉 えっ？ 駿河台のお屋敷へは？

平馬 あの離れ座敷に入れられた女は、肌があざだらけになる。
すべすべしているうちにナ……。

三吉 ヘッヘッヘッ、じゃ、酒手ははずんでおくんなさい。
と、いやしく笑って手を出す。

◎（境内）

拝殿の方を振り向き振り向き三吉去る。

◎（拝殿の中）夜

三千歳を膝にかかえている平馬。

……う、うー

と身をもむ三千歳。

平馬の手が、三千歳の両手を縛った扱帯を解いた。

夢中で、平馬を引っ掻く三千歳に構わず、帯に手をかけぐいと引
くと、裾をひらいて転がる三千歳の体。

襟に手をかけ、着物と長襦袢をむしりとる様に剥ぐ。
夜目に白く、盛り上る乳房。
その上から、再び扱帯が巻かれて、三千歳の両腕は背中で縛り合
わされる。

必死に悶える腰のもの一枚の三千歳。
突然、平馬は
——わあっ！



雪姫が立ち上って
肩で節下の
逃げようとして
雨戸を押して

と叫んで倒れる。
一隅のくらやみから、立ち上る市之丞。
三千歳の縛めを解き乍ら
市之丞 安眠の妨害になった。着物を着たら、さっさと、出て行っ
て貰おう。

◎（境内）夜
直次郎と遊び人風の男くる。

直次郎 じゃ、その浪人てのは、毎晩こ
の拝殿を宿にしているんだな
男 へえ……………。

◎（一室）夜

雪姫が琴を弾いている。
腰元がそーと襖をあけて入ってく
る。

腰元 雪姫様、これが落ちておりま
した。

と、一通の書面を出す。

雪姫、それを受取って裏を返し

雪姫 あっ！ 金子市之丞！

と驚く。

◎（庭）

植込みのかげに、姫と腰元が近寄っ
てくる。

雪姫 市之丞、市之丞——。

突然、黒影が襲いかかる。

雪姫 あれ！

と、叫ぶ口に小布れを詰める。その
上から白布で縛ると、悶える雪姫を軽

々と担ぎ上げる。

腰元は、今一人の黒影に斬り仆されている。

◎（屋敷の塀外）夜

金銀のついた立派な駕籠に、覆面の山崎和泉がいる。

雪姫を抱えたまま、黒装束が飛び下りる。

雪姫は、足をばたつかせて必死の抵抗をするのを構わず、和泉が細引をぐるぐるとかけ、後手に縛り、駕籠の中に押し込む。

◎（練堀小路の河内山屋敷）夜

門も朽ちて、庭も荒れ放題。

◎（その一室）夜

河内山、直次郎、市之丞、三千歳いる。

河内山 —— そうか、直。お前も矢張り人間の血が、通っていた

な。どっちへつくか判断に狂いなかったぜ。ついでに今一

役、袈裟法衣、中啓から数珠、駕籠、供廻りを抜かりのね

え様、算段して来い。

と、懷中より切餅を気軽るに出す。

直次郎 合点だ。

と、それを捻じり込んで素っとなで出る。

河内山 市之丞さんとやら、お前さんには供頭を願いましょうか？

市之丞 何処へ？

河内山 決ってるじやございせんか、今飛ぶ鳥落す勢の大御所様

側近中野碩翁。場合によってはお数寄屋坊主の河内山が、

碩翁と刺し違え、お前さんはそのすきに、雪姫を救い出し

山崎和泉の悪事の証拠を握っておくんなせえ！。恐らく和

泉も、今頃は駿河台へ行ってる頃だ。

◎（夜道）

駕籠をはさんで山崎和泉と森田屋、黒装束が急いでいる。

◎（駕籠の中）夜。

雪姫が、必死に猿轡と、縛めをはずそうと蹴っている。

◎（中野碩翁屋敷裏門）夜

お冬が、うろろうと様子をうかがっているが、駕籠の一行を見てかくれる。

一行来て、周囲を警戒し乍ら裏門より中へ——。

森田屋一人後から来て、お冬を見付ける。お冬は、つとする。

清蔵 おや？ お冬じゃねえか？ 何で、こんな所で……。

冬 はい、あの……。

と、どきまぎする様子に

清蔵 阿魔、今の駕籠を見たな！

と、お冬の腕をぐいとかむ。

◎（離れ座敷）夜

雪姫が、夜具の上で身を蹴っている。

◎（庭）夜

山崎和泉と黒装束、離れの方からくると、森田屋が、お冬の腕を捻じり上げてくる。

和泉 森田屋、その女は、柳橋のお冬ではないか？

清蔵 へい、裏門でうろろうしてましたので？

和泉 裏門で？ 怪しい奴。何故、当屋敷をうかがうか、申せ！

冬 知りません。私は、何も知りません。

和泉 （にやっとして）おい、此の女を木につないで一責めして

見い。

黒装束、お冬の扱帯を解き後手に縛り上げると、小突き乍ら引っ

張って、立木につなぐ。

和泉 女の悲鳴が屋敷の外に聞こえぬ様、猿轡を嵌めてやれ。

むごい猿轡が、お冬の顔半分を覆う。

和泉 不具にならぬうち、申した方が身の為だぞ。

お冬は、首を横にふる。

和 泉 なぐれ!

黒装束が拳でお冬の頬を力一ぱい張る。
続けて、二度、三度。

お冬の髪が解け、櫛、簪が飛ぶ。

和 泉 まだか? 続ける!

五度、六度——。頬に喰い込んでいた猿轡が遂にすり落ちて、布を噛む口から、血がにじんでくる。

和 泉 まてまて。

と猿轡を締め直して、刀を鞘ごと抜いて、縛めに絡み、ぐいぐいとねじる。

……うー、うーッ。

悶絶せんばかりに、苦しむお冬。

◎ (離れ座敷) 夜

雪姫が立上って、肩で廊下の雨戸を押し逃げ様としている。

雨戸は頑丈で、ビクともしない。

と、中野碩翁入ってくる。

手に鞭。

雪姫、恐怖のあまり、あとずさり、とうとう、室の中に入り、夜

臨時増刊号

△限定版▽

『サデイズム特集号』 定価 三五〇円(送共)

マニア垂涎の傑作満載! 残部僅少です。

お申込は 大阪市

阿倍野郵便局私書函第十四号

秘蔵豪華口絵 二十七点

天 星 社

秘作グラビア写真 八十一葉

振替口座大阪第五〇〇四二番

具につまずいて、倒れる。裾の花模様。

碩 翁 ほ、ほう、姫御前があられもない

と、雪姫の肩をつかむ。

喘ぐ胸——。

ニンマリとして

碩 翁 何を、そう怖い目をして睨むのじゃ。そうか、その猿轡が
気に入らぬか。

と、白布を解く。

碩 翁 ほ、ほ、ほ、ほれ! この白布にそなたの可愛い口紅が写っ
ているわ。どれも一つ、お口を開けて……。

と、口の中から小布れを出してやる。

雪 姫 (息をはずませ乍ら) わらわを、何としやるのじゃ?

碩 翁 何もせん。ただ可愛いがってやるのじゃよ。

と、目を細めて、雪姫の顔をのぞき込む。

雪 姫 このような轡など、浅ましい。さっ、縄をお解き——。

碩 翁 よしよし。

と、細引をとく。

雪姫乱れた裾など、とりつくろい、坐り直して吃と碩翁を睨む。

雪 姫 さあ、わらわを帰してたも。

碩 翁 よしよし。だがその前にな、一つ姫に御相談がある。わし

は、中野碩翁じゃ。

雪 姫 えっ!

碩 翁 大御所様側近であり、現將軍家の母堂、お美代の方はわし
の娘じゃ。このわしに此の世で出来ぬ事は何一つない。た

だ、わしに少し悪いくせがあつてな……そのくせを、雪
姫がうんと聞き入れて呉れたなら、姫の兄上、棚倉藩三万
五千石、井上河内守のお家も、また安泰じゃよ。

雪 姫 (恐る恐る) その、くせとは?

碩翁 姫の様な……

と、雪姫の手をとって

碩翁 羽二重の様な、雪の肌を、この鞭で、――。

雪姫 えッ！

とはじかれた様に、碩翁の手をはらいのける雪姫。

碩翁 (形相を変えて) 姫も、矢張り嫌か！……。

と、立上る。

◎(庭)夜

髪も、衣紋も乱れ放題に乱れているお冬が、気を失っている。

和泉、汗を甲で拭って

和泉 しぶとい女め、水をかけい。もう一責めだ。

◎(離れ座敷)夜

帯をつかまれて、引き戻されている雪姫。

雪姫 あれ！ だれか！

碩翁 いくら喚いても、誰も来ぬ。素直に言う事をきけ！

くるくると金糸銀糸の帯がとけて、畳に這う。

◎(玄関)夜

式台鼻へ、ぴたりとついた駕籠一挺。

駕籠を出て、すうーと立った袈裟、水晶の念珠をつまぐる河内山
慌てる取次の者に

直次郎 夜中ではござるが、一品親王御内意の火急の御使者、然

様、中野碩翁様へ、御内達あられましよう

と、素早く耳打ちする。

◎(離れ座敷)夜

帯、扱帯、紐、二枚重ねの衣裳、すべて絢爛たる色彩が一面に散
って、今は、髪も、乱れ、長襦袢一枚に剥がれた雪姫が、碩翁の腕
の中に、抱きしめられている。

碩翁の指が、長襦袢の襟をはだける――。

肩も、乳房も、太腿もあらわになって、絶え難い羞恥に、失神せ
んばかりの雪姫。

と、取次の声

取次 御前様。一品親王の御使僧でござります。

碩翁 何！

と、バリバリとはがみをする、思い切れぬらしく、

碩翁 たわけ！ 何故通した！

取次 火急の御用との仰せ――

碩翁 今参るわ！

すでに、ぐんなりとしている雪姫の唇をこじあけると、小布れを
詰め込み、その上から白布で猿轡。細引で、後手に、腰も、腿も、
足迄揃えて縛りあげると、

碩翁 ご、ほん！

と咳払い一つして出ていく。

入れちがいに入って来た市之丞

市之丞 おお、姫！

と、抱き上げる。

◎(庭)夜

お冬の側に直次郎、そっと来て縛めをとく。

◎(一室)夜

河内山、碩翁に一礼して出て行こうとする。

碩翁 待て坊主！

河内山 坊主とは？ 身不肖ながら一品親王の御内意による使僧で

ござるぞ、坊主とはちと慮外ではござらぬか

と、にやりとする。

碩翁 御使僧などとは真赤な偽り、まことは下谷練堀小路、御数
寄屋坊主の河内山であらう！

とたんに袴の股立高く、刀の柄に手をかけた侍が押取り囲んだ。

河内山 何を証拠に？

碩翁 証拠は、手首の入墨、水戸家ゆすりの二の手か。

河内山 はい、しまった、事露顕か……。

斬りかかる刀を、持った中啓でぴたりと押えて

河内山 おう、河内山なら何とした。おいらをここで殺すと云うのか。はっはっは、おいらは、そんな悪い事はしねえぜ。だが殺すと云うなら殺されましょう。が、大御所様御側近の一万石と引つかえだ。おう碩翁、離れ座敷の雪姫はな、

碩翁 な、何と！

河内山 慌てるねえ！ おいらの手の者で救い出した。おいらはこれでも天下の御直人だ。恐れ乍らと、子分達が雪姫を生証拠に、御老中水野越前守様へ訴え出るのは覚悟の上で、殺して見ろい！

と、でーんと胡坐をかく。

河内山 春とは名のみ肌寒く、大名屋敷の吹きっ晒し。どうするんだ。さ、早くしろい！

と、ふんぞり返る。

碩翁、がらりと態度を変え、猫撫声で

碩翁 あいや、御使僧、並々ならぬ御心底、誠に以て敬服いたしました。只今のはほんの愚老の戯れ事、就いては些少ながら、冥加料を

と、河内山の肩を叩く。

河内山 おっと、それならこちらで注文がある。この屋敷に出入りする棚倉藩の家老、山崎和泉と、森田屋清蔵の身柄を、井上河内守に引渡すこと。山崎和泉の御用立金強奪罪、森田屋の抜荷買迄、將軍様のお父上が、引きかぶるには及ぶめえ——。

◎(街道)

井上河内守の行列がいく。

雪姫の駕籠に連れ添う市之丞。

見送る河内山、直次郎、三千歳、お冬。

河内山 水野様が御大老になった途端、中野碩翁は御役御免、押籠蟄居。之で天下の政道も賄賂から立直れよう。おう直次郎よく聞けよ。之からは、俺やお前の様な屁見てえな悪党なんぞが、大きな面をしていらなくなるぞ。

と、高笑い——。

完

女体緊縛フォトE組 9×13Cm印画紙焼付

ES1 ヌード緊縛集

モデル 佐賀美智子嬢

三枚一組 二五〇円

ES2 全裸悦虐集

モデル 須川 令子嬢

四枚一組 三〇〇円

ES3 臀 羞

モデル 佐賀美智子嬢

三枚一組 二五〇円

ES4 酒宴の弄者

モデル 佐賀美智子嬢

二枚一組 二〇〇円

ES5 脱がされる娘

モデル 須川 令子嬢

五枚一組 三五〇円

ES6 あわや寸前

モデル 佐賀美智子嬢

二枚一組 二〇〇円

ES7 剥れたズロース

モデル 佐賀美智子嬢

五枚一組 三五〇円

ES8 乙女のすべて

モデル 花坂 道子嬢

七枚一組 四五〇円

ES9 女学生の縛り

モデル 須川 令子嬢

二枚一組 二〇〇円

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル 佐賀美智子嬢

六枚一組 四〇〇円

魔

教

圈

No.

8

(その十一)

土

路

草

一

(一) 屈伸テスト

比奈地路子は、さめざめと泣いていた。
押えようとしても、咽喉に絡む鳴咽は自然
に声となって唇を震わす。

無理もないのだ。見るともなく見える壁面
に掛っている大型の鏡に、己れの哀れな惨め
な姿が、まざまざと写っているからだ。

もうその姿は、気品に充ち溢れた比奈地家
の令嬢の容姿ではなく、鉄と革の装具に彩ら
れた浅ましい獣畜の肢体であった。

息づいている純正な乳房の間を鎖が通り、
輓具のように胴のベルトに接続している。

(ベルトの輪の寸法は家畜の身長と体重に
応じて割出される。それも普通の標準を遙かに
上廻り、商売柄、食事を制限して整えるファ
ッションモデルでもない限り通用しない細い
ウエスト巾であった)

ベルトは皮膚にめりこむ程ではなかったに
しても、腹部を圧迫して息苦しい。

足首には囚人のように鉄輪が嵌っている。
間隔を閉して、輪と輪が後手首と同様、密着
して錠されている。

いや、それよりも世に稀な佳女を畜類らし
く見せるのは、嵌められたばかりのステンレ
ス製の鼻輪と真新しい革の頭帯だ。

鈍い銀色の金具が、美貌を惹き立たせてい
た素敵な鼻梁の内部を刳って上唇の上に垂
れ、ごつい鞣皮が、汗止めを兼ねて智的な広
い額を巻いている。

その頭帯からビニールコードで繋がった樹
脂栓が両耳孔に嵌めこまれ、鼓膜の機能を奪
い取っていた。否、奪い取っていたと云うの
は当たらない。耳覚を限定していると云ったほ
うがよいだろう。

耳栓は一種のイヤホンである。

頭帯の内部に小さな受信器がついていて、
ミニチュア送信器から発振される言葉を伝え
るのだ。家畜の耳は、送話器から送りこまれ

る言語以外、一切の音響を遮断されて了う。そして命令受領に疎漏があると、送信者に依って耳孔の奥の粘膜に、罰の電流が通される。電流は弱いけれど、受感するところは紙が触れても痛い個所だ。家畜は瞳孔を逆剥いて、頭骸を割る痛みに悶えねばならない。

これは調教用具の一つである。

一々、近づいて鞭を振う方の要らない所謂、遠隔操縦が出来、家畜の聴覚を占領して主人や調教師を唯一無二の存在と知らしめ、恐れ畏こむ効果を狙ったものである。

路子は濡れた頬を俯向ける。己れの不憫な姿を見るに忍びなかったからだ。……が伏眼となれば、否応なく紅い乳首と大理石のような純白な腿が眼に入る。

それは自宅のタイルの浴槽で、愛しみの眼差でしげしげと眺めやうた柔かい肌であった。自愛して丹念に磨いた嫺やかな肉体であった。

それが今、タイルならぬ灰色のコンクリート床で己が意志では動かせぬ肉塊となったのだ。自分の血が通い、自分の神経が通じているのに……。

肌は、真黒に染まっている己が心に関係なく、絢々と艶やか肉付している。

「ああ！」乙女は吐息する。

これが数日前まで、清新潑刺としていた明眸の令嬢比奈地路子なのだ。

これが叡智に輝いた美貌の女性、比奈地路子なのだ。

乙女は留めようとして留まらぬ涙を拭う手すら持たなかった。滾々と湧き出す涙滴は頬から円い腮を流れ、跼んでいる滑らかな膝に滴たった。

路子は蹲って、鼻輪と鉄杭に繋がれていたのだ。

イレ助教士が寄って来て、緋白な手首と咽喉に、電気計器らしいコードのついた器具をしっかりと装着する。

何か云ったらしいが、蓋されている家畜の耳には聴こえなかった。

これは、その時々運動状態や体勢変化につれて増減する路子の脈膊と呼吸を、後部に備えてある記録計に、コードを通じて送る電波発振器である。

黒い少年は歎歎くっている優美な肩を、平手でどやしつけて荷籠を背負わした。

ずしりと重い。路子は腰をふらつかせて膝を曲げた。

「お前の屈伸機能と腰力を調べる。スイッチが入ると、鼻輪に繋がっている環が上下動する。それに合わせてお前は立ち上り、屈む運動を繰返すのだ。視準回数を超えないと、その躰は飼育に価しないとされて肉処分にされるぞ。ま、俺にとっちゃどっちでもいいことだが」

イヤホーンに、フーガの年少者と思えぬ嗶声、情誼の葉を一本だに示さず冷酷に響いた。

路子は、はっと顔を起して、調教師の姿を捜す。

「私を殺しても構わない。万物の霊長である夢多き乙女を肉牛のように屠殺処分にしても一向に差支えないと云う」こんな、こんな無惨な言葉があるだろうか？何の罪咎もなく、何の悪心も抱いたことのない清浄な私を、なる肉体の強弱だけで殺そうと云うのか？まだ人生の半ばにも達しないうら若い乙女の命を、まるで豚を屠るように簡単に奪いとうとするのか？

その言葉が、温情で疵ってやった少年の口から出ただけに、路子は氷の刃で刳られたように清らかな胸は凍結した。

イーベラに云われ、その通りを重ねてフーガに云われ、語調は正に路子の生命なんぞに一片の関心も執着も示していないとなれば、人を信ずることの厚い女性とても、改めて強烈な脅威を実感しない訳にはいかなかった。

あの時も、フーガはイーベラの命令を神のお指図のように忠実に実行していたわ。今も云われた通り実行するだろう。女主人が私を家畜と云ったからには、彼の心も私を畜類とするに決っている。豚に等しいと信じているのだわ。私の生命を絶つことに、良心の波立

ちなど、かけらもないに違いない。鵜の首を縊るように無造作に屠つて了うだろう。フリーガはそんな人間なのだわ」

路子の行い秀れた頭脳は、極端な境遇に抵抗出来ず、悲しみへ、歎きへと陥ちて行く。

そして最大のショックに当面して、一本一本髪の毛が逆立つような思いで、みるみる全身の血を退潮させた。

前には奴隷と蔑すみ、惨めな黒人と憐れんだ少年を……今は己れの生殺与奪の権利を握る絶対権力者として意識し始め、怯々と姿を求め、情を求めて、戦慄した肌で枷具を鳴らした。

フリーガ調教師は美畜の背後にいたのだ。藤製の安楽椅子に寝そべり、両脇の家畜に雑誌を掲げさせて眼を走らせていたが、イレ助教士に合図を送る。

黒い疣が、ぱちんと上がった。

鼻鎖がキ、キ、キと弛みを無くして行く。

路子は、ぎくっと反射的に中腰になり、不安な眼で、移動しつつある環を追った。

鉄鎖の下部に付いていた環は、杭の表面に縦に刻まれた溝軌道を垂直に上って行く。

釣られて路子は脛を立て、腰をきる。

籠の重みがずっしりと背中に掛って、膝が伸びる前に屈んでよろめく。体を立て直す足は錠で締まっている。重心を失いかけて腰がふらつくと、キ、キキと張った鎖が雅趣の鼻を

がっつと引摺り上げた。痛撃が鼻筋を走って「ああっ！」

と悲鳴する。ぽろぽろと響いた筋痛が、涙となり、鼻液となって溢れ出る。

が、環は容赦なく登攀する。路子は乳房を杭に擦りつけるようにして、均整のとれた脚線伸ばす。踵が上がり、小さな足首が爪立った処で、鎖は停止し、逆転して下降する。

路子は腰を落す。吊り下げられた牛肉のような姿から、白腿で杭を挟み、臀部を突き出した動物的な姿になって軀を縮める。

体操するように、がくんと勝手に踎むことは出来ない。環の下降速度に合わせて徐々と屈まないと、又、鼻筋が引き攣ることになるからだ。

センスのよい衣裳に覆われていた優雅な腰がデリケートな素肌の弾力を見せて墓蛙のよう^{ヒキガエル}に床にひしやげる。

又、鎖が上昇を始める。太腿が弾み、下腹が狼敗して、膝が伸びてゆく。

純度の高い筋肉は、力感を随所に表わしながら、生動の曲線を余す処なく描き出して行く。

幼児より物を背負ったり曳いたりする所謂力仕事と称することに、己が肉体を役したことの無い高雅な育ちの令嬢である。

均齊美を整えるテニスや水泳や舞踊などに人一倍軽妙な運動神経を持っていたが、そ

れと同じくらい、お花やお茶やピアノなどに精進して来た清楚な、たおや女であった。

それが、乳房や腰や腿の筋動きを、まざまざと鮮美な素肌で表現しながら、輓牛のように鼻輪を曳かれて重荷を上げ下げする。

ヴィナスと讃えられた美姫の顔容が悶え^{カバセ}み、蕾に形容された紅唇は乾いて息をする。そして豊麗で繊細な皮膚から、じくじくと芳しい苦汁が惨み出てくる。

ああ、イーベラとさえ知合わなかったら、路子は品位ある令嬢として、豊かな財に恵まれ、暖い情愛に包まれ、洗練されたデザインで身を飾って、幸福な楽しい生涯を送れたであらうに……。

偶々、鬼女と交際してしまつたが為に、口や手足の機能を封じられ、鼻面を文字通りこづき廻されて、肉体力の限界を検される。そして精魂の限りを振り絞られた果ての彼女の行手には、屠殺か、呻き跪き悶える畜生暮ししか展けていなのだ。

(二) 人畜の区別

フリーガは活字から眼を離して、美女の背面に、ちらっと流し眼をくれる。

ふっさりと仄かな香気の潜む黒髪が革紐で束ねられて、至美な衿あしがすっきりと白い。その下で漆黒の毛先が、ゆさゆさと剥き出しの搦肩に触れている。

美しい両上膊に挟まれた清浄な背肉が、呼吸の激苦を伝えながら起伏して、昇降している。

柔かく満々しい餅肌である、その肌に蔽われた豊満な腰肉が更に張満し、弾性の太腿が屈伸の辛苦で更に弾躍の運行を繰返す。

きらきらと透明な汗玉が吹き濡れて、艶やかな凝脂の上を転がり落ちる。

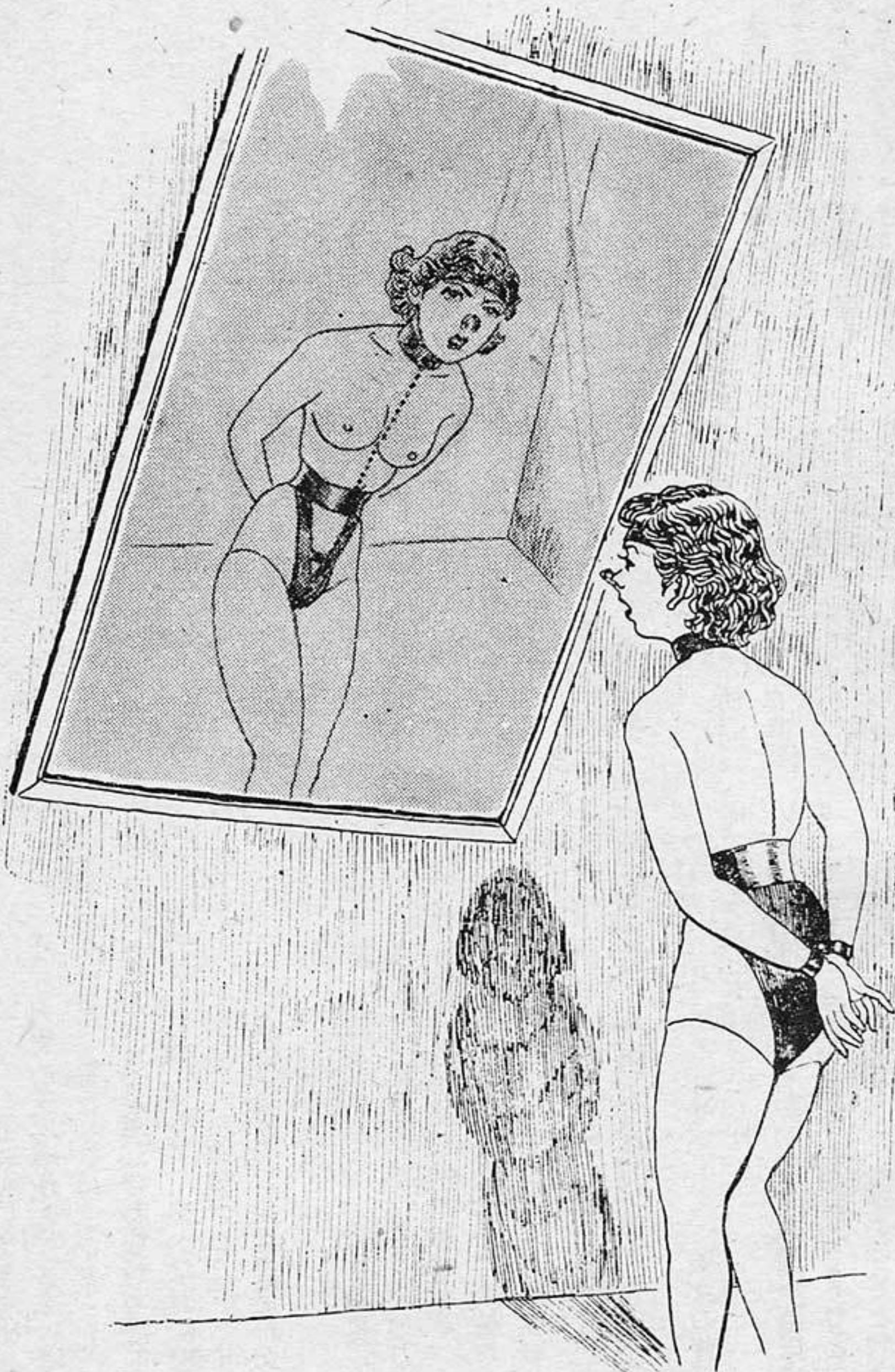
フーガの頭脳は、いつしか、且つて見た淑やかな令嬢の姿を消していた。

あの物静かでやさしく、深い教養を蔵していた叡智の女性の面影は散り去っていた。

今、彼の冷笑の走る瞳に映じている純肌の後姿は、ニュアンスに富み、繊細微妙な光沢を有しているとは云っても、何等変哲のない脆弱な一匹の肉塊であった。

リファインされた華麗な布地で粧われていた高雅な乙女の姿と、同一視せよと云うほうが無理だろう。

他畜同様、白肌に畜具を装着され、器械の作動に依って末梢神経までも動員して、肉や筋の組織を審らかに展示している路子は、あでやかな畜生に過ぎない。



眼も彩なと云っても、フーガにとっては見馴れた牝畜の侮蔑すべき姿であり、その肉体構造の堅牢性、能率性、ひいては飼育上の経済性を見極め、品質管理せねばならぬ手の掛かる代物であった。

フーガは使役畜に、椅子を路子の前面に押

し進めるように命ずる。

併し、前から乙女の苦悶を見ても、それは同じことだ。

麗しの乳房は犬猫のそののように、ぶるんと躍り上り、柳の眉は拉がれて寄り、朱唇は馬の口のように荒々しく息使い、聰明

を沈めていた湖水の瞳は、哀れっぽく奔血からの解放を訴えている。

その精神阻喪した姿形から、高々とした胸を洒落れたジャケットで包み、嫺やかな腕で小意気にバッグを抱え、颯爽とパンプスの足を捌いていた乙女を推測出来ようか。

「異常な環境に対しては異常な反応をする。」

それがノーマルな人間の徴候である」

と「夜と霧（ナチスのユダヤ殺戮）」に就いて、フランクフルは説明しているが、彼の云うナチス親衛隊員のように、フーガや助教士達は、慣れで感情も感覚も、鈍磨して了っている。と云うよりも、単純な頭脳へ、幼時から、それが正しいことなのだと思ひこまされて行動していたのである。

あながち、フーガを異常な性格の持主と云うのは当たらない。彼は黒天使教を至上と考へ他宗や他の社会、云い換えれば、正しい人間同志の営みを知らないのだ。

だから、この場合、路子を家畜視するのは当然であつたし、却つて魔教団にとっては立派な有為な青年であつたと云えるのだ。

逆に路子をユダヤ人の立場に置き替へてみれば、アブノーマルな環境は徐々に正常感覚を奪い去り、家畜暮らしに順応してゆくに違いない。

精神的に崩壊させられ、儚ない希望の幻影を描き、朋輩に対し嫉妬し、猜疑し、魔教団

には阿ねり寵愛を得ようとする。

そうするより他に彼女の生きる道はないからだ。

喘ぎが洩れる。くらくらと脳髓が空になつてくる。

「フーガさん、助けて！もう許して！」

廻らぬ舌に代つて澄んだ瞳が露で訴える。

その苦渋に崩れた泣顔に、調教師は冷やかな視線を配したが、美貌の心底を洞察して、ふと激昂の波頭を表出する。

「こいつ！知合だから情に縋ろうっていうのか？おい！知合だから尚更お前の鈍な頭に、はつきり人畜の区別を叩きこまなければならぬんだ。いいか！俺を甘く見ちゃいけないよ。このまま掛けっ放しにして、お前を疲れ死させることだって出来るんだぜ。俺の眼には、まだまだその躰が倒れるまでには、たと間があると映っていらあな、牝！鞭の気付けをくれてやるから、しやんとしろ！」

イヤホーンが、がんが響いて、路子の胸に轟々と氷河が流れる。悲しみの氷柱が鳩尾から突き上り、寒風は清教徒のような清らかな、僅かな期待を塵一つ留めず、吹き飛ばしてしまふ。

「こいつの為に朝早く起されたから一眠りするぜ。イレ、鞭したらお前も憩めよ」

助教士は頷く。だが、路子は一体どうなるのだ？渦巻く筋肉の痛みに呻いている路子を

器械に固定したまま、憩おうとするのか。

イレ助教士は、ほくそ笑みながら鞭を振り上げる。

鈍重な少年は、最初に背へ、返して上胸へと、打つ個所の順序をもう度一反芻しながら、うづうづしたどんぐり眼で白磁の皮膚を見下す。

こいつに俺の威信を植えつけてやるんだ！愚昧な少年は明媚な乙女の跼む処を狙つて、やおら鋭い皮音を、香り高い裸肉に響かせる。

ぴしっ！

「あっ！」

清美な乙女は蛮人の無道に、けたたましく悲鳴して、がくつと体をのめらせる。

「まだ鳴けるじゃねえか！その鳴き方で疲れてるなんて図々しい奴だ。こいつ！」

ぴしっ！

力の籠った黒皮が矢継ぎ早やに炸裂する。

「あっ！ ああっ！」

ずずつと吊り上りながら、鼻痛で粘液を放出させながら、美女は怒濤のような恐怖に粟立った。

「狡けるな！お前達の体つてのは正直でな、力が無くなれば鳴き方も変るし、瞳の色だって違ってくるのさ。下手に偽装しやがると、この鞭が承知しねえからな！そらっ！」

ぴしっ！

伶俐な心は恨みも期待もすつ飛ばし、只管

総毛立つ。

この人達は私の軀の極根を見透しているらしいわ。立たないと、すっかり上下運動を繰返さないと鞭は停止しないのだわ。さあ、早く足を踏張るのよ。急いで胸を立てるのよ。理智の脳髓は、びりりっと肌を貫く痛みに迫立てられて、灯びを消し、畜体の具象を競々と自身に云い訊かせる。

誇り高い淑女が、黄褐色人の理由なき鞭にぶるぶると戦慄し、訳もなく膝を伸ばし腰を起して必死の運動を反復する。

明朗で慎み深かった乙女が……。

イレ助教士は気持よさそうに、手応えを楽しみながら腹へ腰へと打ち返してゆく。

その家畜の苦悶は手首や咽喉に装着された器具に依って、屈伸時間や回数共々、明細に記録され、オーディオメーターに依る悲鳴の音程も詳細に計られていたのである。

やがて調教師達は午睡の為に部屋を去る。彼等は快適なマットレスの上に寝そべり、心地よい軒を發してまどろむ。だが美女路子は妙なる佳身を残力の限りを尽して躍動させ、絶息の慄影に晒されながら耐え抜かねばならないのだ。何と悲情な弄びであろうか？

(三) 恋畜同志

イーベラ・マックコインは日に二度入浴する。

と云っても朝はさっとシャワーを浴びるだけだが、夕方はバスの中で念入りに垢を落す。浴槽に浸った儘、温もった軀を家畜達に羽根ブラシでマッサージを兼ねて擦らせるのである。齊戒沐浴させられた家畜達は、畜歴に依る階級区分に従い、上位畜から御主人の顔、髪、胸、左右の腕及手、腹、腰、左右の脚と分担して丁寧に洗うのである。

勿論、丹念にやり過ぎて御主人の肌を傷けないまでも痛い思いをさせたら、それこそその数百倍にも当る痛みを甘受せねばならないし、と云って粗末な洗い方をしたら、不勉強家畜とされて肉の叫びを数時間響かせねばならない。

そして、イーベラは気紛れなのである。

その日その日に依って気分が違ふ所謂、むら氣の持主である。

だから彼女に仕える家畜達は、常に断頭台に臨んでいると云っていい。数匹の家畜が生体実験されたり、変形されたりしているのだ。

兼見規子はイーベラの右腕と掌を洗っていた。美しい手である。

透き通るような真白な皮膚に包まれて、柔かく弾む二の腕。すんなりと開いて、ふっくらと温かく、磨かれた爪が桜貝のように紅い掌。

規子は腕を流し終ると、そっと宝石にでも

触るように御主人の拇指を挟み、指間から関節、指先から爪の間とブラシに全神経を集中させて洗っていった。

ふと緊張の中で、この掌と同じ美しい手指の持主を憶っていた。

甲の上にぼくりと笑くぼがあり、至妙な皮膚細胞に覆われた滑かな手。可愛らしい内に何処か知の翳りがあつた素敵な掌だった。

思いがけないことに、その麗しい手を規子は今朝見たのである。

それも、後に廻り固く交叉され錠されている形で……。

規子は控畜として御座所の入口、緋のカーテンの傍でその有様を見た時、思わず、あつと息を呑んだ。

嘘ではないのか？違ふのではないのか？規子は瞳を凝らして、軽く握っている手の姿を眺めた。そして半信半疑の眼差を嬶やかに肉づいている肩へ移し、横顔を覗きこんだ。

やわらかな耳朶、愁いにしばたたいっている睫毛、豊かな頬……。

それは間違いなかった。

規子の胸は暗雲に閉ざされる。それはやっぱり彼女の従姉、比奈地路子のうらぶれた姿であつたからだ。

「みっちゃん！路子さん！貴女も、貴女もとうとう来て了つたのね。貴女だけはこんな暮しをさせたくなかった。やさしく思いやりの

ある。白菊のような貴女だけは……。

「規子の脳裡に、幼い頃から可愛いがつてく
れた。従姉の暖かな愛情が蘇って来た……が
それにのしかぶって、この国で自分が受けて
来た地獄の種々相が、走馬灯のように駆け廻
り、それが、これから路子の上に降り注ぐこ
とに思いが至ると、仲好しで甘えん坊だった

従妹は冷い絶望で声を嚙んだ。

「路子さん！貴女はこれから苦しまなければ
ならないのよ。貴女みたいないい女が……。
こんな、こんな畜生の世界で呻き悶えねば
ならないとは……。路子さん、しっかりし
て！」

貴女はいつも正しい人だった。どんな時で

も良識を失わない人だった。此処は地獄よ。

生きていることがやっとの処よ。でも貴女は
きつと正しい人でいてくれるわね。私の柱に
なってくれるわね。路子さん！頑張ってね。
貴女は顔も姿も美しい。でも心はもっと美し
い人よ。此処でも、いつまでも心の美しい人
でいて頂戴」

規子は心の中で叫んでいた。打ち萎れてい
る路子に、己れの所在を知らせて元気づけた
かった。

併し、それは出来ないことだった。

上級家畜として轡は形式的なので言葉は出
るのだ。緊縛が緩めてあるから路子の前へ飛
び出せるのだ。だが、それは規子の終熄に連
がる。イーベラの仮借ない怒りは、傍若な家
畜が息絶えるまで鎮まないだろう。

が主人の前でなかったにしても、仕込まれ
て習性化した従属心は、反抗の劫火すら燃せ
ないに違いないのだが……。

曳摺られて退出して行く変り果てた従姉の
姿に、見せてはならぬ涙を、背向けるように
して床に落していたのである。

兼見規子はイーベラの手で思い出して、又
臉が濡れてくるのを覚えた。

今、路子さんはどうしているだろうか？フ
ーガに鞭打たれているかも知れない。あの奇
麗な肌が痛みで引攣っているかもしれない。
ぴしっと鳴る皮鞭に叩かれて……。



回想が勤務の力を抜く。イーベラの玉肌が路子の雪肌を連想させて、いじらしげに手を留めて眺めやった。

「何故洗わない？」

靦面に主人の声が頭上で詰問した。

家畜ははっと肩を竦め、狼狽して今度は作業に力を籠める。

「痛いじゃないの！ とんま。退がれ！」

罰は下った。退がれ！と云う言葉は刑罰を受けねばならぬことを意味する。

規子は弾かれたように二、三步跳び退り、床に平蜘蛛のように平伏した。

予備控畜が、さっと間を措かず奉仕の位置を占め、主人の手指の洗浄を継続する。

「賤しい家畜の大それた怠慢をお罰し下さいませ。鈍愚な畜生の心を、矯め直す御慈愛の鞭を戴かせて下さいませ」

規子は心ならずも震えながら喋った。

罪を犯した家畜は自分からそれを願わねばならない。さもなければ、その罪は倍加されて己が身に降ってくることになる。

「お願いで御座います。大恩ある尊い御主人様の肌に痛みを与えました罪深い家畜で御座います。御意のまま厳しく御処分を下さいませ」

額を擦りつけて懇願する。

柔かいブラシをちよつと強く当てただけなのだ。それが万死に価する罪を犯したように

刑罰を願わねばならない。

生命も意志も肉体も総て所有され、飼われていると定められているが為に、家畜は身動き一つでも主人の意に叶わないと罰を下される悲しい存在なのだ。

イーベラは振向きもせず煩さそうに聴き流す。このユーマ人にとって、こんな家畜の一匹や二匹の去就など意の端くれにもかかっていない。又、毎日美容運動代りに鞭を振り、肺腑の畜叫を聞いている身では、路子の様に自分から惚れこんだ特別な家畜でもない限り、先立って鳴かせる興味とてなく、調教員か畜長（家畜の最上位、即ち成績の最良畜で調教員の補助的な仕事をさせている家畜のことである）に適当に処分を任せるのが常であった。

だから、この家畜が出張中の同僚から預った家畜の中の一匹であることや、路子の従妹であり、絶美の令嬢に触手を動かす端緒を与えた家畜であることには気付いていなかった。

「キジタ！」

イーベラは氣に入りの、最近畜長に昇進させたばかりの牡畜を呼んだ。

キジタは男である。二十五才の筋骨逞しい美青年である。眉は秀で鼻は高く、唇は緊まり、女にみまほしい白い皮膚を持つ美丈夫である。

彼は南方海域で日本軍の頭脳と呼ばれた某作戦参謀の息子であった。家畜とされるまでは飛行機工場のエンジニアであり、父同様、将来を属望された明晰な頭脳の主であった。

運命と云うものは数奇なものである。彼がイギリスのジェット機工場の視察を終え、パリに立寄って一週間程滞在した。

この滞在で彼は二人の女性を知った。一人は妖麗のユーマ女性メーシイであり、一人は純情の乙女、兼見規子であった。

捕獲係メーシイは、男の技術的な頭脳の鋭さとその逞しい肉体に価値を認め、規子は男の識見に惹かれ厚い胸板に顔を埋めることを願ったのだ。彼の氣持の中に行きずりの旅客なんだとする意識がなかったら、その生活は正常な廻転を続けたであろうが、彼は一片の旅情として、二人の女に對した。一人は再び逢い難い白人であり、一人は故国で見馴れている同胞である。比重は白人に傾むく。彼は頭脳を畜脳に改造され、肉体をイーベラに売却されて、果遠い蛮国に呻吟する破目になって了ったのだ。

振り返り彼は臍を噛む後悔に悶えた。併しそれは既に帰ることのない宿命であった。そして、同畜の中に規子を発見した時の驚きと喜び、二匹は管理者の眼を盗んで、焰のように唇づけた。

勿論、此処では家畜同志の恋は認められて

はいない。厳しい法度になっていた。併し家畜にも心はある。異性者に恋情を抱いたとしても、表面に出ない限り飼主は法を執行出来ないのだ。

キジタは急ぎ走り寄って、素晴らしい筋骨を浴槽の脇に伏せる。

「連れてお行き！ 刑吏に計って適当に処置をおし！」

イーベラは二匹が恋人同志であるとは知っていない。知っていたとしても、規子に一顧も与えてない魔女は、意識して命じた訳ではない。偶然が、恋畜同志を刑の立会人と被刑者の立場に置いたのである。

逢瀬の少い彼女と彼女はすれ違う時でも、万感の思いを瞳に秘めて見交した。

お互いに相手のいたましい姿に同情と悲しみを抱きながら……

それが偶然にしろ、刑し刑される立場に置かれる。皮肉と云えば皮肉。余りにも苛酷な星の運命であつた。

が、喜びもある。僅かな時間にしても、労わり、労わられ、恋の言葉を交すことが出来る。人目を憚かってではあるが、しげしげと愛する者の姿を見、触れ合える。

家畜の、家畜と定められた男女の、佻しく朝露にも似た儚ない愛の灯びであつた。

規子は愛する者の前で、滑らかな腕を背に廻し、手首に嵌っている輪と輪を合せて、己

れで己れの自由をパチンと錠する。そして閉眸の美面を挙げ、真白な歯並を開く。

畜長キジタは鞭柄に舌袋を引掛け罪畜の口へ突込み、鼻輪に鎖をつけて、感情に震える手で、ぐいと曳張った。

「来い！」

誰も知らない恋人同志は恐れと喜びで胸を鳴らしながら退出していった。

イーベラはマッサージを止めさせる。バスの垢湯は備えつけの罐の中へ流れる。

新しい湯が注ぎこまれて石鹼泡がタイルに溢れる。家畜達は入念に香料入りの洗液をブラシに泡立てて、美肌を磨く。

それが流れるとミルクの温湯が溜り、女主人はうっとりとして美体を沈める。

最後に香水の仕上げで、バスタオルに包まれるのである。

「夕食には黒山谷子様が報告を兼ねて陪席されますそう、お迎えが参っております」

秘書が知らせる。

「そう」

軽く頷いたが、ドレスに通している腕をとめて、

「フーガに今朝入荷した牝を連れて来れるようにしておくと云つたいて頂戴」

「はい、承知致しました」

秘書が去ると家畜に手伝わして、ゆっくり化粧に取りかかる。

いやが上にも美しい女王が造り上げられていった。

(四) 屈曲テスト

山が崩れると云う形容がある。路子が今迄有していた社会の通念はがらりと想像を絶した崩壊を続けた。

五歩も六歩も譲歩していたつもりだった人間の権利も、人間の恩義も、人間の幸せも喜びも、その総てを壊さずばやまざる勢いで次々と襲来する。

そして肉体の限界をさ迷い始めた眼先は、ぐるぐると転回、天井も壁も床も、視線の映ずる個所は逆巻いて崩れ落ちていた。

「許して、フーガさん！ 後生です。もうやめて下さい！」

令嬢は売ったとは思わぬが、恩に感じて貰ってもよい程、やさしく遇した黒奴の報恩、否、一かけらの同情を希念した。

だが、調教師は寸豪の感情も示さない。せせら笑う眼を品評眼にして射るように注いでいるだけだ。

路子は馬蹄形に伸び曲っている鉄骨の下に立たされていた。

前後に通る鉄筋の高さは路子の背丈よりやや高く、下部へ来て狭まって、胫の附近では三十糎もない。

そして、顎に食いこみ頭帯を通った鎖が、

その鉄筋に接続しているのだ。

鉄骨には杭同様、溝が刻まれ、一定の早さで鎖は軌道を、前下へ、転じて後下部へと疾走しているのだ。

腰をしっかりと固定されている路子は、鎖の移動につれて上体を前へ折って頭を膝につけ、反り返って腰に近づける運動を繰返さねばならない。

前は、まだやりよい。だが後へ倒すことは、加減してあるとは云っても首が抜けんばかりに息が詰った。

もう幾回繰返したろうか？乙女は呻く力さえ失いかけていた。

黒髪がぱっさり前に垂れ、広い背肌と後手の二本の腕が逆さになったかと思うと、翻って顔が起き顎が上がり豊かな胸が張り始める。

細い咽喉がのけぞって透け、真白な腹部が引き切れそうにびいんと張り伸びる。

仰向いた美貌は脂汗の喘ぎに濡れ、鼻孔は精一杯の呼吸を貪って拡大する。

ああ、人目を見張らせた美女である。この顔一つ、この肢体一つに幾多の青年が争って恋したのである。捷ち得られぬ愛に執念の火を燦らせ、眠れぬ夜の臉にまざまざと写し描いたのである。

加うるに、彼女には深く秘めた知性と感受性がある。恵まれた生活と閃めく才智があっ

たのだ。

それが今、製造された計器か工具の性能を調べるように骨の屈折をテストされている。肉の耐用度を試験されているのだ。

暖かく青春の弾みを宿す肉は、細胞活動のぎりぎりの線で苦脂を滲ませる。

じくじくと、否、ぎらぎらと水分の少い汗が、流れる凝脂となって膚に被る。

織骨が生れて始めての歪みを強別されて、奥部で軋んだ。筋は振れそうに引攣って、随所でびくくつと痙攣を出し、デリケートな肌面は鼓のように張り詰め拡大した。

ああ、これが美女、これが良家の子女。この逆向いている肢体が典雅な令嬢の容姿だと云うのか？二本の脚の上で、ヨガの行者のようにアクロバットしている肉体が才智溢れた娘の姿だと云うのか？

白い家畜だ。正に新奇な生物だ。

労役や愛玩に用うるに相応しい動物だ。

牝は呻く。今だ且って覚えたことのない臓腑の苦しみを呼気に絡ませて吐き出す。

ああ、その声すら、愛らしい唇から洩れるその声すら、獣の唸りに近い。

絶え絶えなこの声が、清らかな乙女を象徴した声だったのだ。教養を表現した声だったのだ。

魅力を濡した皓齒が剥き出ている。魅了の鼻柱が拗れてびくびくと呼吸する。

ああ、正に禽獣の跳きに等しい表情ではないか？

フーガは黙って凝視める。

脈博や呼吸の他に、背に貫した電針から背骨の柔軟度が記録されているが、物慣れた調教師にはそんなものを見なくとも大体の見当はついた。

「うん、案外だったな」

胸底で呟いた。過去の温室育ちを知っているフーガは、これ迄はもつまいと思っていたのだ。それが心積っていた水準を遙かに上廻り、まだ残力を有している。

見掛に依らない柔軟性や健康もあったが、より以上に路子の精神芯が強かったと云えるだろう。

「こりや使えるわい」

手加減がそれ程必要ないととなると、調教師にしてみたら、心おきなく仕込めるのだ。フーガは嬉しくなった。

扉が開いて、イーベラの秘書が入って来た。

「これなのね、今日入荷した牝は……」

秘書は、主人の関心がある牝畜に嫉妬にちかい詮索の眼を走らせてから命令を伝えた。

フーガは頭を下げ、上級者に対する礼をとってから、新畜を展覧に供する為に機械を停めた。

頃合を計られて犠畜の頭が丁度、腰へ下り

きつた処で運行は停止する。

「ちよっと、踏める肉ね」

と勝気そうな褐色の秘書が、グレイのパンプスの先で、牝畜の肩を突いた。

「おやっ！ 私の顔を見たね」

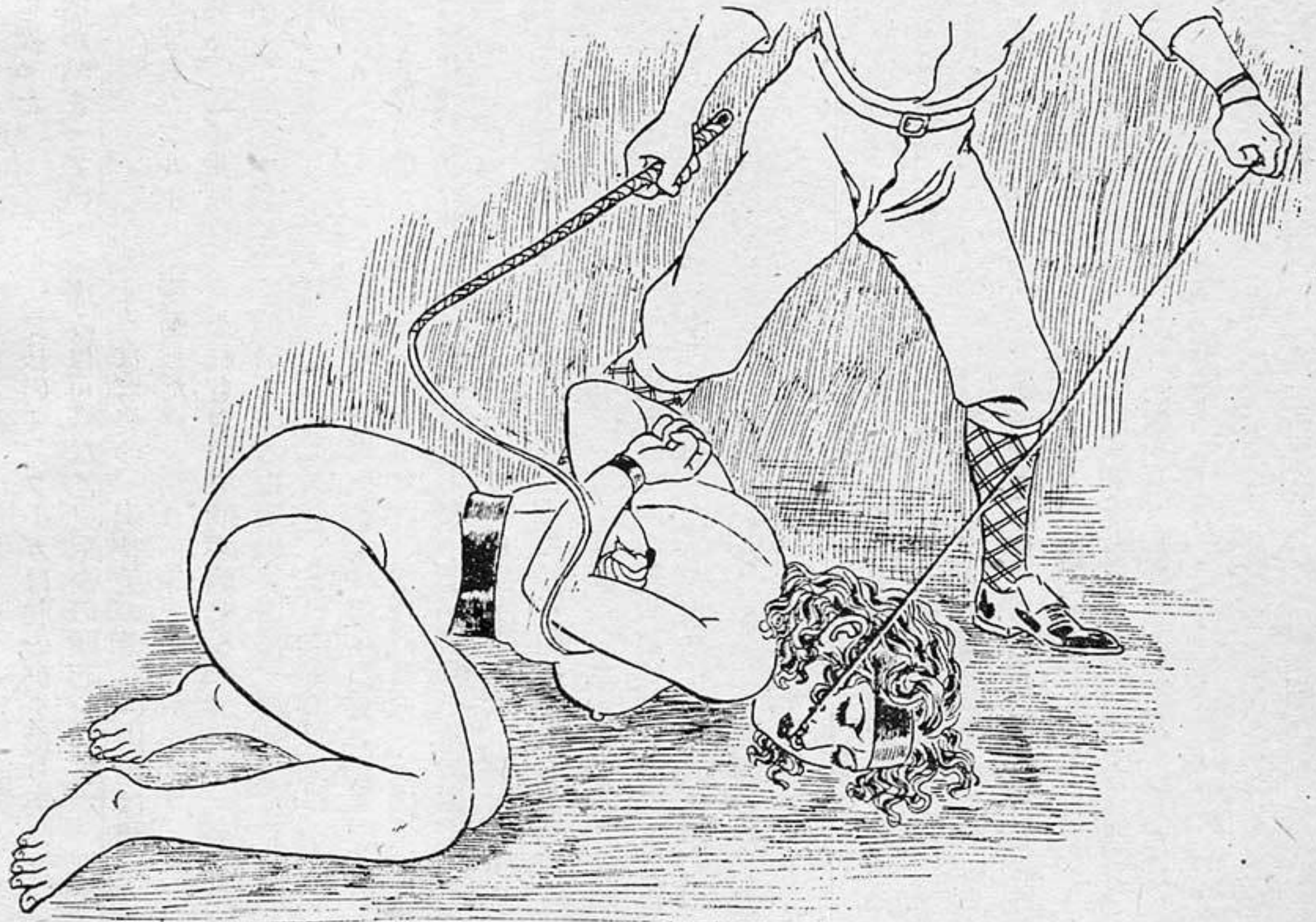
ぱっと怒りを刷いて秘書は睨む。

路子の仰向いている視角が運悪く口許へ届いて了ったのだ。

褐女は、弓なりに張り伸びている麗美な乳房を固い靴で思いきり蹴りつける。逆さになっている円い顎をぐいっと踏みつける。

「あわっ！ぐうっ！」

皮靴の脇で、透けるように血管が通っている咽喉がごきんと骨鳴りし、咽喉仏がびくびくと動いて潰れた呻きが飛び出る。



「ぐ、くる…しい、靴を除けて！ 見るつもりはなかったんです。かんにんして下さい。お願いです！」

路子の白黒している眼先きに、女秘書の光沢のあるパンプスが逆向いて映った。ストッキングに包まれた脚が写った。だが、その靴は路子が履いていた靴よりも数等見劣りのする安物だったし、脚線に至っては事象通り足許にも及ばなかった。その足許にも及ばぬ足許で、路子は黒髪を乱し、安物の靴で踏まれ安物の靴の他へは眼が注げないのだ。

美畜は胸が圧迫で塞がり、苦い塊りがせり下って、吐血せんばかりに咽喉を喘がせた。「ううっ！ぐうっ！」

が、胃には何もない。少量の酸液が泡立って口中に湧き流れた。

「その態はなんだ。幾度云っても眼を向ける身体にしっかり教えて貰うんだ」

流石にフーガは鞭を当てず、犠畜の耳許で空振り、畜体の余力を揮い立たせる。

そしてざらついている手を、凹んでいる腹部の上に這わせ、肋骨の下骨を手荒く撮まむ。

「骨の造作は比較的いいですよ。貴女方が下着をよくしないと衣裳が惹き立たないように、こいつらは骨がよく発達していないと覆う肉と皮が不体裁になるって寸法ですよ」と秘書に話しかける。

「なるほどね」

秘書は誘われて、路子の蠕動している脇腹を指腹で押し挟み、腰骨の形状を探った。

この皮膚の下に、路子の臓器が納まっている。

令嬢の魅惑的な口から送りこまれたフルーツやパンやロースを血肉に消化し、この素晴らしい体を、艶やかな肌を造り出した臓器が収容されているのだ。

褐色の指がその優れた器官を押しつける。捻転して、血の流動が間歇している器官を力強く挟みつける。

「ぐうっ！」

路子は息も絶え絶えだった。咲き薫じている肌を汚れた手で抓ねられ、まるで牛馬の品定めをするように骨質や肉質を云々されて弄られていることに、しとやかな暮しを振り返って、羨恥する余裕も、理智の頭脳を呼び起してフーガの悪業を嗜める良識も、転じて罵倒する気概も、既に遙か感知の圏外へ追い出されていた。

「苦しい！ 息が、息が停まる。救けて！やめて！ 軀を緩めて下さい！ お願い！」

この苦しささえ無くして貰えるのなら、少年の前にひれ伏して足指を舐めることぐらい仕方がない。犬のように物を啜えて走るぐらい仕様がなない。と知性の女は意識の下の意識で肯じていたのだ。

その意識も雲に乗るように朦朧としてく

る……。

見抜いて、フーガは肋の裾を捻り突いた。痛みは可憐な乙女家畜の頭芯を醒ます。獣のような容姿の、均整美の芳しい肉体は悶え、耐動した。

それもやがて限度が来る。

伸びている皮膚の表面に、微妙な痙攣が走る。口辺の泡がぶくぶくと気泡を増していく。澄んだ瞳は露玉を渴求して網膜が白く転回した。

フーガは鞭を二、三度、家畜の耳許で素振ってから、いきなり肩から尖端が背部へ巻きつくよう打ちあげた。

びしっ！

「うっ！」

衰弱の声が力なく洩れると、一瞬、瞳が戻った。

泡がずるっと口に吸いこまれるのを見届けると、調教師は素早く鎖を緩め、腰の縛めを外した。

(五) 畜語教授

学もなく、智恵とて薄い蒙昧なこの少年は家畜の調教にかけては天才的な才能を発揮した。畜体の極限を見計ることは確かであったし、又、筋肉の弱所をよく心得え、足だけでも、結構責めつけて、意のままに家畜を動かした。畜心理も洞察することが早く、巧

みな悪罵や賞讃で脳神経を覚乱しつつ、効果的な洗脳をした。

金釘流の字しか綴れない未開人であるフーガにとって、調教師は適業中の適業であったのである。

その黒い少年は、熟練の手捌きで朽木のよう倒れようとする女体の髪を掴み白膝を蹴って、がくと坐らせる。

毛髪を引かれた美貌は、苦悩の解放でだらっと安逸を展げ、氣力を後退させて失心手前を表情している。

びしっ！ 名調教師は更に氣付けの鞭を振った。

「あうっ！」

路子は消え去ろうとする意識を無理に引戻される。

浮き沈みする木の葉のように、意識の底を氣脈が彷徨する。

痛い！ 痛っ！ 乙女は殺倒する恐怖に氣だけの力で背を伸ばす。

息していること自体が、痺れて感覚がなかった。ぜいぜいと咽喉笛が哽すれていた。ひりひりと口腔粘膜が腫れていた。

「呑め！」

眼の前にバケツが置かれる。

自宅にあった雑巾バケツよりも汚く、錆びて黴んだ水垢がこびりついている容器に、澱んだ水が湛えられていた。……が、心気をち

らつかせている路子の眼は、そんな不浄を感じ覚するゆとりはなかった。

この国に到着して始めて口に含めるものであり、灼けている胃の最大要求物の水であつたからだ。

令嬢は馬のようにバケツに首を突込むと、無我夢中で吸い上げた。空気を水に代えてむせんで呼吸した。

おいしい！ とっても、とても、おいしい水！

乙女の咽喉仏がごくごく動き、生気が頬に這い上ってきた。

「何と素晴らしい水の味なの！」

路子は一息ついて、又啜ろうと吸気の息を水に潜らせる。……途端に鼻輪をぐいっと引上げられる。

「あっ！ もっと吞ませて！」

家畜は生物本能を曝け出して、鼻輪の痛みに抵抗した。

だが、バケツはさっと退く。

路子は諦めきれぬ瞳で、金属の容器を追つた。

「水が欲しいのか？ よし、お前が家畜らしい家畜になれば、いくらでも吞ませてやる。だが、お前は、今はまだ野良猫や野良犬より悪い畜物だ。野良猫は畜生の立場を意識して、人間の姿を見れば尾ツポを巻いて逃げるが、お前のような新畜は少しばかりの鞭じやあ、

つまらない自尊や空意地で反抗を消さない。

お前が純粹に我々を飼育者として納得し、畜生の立場を認めるようになって、先ず野良猫並と云えるんだ。

併し、犬だって馬だって、人間が利用出来るように調教して初めて家畜としての価値が出る。だからお前だって、我々が使い易いように仕込まなければ無価値な家畜に過ぎん。水一杯、餌一切れでも飼育の意志で与える。

我々の気持はお前の真価、即ち畜類としての行為や動作に左右されるんだ。犬だって餌を貰う時にはチンチンして飼主に感謝の意を示す。飼養されている家畜が、主人に対して尊崇、感謝、慕心を表わすのは当たり前だろう。飼われる恩義を知らない家畜には我々は水一杯だってやりたくはないよ。水を吞ませて貰いたかったら己れの性^{オカ}通り畜生になって、仕込まれたことをよく覚え、従順に忠実に、仕えることだよ」

路子にその論理の恐しさを胸に浸み通らせていた。それは所詮、心も姿も畜生にならないければ生きてゆけないと云っているのだ。

一口の水が絶大な効力を擁して、乙女の誠心を攻撃し革命へ導く。

「こんな無惨な世界で生きていようなんて、こんな浅ましい生き方をしようなんて……、私は比奈地の娘よ。世間に褒めそやされた品位ある女よ。それが犬畜生の暮しをしてま

で生きていきたいの？ それとも生に執着するだけの希望が残っているというの？

異国の果で、どうやって脱出しようとするの？ どうやって、もとの生活へ帰り着こうとするの？ 出来っこないじゃない。

死のう！ 死んでしまおう！」

路子は自己嫌悪し、絶望の淵に思考を投じて惑乱する。

が……死んだら父母はどんなに歎き悲しむだろうか？ 眼に入れても痛くないように可愛がり育ててくれた父母が……。

そうになったら黒い国の魔手は、父母の上に伸びるに違いない。父母の生命は、あの電話の時に既に風前の灯だったのだ。

それに、大人しい弟正哉には、冷酷な南城の眼が光っている。

私の自殺は、ひとりよがりな死への逃避は、父母にも弟にも巻き添えを食わせることになる。肉親の生命をも奪いとることになりかねないのだ。

貞淑な乙女は、愛情に強い娘は、自己中心的な考えには没頭出来なかった。

日本女性の良い面でもある。が、又、己れだけが泳えればとする、封建的な悲しい自己犠牲の論理でもあった。

女は逆境に耐えろと云う。されば私も、この八大地獄にも耐え抜いてゆけるかもしれない。路子の頭脳は颶風に煽られて錯綜を続け

ていた。

そして、愛と死の葛藤の上に、生物の本能苦が覆い被さる。

死ぬにしても一杯の水が欲しい！ 一片の食物が食べたい！

それは死の誘惑にも増して、血漿を湧き立たせた。

愛の睡眠薬心中。失恋の投身自殺。或は生活苦で鉄路自殺した人々が、このような立場に置かれた場合、果して何物も欲しようと思わず死んで行くであろうか？

彼等は最後には、温泉や娯楽場で俗な快楽を味ってから、生を失っている場合が多いのだ。

砂漠の水を求めて彷徨している者が、果して己が手で己が首を縊るだろうか？ 彼は意識のかすむ瞬間迄、水を求め這いつづけているに違いない。

路子にしても、その自殺考は、まだまだ虚栄のための死だ。併し、現に生身を責めているのは饑渴と云う生物の本能的欲求だ。彼女がその欲求の前に、己が心を垂れ伏してしまつたとしても、あながち浅ましい女と云うは当たらないであろう。

まして調教師は、機微を捕えて、充分水を与えて渴を癒してしまふようなことをせず、と云って全然、水を断つて絶望させてしまふこともしない。

正に、新畜の心意の相剋を見透して操っているのである。

一含みの水は、高邁な心を一削りする。

除々に感情の昂ぶりを弱め、いつしか家畜の所作をする乙女に仕上げてしまふのだ。

「お前の躰はお前のものでなく、飼主様の所有品であることは解つたろうが、いろいろな躰内部の現象は、その時々々に飼育者に報告せねばならない。例えば水を呑みたいとか、排泄をしたいとか、もつとも諾き入れる、入れないは、我々が観察した上で適当に判断するが、所有者の品物を保管者が故意に毀損すれば当然。罪になると同様、躰を預かっているお前が内臓の状態を告げることは当然の義務であり、責任だ。怠って損壊するようなことがあれば重大犯行になる。これから報告する為の言葉、即ち畜語を教えるから、しっかり



覚えろ！ 先ず、餌や水の欲しいときはこんなふうにもうくのだ」

フーガは傍の牝畜に模範を命ずる。

小柄な愛くるしい顔立ちの牝畜は、調教師の靴先に畏まって、なだらかな乳房を起した。

顎を突き出し、奇麗な歯並の口を開くと、咽喉の声で

「あ、アアー、あ、アアーン！」

と語尾のアクセントを高く、お終いを鼻で甘えるように鳴いた。腹の空いた悶えと云おうか、淋しさと云おうか、そんな感情が、まざまざと感じられる鳴き方だった。

路子はかっと胸が照って、後に廻っている腕を緊めた。

ちやんと言葉を云える舌があるのだ。それを括って了って、猫のように唸り鳴けと云うのだ。

舌が動けば一角の知識を述べることの出来る口だ。語学も音楽も究めた口である。

その口で、四足の獣並に咽喉を鳴らして水を求めよと云うのだ。

才女の胸は煮えたった。

「そら、解ったろう。鳴いてみる！水は其処にある。」

イレ助教士がバケツを持ち上げて、じやぶじやぶと水音を發てた。

囚女の胃は騒ぐ。口腔の粘った唾が、べとりと咽喉元に絡んだ。

教養があり、良家の子女であり、そして稀代の美女であろうとも、生物であり、本能慾を有することには変りはない。

路子は、沸りを胸許で抑え留める。

純情そうな女が鳴いているのだ。私と同じ年頃の娘が……

どんな素性の女か知らないが、苦しい目に会ってきての結末なのだろう。

その女の悲しそうな瞳は、逆らっちゃいけないわ、と路子に囁いているように思えた。乙女心に強い親近感が湧く。今迄、別な女達と観じて、己れを孤独に置いていた身に、それは荒野の灯にも似た、暖かい友情であった。

“この場は白痴になるのよ”と促している女の瞳に導かれて、路子は思考のざわめきを鎮

圧した。

挙げ得られぬ双眸で、膝の一点を凝視し、含むように可細く、令嬢は鳴いた。

「あ、アアーアアー」

ああ、香り高い美女は、比奈地路子の人面を捨てて、畜生の化粧を施し始めたのだ。

「ちっとも水が欲しそうじゃねえ。もっと咽喉を開け！」

【通信】

腹切りの要因

大島 広 志



女性
切腹マ
ニアの
一人と

して、最近のK誌の切腹物の質が低下したのではないかと憂い、あえてペンを執った次第です。

かつては『女腹切八景』を發表し、中康弘通氏のすぐれた研究資料が豊富に掲載された当時から比べると、内容的にも明らかに落ちています。小説は全く影をひそめ、僅かに藤山秀緒女史の熱っぽいものばかりです。

藤山さんの情熱にはうたれますが、女性の書かれる切腹物には、失礼乍ら色気が乏しい様です。女史の小説に登場するヒロインは定って女スパイか飛行士であり、最後は必ず乗馬服姿で凄惨な十文字腹です。腸をたぐり出して叩きつけるなど、激痛に呻吟する断末魔の声が今にも聞えてくる程リアルな割腹の描写です。だが、私の様な気の弱い男性のマニアには、余りドギツイ表現や残酷な場面は、反って興が削がれる思いがします。

私の理想とする女腹切りは、やはり女性らしくたまらない羞恥の感情を押えて、婦

フリーガは鞭柄を朱唇の間へ、拗り入れる。

「水が欲しかったら欲しいように感情を籠めるのだ！」

路子は、ほろっと涙する。

「フリーガさん、貴男は、貴男と云う人は恐しい人なのね……」

言葉になって口から洩れたとしたら、フリーガは調教初期の効果を認めて、満足気に頷いたろう。その通りだ。この少年を家畜の境遇から見れば、世にも恐しい悪鬼的な存在である。

「あ、アアー、アアーン」

路子は淋しげに鳴く、匂やかな肌を律動させて……。

ぴしっ！

痺れのきれた調教師の鞭は、容赦のない音を美肌に響かせる。

「鈍牝！ お前が覚えなきやならない鳴き方は、これだけじゃねえんだ。心底から鳴かねえと水の代りに機械に縛るぞ！」

路子は愕然と裸身を収斂させる。

もう嫌！ もうあの苦しみだけは許して！ 女畜は急速に躊躇を消して、真剣に声帯を絞る。ハイ・クラスの美青年達の胸をときめかせた甘い声音で……。濁った一杯の水を吞ませて貰おうと……。

だが、路子は知らない。

その水は、昨晚イーベラが浴みした捨湯であることを……。

(未完)

道の義理に殉ずる哀切極まりないものにあります。

女性切腹の真髄は、自己の美しい肉体、なかでも、女性美の象徴である豊満な下腹部に対するナルシチックな愛撫と、鋭利な刃物で最も感覚の強い個所を刺突、切開するという自虐的な行為とが、統一されたところにあるものであります。

それは、あく迄女性美の追求が目的ですから、切腹という実技又は描写がこの幻想を損うような限度を越えることは行過ぎであり望ましくありません。従って藤山女史描くところのヒロインの立腹とか、介錯なしの十文字腹とか、臓腑の摘抉とかは余りにも現実放れしており、女性の切腹法としては不自然であり、醜悪でさえあります。やはり女性切腹の創作的前提としては、やはり劇的必然性がほしいのです。

例えば、女主人公が自害をせねばならぬ様な事件があって、死を覚悟する。しかも自分の死を最も美しく飾ろうとする女心の切なさや武家の娘としての意地と誇りから、進んで切腹することを願い、許されてよろこびに泣く。入浴、下着、死化粧、白粧束、切腹寸前の別れの水盃、小姓、廊下、庭前、桜、落花、切腹の座、白幕、白屏風、白布、櫛、打水、首桶、三宝、九寸五

分、辞世、介錯人、検使役人、etc、etc……

こういったいくつかのカットの進行の中に、ヒロインの切腹終了迄の心理的な起伏と、時代劇的な情緒と、雰囲気が必要なのです。この点、吉村礼津の最期をえがいた『切腹本願』、志津の十文字切腹をえがいた『散紅葉』、などは私の最も好む題材です。どうかこのように美しくも悲壮な女腹切りをとりあげた作品をどしどし発表して下さい。私も近く、長い間の構想を纏め、仮題『おんな忠臣蔵』を発表したいと思っております。内容は、大体鏡山の尾上の憤死を発端として、下女お初、岩藤刃傷から、お初の処刑(切腹)に至る、大奥秘巻、哀艶限りの女腹切り物語です。

それから、最近女性マニヤの方々が沈黙されている様ですが、どうしたことでしょうか。私たちの夢が現実のものではないからこそ、もっとお互いの欲望を正しく発散させ、昇華させる必要があるのではないのでしょうか。

藤山秀緒女史には失礼のことのみ書きましたがおゆるし下さい。

x

x

x



○ 女体切腹秘話 ○

月光の中で

池 島 水 行

柱の鳩時計がポツ、ポツと愛らしく鳴いて十二時を報らせた。京子は着替を済ませて、寝床をとった。店で飲まれたビールの酔がほんのりと気だるさるさを覚えさせている。
「寝よう」

京子が胸の内で呟いて蒲団へにじり寄った時である。コツコツ、と小さくドアがノックされた。

「どなたア？」

京子の澄んで声が、ドアを通して外の人に訊ねかけた。が、唯、間をおいたノックが繰返される許りだった。

彼女は仕様事なしに錠をはずした。そして押入る様に這入って来た男を見て思わず息をのんだ。男は急いで自分で施錠すると、京子と向き合ってニヤリと笑った。

「よくも今更ノメノメと来られたモノネ……てな顔付だせ」

と底い声で云いながら、男はズカズカ上り込んだ。

「そうよ、その通りよ。……帰って頂戴！」
彼女は身を固くして鋭く云った。然し男はチラッと流し目をくれただけで、黙って上衣を脱ぎ、ネクタイを解いている。

四畳半一間のアパートでは、いくら家具類が少いとは云え、床をとれば部屋一杯になって、足の踏み場もない位である。その為か、非ずか、如何にも若い女性の一人住らしい

華やかな寢床の上に、上衣を脱いだだけで男はゴロリと寝転がった。

「又しばらく一緒に暮してやるぜ」

「ナ、何ですって……」

入口で身を慄わせて、憎悪の表現に戸迷った。

「いた京子は思わず口走った。

「嬉しいだろう？」

「なんと云うことを……」

彼女はキリキリと歯を噛んだ。

四年前、まだ高校生だった彼女を、誘拐同様の手段でその前途を灰色に塗り潰した男。

彼女の純情を利用して、自宅から金目の物を持出させた男。家出させた彼女を絞れるだけ絞った上、赤線の女に叩き売ろうとした男、

ゆすり、たかり、賭博、強盗、あらゆる悪を平気でやる男……須森。

その須森が、ドン底からやっと立ち直りかけた彼女を嗅ぎ当てて、又突然に現われたのである。

彼女の頭の中を、憎悪が火を吐いて暴れ廻った。

「どうもサツの野郎がしつこくなりやがってうるさくていけねえ。此所はまだ手が廻ってねえ様だからヨ、しばらく此所で住んでやることに決めてやって来たんだ。だからおめえもその積りで周りに注意しな」

須森は一語々に凄みを持たせて云った。彼女は無意識に身を退いて、ドアに背をつ

けた。途端に須森がガバツと身を起した。

「てめえ、俺の云うことが諾けねえでんだな、オイ！ ちよっとでも大きな声を出した

り、その戸に手を掛けたら最後だぜ！」

ピカリと光って、白木の柄の短刀が畳にグサリと突き立った。

彼女の白い頬が一瞬こわばり、大きな美しい瞳が恐怖に睜かれた。

……無気味な沈黙が流れる。

ゴロリと須森が元の様に転がった。その顔には「どうだ」と云いた風なうすら笑いが浮んでいる。

「黙って俺の云いなりになつてりやあいんだ。俺だって手荒な事はしたくねえ。ナ、サアこっちへ来な。」

彼はそのおどし的一幕で、彼女が慄え上つて己の命令通りになる筈だと思っていた。そしてオズオズと自分の傍へにじり寄る彼女を確認して、計算通りだと安心した。京子が自分の体で底いながらその短刀を抜きとったことに気がつかなかった。手を伸ばして久方振りの、柔かな彼女の肩を抱き寄せた。芳しい体臭が快よく彼の五体を包み込む。彼は腕に力を籠めて花の唇を求めようとした一瞬、脇腹に烙きつく様な鈍痛を覚えた。

彼女は突飛ばされながらも、須森の体にし

がみついて離れなかった。美しい瞳がギラギラと血走った輝きをみせ、キリキリと皓齒を

噛み鳴らして、狂気のように男の脇腹に突き刺した短刀をえぐり続けた。

柱の鳩が二時を報じた。

果然と須森の死体を、うつろな瞳で凝視していた京子は、呼び起された様に時計を見上げた。

「鳩さんともサヨナラネ」と小さく呟く。そしてすっと立ち上ると、手早く辺りを片付け始めた。

返り血でぐっしり濡れた夜着を脱いで、須森の屍を覆った。新しいシユミーズに着替えて、新しいシーツを取り出し、部屋の片隅へ敷いた。ベツトリと血にまみれている短刀を丁寧に拭き清めてから、そのシーツの上

に正坐した。

——お父様、お母様、京子は悪い娘でございました。どうぞお叱り下さい。京子は許して戴ける娘に立ち直ろうと努力してしました。けれども、もうどんなに努力しても駄目、悪人とは云いながら、京子は人殺しをしてしまいました。京子が死んだら、この上まだ不幸を重ねることになります。京子は死ぬこと以外に採る道を知りません。お願い！ 馬鹿なこの京子を不びんと思つて、最後の不幸をお許し下さい……。

彼女は胸の内で訴えながら、壁の写真を潤んだ瞳でじっと見詰めた。小さな枠の中で、

両親が揃って彼女を見守っていた。

——その代り京子は、立派に死んでみせますわ。京子の最期をみていて下さいネ。ネ、お母さま……京子はお腹を切って……

彼女は両手をついて父母の写真に深く頭を下げてから自害の準備に掛った。

黄と緑が少しずつ入り混っている薄紅の腰紐でふっくらと息づいている様な両腿を合せて、シユミーズの上からキュッと括り合せた。固く縛って正座すると、膝の上に喰い込んだ紐が、過ちを冒した自分を身動きならぬ様に縛り上げて、罰している様な緊縛感を受けるのだった。

大きく息を吐いて、胸に顎をつけて見降すと、コンモリ盛り上っている双丘が、別個の生物の様に妖しく喘いで、艶やかな二の腕が、ほんのりした桜色をみせて、スナナリと柔かな線を形づくっている。

我乍ら美しいと思う。京子はその美しい吾身に訣別の意を籠め、ギョッとその豊かな乳房を掻き抱いて、しばし目を閉じた。長い睫が慄え、涙が溢れて白いふっくらした頬に長く尾を引いて流れた。

然し、やがて開かれた明眸は、露に光ってはいるが、もう、何の憂いも悲しみもないものの様に、安らかな決意を漂わせていた。

腰を浮かせて手を差し伸べ、柱のスイッチを切った。電気が消えると同時に窓から蒼白

い月光が射し込んで来た。

京子は改めて坐り直して、男の血を吸った短刀を静かに取り上げた。シーツの端に刃を当てて手頃の大きさに切り取り、切先を五糎ばかり残して刀身を巻いた。それを右手で逆手にしっかと握り締めた。プリッと張りのある柔らかな腹部を左手が無意識に揉み降していた。さすがに細かく震えている。

徐々に右手が動いて切先がシユミーズに触れた。ピクッと全身が痙攣する。彼女は大きく息を吐くと右手に左手を添えて、両手でしっかと刀身を握った。グッと力を籠めた……が切先は、ブルブルと震えるのみで突き切れない。

「よわむし！」

彼女は自分を叱咤した。そして腰を上げて切先を腹に当てたまま、俯伏にガバと身を打つける様につぶした。

「ウッ！」

思わず呻く。左寄りの下腹部にズブッと微かな音をたてて鈍痛が襲った。ふくよかな女体に五糎の切先はその姿を没していた。彼女は左手を支えにして上体を起した。動悸が激しく、じっとり汗が噴き出している。

右へ刃を引きつけた。しかしホンノ少し腹皮を切っただけで短刀そのものは動かない。

——切らなければ——

彼女は焦りを覚えて左手を握り添えた。ギ

リツと一糎程右へ進んだ。途端に血がダラダラッと流れ出した。彼女はその血を見て始めて、安心した様な気になった。

短刀が焼け火箸の様に熱く感じられる。血は後から後からと噴き出してくる。

——死ねるんだワ、もうすぐ死ねるんだワ。彼女の胸に喜びに似たものがつき出でて来た。両手に力が籠もる。右へ右へと引廻す。「ウッ！クックク……」

激痛が全身に響き渡る。柔軟な女体が身をくねらして必死に苦痛を耐えている。喰い縛った歯がキリキリと音を立てる。紅唇がヒクヒクうごめき、美貌が苦悶に喘ぐ。流れ出る血が白いシユミーズを真紅に染め上げた。激痛が五体を駆け廻っているのが痛さを覚えるより却って快よく感じられる。

——もう十分切れた筈だわ——

彼女は、思ったより易く「切腹」という壮烈な自殺方法を成し得たと、誇らし気にその創口に目を落した。

——いけない！——

あれ程、引廻して切った積りが、まだ七、八糎しか切れていない。その上、短刀の刃が半分程も抜けかけているのだ。

——これでは、これでは死に切れない——
——そう思うと、渾身の力を両腕に集注して突込んだ。

「グエー」

吾知らず、喉の奥が悲鳴を上げた。新らたな激痛が脳の芯を突き抜けた。

「こ、これしきのことと、……」

京子は声に出して自分を励ました。

「ズブズブズ」

今度は確かに相当の長さ、切れた事が判る。刃が腹壁を裂いて行くに従い、プリプリとした手応えが、しびれた頭に奇妙な快感を覚えさせた。しっかと握り締めている短刀はもとより、両拳、手首の上迄真赤に染って、刀身を巻いたシーツは、タツプリ血を吸い込んでその先端からポタポタと垂れ落ちていく。

彼女は大きく喘ぐと、尚も短刀に力を振り絞った。グーっ一気に右脇腹迄……。桜色と赤色の層が、脂肪層とハッキリ区別を見せて厚い腹壁が上下に一線を画して、パツクリと口を開ける。一瞬の後にはプツプツと血が噴き上げて流れ出す。

——き、切った——

赤味を失った彼女の唇が痙攣しながら、異様な笑みを形づくる。然し次の瞬間、その上体はグラリと前へ倒れ掛る。動きの鈍くなった左手が辛うじて、これを支えたが、たま

らず横倒しになった。五体を駆け廻っていた苦痛が、軀全体を押し包んで煮え返った。

「ウツ、ウツ」

彼女は激しい苦痛に、血の海の中でのたうち廻った。

倒れたはずみに、割れた切口から腸管の一端がハミ出した。彼女は夢中でこれを掴んだ。ズルズルと引出されるドス黒い腸管。喉の奥まで響く様な、脳の奥底をくすぐる様な、得も云えぬ奇妙な苦しみ、間断なく迫りくる激痛を、一瞬の間ではあるが忘れさせた。血がドクリと塊の様になって噴き出す。

「く、く、くるしい！ だけど、だけど、これで、……京子は、ほ、ほんとうに死ねる。……」

……お母さん。みて、みて」

彼女は声を出した積りだった。だが最早、それは声にはならなかった。スーッと急激に全身の知覚が抜けて行く様だった。云い様の無い苦悶に自然と身をくねらせてはいるが、先程迄感じていた激痛はもう左程感じない。混った頭の中には五色の華が咲いていた。

右手が、短刀は創口から抜け切っているのも知らぬげに尚しっかと握りしめ、左手が、

ブルブル震えながら、喰み出た内臓をさまざまっている。微かに開いた瞳には、霧に包まれたように両親の写真が、ボンヤリ映っていた。突然、ググッと烈しく胸をつき上げてくる火の塊の様な熱さを感じて、京子は軀を弓なりに反らせた。

「ウツウツ——！」

喉が烙ける。腹の創から血の塊と共に、異物がダラリと流れ出す。

ビクビクッと全身が痙攣を起して……。うごめいていた指先にグッと力が入って、やがてヒタと動きをとめた。然し微かな胸の動悸につれ、血の噴出は尚続いていた。

完全に血の気の消えたその顔には、苦悶の歪みも消えて、もうろうとした意識が快い苦痛を享樂しているかの様である。静かに閉じられた切れ長の眼、半ば開かれた唇は微笑している様であった。

蒼白く射しこむ月光が、この壮烈な惨状を静かに照らし続けている。

主のない柱の鳩が、もの悲しげに四時を報らせた。……二度と振抑いでくれることのない美しい女主人の屍に向って……。 (了)

女体「切腹風景十二態」

(9×13センチ) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円
モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

◎女体切腹フオート◎

(略号こし)

「腰元自刃」

村井知可子嬢 大判判印画紙焼付
六枚一組 八百円

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十三年

○二月号（復刊第二十四号）

【定価二百円】

口絵

貴面 歌姫誘拐……………四馬 孝面
滝れい子面集……………滝れい子面

「舞妓受難」「女体自刃」……………阿部秀提供

緊縛映画名場面集……………阿部秀提供

「冥土の顔役」「危し伊達六十二万石」……………（本誌写真部特写）

緊縛写真……………（本誌写真部特写）

ニユー・ガールの緊縛模様……………編集部選

愛川悦子、大塚啓子、田中芳代……………編集部選

洋面スチール二題……………編集部選

米映画「ボーリンの冒険」「追はぎ」……………南方佳男

一九五七年の時代劇映画から……………久留木 栄

美容病院……………岸本 青柳

姉妹先生の惨憺な責め……………杉 正三

家畜人ヤプー……………沼田 曜一

少年神美に関する構想……………須藤 俊夫

黒の魅惑……………吉田 幸一

被虐の一日……………青田 幸一

病者の獄……………辻村 隆一

フアンドロナの女王……………沼田 曜一

ある夢想家の手帖より……………小坂 多美枝

大阪屋花鳥（女牢名主）……………山川 和男

マヤの黄昏……………鬼山 紉策

さんまをやく哀愁……………原 忠正

現代マゾヒズム芸術時評……………や ま

街で見つけたフェチシズム……………や ま

○三月号（復刊第二十五号）

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面
滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

ニユーガールの緊縛模様……………大塚 啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

口絵

貴面 蠟淚……………四馬 孝面

滝れい子面集……………滝れい子面

写真「腰元折檻」後手吊責村井知可子……………啓子

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

縛り絵 岩礁…………… 滝れい子画

者通信

「世間」

美作丹の巻……………牧 高志

読者通信



同好の皆様。私は永らく本誌を愛読しております同好の者です。私も縛られている女性の写真や絵画を最も好んだのですが、今まではなかなか入手出来ませんでした。最近、代理部の分譲で入手出来るようになり嬉しく存じます。色々の本の口絵写真をコレクションとしてスクラップ・ブックに整理しておりましたが、近頃では大分多くなり、よいものばかり二冊分が出来ました。同好の友が集いあってコレクションを見せあったりしたく存じておりますので、希望の方は御便り下さい。最近の本誌は口絵の写真及び挿画が特に興味あるものが多く掲載されておられ、誠に嬉しく存じております。今後も益々、強烈な責場を掲載して頂きます様、希望します。

(奈良 淳)

婦人雑誌にグラビヤで福島県柳津町、国造神社の裸祭りの写真が出ていたが、この種の裸祭りは全国に相当あるのではなからうか。岡山県西大寺市の裸祭り、尾張の国府宮の裸祭等々、全国の読者諸士が郷土の裸祭りのフォトを紹介したら面白いでしょう。十一月号の読者通信の大阪の森太一氏。私も何かの本で昆布の禪の事を読んだ覚えがあります。大阪の黒田康夫様。最近、禪美関係のものが少なくて残念ですね。兵庫凡生様。私も制服姿が好きです。警官・自衛隊、大学生等を幽閉して着衣を一枚宛はいで行って、やがて裸にする、そんな事を空想するとゾクゾクして来ます。千葉の室様。本誌の半分をソドミヤ物、禪物で埋めること。特集号を出す事等は賛成です。兵庫の趣味者様、私も同感です。横村氏の作品は毎号熱

狂させられています。その挿画青木審氏のもの、いつも感心しています。(SK生)

またまた多忙にまぎれて怠けていますので今回は通信欄を拝借して麻生の生活と意見の一端を。週刊サンケイ十月五日号、グラビア「秋は馬に乗って」……榛名湖へ遠乗りしたデパート乗馬部の女子部員たち。週刊サンケイ十月十九日号「ニュースの女王その後」レインボー社長、坂内みのぶさんは裸で女中に体を揉ませる由、又使用人たちを虐めるとの事。麻生は以前から気が

ついていました。が、週刊サンケイをよく注意している時々、嬉しい記事があります。アンリ・ダンフルヴィル著、田辺貞之助訳「性の難破」紀伊国屋書店発行。ゆっくり感想を述べている暇がありませんので、ただ書名だけ記しておきます。沼氏、原氏あたりには是非論評して頂きたいと思います。十一月号は沼氏も森本氏もお休みにて少

◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他についてお返事いたします。(返信料同封下さい)

しガツカリ。御健筆を祈ります。ところで、口絵に少しはマゾものをいれて頂けませんか。復刑後、口絵は全くサド一辺倒で大いに不満。旧号の天泥氏演出のものなど、一寸イカしましたね。なお麻生氏は十一月号のニューガル、絹川文代さんにはささかお熱です。彼女をクインにしてマゾフォトを作つて口絵にして下さいませんか。(東京 麻生保)

「お嬢さん放浪記」について……一人のお嬢さんの女子学生が、アメリカからヨーロッパへと、お金もなければ特別の頼る人もなしに、しかもその間に何度も健康を害して、知らぬ異郷に病床に臥しながらも元氣と希望を失わず生き抜き、やりたいたことをやり抜き、若い娘らしく存分に楽しみ学んで来たという。それには本当に打たれました。「いい人だなア」と思う。殊に、この本の扉の写真。白ブラウスにベルトつきのタイトのスカート、ストッキング

にサングルのハイヒールだけの飾り気のない身なりでニッコリと人なつこく笑ったその姿の魅力！度々、病に倒れたとはいえ、これだけの境遇を女一人逞しく生き抜いて来た、その小柄ながら柔かく艶やかな手、肉づきのよい脚、ふつくりとした白い豊かな頬、はちきれそうな胸にも本当に親しきを感じて。これだけの「放浪」の生活、活躍のあとに、もう一つあつたらと思ひます。シカゴでは、彼女は随分危険な目をくぐつたと書いてある。五人の男に暗闇で襲われて必死になつて逃げまとい、口はカラカラに乾き、心臓は早鐘のようにどよめき、もう駄目と思つたと彼女は書いています。そこで、もし彼女が彼等に捕えられたとしたら……。あの彼女の体が手足が縄でギリギリ巻きにビッシリと縛ばられて、倉庫のローソクの下に横たわつて。勿論、猿ぐつわを頬も縊れる程固く嵌められて……。ジッと眼を閉じて責め苛まれながらも、屈辱と恐怖、苦痛と絶望に耐えるお嬢さん。ロープで天井へ宙吊りに吊り上げられる。堪え切れずに猿ぐつわの下から絹を裂くような悲鳴、呻き、身悶え、そして呻き、失神。後手の捕われの

姿のまま、闇の街の一角を猿ぐつわに黙々と曳き立てられ、売られて行くお嬢さん。だが気丈な彼女は、希望を失わなかった。生きよう！逃げよう！川岸、縄尻を掴んでる男の手を振り切つて縛られたまま、ザンブと川へ飛び込むお嬢さん。川は浅かった。男達が騒いでいる処へ、異常を知つた救いの手が闇の中を……。そう云う冒険を活潑な自由なお嬢さんにしてほしかった。いや、したこともあつたんではないかしら……？

(浦田 紀夫)

最近の本誌は全く我々サジストを満足させてくれますので、深く感謝しています。前回につぎまして、愛川悦子嬢のコード縛り姿は大いに満足。豊満な肉体美の悦子嬢。白い細いブローズ一枚、乳に固く食い込んであるコード。見た目では非常に痛々しい気がします。が、それだけに緊縛感是十分でした。ただ細コードではなく、縄で四重巻ぐらいにして欲しかったと存じていますが、白いブローズは特に目立ち、女の哀れさが、よく撮れていました。又、新人モデル絹川文代嬢ですが、大きな黒い瞳の綺麗な彼女のスタイルは、美し

代理部案内

最新版女体緊縛フオート

絹川文代嬢

全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

絹川文代嬢

股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

本誌十一月号口絵写真にて初登場した美貌の新人モデル嬢。

凌辱 略号(れん)

愛川悦子嬢、辻村隆氏

連続十二枚一組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子嬢 略号(よく)

三枚一組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子嬢 略号(あめ)

五枚一組 四〇〇円

剥れた腰巻

花坂道子嬢 略号(まき)

三枚一組 二五〇円

全裸強烈股間縛

花坂道子嬢 略号(きよう)

五枚一組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子嬢 略号(ふさこ)

五枚一組 四〇〇円

寢室の苦悶

益田房子嬢 略号(くもん)

三枚一組 二五〇円

縄のれん

大塚啓子嬢 略号(なわ)

三枚一組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子嬢 略号(もん)

五枚一組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子嬢 略号(せつ)

三枚一組 二五〇円

行燈 (アンドン)

愛川悦子嬢 略号(あん)

三枚一組 二五〇円

いたぶり

春日ルミ嬢、愛川悦子嬢

略号(いた)

三枚一組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代嬢 略号(ねや)

い肉体で申分なく思います。海野
築朗氏の「ねずみ小僧」は「お町
の最期」と対象的に面白く拝見。
文中に於いて、お雪が遂に捕わり
自分の帯で後手に縛られ猿ぐつわ
もされますが、この時、女が「許
して、それは苦しくて」と必死に
抵抗する処がよく、ゆっくり時間
をかけて女に猿ぐつわを噛ませる
のも楽しい事と思いました。

(名古屋 岩谷)

始めて御便りする三十五才の男
性、同性に対する軽いサドです。
又、裸は好みません。衣服の上か
ら縛ったり鞭打ったりすることを
夢みているのです。ただし服装に
制度があるのです。自分でもわか
らないのですが十七、八才位より
二十四、五才までの制服を着た学
生さんが大好きなのです。メガネ
をかけない頭をスポーツ刈等に短
か目にした学生さんを街で見付け
たりすると、思わず立止って眺め
てしまいます。ですから野球等を
見にいても半分位は応援席の学
生達を見えています。又、白い詰襟
に黒ズボンのボーイさんもよいと
思います。時々、ボーイさんのみ
の店へ、お茶を飲みに行き、遠く
からじつと見つめている事がある

程です。この意味では一種の制服
愛好者とも云えると思います。し
かし、いずれも、身体によく合っ
た、特にズボンは細目の尻にぴつ
たりと合って股下にキユツと食い
込む程のものでないと好かないの
です。街頭や電車の中などでその
様な青少年を見つけると、いつも
彼等を縛ったり牢に入れたり、服
装を強いたりするのを想像して楽
しんでいます。又、その様な人が
現実に小生の目前に現われて来な
いものかと、ひそかに願っている
ものです。東京又は近県の青年
で、その様に責められたりした
方々は居られませんか？学生さん
でしたら更に結構です。小生は気
が弱いものですから、そんなにヒ
ドイ事は必ずしません。なにとぞ
御便り下さい。

(東京 学生服マニア)

九月号の「裸馬との対談」を拝
読して安心した旧刊以来の一愛読
者です。若し女性様が裸馬より鞍
付馬を好まれるなら、私は馬にな
るより鞍になり度いと願うでしょ
う。又、且つてこの誌上で、力の
劣る女性が縛られてもいいない男性
を征服するのは不自然でいやらし
いと申された方がありました。

五枚一組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子嬢 略号(ふと)

三枚一組 二五〇円

腰元全裸折檻

村井知可子嬢略号(せつかん)

三枚一組 二五〇円

振袖哀歎

花坂道子嬢 略号(ふり)

三枚一組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子嬢 略号(こか)

三枚一組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子嬢 略号(ます)

五枚一組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子嬢 略号(たか)

三枚一組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子嬢 略号(りよ)

五枚一組 四〇〇円

賭 機 (かけにえ)

愛川悦子嬢 略号(かけ)

三枚一組 二五〇円

◎以上、印画紙の大きさは、全部
大手札型(9×13㎝)です。

磔(ハリツケ) 三態

大塚啓子嬢 略号(はり)

大判判印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

花坂道子嬢

優美姿態緊縛集

大判判印画紙焼付

ヌード縛り

略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

股間緊縛

略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

御注文の栞

○送料はすべて当方にて負担いた
します。略号だけ書いて御注文下
さい。早速厳重荷造の上急送申し
上げます。

○代理部分譲品目録並に振替用紙
御入用の方には御申込次第お送り
します。

○御送金は、振替、為替、現金、
書留、等御利用下さい。

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪第五〇〇四二番

私なりの異議を述べさせて頂きます。世の諺に「文は武に勝る」と申します。現代の円熟した文化の中に住み、高い芸術的センスを持つ文化人の間では「美」こそ「文」にも「武」にも勝る憧憬ではないでしょうか。神々しい迄に気高い女性の美しさに対して、原子力時代には於ける男性の微々たる腕力と不安定な知力などが何で対抗出来るでしょうか。例えば私の男性としての筋肉質の胸板とか、精悍そうな顔——俗世間にのさばっている知性の広告の様な広い額や冷たい眼、長い瞳毛、つき出た鼻、尤もらしい事をソツなく喋る二枚舌等は美の世界に君臨する女王様の美瞳に一たび射すくめられたが最後、忽ちその効力を失い仰向けに卒倒して、重いヒップに蹂躪されてしまうでしょう。私は私のこの胸板と顔とが、その本来の用途に戻って女王様がトイレットにお立ちになる御苦労をお省きになる為の腰掛として使用して頂く光栄に浴し度いと願っています。どうぞ貴女の快樂の為の消耗品として私を使い尽して下さい。

(東京 三上伏夫)

緑猛比古氏の書かれた、曾ての

「天狗鼻由来」を忘れかねているものです。美しい女性の手によって若い逞しい男性の肉体を責めさいなむ小説をどうか又書いていただきたいものです。隠密の疑いを受けた若い武士を多数の奥女中や腰元の手によって拷問させる時代小説をあこがれています。領主とその愛妾は酒を汲みながらそれを眺めては楽しんでゐる。純白な六尺禪一本の姿で松の木に吊されて腰元たちに割竹で打たれたり、蠟燭の火で責められて、苦しむ武士の姿に昂奮を感じます。揚句の果に、腰元達は寄つてたかつてくすり責にする。武士は羞恥と苦痛のため全身から脂汗を流してころげ廻る。汗と泥にまみれた禪は藻掻く度に解けかかる。そんな小説は久しくK誌では見ないので、是非実現していただきたいと思ひます。

(東京 葛西生)

十月号。口絵、本文共に近來にない充実ぶりで嬉しかった。目次裏に奈加多氏のアイデアにより磔の女をのせたのは好企画、継続を望む。画家はアイデアと不即不離の所に自己のイメージを表現すればよいのであって、何もアイデアとそっくりでなくてはならないと

いう理屈はないが、この磔の女は奈加多氏のアイデアでは口を開いて、目を見開いていることになっているのに、画ではその逆である。表情が甘すぎ無惨さがとぼしいと感じるのはそのせいであろう。益田房子嬢の脚線美は上品な感じがあふれ好感がもてる。創作は「翳り」「最良の仲人」「女水兵哀史」と粒揃いで十分たのしめた。

(南方 純)

乗杉貴代子様の「裸馬」拝見いたしました。これがダイアナ夫人御自身の体験とせず、第三者の口をかりて語っておられるのは本當に嬉しく、我意を得ました。裸馬に乗るのはどんなに気持のいい事か存じませんが、矢張り人前ではなさらないダイアナ夫人の身だしなみの程がうかがわれ、流石に本當の貴婦人だと改めて感激いたしました。そして又、第三者を使つて語らせていらつしやるあたりに、高貴な精神が感じられました。それは丁度、貴婦人が焼芋を食べてはいけない理由はなくとも、人前で食べてはいけないし、どんなに好きでも自分で買いに行つては、なお悪いというのと同じ理屈だと思います。(麻生 保)

藤山様始め皆様御元気ですか。「奇ク」も色々の特集を出している様ですが、早く「切腹」の大増刊号を出して頂きたいと思ひます。さて藤山様、御丁寧なお返事有難うございました。おすすめにより私も飛行服の切腹をうつして見ましたが、矢張りこういうのは貴女の独壇場です。どうか毎号お書きになって下さい。海軍のものとえば、自沈したドイツのグラフ・フォン・レーベを舞台にしたもの、又囚われた女スパイが変装のまま一文字に腹を切った所で味方に救われ、其処で分厚い飛行服に苦痛をたえながら着替えて、後死んで行く……と云う様なものなど、貴女の凄烈な筆が絵図を染め上げて頂けたら……と思つて居ります。では又、さようなら……

(法谷 四郎)

僕は藤山さんの大ファンです。初投書ですが、よろしく御願ひ致します。藤山さん、貴方の書かれた女腹切は、きつと歴史に残る事でしょう。「腹切る女スパイ」は凄く。貴方の凄絶な同性愛シーンを思い浮かべると、胸が一杯になり、うっとりしてしまいます。

「夕陽に散る華」も苦しい程の感激を与えて呉れました。僕はスラックスの女が大好きでしたが、今は絶対、乗馬ズボン党です。時々、円山の馬場で乗馬ズボン姿の女の人を見ますが、中には藤山さんではないかと思うような美しいが凛々しい人もいます。下手なカメラで写して来て、うっとりしてしまいます。藤山さん、今度は何を書かれていますか。僕は時々、自分が女になって乗馬ズボンを穿き、あの美千代や、たか子のように腹を搔き切つて、のたうち廻りたいような衝動に駆られます。馬場で馬に跨り腰を浮かして馬を乗り廻している女の人を見ると、腹を切つて苦しんでいる処が想像出来、うっとりします。あの腹切物が全部、乗馬ズボンか飛行服姿なのは、女の微妙な苦悶の悩ましさを余す処なく描くためには、全くふさわしいと思います。

○ (京都市 藤山党)

本誌も最近のスタイルは、昭和二十七年頃に戻ったかの感があります。特に読者通信欄のカットは、あの頃を思い出さずにはいられません。十、十一月号の読者通信欄は何か低調気味で、少々片寄

った好みの人達の意見で占められた感じでした。再び、ページの拡張を望みたいものです。本誌を拡げて真先に見るのは、何と云つても読者通信欄ですから。十一月の浦田紀夫氏の「涙は宇宙空間に輝く」は非常に面白く読みました。が、雑誌で内容の似か寄った作品を読んだ後でしたので、何か二番煎じと云う感が強かった。三条卓史氏の「竹夫人」は百二十五ページの挿画がよかった。セーラー服のスカートで足を、ばたつかせている芳枝の如何にも初々しい顔が印象的でした。久し振りの藤見郁氏の登場もなつかしい。百四十一ページの三吉少年が花子嬢を縛る場面が実に効果的。花子嬢の顔の表情が何とも云えません。土路草一氏の「魔教圏」は少々あくどくなりすぎて、むしろ私には藤山秀緒氏の「腹切る女スパイ」の方が、切腹物にしては、それ程残酷には感じられませんでした。

○ (東京 東 一郎)

分譲品中に緊縛八ミリ映画を加え下さい。最近、八ミリブームで緊縛ファンは多かれ少なかれ撮影機、映写機を所持して居ります。私も最近の貴誌中の映画女優

緊縛場面にヒントを得て、映画館へ緊縛場面を撮影に出かけて居ります。スクリーンより七・八米の処からF一・九で八駒ASA40で完全ですが、緊縛ショットが一般に短かいため、八駒では更に短かく撮影されるので一寸たよりないです。モデル嬢のただ緊縛場面だけで結構です。動きのあるものを希望。(姫路 熱烈ファン)

○

十一月号所載の四馬孝氏の鼻吊りの図、大変興味深く拝見しました。しかし、鼻の障子に穴をあけてしまふのでは余りに現実性がなく、特定の人だけの鼻吊り責めに終る嫌いがあります。私の研究実験を次に紹介しまして誰にでも出来る鼻吊りのプレイを楽しんで頂きたいと思います。先ず、鼻の障子に穴を開けるのではなく、鼻の障子に挟むように輪を嵌めるのです。適当な太さの針金を二本に合せて作ることも出来ます。相当強く鼻を吊つても絶対に外れません。私の研究済ですから、鼻責めマニアの方は必ず満足出来ることでしょう。恰好のよい高い鼻が思い切り上に吊られ、鼻の穴もみじめに細長く引き延ばされます。鼻につながらる上唇も自然に引っぱら

れ半ば開けられて綺麗な歯が出ます。細長く延びた鼻の穴が完全に上向きになり、穴が奥の方まで覗かれるのです。強く鼻を吊つて、細長く延びた上向きの鼻の穴にコヨリを突込んだり綿棒を押し入れたり、奥の方まで惨々いじめます。涙が出て鼻汁が流れ顔もクシヤクシヤになります。

○ (T・H生)

初めて御たよりします。小生、三十五才になる男性です。軽度のSであり、同時にMでもあります。が相手は同性のみに限ります。十七、八才より二十五、六才位までの青少年です。裸体は好みませんが服装はシャツ又はジャンパーに身体にびったり合ったズボンをつけた慎太郎刈りの青少年に強く心を惹かれています。又、びったりと学生服をつけた学生さんにも心を惹かれます。そして眼鏡をかけていない人が好きです。最近はいズボン特にGパンが流行しているのは喜ばしいことです。小生も時々、Gパンを着用しますが、少し古くて汚れているGパンを穿いた男性が好きです。その様な青年が運動や仕事に熱中しているのを見かけると、思わず立上って眺め

てしまします。そして縄で後手に縛り上げ尻を答で打ったり牢屋に縄付のまま正座させたり、その他色々の仕置をすること等を想像して独り楽しんでいきます。又、男性のMの人が案外に多い事を知り、何んとかしてその様な人々と御知り合いになり、プレイをしてみたいものだと思っています。

(東京 S・S生)

○

禪をテーマとしたもの(1)少年時代に何故、禪に非常な興味を持つようになったか。そして、秘かに禪を締めて楽しむ告白。又、禪を締めて人前に出た時の辱しさと誇らしさ。禪姿を発見された時の驚愕と心の反応。(2)禪姿を見る憧れ。少年(美少年、逞ましき漁村の少年)の六尺禪。三角禪。法被の下から、チラリと覗かれる越中禪。赤禪。少年武士の禪、少年の相撲の締め込み禪。(3)禪を締めて貰っている少年に対する憧れ。少年が、父か母に禪を締めて貰っている。上級生が下級生に水泳の六尺禪の締め方を教えている。教師が生徒に相撲禪を締めてやっていく。(4)禪を締めて貰った少年時代の感動談。父や母に「お前も、もう中学一年になったから、禪を締

めよ」と云われ、母が丹精こめて作った真新しい禪をして貰った告白。学校で土俵が出来、相撲を教わる事になり、皆の前に立たされて裸にされ、禪を締める見本台にされた告白。以上は既に発表された内容かも知れないが、未発表のものもあるものと思われる。(5)奇抜な禪を考案して着用した告白。紺の帆前掛で作った禪。昆布の禪。ゴムの禪。ズックの鞆を解きほくして作った禪。皮の禪。インクで染めた赤禪や黄禪。網の禪、帆前掛の紐を集めて作った禪。(6)禪姿を賞められた告白。学校の身体検査で六尺禪一本で測定を受け、教師から賞められた。越中禪か六尺禪姿を両親に見えられ「お前も禪をするようになったか、偉いぞ」と云われた。近所の人に「泣き虫のぼんぼんや」と思っていたら、禪をして貰ったのか、やっぱり男の子や」と賞められた告白。(7)奇抜な禪をして人を驚かせた告白。昆布で六尺禪をして海岸に立っていると大人が中学上級生を見て驚いた。帆前掛の紐と出し昆布で禪をして医者の診察を受けたら、医者には最初は驚天したが、特別に念入りに診察して呉れた。昆布禪がクラスで評判になり、教師にかくれ

て級友に見せてやった。昆布禪の同好の友がふえ、昆布屋の友達の倉庫で裸になり、出し昆布で禪をして相撲をし合っただけだ。水泳の時、白い六尺禪が規定であるのに一人だけ赤禪をして皆を驚かせた。酒屋へ遊びに行ったら、小僧が前掛の禪を締めた所へ、主人が来て驚いた。八百屋のぼんさんと仲好しになり「僕、前掛で禪をするのや」と云ってぼんさんを驚かせた。「おっちゃん、ええものを見せてやるか」と云って変わった禪を締めているのを覗かせてやった告白。(8)禪を無理に締めさせられた告白。兄が自分を裸にして赤禪をさせた。逃げるのに捕えた自分を裸にして、多勢の前で相撲禪を締めた。酒屋の番頭が、初めはズボンの上からでも良いと云い乍ら、段々と服をぬがせ、パンツの上から禪を締め、「どうも恰好が変だ」と云って、遂に下半身を裸にして禪を締めた。探偵ごっこ遊びをしていて、泥棒となった自分が捕えられ、樹に縛られ「刑務所に入れられる奴は裸になって赤い禪をさせられるのや」と云われ、わめく自分に耳を貸さず、裸にして赤禪をさせられた。「男のくせに弱虫でいかん」と父に叱られ、母の前で六尺禪を締められた。(9)禪を締めて鍛えられた告白。中学年になった時、毎朝父に六尺禪が相撲禪を締めさせられて運動した。店の小僧達が主人である父の命によって禪をさせ荷物運びや仕事を手伝わせた。

◎浣腸連続フォト◎

略号(ちよ)

(9×13センチ)

印画紙焼付 十二枚一組 九 百 円

モデル 愛川 悦子嬢

女体

『浣腸風景十二態』

(9×31Cm) 印画紙焼付

十二枚一組 九 百 円

モデル 大塚 啓子嬢 略号(ちよ)

姿を見ての気持。

(4) 丁稚小僧に憧れるのに、奉公に行けない運命に対する自分の告白。

(5) 中学生であるのに、店の小僧の厚司や紺の帆前掛をこっそり着用した告白。

(6) 丁稚小僧の服装が出来るチャンスがあるのに、逃した告白。

(7) 丁稚小僧の志願者が多くて、採用試験を受けた。採用する商店の主人が、自分を交えた数人の少年(尋常科卒)に数々の試験をする。まず、体格検査が行われる。真裸にしていろいろな禪を締めさせてその恰好を見る。禪コンクールだ。厚司や前垂を着せ、最も小僧らしく似合う者が合格となる。

(8) 酒屋、米屋、魚屋、八百屋、材木屋、すし屋等の小僧や出前持の服装コンクール。

(9) 丁稚学校の風景。(10) 「デッチ」「ぼんさん」「小僧」「丁稚小僧」等の呼び名に対する感想、あこがれ。

(11) 厚司、法被、半天、角帯、前掛股引などの収集談。

(12) かわった丁稚の服装。

(13) 理想とする丁稚小僧の服装。

(14) 昔の丁稚と今の丁稚の変わり方

(森 太一)

○
僕は三十才になる警察官ですが、二十七才ぐらいに見えます。体は人並ずぐれて逞ましく岩のようです。筋肉のごつごつした野性的といってもよい男性です。だから一対一で僕を責めたのでは責める方が疲れてしまうでしょう。僕は自分が責められてみたいのと、自分と同じような筋骨逞ましい男性を思いのままの方法で責めてみたいという両方の気持を持っております。好みの方、読者通信に住所を知らせて下さい。すぐ便り致します。僕の方は職業柄、通信欄に住所を出すことが出来ませんので。

(東京 K・M生)

○
十二月号受領しました。前号におとらぬ内容充実ぶりは、来月号

実写

写真

(ハリツケ)

三態

略号(はり)

大判印画紙焼付

三枚一組

四〇〇円

モデル

大塚

啓子嬢

を楽しませます。小生の拙絵、再度採用していただき感謝しております。今後もしもせいぜい努力をつくして、常連の先生方に負けない作品をモノするつもりです。さて、本月号の庄巻は「魔教圈」を番外として、近藤一氏の「継母」でした。例の流麗せん細な筆致によって描き出される変幻きわまりない心理のアヤは、氏独特のもので感心しました。「竹夫人」は前号で新しい展開を見せましたが、本月号では、ややあっけなく、メロドラマ風の結末をつげたのは残念でした。その他本月号にのった「妖異人肌人形」や「水野十郎 左エ門」等の時代物を考えあわせる

と、責小説のあり方について、いろいろ考えさせられました。ハッピーエンドにするか、悲劇の結末にするか、それとも主人公の将来について暗示するにとどめるとか、なかなか問題の多いところですね。小生としてはハッピーエンドは大嫌いですから、後のどれかがよいことになりましたが、その点、臨時増刊号の「与那国奇談」は巧みなさばき方だったと思います。

代理部分譲品総目録

女体緊縛フオトの部として新版十七組最新版「縛り」写真五組、新人モデル新作姿態六組、女体「責」写真集二十組、花坂嬢優美姿態緊縛集四組、女体緊縛フオト・オンパレードR組百花撰、外に女体切腹フオト、浣腸写真、マゾフオト、禪美写真等満載。切手八円同封にて御申込次第急送いたします。

この点については、後でまた改めて筆をとるつもりでおります。さて例によって例の如く、「魔教圈」ですが「壊滅の前夜」と同じシチュエーションになってしまつたようで、いささかがっかり致しました。作者の好みとあれば致し方なく「壊滅の前夜」の場合とは、その突込みを深くして頂ければ満足です。挿絵はマタマタパンツをはいているのでガツカリしました。本月号で他の人も指摘しておられた様に挿絵は本文を更に生かすものですから、もっとも忠実にねがいます。小生の絵も全裸で載ったのですから、この程度はゆるされるのではないかと思います。ゼヒゼヒ実現させて下さい。他の挿絵は本文に忠実なのに、これのみこのザマでは悲し

ぎます。以上ザッと感想を書いて
みました。(石川 浜毅)

臨時増刊号「青い廃院」につい
て、一、二気づいた点をお知らせ
致します。文中の美智代に対する
「責具」については非常にふくざ
つで一寸とまどった。文が空想的
で現実性が少いのが残念でした。
責められるのは美智代一人では一
寸物足りなかった。出来る事な
ら、美智代と姉妹や母親の中一人
はつけてほしかった。それから、
美智代が何故曾根部に責められる
のか説明が不十分のような気がし
た。私なら美智代の為に曾根部が
刑務所に入れられたことにして、
出所した曾根部がその復讐をする
という風にしたい。又、助けるの
も志木一人ではおかしいと思う。
だが、いずれにしても小説なのだ
から、これでよいのかもしれない。
「青い廃院」第二部の「与那国奇
談」出来ることなら時代劇に書い
てほしかったと思う。文中、一六
三頁の股裂き刑に加うるに凄惨な
引伸し刑と一六六頁の十字架の刑
に目の前にその光景を見るようで
非常にうれしかった。

(大阪 八尾の愛読者)

毎号面白く拝見しています。こ
のあたりでちよつと趣向を変えて
巻頭に色頁の絵物語なんかを加え
られたら如何ですか。例えば裸女
の捕われの物語といったもの。ス
トリーは美貌の乙女が彼氏と二
人で映画見物中、突然の停電にて
混雑中に彼氏とはなればなれにな
り、暗闇に佇んでいるところを麻
酔薬をかがされて連れられてゆ
く。気がついたときは一糸もまと
わぬ裸身にされて、ベッドに縛り
つけられていた。そして二の腕に
気味の悪いトカゲの刺青がほられ
ている。悪人達は隣の部屋で酒盛
をしなが、この娘を香港へ売り
とばす相談をしている。彼女の後
を追ってきた彼氏に救い出される
が、トカゲの刺青をされた彼女
は、いつまでも、その事で彼氏か
ら責められるといった物語です。
又、これに似た筋で時代物にして
もいいと思います。

(熊本 牧場一雄)

初めての御便り。女性を神と崇
め畏れるものです。服部みどり
様、乗杉貴代子様、森山美歌様、
皆川のぶ子様、三木恵子様、鷹野
めぐみ様、二保様、それに十一月

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』(略号)
四馬孝画

○申し責 ○苦悶のコレット ○浣腸責
大判判印画紙焼付 三枚一組 四 百 円

号の岐阜の山崎ゆき子様……。こ
のような方々が本場に現実にいら
っしゃるのでしようか。私のこれ
迄空想し憧れてきた事を、どしど
し実行なさっている……。多年、
唯、夢見渴望し続けてきた場面。
私にはまるで夢の国の女神様のよ
うに思えます。緊縛、鞭打ち、馬
乗り、便器、足蹴、一流大学を卒
業し他見には明朗なスポーツマン
として評されている私の密かな悩
み。唯一の心の捌け口を、これ等
奇巧の小説や手記から独り慰める
外、解脱の道はないでしょうか。
奇巧で度々お目にかかる女王様方
女神様方、本当に実在なさるので
すか……。もしそうでしたら御願
い。私の心身の一切を捧げ尽
して悔いありません。せめて御便
りだけでも賜りとう存じます。そ
して、貴女女性にとつて私共
が、犬、馬にも劣るという事、又
もし私共が人間であるなら貴女方
は神であるという事を身に滲みて
自覚させて戴きたいのです。これ
迄私は貴女方女神様はマゾヒスト
の頭の中の偶像でしかあり得ない
という考えから脱する事ができま
せんでした。勿論、沼氏、黒田氏
の自信あるマゾヒストとしての態
度には寧ろ羨望の念を以て見てお
りましたけれども、私自身益々劣
等感に陥るのは、単なる御自分の
気晴しの為に私を鞭打ったり、足
下に跪く私に眼もくれず、女神様
同志の御話に興じられるような女
主人様に実際に御仕えした事がな
い為だと気付きました。つい最近
の記事からも、レインボウの坂口
社長、週刊雑誌にあった日本兵に

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』(略号)
四馬孝画

○胃の洗滌 ○ヒマシ油責
大判判印画紙焼付 二枚一組 三 百 円

懸賞原稿募集

☆ 規 定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

- 優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇
- 一、必ず未発表の自作であること。
一、枚数に制限はありません。
一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
一、賞金は発表と同時に送りいたします。

対する米婦人将校等、女神様の実在は察しられます。何卒女神様、私を貴女の道具なり家具なりの一つとして御試用下さい。この読者通信欄を拝見して、よくマゾビスト等と称して、マゾヒズムを満足させる手段として考えている如くとれる似而非マゾヒストを見出すことがあります。私はただ如何に女神様の御意に副えるか、只それだけを心掛け私の方から女神様にああして下さい、こうして下さい等とは決して申し上げないことを御約束致します。女

神様、せめてこの欄にでも結構です。何か御返事戴けましたら、それ以上の感激はございません。最後に編集の皆様に御願ひ、サド特集号だけでなく、是非マゾ特集号を発行御願ひ致します。それから沼氏の「手帖全集」楽しみにお待ちしております。……。

(東京 水口生)

○ 御誌の素晴らしい毎月の内容、只々胸をわくわくさせて拝見しております。殊に四馬孝氏の口絵の表情といい、タッチといい、いつもうっとりとして拝見しています。

女体禪美の緊縛

(9×13センチ) 印画紙焼付

五枚一組 四百円

略号(こん1)

女体の禪美フオート

(9×13センチ) 印画紙焼付

二枚一組 二百円

略号(こん2)

次のような私のイメージによって、一度四馬氏の彩筆を揮って頂きたいと思いますが如何でしょうか。先ず第一は、アメリカンスタイルの美女を手をつないだ様に四つ這いにさせて、手は勿論後組みに縛り、ハイヒールのカカトを上げさせ股を開かせ、その間にバケツを一つを置き、すぐ背後には責め手の女に鞭を持って立たせる。「フン、でっかい尻をしゃがんで、しこたま油をしぼってやる」と、まるで乳牛がミルクを搾られるように。勿論、牛になる女は鼻輪を杭につなぎ、開かせた足も各々杭に縛って完全に自由を奪っておく。次に、映画「女の防波堤」で、三原葉子がリンチを受ける場面は、両足を宙に上げてのけぞったり、屈曲したりしてのたうち回ったり、徹底的にいためつけられる所があるが、これにナイロンのストッキングとハイヒールをはかせて鞭打つ女を配して絵にしたら、映

画の場面よりもっと緊迫した素晴らしいものが出てくると思う。第三には木馬責の構想、女を高手小手に縛って、木馬に跨がらせ、乳房の上と下に縄を掛けて引っぱり胸をさらしてのけぞるようにする。上半身はベールをはかす。鞭を持った女を傍に立たすると一層効果的だ。責められる女の顔は全部山本富士子の似顔とすること。

(岐阜 夏川楓生)

○ 私が奇クを読みはじめて、もう二年過ぎました。この次にはこの次にはと思ひながら新刊が届くのを待っているものです。が、最近手は試みてガッカリすることが多くて憂うつになってきます。私が求めているのはただ一つ女装記事なんです。今までも女装記事は読者通信まで全部記録してあります。小説化された本文記事よりも、字数の少ない女装マニアの告白や体験記の方がどれほど私を元

次号(二月号)の本誌は十二月中旬発売です

気づけ喜ばしてくるでしょう。

私は三十を過ぎた会社員なんです。妻と子供が二人ございます。

結婚して間もなく、私達は夫婦の間に一切の秘密をなくそうと相談したので。ですからお互いなん

でも要求しあうことにしています。私は女装が好きなので中学生の頃から時々赤いお腰をまとった

り女の着物を着たりしてました。それはいつも家人の留守の時にこっそり独りでやっていたの

で、それが習慣になったのか、他人に内密で女装することに言い得

ない興味があるのです。そんなわけで女装することについては妻

にも絶対に秘密にしています。でも宅では着物が好きなものですか

ら妻の肌着やお腰を借りて常用しています。近所の方は洗濯した腰

巻や襦袢などを物干に掛けてあつても、私が常用しているなどと思

う者は一人もありません。それをいいことにして、色とりどりの

んなものをつくりました。いつか化粧品店で月経帯とホルセットを

買ったことがあります。使用してみても余り面白くないので止めま

した。これは緊縛感を味わいたく思ってたのです。私は紅やピンク、紺やコバルリといったような和装用がとて好きです。会社から帰ると、素肌にもスヤ化繊のなるべく派手な模様の腰巻をして衿つきの襦袢を着て伊達巻でちゃんと締めます。そしてその上に着るものは少しヘデですが、女のものでもない柄で仕立も男用にした着物を着るんです。座ったり立ったりするとき胸をしめつけている伊達巻がとて女らしい心地を呼び起してくれます。

(香川 山田晴美)

秋風の一人身にしみわたる候となりました。名古屋在住の山本様、十二月号誌上にて貴男の御名前を拝見、貴男の淋しい心持承りました。同志を求めて北辺の地よりわざわざ此の名古屋迄御出でになりましたのに、貴男の心を慰める者もないとは残念なことです。奇クへの反響も強い名古屋の地で、せめて貴兄に一夜の歡を差し上げたいと思つて、こうして筆をとりました。男性への責、拷問、

何と快い響を持つ言葉ではありませんか。遅ましい男性が禪一つの姿で後手高小手に高々と括りあげられ、或は脛が頸にびたりとついてしまつて全身真赤になつての海老縛り、はた又逆吊り等隆々と盛り上る筋肉をどんなに美しく見せてくれることでしょうか。想像するだけでも激しい情熱にうたれます。貴男と二人、互いに責めつ責められつ出来たらどんなに楽しいことでしょうか。然し残念な事に貴男の住所がわかりませんし、又連絡場所も存じません。私の御知らせしてもよいのですが、互いに名も所も知らぬ出会いというのも夢があつて面白いではありませんか。連絡方法は、若しこの一文が編集部の皆様の御好意で誌上に載せていただくことが出来ましたら発売後、なるべく一週間以内に名古屋駅内伝言板を通じてお互いに連絡をとりましょう。貴男の方の御都合が出来れば他の何かの方法で御連絡下さつても結構です。その日を楽しみに待つております。

(高知 夢野佐渡)

末席にお仲間入りさせて頂けたらと独り期待しているマゾ愛好者の一人です。本誌を愛読してよ

り、少なからず意を強くいたし是非共、同好の方々と文通をいたしたく考えています。旧号当時、嶽取一氏の発表の読物など私の好みに合い期待していましたが、偶然本屋の店頭で見た杉俊夫氏の少年の禪美に関する構想、病者の獄等、面白く読みました。関西に居た頃、経験したことですが、旅役者の青年(勿論、一座の二枚目でした)とある程度、プレイにも似たことを行い、猿ぐつわ、役者の着ける晒天竺の猿又(半股引)に異常な関心を持つ様になり、私自身、身につけたりして居りますが、家人の不在の折のみしか実行出来ず不満に思っています。以前に本誌に投稿された香川県のK・M生氏の如く、サーカスの男の軽業師、少年軽業師のタイツ、キヤルマタ姿に殊更、魅力を感じ、私自身、それらの衣裳を所有し時折、身につけイメージを念頭に置いて独り慰めています。そういう姿で責めたり責められたりプレイを御願ひしたいと思ひますので、文通を是非お待ちして居ります。

(立川市 大森)

山崎ゆき子様、十一月号通信欄の素晴らしい御便りを拝読致し、御

飼育中の男性奴隷に限りない羨望を覚えさせられ、若しお氣が向いて私にもプレイのお仲間入りをお許し頂けたら何と幸福なことであらうかと、不躰とは存じましたが思わずペンをとった次第です。私は旧専卒、三十才。体重五十五キロ、身長百七十センチ、小売商を営む者でございませうが、山崎様がお考えのように決して貧弱な男性マゾではなく、自分で申すのもおかしいことながら、容姿の点ではきつと山崎様に御満足頂けるものと存じます。又、山崎様の苛責な御調教に耐えかねて悲鳴を洩らすようなことがあったとしても、山崎様がこの程度なら危険はないと御判断になれば、そのまま拷問を続行し、お氣の済むように願って頂いて構いません。

(愛知 大村増夫)

○ 女性から散々に苛められたいと願うマゾヒストです。僕は自転車に乗った女性の姿に最も引きつけられます。ことに若き美しい女性がショートパンツやストラックスな

どを穿いてサイクリング車の小さなサドルを豊満なお尻の下に敷いて颯爽と街を疾走するのを見る、思わず恍惚としてその姿を見送ってしまいます。美しい女性が、この僕の顔をサドルとして一日いや、一生でもいい、尻に敷いてくれたらどんなに幸福でしょう。そんな事を毎日、空想しています。又、美しい女性のためなら土下座は勿論、足舐めをさせられても本望です。どなたか、この僕の女主人として苛めてやりたいという人はおられますか？お便りをお待ちしております。

(東京 T・S生)

○ 貴誌益々御発展よろこびに堪えません。我輩ずっと以前からのKク愛読者で、既に四十の坂を起えたマゾ男性であります。今迄自分の性癖を満たされないうままに、ただKクを唯一の心の糧として生きて来た、あわれな男です。

我輩は男性によるマゾを好み、女性によるものは関心がありませんし、男性でも二十才前後の若い

人を好みます。最近のKクには男性による男性のマゾの記事が時々掲載され胸を躍らせながら何回も何回も繰返してよんでいます。更にこの種のもので充実して頂くようお願いします。「若い男性に凌辱されている男性マゾ」などの写真や、画もどんどん誌上に発表して下さい。男性マゾ特集など如何でしょう。読者通信に投稿されている方々の中にも同好の人々も相当あるようですし、是非実現させて下さい。

我輩はいつも数人の青年に襲われた美青年が、人里離れた山の中又は倉庫の中に連れ込まれ、一切の抵抗を許されないうままに、奴隷として、着衣を剥がれ、体にピタリ着いたうすいメリヤスの申又一枚で、責め罵られてる姿などを空想しては、胸をうづかせるのです。そして自分がこんな立場になれたらどんなに幸福だろうと思っております。既に中年以上の我輩ですが、誰か恥しめ、苦しめてやろうという方はいませんか。有志の方があればお便り下さい。心からお待ちしています。

(奈良 TH生)

○ 初めてお便りいたします。小生

体刊以前より御誌を愛読しているものですが、何分悪筆の為今までお便りしませんでした。最近では魔教くおねがいします。最近では魔教圏に大へん引きつけられて雑誌を手にするの一番に読みます。路子が首輪をはめられて乙女として最もはずかしがる婦人科の身体検査をうけ責められるのをたのしんでいます。十一月号はその点で期待しておりましたが、あまりにもあつけないように思いました。十二月号を期待しています。休刊以前に執筆しておられた岡田咲子さんは、どうして居られますか。

(京都市 S・U生)

○ 秋の臨時増刊号として発刊された「青い魔院」本日入手いたしました。先ず一読してみましてサジズムオンリーの編集で一貫しているのには好感が持てました。普通号では、マゾが少しぐらい混入は、まあまあ辛抱できないこともありませんが、特集号だけは夾雑物は一切廃除して、すっきりしたものでやって頂きたいものです。なんといっても絶対数の多いサジズム本位で発行して貰うのは、読者に対する奉仕という点から当然で、限られた一部の嗜好にまど

代理部分讓品総目録

新人モデル多数
新しく参加

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

わされるのは得策でないと思ひます。さて、青い廃院について、二つの長篇、さすがにどっしりと読みごたえのあるのは普通号と違つて、特集号の特色がよく發揮されて、いたと思う。口絵に挿絵は、まああの出来ばえ。他の雑誌には、こういう縛りや責めの場面が、このようにふんだんに楽しめないのだから、我々ファンにとつては貴重な特集号といえよう。望むらくは、上下のカットをやめて、その余りをもっと活字で埋めるようにされたら尙更充実したものになつたのではないかと思います。

(奈良 若水生)

○ 小生、貴社発行の奇譚クラブの八月号をふとした事から手に入れたことが出来、その内容のすばらしさに於ては、完全に他のものとは比較になりません。こんな立派な雑誌をなぜもっと早く発見出来なかつたかと残念でなりません。十一月号に引続き、臨時増刊号の「青い廃院」も拝受いたしました。十一月号では、口絵の「縛られた女優たち」の中、三原葉子の猿ぐつわのポーズが極めてよかつた。若悶にゆがむ眼の表情。油気のないバサバサの髪が猿ぐつわの

手拭の下を通つて乳房のあたりまで垂れているのは効果的。只猿ぐつわが少しゆるく、ふんわりとしているのは画龍点睛を欠いていた。やはり俳優に気がねをしてこのようにゆるく括つたのであらうがなんといいつても、こういった場面では手心をしては写真が死んでしまふ。但し、映画の場面としては秀逸の部。縛り写真特報の「喰ひ込むコード」は題名通り乳房の上に喰ひ込んだコードが大写しでよくとれている。顔面全体が出ていないのであるが、これも猿ぐつわがあつた方が一層素晴らしい。以前に縛り写真集を他の出版社で見ることがあるが、全然一枚も猿ぐつわをしていないので失望したことがある。半分位は猿ぐつわをしておつた方がよいのではないか。ニューガールの緊縛模様の絹川文代嬢の写真は一段と秀れた写真である。フェイスといい全身の表情といい垢ぬけしていい好感の持てる写真である。この絹川文代モデルのこれからの変つた作品をドシドシと見せて貰いたいものである。「青い廃院」はわくわく胸を躍らせながら二度読んだ。我々同好者にとつては楽しい雑誌であつたが、それだけにあとに残るもの

の少い二篇であつた。八枚の口絵は、どの一枚をとつても値打ちは十分にあるものだ。とにかく、読む方の立場からすれば、こういう増刊号は二月に一回ぐらいの割合で次々と発行して貰いたいと思ふ。

(和歌山 杉浦生)

○ 台風一過、一段と秋らしくなりました。貴社御一同様盛々御元気で御活躍の事と拝祭いたします。十一月号で福岡のM・S様御提案のアクロバットの参考資料及情報交換の件、誠に良策と思われまふ。日本洋舞界の元老、石井漢氏の「おどるばか」を読みましてもその昔、毎日太股をムチで叩かれ青アザが出来、翌日は立てない程の訓練を受けたということが出ておりますが、同封の帝劇歌劇部沢モリノの記事の切り抜きを見て頂けば石井氏の書かれていたことが本当であると思ひます。昔の帝劇の歌劇部の訓練がそれ位ですから、今の洋舞、特にアクロバットの訓練はM・S様の言われる通り相当強硬方法が採用されいると思ひます。現在舞台上で活躍中の有名なアクロバットダンサーにR・エンゼルさんが居られますが、この方は父が失業中の為、新中二年位

からアツクルを習ひ、十四、五才の時から駐留軍の舞台に立つた為、その父が青少年保護法等により相当攻撃を受けましたが、父が毎日泣く娘をなだめてアクロの訓練を受けさせ、夜は年令を大きく見せる為、乳房のマッサージをして乳を大きくし年を十八才と誤間化して舞台に立つたそうです。そのR・エンゼルさんが、「天皇の墓と人民」なる一文を新聞に載せられました。その終りの方を添布の文章に直してみると実感が出ると思ひます。又同封のダイ・ケイ嬢の奇抜なポーズ等は文字通り血の出る様な猛訓練の後、初めて出来ると思ひます。サディズムの香り高いアクロバットの記事を心待ちにしているのは私一人ではないと思ひます。来月号をたのしみにしております。

(一愛読者より)

○ 毎月号の巻頭を飾る写真並に分譲写真楽しみに拝見しています。大塚或は愛川嬢達は、その表情といいポーズといい恐らくは撮影者の熱意も加つてか一段と秀でていふように思ふ。今回又絹川嬢を加え今後の誌上に大きい期待が持てるようになった。(津 村上生)